誰れにもやさしくできる

奇術と手品の習い方

石川雅章著

金園社

Orange Books

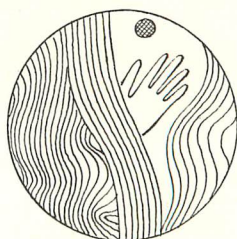
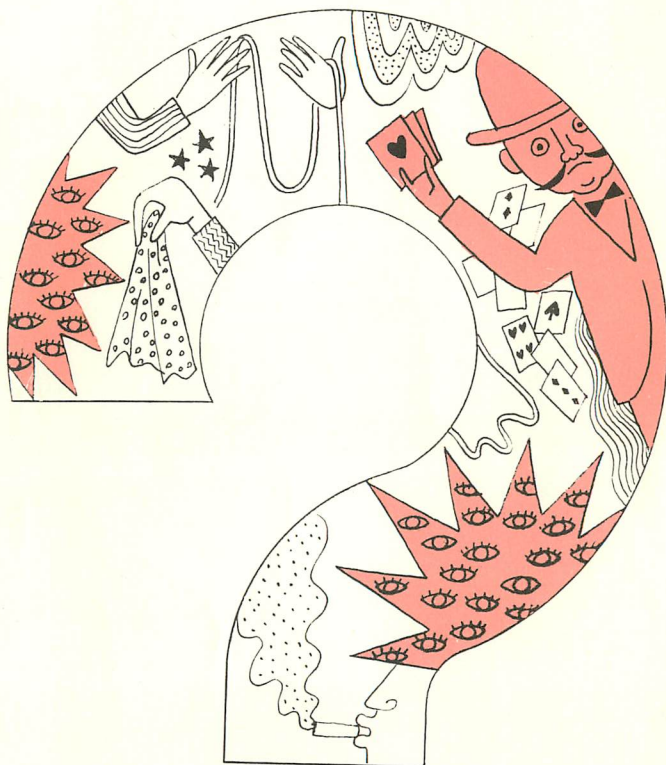
奇術と手品の習い方

誰れにもやさしくできる

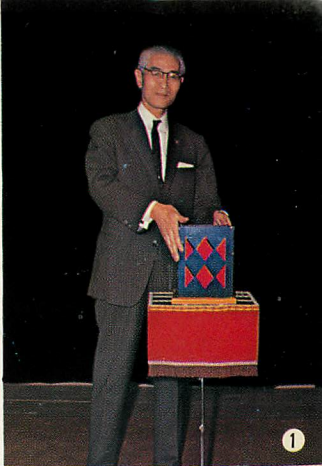
石川雅章著

金園社

奇術と手品の習い方

石川雅章著

金園社

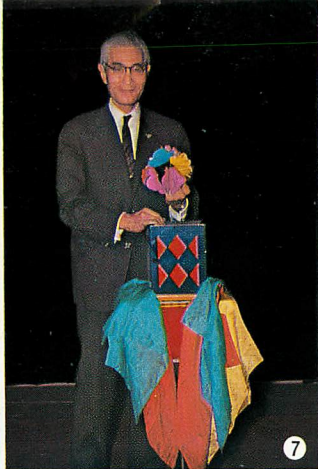
六枚ハンカチ

本文百三十七ページ参照

●三重の筒

〈演技〉

マジック・テーブルの上に、中の透けてみえる四角の筒を置いて幕をあけます。

ミュージックにつれて演者が登場、ごあいさつがすみましたら、まず一番外側の筒（青色）を引き抜いて、上下つつぬけであることを示します。

つぎに、これをもとにもどして、今度は内側の筒（赤色）を引きぬいて同じくしらべ、これも元にもどして、（写真①〜③）空中から何かを招き入れるゼスチュアをし

て手を突き込みますと、万国旗が出てまいります。
つづいて色とりどりのハンカチが取り出され（写真⑤）つぎに花が出てまいります（写真⑦〜⑧）。最後に鳥かごを取り出して終わります。（写真⑨）
——これは著者がかつてNHKテレビ「生活の知恵」で「錯覚」の話をしたときに実演したものです。

＜ひみつ＞

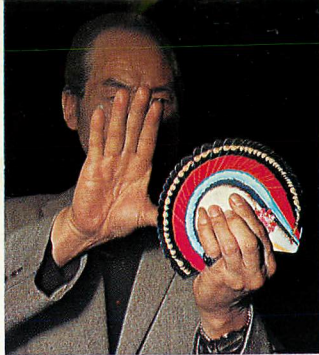
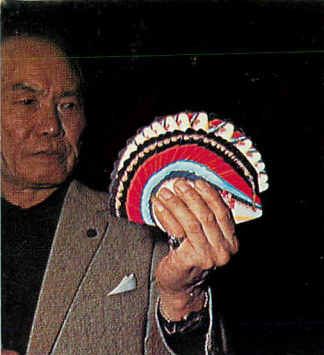
まず、内・外の筒は同じようにヒシ形のキリヌキになっていますので、いかにも中は空のように見えますが、内外のキリヌキは場所が異なっていますところにご注目ください。

そうして、実は一番中に黒塗りの筒があって、ここにいろいろのタネを仕込んでおくのです。

ハンカチも万国旗も絹で弾力に富んでいますから、引き出せば驚くほどの量になりますし、花は羽毛製、くす玉はスプリングで、おさえている輪ゴムをはずすとパッ！と開くようにできています。

鳥かごは折りたたみになっていますが、天井のふくらみを利用して生きた小鳥も入れておくことができます。

●……支那せいろう

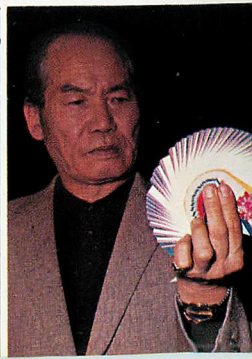
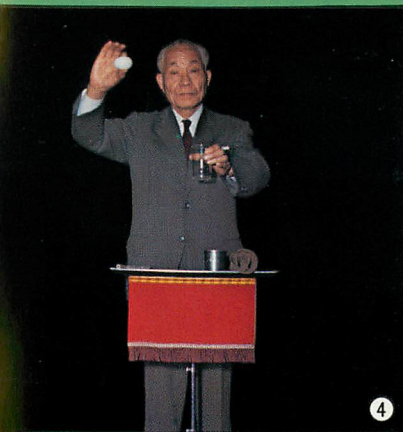
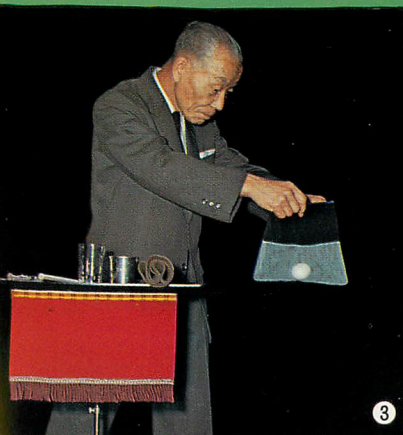
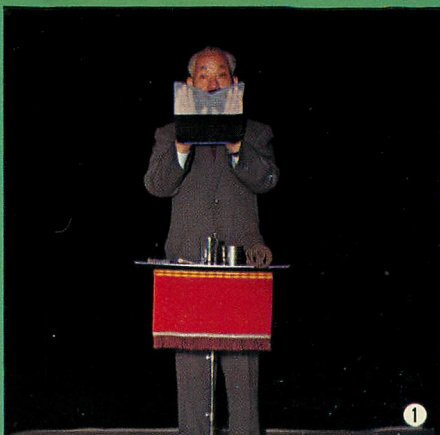
本文二六五ページ参照

●…ファン・カード

カードを両手で、あるいは片手で、サラサラとファン（扇形）にひらく技術で、これは奇術というよりは、カードの高等技術といった方が適当でしょう。

したがってタネというものはなく、あくまで指先の訓練による技術ですから、活字で指導することは至難です。

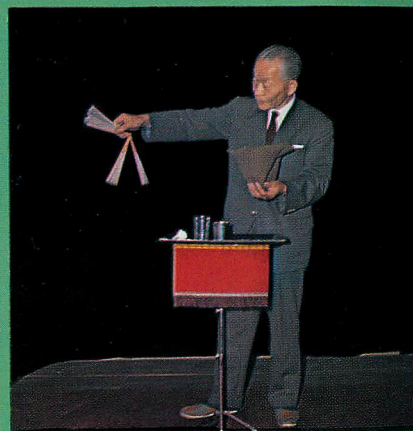
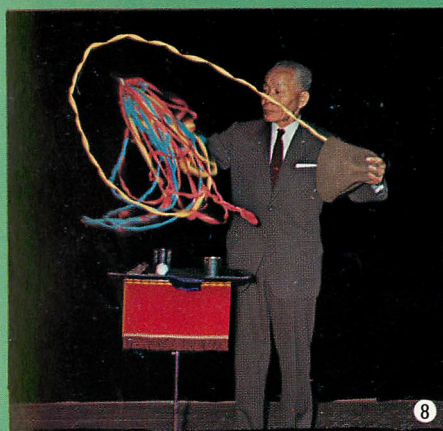
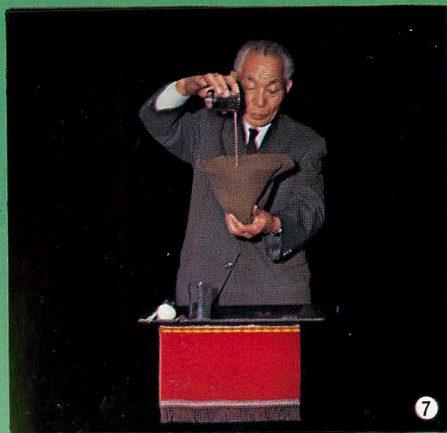
ただ、両手で開くにせよ、片手でひらくにせよ、扇のカナメに当たる部分にあてる指への力の入れ方がポイントになり、一にも、二にも、けいこ、けいこですが、ファン・カード用として、特に裏模様のデザインにくふうをこらしたものが市販されていますから、それを使用することがきれいな演技をみせるひみつと言えます。

また、カードのすべりをよくする特殊なパウダーを添えたものもあるが、純良な粉石けんを用いてもよろしい。

（ＳＳＭＣ・篠原健二氏所演）

●……ニュー袋卵とメリケン・ハット

〈演技〉

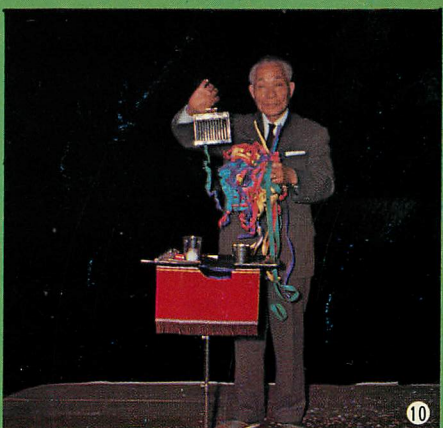
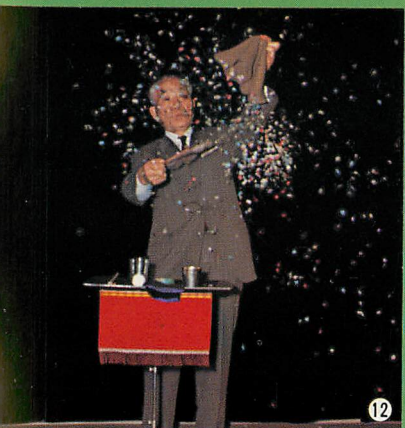
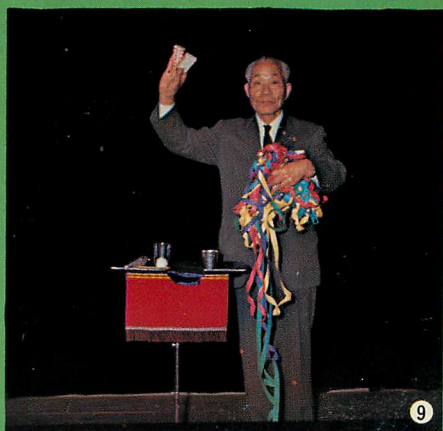
これは本文に紹介した「袋卵」のニュースタイル、すなわち袋が紗でできていて中が透けて見えるところがミソというわけ。――こうしてよくあらためたカラのはずの袋に突如として卵が出現します（写真①～③）から、これをカップに割って、ハシでかきまわし、これもよく内外をしらべた帽子の中に流し込み、サッ！と扇子（これはまたナンセンスというお化け扇子）であおぐと、五色のテープに変化します。（写真④～⑧）

⇦

マジックウオンドでこのテープをたぐり、こんどはタバコやらキャラメルやら、あげくのはてに鳥かごまで取り出し（写真⑨～⑩）、ここで一応また帽子の内外をしらべて、もう一ペン気合いをかけると、今度は五色の花吹雪が舞台一ぱいに散乱する！（写真⑪～⑫）……という〃メリケンハット〃とコンビにした、豪華けんらんたるステージ・マジックです。

（演ずるはＳＳＭＣの宮村忠男氏）

＜ひみつ＞

ふくろ卵のひみつは本文で説明しましたが、これは中が透けて見えるだけ操作に苦労がいります。しかし、お察しの通り三分の一ほどの透けて見える部分に

⇦

ネタをかくしておくわけです。

　ところで、帽子の操作ですが、これは熟練が第一と心得ていただくほかありません。もちろん帽子にはタネも仕かけもないので、何度も内外をひっくり返して調べることができるのですが、タネはマジック・テーブルにも、上衣のひみつのポケットにも、方々にかくしておいて、帽子をひっくり返しながら通わせるのです。これは〝メリケン・ハット〟と呼ばれるおなじみの奇術で、ベテランでないと、なかなかこうあざやかにはまいりませんが、苦労に相応して大かっさいを博することはうけあいです。

まえがき

前著「奇術と手品の遊び方」は、幸に好評を博して、版を重ねること実に三十数回、十五年にもわたるロングセラーズとなり得たことに、まず厚い感謝を捧げます。

この間に、奇術界の伸展はまことに瞠目すべきものがあり、世界著名マジシャンの来訪も相つぎ、特にアマチュアの奇術愛好家、研究家は、年々すばらしい勢いで激増の一途をたどっており、そのクラブの結成も、ほとんど全国にあまねく、横の連絡も緊密になって、試演会やコンクールなども花盛りの観があるのは、ほんとうにうれしいことであります。

また、東京都大田区や、神奈川県川崎市の成人学校には奇術科が設けられ、いずれにも著者は初代の講師に迎えられて、アマチュア・マジック愛好家の層を大幅にひろげることができたばかりか、海外視察団の来訪も受け、この言葉が通じなくとも解ってもらえる明るい芸能が、国際親善のためにもどんなに役立つことかに確信を深めることができたのは、望外のよろこびでありました。

もはや、月世界への旅行も夢ではなくなり、テレビの宇宙中継も実用化されて、なまなかのトリックなどでは人を驚かすこともできなくなりましたが、人類の欲には限りがなく、その数々の夢が、わけもなく現実のものとなる奇術・魔術の魅力はいよいよ増すばかりだと思われます。

進む時世とともに、トリックもますます斬新奇抜なものとなり、演出にも新くふうが加えられておりますが、またその一方には、未だに魔法・呪術の実在を信じ、いわゆる「霊能者」の、奇蹟、神わざ、憑霊現象、ＥＴＣ……のスピリチャリズム・トリック（心霊術）の正体を解き得ず、他愛ない「言葉の魔術」に踊らされて、バク大な財を巻きあげられたり、尊い生命までを失ったりする人も、ウソのように多いので、本書では、その方面のタネあかしにもあえて多くのページを割きまし

た。「知ってしまえばそれまでよ」という歌がありますが、あかされてみると、手品のタネとバケモノの正体ぐらい興ざめのするものはない……などとも言われ、奇術のタネはあかさないのが建て前とはなっていますが、タネを知っていて、その演技を鑑賞するようになってこそ、はじめてほんとうの奇術ファンと言え得ますし、この「おもしろくて、しかもタメになる」奇術の普及は、トリックの解説なしにはできません。

本書では、まことに惜しみなくタネあかしをいたしましたが、現に職業奇術家が舞台に演じているものの秘密には努めて触れないように気をつかいました。これは当然のエチケットであります。外国から大仕かけな魔術団が来て評判になると、必ずといってよいほど週刊誌などから解説を頼まれますが、この理由から、私はヒントを与えるだけに止めておりますけれども、中にはナンセンスな当て推量をして、プロマジシャンの失笑と怒りをかう編集者も無くはありません。奇術を学ぶ者がタネを教わる苦労はあたり前ですが、習い覚えたトリックを軽々しく他人にあかすことは厳に慎んでいただきたいし、またそうすることによって奇術の品位をより高め、興味をいや深くするゆえんであることをさとるべきであります。

本書の上梓に当たっては、まことにたくさんの方々からご好意あふるるご支援をいただきましたが、特に「奇術で世界を明るくしましょう」の標語のもとに精進しておられるＳＳＭＣ（スロー・ステディ・マジック・クラブの略称＝初代松旭斎天旭・三瓶元寿氏会長）の清水長次郎、宮村忠男、田島義秀、篠原健二、小寺幸作、芦沢義作、中西常之助、桜井隆太郎、小林勝義の諸氏には演技の写真撮影にも一方ならぬお力添えを辱うし、また清水邸の豪奢なスタジオまで快く使わせていただいたことに、重ねて厚く御礼を申し上げます。

著　者

目次

総論編

奇術の学び方

ロープの奇術

小品奇術

ハンカチ奇術

コイン・マジック

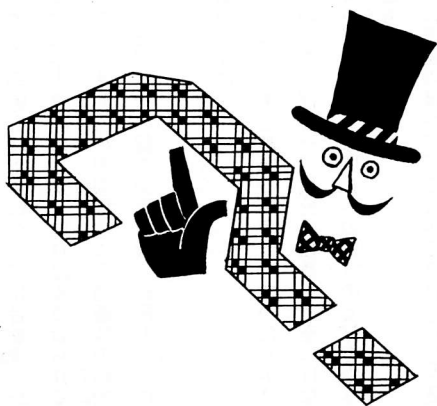
カード・マジック

身のまわりの材料でできる奇術

ステージ奇術

催眠術

本文カット　堀　正芳
演技　著者＝石川雅章、清水長次郎、宮村忠男、
田島義秀、篠原健二、小寺幸作、芦沢義作、
中西常之助、桜井隆太郎、小林勝義の各氏

総論編

最高の趣味

奇術をマスターしよう！

老人医学の世界的権威、文化勲章の緒方知三郎博士は今年満で米寿の高齢を迎えられたが、壮者を凌ぐかくしゃくさで医学大事典の大業と取り組んでおられるが、博士はこの健康長寿の源泉は実に奇術趣味の賜物である！……と、八十の賀の記念出版「奇術と私」に序しておられる。

その礼讃の一節に、

……おもうに、仕事と趣味の両者は、まったくかけ離れたものであればこそ、気分の転換も完全に行なわれ、それによってまた明日への働きの元気を生み出す因ともなるであろう。

すべて趣味は理窟のほかで、心底からそれに打ち込み、無我の境に達し得て、始めてこの上もない慰安とも、また楽しみともなる——と奇術趣味の徳をたたえて、

……奇術こそは、これを演じる自らが楽しみつつ、同時に見る者を喜ばせることができるという点が、他の趣味には見出せぬ長所と申せようか。……

と、謡曲や小唄のようなノドをきかせる道楽は、時として落語の「寝床」もどきの迷惑をハタに及ぼす嫌いもなく、ネタがばれてもかえって座興となる徳すらあり、また言葉が通じなくとも、見てさえおれば何人にも理解されるので、国際親善に貢献することも一通りでないことを強調しておられたが、「科学天皇」として世界に親しまれる天皇陛下も殊のほか奇術を好まれて、毎年の天皇誕生日には、この緒方博士が名誉会長になっている東京・アマチュア・奇術人クラブ（略称TAMC）のメンバーがご覧に入れる素人奇術を何よりも喜んでおられるのは、ほほえましい限りである。

総論編

手品・奇術・魔術……●

手品と奇術はどう違う？
奇術と魔術は？
――とは、よく訊かれる質問である。私はこれをつぎのような拙作で答えたいとおもう。

ワン　ツウ　スリーと
手を振れば
天から降ってくる
シガレット
アハハと　吐き出す
なまたまご
手品の　おじさん　ゆかいだナ

ワン　ツウ　スリーと
飛ばす　鳩（はと）
開（あ）いた　口から
釣る　金魚
キングも　クインも
ごかっさい
奇術の　おじさん　ゆかいだナ

ワン　ツウ　スリーと
フタとれば
何でも　出てくる
玉手箱
乙姫（おとひめ）さままで
おどり出る
魔術の　舞台は　ゆかいだナ

……すなわち、「手品」とは、「しなやかな手」という意味で、小手先の妙味を観賞するもの。英語の「スライト・オブ・ハンド」(Sleight of Hand＝略してスライハンド)も、まったく同意語である。

「奇術」といえば、まず小手先にハンカチやカードの花が咲き、ロープを切るとか、小箱におさめた時計がパンの中から出てくるとか、シルクハットから鳩が飛び出したり、空中から金魚が釣られたりする、華やかな舞台を連想するであろうし、「魔術」ともなれば、人体浮游術とか、美人の胴切りとか、このごろではピアノや自動車までがこっぜんと舞台から消え失せたり、あるいは「人間大砲」とか、トランク詰めにされた魔術師が、ヘリコプターで運ばれて海中に投ぜられ、水中でエスケープする！——という大がかりなものまで、「宇宙時代」にふさわしく、海・陸・空の広汎な舞台で演じられるようになった。——その語感のままにとっていただいてよいとおもう。

そして、最近では、これらをひっくるめて「マジック」といい、奇術師という呼び名もマジシャンといった方が世界中どこへいっても通るし、かえって親しめるようになってきた。とくに、最近ではアマチュアの奇術愛好家が激増して、そのグループも各地に続々名乗りをあげつつあるが、大ていは「何々アマチュア・マジシャンズ・クラブ」と呼ぶものが多く、横のつながりもこれで通っているようである。

その中でも、「東京・アマチュア・マジシャンズ・クラブ」(略称ＴＡＭＣ＝会長・肝付兼英氏、名誉会長緒方知三郎博士、徳川義親氏)のごときは、国際的にも有名で、メンバーは学界、政界、刀圭界、実業界、作家、音楽家……と多士多彩、前副会長の坂本種芳氏(ＫＫ・坂本機械製作所社長)は「奇術界のノーベル賞」といわれている「スフィンクス賞」(最も権威あるアメリカの奇術研究誌「スフィンクス」が、毎年世界中で最も秀れたトリック・アイディアを考案製作した人に贈るもので、アマチュア・マジシャン選手権もあわせ獲得する賞)の

受賞者である。

〔P5上写真――TAMCの試演会風景。「人体浮揚術」を演ずる坂本種芳氏と林伯民氏。後列右から二番目は緒方知三郎博士。
P6上写真――スフィンクス賞「香炉とひも」を演ずる坂本種芳氏〕

奇術界のノーベル賞……●

坂本氏の受賞作品は「香炉とひも」という。有名なインドの伝説的な「なわの魔術」にヒントを得た、オリエンタル・ムード満点の神秘がかったものである。

その現象を略記すると、舞台の小さな一脚のテーブルの上には、青銅の香炉が安置されて、紫の香煙がるると立ちのぼっている。――そこへ、術者は1メートルぐらいの、緑の平うちのひもを持って登場、見物にあらためてもらって、両手でクルクルとまるめ、香炉のフタをとって煙の中に投じてしまう。

そして、マジック・ステッキを香炉の上にかざすと、ひ

もの一端はそのフタの頂部のアナから頭をもたげてステッキにとびつくから、そのまま静かに引きあげて、ひもの端をひと結びし、さらに30センチぐらい引きあげて手を放すと、ひもはシャッキリと硬直して棒立ちになるのだ。

そこで、ハサミをとって、結んだ端を切りすて、マジック・ステッキで上・下・左・右を払い、さらに輪を通して、ひもを上から糸でつるすようなトリックを用いないことを立証し、さらに引き上げるが、ひもは硬直したままである。――術者はここで「我が意を得たり!」という面持ちでニッコリ、硬直したひもを香炉から引き抜いて観客席に持参、お立ち会いに手渡すと、ひもはとたんにグニャグニャになって、タネもシカケもないただのさなだひもなのだ。術者はそれをお立ち会いの手に残したまま悠然と舞台に戻り、一礼して退場する。あとには何事も起こらなかったもののごとく、香炉からは依然として紫の香煙がゆらゆらと立ちのぼっている、……という奇術だ。

もちろん、これは香炉の中にトリックをシカケておくのだが、この演技の呼吸が、すなわち坂本氏多年のキャリアの持ち味というわけである。

これなどは、考案者が一流のエンジニアなればこそできた精巧な作品で、まねようとしても容易にまねられないから強いが、多年苦心の労作も、一度発表すると、「ジャのみちはヘビ」で、プロマジシャンにはすぐタネ・シカケの想像がつくので、さっそく模倣されるのは、まぎらわしい名前を乱用されるよりも、もっと実害は大きい。

アメリカには、S・A・M(Society of American)や、I・B・M (International Brotherhood of Magicians)のような強力な団体があって、全米の主要都市に、それぞれクラブや支部を有し、これが横の連絡を密にしており、常に情報・研究の交換が活発になされているから、無断でアイディアの模倣や盗用などやろうものなら、たちまち厳格な制裁を受けなければならない。

もし、プロでこれを犯すような背徳者があれば、日ならずして全米の興行界から締め出されるという憂き目に会うのが実情である。

また、悪意はなくとも、現にステージで演ぜられている奇術のタネあかしをうっかりやったら、同様の制裁を受けること、日本では想像もできないきびしさである。

滞米三十三年、いまではI・B・Mからライフ・メンバー（終身会員）として年金を受け、故郷名古屋で悠々自適の生活をしている世界的マジシャン、ミスター・テンカイ（石田天海）がまだ若かりし日、クリーブランドの舞台でアンコールが続くのに、すっかり気をよくした彼が、帽子にカードを打ちこむ奇術のタネあかしを披露して人気をとったまではよかったが、そのとき観客の中にS・A・Mのメンバーがいて、「テンカイはタネあかしをやっている」とエージェントに通報したので、たちまち解約されるという悲劇に直面した、苦い経験をなめている。

だが、その代わり、ひとつ優れたオリジナル作品を案出すれば、それで数年間の生活は保証されることになるのだから、うらやましい限りではないか！

うらやましいアメリカのクラブ組織……●

よい機会であるから、この天海氏から聴いたアメリカ奇術界の話の一端を紹介しておこう。

アメリカは、世界一奇術のさかんな国で、毎年シーズンになると、世界中のチャンピオンが集まり、国際的に技術の妍を競うことでも有名である。それだけに、なかなかの芸では見向きもされないが、天海夫妻は、スマー

トで、知的で、オリジナルがフレッシュで……と、あらゆる賛辞を浴びて来たプロフェッショナル・マジシャンだが、その至芸中の至芸として評判の高かったのは、「オリジネート・オブ・ザ・ファビラス・ウオッチ・トリック」という、シガレットの煙の中からとり出す時計の奇術である。

例の、天から降ってくる、火のついたシガレットの、その煙をつまむと、それがさんぜんたるウオッチに化して、実に二ダース以上も時計架にならんだ果てに、最後は直径40センチにもあまる巨大なクロックが出現して夫妻の手にぶらさがるのだから、まったく度胆を抜く大魔術と絶賛を博したのも当然だが、それがフジヤマにサクラ、それに朱の鳥居を配した背景の前で、大輪の菊の模様のハカマに、袈裟に似た独特のガウンをまとった天海と、ふりそで姿の夫人がならんで、オリエンタル・ムード濃厚な舞台を見せるのだから、いっそう人気をあおったのであろう。——と、当の天海氏は語っている。

そうして、アメリカの奇術クラブでは、いずれもプロの入会を希望し、技術的指導をかつての舞台人、および現役のプロフェッショナル・マジシャンに受け持ってもらうのがたてまえだから、自分たちのクラブには、これ

これの有名なプロ・メンバーが在籍するんだぞ！　とじまんのタネにしているのに、日本のアマチュア・マジシャンズ・クラブの中には、ことさらに資格を制限して、職業奇術家の入会を拒む向きもあるのは、何とも不可解なことだ。……とも言っていたが、これも近来頃はアメリカ風に有名プロ・マジシャンを指導者として迎えるクラブが多くなった。天海氏自身もまた、地元の東海マジシャンズ・クラブや、東京の邪宗門魔術クラブ、和歌山・アマチュア・マジシャンズ・クラブなどの顧問となって、実地指導に当たっているが、別にプロの職能団体として「日本奇術協会」（会長・松旭斎天晴）があり、年々その結束を強固にしつつある。一日も早くアメリカのI・B・MやS・A・Mのような権威と実力をもった大組織に育て上げたいものである。

〔P8上写真―石田天海師の円形ミリオン・カード〕

天海師のオリジナル・マジック"タバコと時計"

天皇さまも奇術がお好き……●

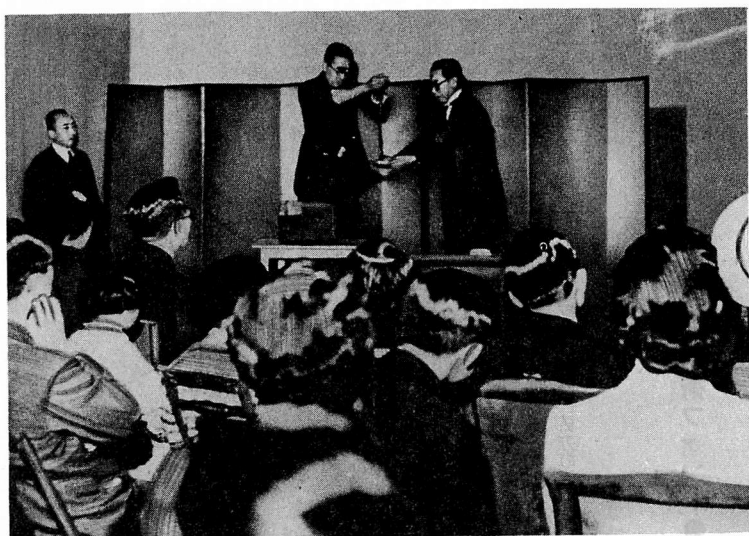
さて、話を戻して、日本のクラブ・TAMCをいっそう権威付けているのは、ほとんど毎年の天皇誕生日に宮中に召されて、天皇ご一家にその妙技をお目にかけていることである。

陛下は、「科学天皇」として全世界に有名であられるだけに、奇術にはなみなみならぬご興味をお持ちになり、テレビの奇術ショーなども好んでご覧になる由であるが、前侍従の永積寅彦氏もこのTAMCの古参会員である関係上、奇術鑑賞のお相手としてはこの上なき適任者であったわけだ。

かつて読売新聞出版局から発行されていた「週刊・娯楽よみうり」に、「天皇家のお楽しみ」という特集記事が載ったが、それによると、相撲と奇術が一番お好きらしいということで、その前年のお誕生日にも、例によってTAMCの人々のアマチュア・マジックに興ぜられ、義宮（現・常陸宮）さまや清宮（現・島津貴子夫人）さまは、道具をしらべられたり、ロープやお盆を持って助手を勧められたり、……といった春風たいとうぶり、陛下は最前列でヒザをのり出され、「ホウ、ホウ」と不思議な現象に感心しておられたという、ほほえましいごだんらん風景が詳しく紹介されていた。

陛下はご幼少のときから天勝一座の奇術はたびたびご覧になっておられるし、大正十二年の夏にも、葉山のご用邸に、当時アマチュア・マジシァンの第一人者阿部徳蔵氏を召されて、その演技にことのほか興をおぼえられ、以来引き続いて葉山や赤坂御所に、数回阿部氏をお招きになっている。

今日とは事情がまるで異なって、まことに「雲の上」に召される、……といった晴れがましいことだったから、阿部氏の「奇術随筆」には、

……無位無官、一布衣の身をもってこの光栄に浴することができたのも、奇術にいのちをかけて精進したればこそである。これでどうやら多年の親不孝も帳消しにできた。……

と、阿部さんの一通りならぬ感激の言葉が載っている。（この阿部さんと筆者のことは、谷崎潤一郎氏の随筆集「三つの場合」（中央公論社版）にも収録されている）

前にものべたように、「科学天皇」といわれている陛下のことだから、奇術の現象には思わず、ひざをのり出すほどにご熱心ではあるが、何をご覧に入れても、「あれはどうしてああなるのだ？」などとご下問になって演技者を困らせるようなことは一度もなく、観客としてのエチケットは厳格にお守りになっておられるごときは、一般大衆のもって貴い範としなければならないところである。

ここにお目にかける写真は、27年12月24日、立太子礼の行なわれた後で、高輪の光輪閣で催された「菊栄会」（皇族の親睦会）の余興としてご覧に入れた「水と砂」という奇術の演出風景である。

現象は、卓上にすえたガラスの水槽に、術者はまず青い砂を一握り入れてかきまわすと、水はみるみる青く濁ってしまう。そこで、今度は赤い砂を入れ、つぎに黄色

の砂を入れて、……つまり三原色の砂を投じて、すっかり混ぜ合わせてしまうのである。

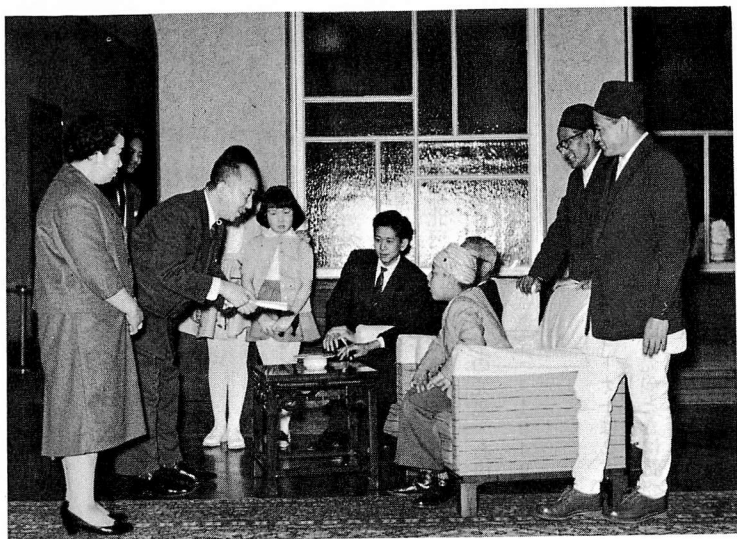
そして、いったん手を引きあげて、よくあらためた後、再び水中に両手を入れて砂をすくいとり、お盆の上で静かにもむと、青は青、赤は赤、黄は黄と、三色の砂はそれぞれ原色のままで、サラサラと三枚別々のお盆の上に還元する、……という、摩訶不思議な術である。

これは、明和元年（1764年）に刊行された、「放下筌」という奇術書にも、すでに見えている中国伝来のタネであるが、演者の坂本種芳、柳沢義胤両氏が演出を新しくくふうしたもので、帝劇のミュージカル「天一と天勝」の劇中にもとり入れて好評を博した奇術だ。

〔**P11上写真**――前方左から河合佐治、坂本種芳、柳沢義胤の諸氏、観覧席には、天皇、皇后両陛下のほか、皇太子殿下、常陸宮、三笠宮ほかの宮様方のお姿が見えている〕

ネパールの王子さまも奇術ファン……●

天皇陛下は、よほど奇術がお好きらしく、インドネシアのスカルノ前大統領が来朝し、やはり高輪の光輪閣で歓迎宴が開かれたときも、談たまたま趣味のことにおよぶと、この奇術談義に花が咲いて、TAMCの人々の演技のことにおよぶと、ぜひおみやげに奇術材料を持ち帰りたいということになり、永積侍従から坂本氏に電話があって、三越からKK天洋の作品をゴッソリと買って帰られたものであった。

また、ネパールの第二王子マヘンドラ・ビクラム・シャー殿下が来朝されたとき（1960年4月）も、たまたま三越においでになり、奇術用品売り場で実演販売をご覧になって、即座に数十種の材料をお買い上げになったばかりか、その御宿所迎賓館にTAMCのメンバーで「奇術一家」として有名な河合佐治氏を講師としてお招ぎになり、ふみ子夫人、次女の愛子さん、三女の治子さんなどを総動員して、スライハンドもののほかに、日本古典奇術の、水中から提灯が出現したり、布ざらしからかさづくしとなる「一夕涼み」さては空中金魚釣りやら、

物品取り寄せ術までご覧に入れると、演技が終わったとたん、機関銃のような質問攻めに、外務省から来ていた通訳も汗ダクになり、それからいよいよ手をとってのご教授、——となったものだが、ご熱心なだけにご上達も早くハンカチの手品やロープ切りなどはたちまちマスターされ、三越で買って来られた「これが奇術だ！」という、透明なカップ二個をならべて紅白のハンカチを入れ、新聞紙をのせて号令をかけると、そのカップが新聞紙に吸い付けて持ちあがり、中のハンカチを引きぬいても落下しない演技などは、たちまちあざやかにやってのけられ、十二才の少年とも思われぬあっぱれなお腕前だった！——と、先生の河合氏も舌を巻くほどであったという。

……こんなしだいで、いまやアマチュア奇術人口は驚嘆すべき激増ぶりをみせ、デパートの奇術材料売り場の繁盛も大へんなもの、人形やおもちゃと共に外貨獲得にも大きな一役を買っている

〔**P13上写真**——奇術ご指導中の河合氏と令嬢たち〕

魔法へのあこがれ

明治の文豪国木田独歩は、何よりも平凡ということをきらい、その名作「牛肉と馬鈴薯」の主人公に、「ボクはアッと驚きたいのです！」というセリフを吐かせているが、今日ではもう自分がアッと驚くだけではそれも平凡になってしまい、人をアッ！と驚かせなければおもしろくない時代となった。奇術材料とともに「大人のおもちゃ」が飛ぶような売れゆきを見せていることでこれが証明されよう。

手を替え、品を替えて常に新聞・週刊誌・テレビの話題となるビート族とかフーテン族、ないしは学生騒動の深底に潜む原動力も、爆発魔やガンマニアの突飛な行動も、モトをただせばこの心理の発動なのだから、こういう悪質のスリルをたのしむ気持ちを、奇術趣味に転換してやることができたら、どんなに世の中が明るくなることだろう！——と、私はいつも考える。

たとえば、晴れ着を着飾って浮き浮きした気持ちで盛り場を歩いている妙齢の娘さんに硫酸を浴せてひそかに悦に入るとか、女性のやわ肌を傷つけて赤い血を見るこ

テレビ時代とマジック…●

テレビでも、マジック・ショーは広汎なファン層をもって高い視聴率を占めているが、テレビ・マジック教室の草分けは、東京都北区滝野川の安部学園女子高校の校長安部元章氏が、プロ・マジシャンの元老・石田天海氏と組んでNTVでやった「手品教室」（1949年9月～52年1月）だったとおもう。

そして、デパートのマジック・コーナーはますます大繁盛で、新ネタも続々登場、実演販売のときは特売場以上のにぎわいぶりを見せ、二万円、三万円という凝った道具もドンドン売れている。

とで興奮するとか、あるいは火事騒ぎが好きな放火魔とか、……ＥＴＣの物騒な連中も、奇術のギロチンや手錠ぬけ、電気ノコギリで美女を真二つにし、血しぶきをあげる、――などでうっぷんをはらすことができたら、狂暴な犯罪に追いやられずにすむのではあるまいか？

〔Ｐ15上写真――デパートの奇術材料、実演販売のにぎわい〕

魔法使いも人間だ！……●

まんがの人気者は、大方スーパーマンであり、魔法使いであるが、

「魔法使いになれたらなア！――」

というあこがれは、だれしもが一度は抱く夢であろうし、その夢を痛快に代行してくれるのが、これらまんがの主人公たちなのである。

だが、「魔法使いも人間じゃないか！」とさとるとき、どんな憂愁（ゆうしゅう）のドン底に沈んでいるときでも奮い起つ勇気が与えられるであろう。

会津の山寺に生まれて、ひとりぼっちの弱虫だった私は、小学四年生のときかわいがられた、園部忠義という担任の先生に奇術のおもしろ味を教わったのが今日あるもととなった。

すなわち童話の魔法使いに親しんで童話作家となり、童話劇の創作・演出者から、「魔術の女王」松旭斎天勝に招かれて一座の文芸部長となり、遂によろずの不可能を可能たらしめる大魔術一座の楽屋に生活するようになったのである。

だれでも、「アッ！」と驚いたつぎには、「ふしぎだナ！」と首をひねることになり、当然「どうしてこんなことができるのだろう？」と考えるようになるだろう。そして、その原理探究がどれほど思考力を養い、それがすばらしい創造を生んで、やがて偉大なる発明・発見の実を結ぶこととなるか。――

おもえば、大空を鳥のように自由自在に飛びまわりたいという人類の欲望が、今日のはなやかな航空時代を生んだのだし、月の世界に遊び、あの星この星を訪ねてみたいという夢も、いまではすでに夢ではなくなったのである。

魔法使いにあこがれた人間の力が、とうとう空想以上の現実を生み出したのだから、マジックの功績は実にすばらしいものではないか！

奇術教育の収穫……●

話はだいぶ飛躍しすぎたようだから、この辺でもっと身近かな例をひとつあげておきたい。

テレビ奇術教室の草分け、安部元章氏のことは前にも記したが、安部学園が今日の大を成したのは、実に氏が奇術を実際教育に活用して人気を博したからである。どんなにむずかしい理数科の問題でも、氏の手にかかると、尽くせぬ興味の中にいつしか頭にはいるので、勉強ぎらいな生徒はひとりもなくなるのだから、この方がむしろ魔術的といえよう。

安部さんの教授ぶりは実におもしろい。

たとえば、低学年の場合なら、コップになみなみと水を注ぎ入れ、一枚の古はがきを載せて密着させ、コップをさかさまにしても水は落下しない実験をやってみせてから気圧の講義に入り、トリチェリーの真空管のこと、水銀の比重のことなどに説き進むと、いかに理科にはヨワイという生徒のひとみも、いつか好奇にイキイキと輝き出す。

マグデブルクの半球の実験のときなども、教壇に器具を運ぶ前に、まず内部の空気を抜いておいて、

「このクラスで一番力持ちの生徒はだれかナ?」

と呼びかける。そして、力じまんの生徒が登壇したら、「先生のかぶせておいたこのフタを、君の力でとってみてくれないか?」

とやる。――もちろんとれはしない。二人、三人と交代してテストするが、どんなにリキんだところでとれるはずはないのだ。そこで、

「先生なら二本の指でつまんでとるがナ」と、こともなげに言いながら、人さし指とおや指でフタのツマミをつまみあげるのだが、実はその前にひそかに弁をひねって、内部に空気を送りこんでおく。……といった手をもちいるのである。

……はじめてこれをみる生徒や児童は、びっくりすると同時にこの不思議な現象が、脳裡に強く印象づけられます。タネあかしと称して理論を説明すると、どんな理科のきらいな子でも必ず好きになるはずです。私は、物理の実験は教育手品として行なうべきだとさえ

思っています。

「不思議だな、なぜだろう、調べてみよう」というのが理科教育の行き方です。この三段階のつぎに「やってみよう」というのを加えると手品になるわけです。

……

と、氏はその著「手品」の序論にのべておられるが、無味乾燥と敬遠されがちな数学の講義なども、安部さんはクイズや魔方陣などを巧みに応用して、たまらない興味の中に引きずりこんでいくから、苦もなく覚えられる上に、一度のみこんだら永久に忘れられない印象を刻みつけられるので、日大や日銀でも安部先生の人気は大へんなものである。

〔P17上写真――テレビ出演中の安部さんと石田天海師〕

奇術と詐術……●

手品、奇術といえば、常に娯楽の芸能としか思われていないばかりか、ある百科事典の「奇術」の項を引いてみると、「巧妙なトリックで人の目をくらませる芸能」と解説されているのには唖然とさせられた。執筆者をきけばこれでも芸能評論家と称せられる人だそうだが、こういう非常識な人は案外に多くて、その中には「手品使い」というと、すぐ「ペテン師」を連想する困った人た

NTV“手品教室”の安部元章氏

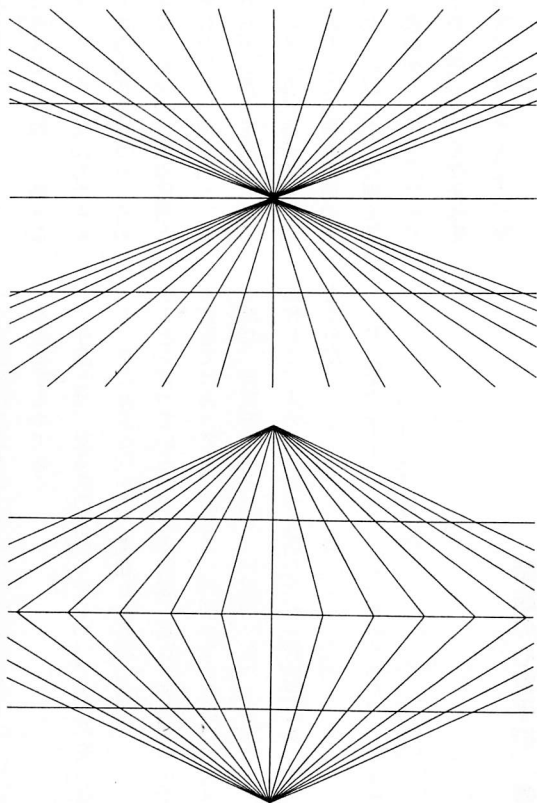
ちも少なくない。

だから、紙幣スリ替えの犯人などが報道される場合、よく「手品師そこのけの早わざで……」とか、「まるで奇術師」などと形容される。

こんなふうに　人をたぶらかすとか、目をゴマ化すとか、とかく意地悪な表現をされるのはまことに心外千万で、いちいち抗議をもちこみたいような気持ちになるのは、奇術愛好家の全部といってもよかろうと思う。

しかし、心なき三流職業奇術家の中には、自ら、

「見事ちょろまかしてしまいましたようで……」

などと脱線するものがないでもない。言葉使いには慎重であってほしいものである。だから、何かの会合でわれわれが余興の一役を買わされると、

「今晩は何某さんという奇術の名人が見えておられますので、これからその妙技を拝見させていただきますが、皆さま、くれぐれも懐中物にはご用心！」

などという、不ゆかい千万な言葉で紹介されることがあるのだ。

もちろん悪意あってのことではなく、先方はせい一ぱいのユーモラスな紹介のつもりなのだろうが、私たちにとってこのくらい侮辱を感ずる言葉はない。

昔から、スリは「おれたちは盗人じゃアねえ、職人なんだ！」とうそぶいて、手さきのワザをじまんしたものだが、たしかに人の注意をあらぬ方向に向けさせ、その虚に乗じて財物を抜くという手は、奇術の技法の応用といえないこともなかろうが、それだけに奇術を知っておれば、その逆手をとって、これら不心得者を懲らしめることは、容易なのである。もちろん、私にもその経験は二、三にとどまらない。――こんなところにも奇術のトクは広大無辺と感謝することがたびたびだが、奇術を知っていると、人をたぶらかす「悪の楽しさ」などよりは、もろもろのインチキのタネを看破して、その正体を知ることの快感を味わうことの方がはるかに大きいから、緒方知三郎博士のおっしゃるように「奇術趣味の人に悪人はいない」のである。

安部さんは、「不思議さ、おもしろさ、上品さ」を「手品の三要素」だといっている。そして、

……手品をゴマカシと見るのは当たらない。人間のもつ常識には虚がある。この虚をつかれると人間は錯覚を起こすものである。

手品とは、見る人の常識の虚をついて錯覚を誘導し、その錯覚を利用し、美化した表現である。

……とも言っているが、この錯覚、盲点、死角を利用する芸能ではあっても、断じて「詐術」ではないのである。ただ、奇術を奇術とせず、「霊術」とか「心霊術」とか称して、人の弱みにつけ込むと、「詐術」になってしまうのだ。

〔P19図上・下――中央に引いた二本の直線がどう見えますか？――どちらも曲がってはいないのですよ。〕

話題の心霊手術……●

このほど、ごうごうの話題となった「心霊手術」などはそのよき一例で、朝日新聞の「声」欄でも、１９６８年11月20日の紙上に、東京都の滝口守氏というドクターがいみじくも、

……心霊手術というインチキをテレビ（14日）で放映するということは、世人を惑わす許しがたい行為である。確かに現代の科学で究明できない事象は数多くある。あるのが当然である。（中略）百歩譲って、彼に心霊能力があり、ある種の疾患をなおす力があるとしても、放映された心霊手術はインチキである。

と喝破し、

理由は多くあるが、

①取り出したと称する虫垂や筋しゅをはっきりと提示しなかったこと。

②肝じんな場面は術者がカメラの前にのり出して隠してしまったこと。

③その他は専門的な疑点なので、ここでは取りあげないが、インチキを確信させたのは、あのバンソウコウ

切りである。われわれは、不断バンソウコウを切るのに指を用いている。ピンと張ったバンソウコウは、ある種の力に非常に弱いことは日常経験している。また舌を用いて切ったと称するが、あれは明らかに指を用いていた。奇術的素養を持つ者には、すぐに見破れるトリックである。

このようなトリックを用いなければ、彼の超能力を証明できないことがおかしいし、またバンソウコウが切れでも、心霊手術をする能力があるとは決していえない。

動物で心霊手術を行ない、そのあとで現代の外科医が開腹し、臓器が明らかに取り出されていることを証明しない限り、信用できない。

あのテレビを見ていたわれわれ医師は一笑に付し、私が憤慨することすら、大人気ないというが、これは一般の人たちへの影響があまりにも大きく、非常な実害を伴なうおそれがある。

——と書いている。

また、これに続いて、映画監督の木下恵介氏が「比国で聞いた手術の手の内」と題して、

……フジテレビの「フィリピンの心霊手術」につき、朝日新聞のテレビ・ラジオ面の「波」（批評欄）にもびっくりさせられた、と出ていましたので、つい先日フィリッピンに旅行したばかりの私が、マニラで聞いた話を参考までにお伝えします。話してくれた人は、マニラに六年とかいる信用できる日本人です。

ある日、ホテルのエレベーターで不思議な感じの人達と乗り合わせました。観光旅行ではなさそうな日本人の老人男女で、聞いてみると、沖縄の人たちでした。

「バギオに変なやつがいましてね。指さきだけで手術してどんな病気でもなおすというのですよ。一回の手術が五百ドル（十八万円）。痛くもないし傷もなんにもない。いまアメリカからわざわざ来る人もあって、あの沖縄の人たちもそれなんです。

ところがあれにはタネがありましてね、手の中に血

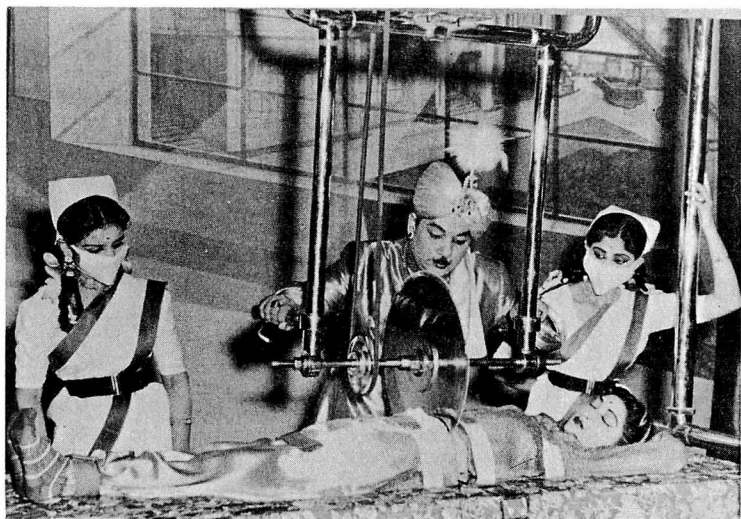
の粉末をかくしておいて、それをもみながら水にといて流すんです。その血の中から豚か牛の臓物を出すもんだから、患者はびっくりして、自分の悪いとこがとれたと思うんですね。インチキなんですが、病気って変なもので、それでなおったと思う人は本当になおっちゃう人もあるんだから、びっくりです」

テレビという公器にのった以上、沖縄の人たちのようにわざわざ出かける人があるかも知れないので、ちょっと書きました。

といっている。

〔**P21下写真**――これがその心霊手術の実況です。――少年マガジン提供〕

目明き千人・めくら千人……●

ところが、その翌21日の紙上にはもう「心霊手術師つかまる」という記事が載っているのだから痛快この上もない。そこで私も「目明き千人・めくら千人」という一文を寄せた。（24日紙上）

……インチキ心霊手術師逮捕のニュースに、二十一日の朝は心洗わるる思いがした。（中略）
　私もあのテレビを見て、「これは後楽園でやった世界魔法団の〝美女真二つ〟という胴体切断術で、舞台一ぱいに血しぶきをあげ、臓器（もちろん代用品）をゾロリと出してみせたのと同工異曲のトリックじゃないか！」と苦笑していたところなので、やはり世の中は目明き千人・めくら千人だ！　と、うれしくなったのである。
　あの、いわゆる「心霊手術」が、本当に指先だけででき、「霊力」で出血もなく、たち割った皮膚の縫合もアトカタもなくできるとなれば、現代の生理学は否定されねばならぬことになるが、トリックなれば幾多の奇術師が苦もなくやってのけていることなので、何の不思議もないのだ。要するに、いかに巧みにお立ち合いの視線をさえぎってトリックを成功させるか、ただその演技の熟練如何にかかっているだけの話である

〔**P23下写真――P・C・**ソーカー氏の〝美女真二つ〟〕

ディレクターの弁明……●

すると、29日の同欄に、今度はフジテレビの原敏明ディレクターが、「トリックではない心霊手術」という弁明を寄せて、
（前略）私は九月二十一日から一週間フィリッピンに滞在し、アグパオァ（通称トニイ）、マルセイロ、メルカド、ブランセの四氏による二十余例の手術に立会いました。私はこれらの手術に何らかのトリックがあるのではないかとの観点から、あらゆる角度から見て、これら観察を続けましたが、終始施術者のかたわらではいずれもまごうかたなく現実の手術でありました。
　手術は放送されたもののほかに、胃ガン、蓄のう症、しゅよう、言語障害、抜歯などがあり、特に斜視の手術では、目の中へ指をつっ込んで手術し、終わったときは、術前に方向が著しく違っていた目が正常な位置となっていた例など、医学的には素人の私などに

も、その結果は一目りょう然でした。
これらの手術により摘出（てきしゅつ）された患部、血液の一部は、マニラの極東大学医学部で裏付け調査を行ない、それらが間違いなく患者の患部であり、血液であるとの報告を受けております。
さらに、私は自分自身で体験すべく、メルカド氏を訪れましたが、彼の指が私の皮膚に触れる瞬間、電撃（でんげき）のようなショックが体を貫き、その個所が注射した跡のようにほんのり赤くなり、血が流れました。また、直接患者の皮膚に触れず、五十センチくらいの距離から人差指を小さく振るだけで皮膚を切ってしまうという驚異的事実も目撃（もくげき）いたしました。この事実は、私の三人の同行者も目撃いたしております。
木下恵介氏のご指摘になったような、インチキ心霊手術の存在していることも知っておりますが、私の見た二十余例の手術においては、一部の人がいうように、動物の内臓や血液などを使ってトリックをする余地はないと断言できます。私はこのような事実を自分の目で確認した上で「万国びっくりショー・フィリッピンの心霊手術」を放送いたしたのです。

――と、いっているが、私はこのくらいのお立ち会いの目がくらませる（この場合はあえてくらますといってよかろう）ことができなければ一人前のペテン師にはなれないと言いたい。

インドのソーカー氏が十年前ほど前に来たときは、「舌切り魔術」が評判になった。三、四十人もの立ち会い人の目の前で助手の舌を切って、すぐ復元してみせたのだ。その中には、五、六人のお医者さんも交っていたが、トリックであることをハッキリ認識できたのは、やはりアマチュア・マジシァンの二、三人だけだった。医師という職業は、四六時中人の生命と相対して、緊張（きんちょう）そのものの日常をくり返しているせいであろう、案外この「霊能力」なるものを信じている人が少なくないし、姓名判断とか、方位迷信などの信奉者（しんぽうしゃ）も多いのである。

いわんや、自分でおっしゃるようにこうした方面に「ズブの素人」であるディレクターを手玉にとるくらい

の度胸がなければ「心霊手術師」などと名乗れるはずもないではなかろうか。

死角をつけば……●

折から、十二月一日にはホテル・ニューメグロで石田天海氏の八十の賀の華麗な大祝宴があり、北海道から南は九州まで、全国の奇術ファンが集まった、その席上でも、この心霊手術は話題をにぎわしたが、絶対にだまされないはずのカメラのレンズがだまされたのである。一ディレクターの目をくらますことができないようでは一人前のペテン師ではなかろうじゃないか！——という結論が出た。

また、心ある外科の専門医は、手術の際に外部に流れる血液はわずかなもので、問題は内に溜る出血をどう処理するかにあるといっている。あのように、消毒もせぬ手を突っ込んで患部をつかみ出し、アトをなでると切り口も元のままになるというのも生理学を無視した話だが、内出血まで雲散霧消させるなどは、神話にはあり得ようが、現実には不可能なことだといって、苦笑していた。

——ともあれ、いずれかの方法で、ほんの一瞬視線をさえぎられるか、死角から見せられるかすると、その道程を思わずに、結果だけに驚くのが一般大衆なのである。

——こんな甘っちょろい偽瞞も、しかし奇術眼をそなえさえすれば、いともかんたんに見抜くことができようというものである。

心霊術（スピリチャリズム・トリック）については、別に項を改めて詳しく説くが、奇術の心得がなければ、あのような子どもだましのまやかしにひっかかってバカを見ないだけでも、どんなにトクをするか！——量り知ることのできないものがあろう。

器用と不器用……●

ところで、
「奇術は私も大好きで、少しはおぼえたいと思うのですが、何しろ不器用で……」
　という人が少なくない。いつぞやも上野の精養軒のある宴席で、奇術協会の若手花形花島皆子がきれいな演技を見せての帰りしなに、筆者に挨拶したものだから、隣合っていた老紳士が、
「あの若さで達者なもんですなア、ああいう子はよほど器用な生まれつきなんでしょうナ」
　と感嘆するので、
「いや、どんな名人・達者といわれるマジシャンでも、まさか奇術師たるべく生まれついたわけじゃありませんよ。かえって不器用といわれたくらいの人が、志を立てて熱意を燃やし、猛けいこを続けた結果名声をかち得た実例はいくらでもあるんです！」
　と答えると、その老紳士は深くうなずいて、
「なるほど！――こりゃアいいお話をうかがいました！」
　と握手をもとめ、

「一度自分の農場へ来てその話を聞かしてくださいませんか！」

と懇請されたことがある。

実際、なまじ小器用に甘えていいかげんにお茶を濁しているような連中は、いつの間にか忘れられた存在になる例が珍しいことではない。精神一到何事か成らざらん！である。興味をもったら勇を奮って取り組んでみるがよいのだ。――ただし、五度や十度の失敗で投げ出したり、あきらめたりしたのでは、ものになるわけがない。根気とねばりが大成させるものであることは、べつに奇術に限ったことではないが、「読書百ぺん意自ら通ず」の代わりに、「演技百ぺん手自ら動く」のが上達の極意だと思っていただければ間違いはあるまい。

何も奇術に限ったことではないが、アイディアマンではあっても、ネタの製造元であっても、舞台に立って演技が直ちにうまくできるものではないのだ。

〔P27上写真――「フラワー・ステージ」向かって左より花島みな子、松旭斉すみ江、花島かおる（日本奇術協会青年部）〕

奇術の歴史

そもそも奇術の始まりは……●

さて、奇術の起源は大へんに古く、その記録に残る最古のものは、ロンドンの国会図書館にある「ウイストカー・パピロンズ」だといわれているが、これは今から約六千年の昔、「パピルス」という、葦のような植物の葉の粗製紙に、古代エジプトのある奇術師が、王様の御前で鵞鳥の首を切り、また元通りに継いでみせたことが記されてある、貴重な記録だとのことである。

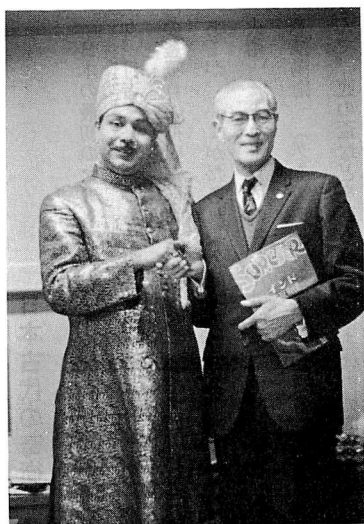
だから、奇術は実に人類と共に進み、人智と一しょに発達して来たといってもよいであろうが、その、そもそもの発祥の地が、占星術や易と同じく東洋であったとい

うことは感無量である。

そうして、それがおのおのの民族によって生かされ方が異なり、国民性の土壌で異なった育ち方をしているのはおもしろい。

インドの奇術は、最も魔法じみたムードをもっていることで世界に知られているが、彼のP・C・ソーカー氏が先年来演の折の記者会見で、「西洋奇術と東洋の魔術の差異と特色は？――」と質問され、

「一口に言えば、西洋に発達したマジックは、多分にメカニカルなものであるのに対して、東洋魔術の特色はたいへん神秘的な味が濃いということでありましょう。インドは、その東洋魔術発祥の地であり、みなもとをヨギ(yogin＝ヨガ行者)の難行苦業の果て、はじめて行なうことのできる、人間放れのした体技に発しているので、科学的なネタとメカニカルなトリックに頼る西洋マジックとは、まったくその味を異にしているわけです！」

と胸を張って答えたシーンを、折あるごとに印象深く思い浮かべるのである。

これの東漸したものは、まず中国で非常にスケールの大きい、夢幻的なものとなり、これに曲芸の技法が多分に加味されて、中国独特のはなやかで楽しい「戯術」ができあがり、これが日本に渡来して「外術」となり、「放下」「奇妙術」「奇術」「手術」など、いろいろに呼ばれ、そこは小手先の器用な日本人のことであるから、次第に小手先ものが発達して、「しなやかな手」という意味から「手品」となり、これに「電光石火の早わざ」という意味が加わり、「稲妻」の妻が結びついて「手妻」

となったのだ。

〔**P29下写真**――インド大魔法団長P・C・ソーカー氏と著者――サンケイ会館の楽屋で〕

奇すしきすべ……●

しかし、日本にも、いわゆる「神代の昔」から奇術は存在した。

これが、前にも述べた「奇すしきすべ」であることはもちろんで、現代の大衆が考えるような娯楽的なものを指すのではなく、占い、予言も、加持祈祷も、まじない（禁厭）も、招霊術も、千里眼も、錬金術も、……とにかく、ありとあらゆる不可思議現象を一括したものがそれだったことはお多分にもれない。

英語の「マジック」（Magic）は、ギリシャ語の「マゲイア」(Mageia)、ラテン語の「マギア」(Magia)、ドイツ語の「マギー」(Magie)であり、その本来の意義は、ゾロアスター教（陰陽教）の祭司のことであり、「マギア」は、「巫術者」のことであるから、奇術の最初の形式は、いずれも多分に魔法・呪術めいたものであり、呪文を唱え、印を結び、あるいは九字を切る……といった法術を行なうことによって、どんな奇蹟（Miracle＝ミラクル）も顕現すると信ぜられていたもののようで、自然に宗教や医術とも結びついて、大いに世に行なわれたものである。だから、今日いわゆる「心霊手術」が話題をにぎわすのも、何の不思議もないのである。

日本古代の奇術……●

日本の最初のマジシァンもまた、古神道の神官や巫女、行者、修験者であった。備前（岡山県）吉備津神社の釜鳴りの神事「吉備津の鳴る釜」はあまりにも有名であるが、「くがだち」（久訶陀智）の名で呼ばれる「鉄火術」（トロトロに灼熱した鉄棒を素手でにぎる）や、「探湯術」（グラグラと沸とうさせた熱湯に手を突っ込んで、底の盃などをひろう）は、古代の神前裁判に用い

られたことは、古事記、日本書紀外の古文書にも記されているところであるが、古代ローマのアポロの殿堂でもこれと同じような裁判法（Fenerprobe）が行なわれていたことも、一そう興味が深い。

後にこれがしだいに職業化されて、「のろんじ」（呪師）となり、宮廷の宴に招かれて、火食いの術、呑刀術、白刃渡り、怪力術などを演じたり、あるいは深夜、――いわゆる「草木も眠るうしみつどき」に病気平癒の祈願をこめるのはまだよいが、「のろい」となって憎悪の的となった人々の生命を縮める祈祷や秘法が修せられたのは、だれもが知る通りで、現代にも長く尾を引いているが、これらの諸方術は、ことごとくが一種の暗示術（ヒプノチズム＝催眠術）であり、また物理現象、生理現象であって、何も摩訶不思議なカミワザ（神業）ではない。

〔**P31上写真**――「動物強制術」宮岡天外のポスター（近藤勝氏提供）〕

中国の変戯法児……●

刀剣類を用いる奇術は、「呑刀術」をはじめとして中国でもずいぶん派手に演ぜられているが、「南京出刃うち」の名で知られている手裏剣投げや剣通し（ソード・ボックス）なども、中国人が演ずるのは何となくおおらかで、ゆとりたっぷりであるのに、ひとたび日本人によって演ぜられると、「鬼気迫る」といった凄味が加わるのは、おのずからなる国民性の相違がハッキリと感ぜられるのも争えない現実である。

怪談にしたところで、日本の幽霊はいかにも陰々滅々として、凄味たっぷりであるが、中国の幽鬼や妖精は、恐いというよりもむしろチャーミングでさえあって、あの「聊斉志異」なんかに登場する霊魂や花の精などの魅力は、むしろ実在の人間以上に生々しいものがある。

鳥かごや金魚鉢を出す奇術もまた中国の味の深いものだが、金魚釣りのごときも、あの東洋風な味は、西洋奇術とまったく別個のものである。

十九世紀の中ごろ、アメリカの奇術師ロビンソンは、「程連蘇」と名乗り、まったく中国人になりすましてこの金魚釣りを売りものに欧米を巡業、大当たりをとったのなどは、よくこの間の消息を物語っているといってよかろう。中国の奇術師は変戯法児（ペヌシー・ファー）である。

日本手妻の味……●

日本では、小手先ものが特に喜ばれ、発達したことは前にも記したが、中国伝来の「茶わんと玉」などは、キメの細かな「和妻」（日本古来の手妻）風の演出で一だんとその濃度を増し、「水からくり」は、中村一登久から松旭斎天一に承け継がれ、さらに天勝によって大成され、欧米の巡業でもマダム・テンカツの「水芸」は、オリエンタル・ムードの最も濃厚なものとしてかっさいを博した。

33 奇術の歴史

戦後、二代目天勝も、二代目天花（松天勝）も、これを呼びものとして数回にわたり、イギリス、フランス、西ドイツ、イタリア、南北アメリカまで巡業している が、到るところで好評を得、天勝はパリーで延々一年間のロングランに成功して帰ったほどだが、大阪の帰天斎正一がお家芸としている。白紙をひねって蝶々に生命を与えて自由自在に舞わせる「浮かれの胡蝶」なども、純粋な日本の古典奇術として世界に誇ることのできる立派な作品だとおもう。

――このようにして、インド―中国―日本を連ねる東洋奇術の伝統的風格は、けんらん豪華ではあるが、メカニカルな西洋奇術と相対して、まことに神韻びょうびょうたる味をもっていることを再認識し、いっそう大せつにしなければなるまい。

――以上は、かつて私がNHK国際放送でお話した「世界奇術大観」のダイジェストである。

〔**P33全写真**――二代目松旭斎天花の「水芸」〕

奇術応用の精神療法

動物の心霊手術……●

この奇術の元祖と伝えられる鵞鳥の首切り術は、68年のクリスマス前夜祭に、TAMCのメンバー、鈴木順一郎氏が七面鳥を使ってNETテレビから放映したが、これがやがて人間の首切りとなり、胴切りとなり、そうして「心霊手術」に進歩（?）したのであるが、もとより進歩したのはトリックであって、鳥でも、人間でも、生体をほんとうに切断して元通りにつなぎ合わせる手術は、まだ完成されていない。

ようやく臓器の入れ替えが可能という論理が認識された段階で、心臓手術の成否で世界中が沸く今日であるこ

とは、だれしもの知るところであろう。

しかし、このように、現実にはあり得べからざる奇現象を、さも現実にできるように信じ込ませるところがすなわち「奇すしきすべ」であって、術者があやしいゼスチュアを大げさに見せながら、呪文を唱え、祈りを捧げ、あるいは印を結び、九字を切る、ｅｔｃ……の手段を用いることによって、摩訶不思議な超自然力が働くものと、いまでも信じている人は驚くほど多いし、まれには術者自身も学理的知識がなく、そう信じ込んでいる者もないわけではない。

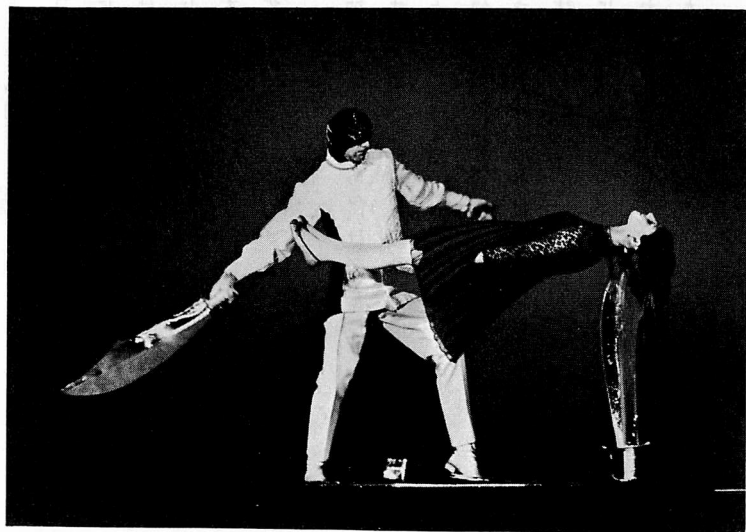
医療方面でも、この強力な暗示力を善用して、精神療法を行なっていることも事実であるが、もっぱら現世利益の病気治しを看板としている新興宗教や拝み屋、ないし心霊術師の「テレパシー」（遠隔感応術）などで、「ガンは手術せずに治せ！」などと誇大宣伝をして、万病が治ると大ボラを吹いている連中が野放しになっているのは困ったことである。

医家が、時に「偽薬」を用いて「プラシーボ効果」による薬毒や副作用を回避し、まともなヒプノチズム（Hypnotisme＝催眠術）の応用で悪癖の矯正や無痛安産などに効果を挙げているのは例外だが、この「奇しのわざ」は、「奇しの神」（久志之加美）「クス（薬）の神」に通じ、祈祷やまじないによって病患から救われると信じた古代人の考えは、いまにその尾を引いていることを知っておくべきである。

往古、魔術師はすなわち魔法使いであり、全知全能の神のつかわし人、あるいは多年難行苦業を重ねて、その法術を体得した行者や修験者と同格と信じ込まれていたようで、初代天勝などは、地方巡業中よくこの霊能力を備えた人間と信じて疑わぬファンに真剣に病気治しを頼まれて、断わるのに困っていたものである。ある大衆雑誌の対談会でも、歌人の中原綾子女史のごときは、信者にも近い口調で、この天勝霊能説を主張して譲らず、これには微苦笑を通り越して涙ぐましい思いをしたものである。

ショーとしての催眠術……●

テレビショーが「催眠術」と称するインスタントなトリックを、おもしろ半分にしばしばナマ半可な放送をするので、とんだ大小の悲喜劇をひき起こしているが、奇術の舞台でも「催眠術」を施すと称する演技は、昔からほとんど欠くべからざるプログラムのひとつとしてとり入れられているのも、こうした大衆の心理を意識してのことであったろう。

例の「人体浮游術」や、「まわりかんたん」と呼ばれている、一本の支柱にワキの下をあてるだけで身体が鉄板のように硬直し、魔術師のゼスチュアにつれておもむろに一回転する、――それが、いかにも一本竹の上に催眠状態で術師にあやつられるように見えるので、「かんたん夢の枕」の古事からこう名付けられた――演技などは現在でもインドのソーカーやアラビヤ魔法団のアラジンなどが、神秘ムードたっぷりにやると、やはりほんと

うの魔法と信じ込んでいる人が少なくないのである。

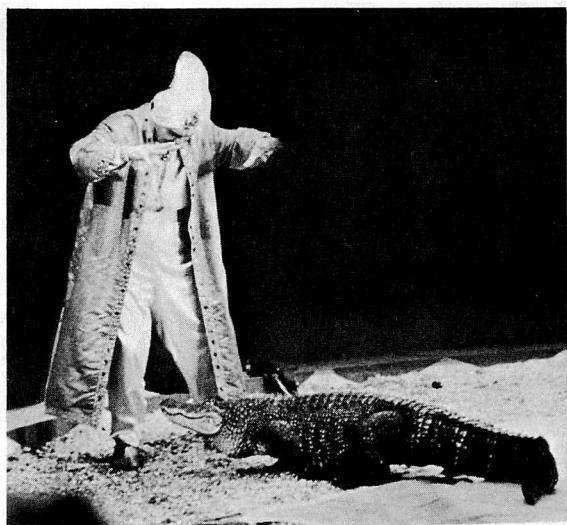
このトリックは決して新しいものでなく、初代天勝がアメリカから輸入(ゆにゅう)したのは明治三十八年のことだから、最初の洋行みやげとして歌舞伎座で公開してからすでに半世紀もたっているわけだ。

もっとも、この初代天勝という人は、義弟（妹寿子の夫）に矢部八重吉という、フロイトの直門で、国際精神分析学会日本支部長をしていた心理学の権威者がいたので、本格的にヒプノチズムもマスターしていたから、二度目の渡米のときなどは、その絶妙な「読心術」が爆発的人気をとったものである。

〔**P36下写真**――「空中大浮揚術」世界魔法団のメフィスト（フランス）が演ずる。剣一本に支えられて、少女の身体は宙に浮く……！〕

動物催眠術とは？……●

1968年に日本公演をもった「アラビア魔法団」の

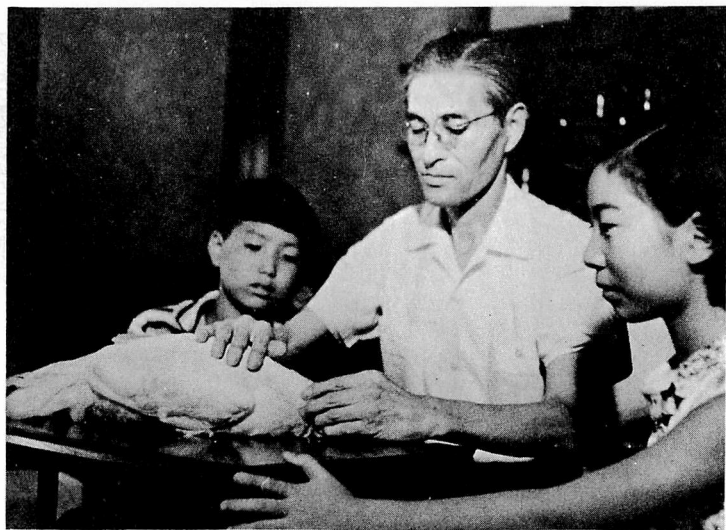
アラビア魔法団のワニの催眠術

プリンス・カラカバは、十四ひきのどう猛で鳴るクロコダイル種ワニに催眠術を施し、自由自在にあやつるという大宣伝をやったが、この種の「動物催眠術」と称する

もの、実は動物の習性と連鎖反応などを利用したテクニックなので、明治時代に宮岡天外という奇術師（松旭斎天一の弟子で、天一一座では天慶と名乗っていた）は、「動物強制術」と称して巡業した。この方が正直な呼び方なのである。

この、いわゆる「動物催眠術」で人の度胆（どぎも）を抜く、一番手っとり早い方法を、まずここでひとつご伝授しておこう。

にわとりを眠らせる……●

私がかつて無声映画時代の人気の王者鈴木伝明君と東北を旅行したとき、岩手県花泉在のある農家で、よろず配給当時の珍品だった地酒と山菜料理をご馳走になった返礼に奇術の二手、三手をご披露に及んだことがあった。そのとき、ちょうど庭先にエサをあさっていた白レグホンの見事なにわとりをつかまえて、

「えいっ！」

と気合一声、たちまち剝製(はくせい)の置き物のように動かなくしてみせると、居合わせた一同眼をまるくして驚いたことはいうまでもない。

しかも、眼を閉じてうずくまったまま、二分——三分——と小動きもしないので、伝明君が、

「まさかおとした（殺した）んじゃないだろうね」

と心配し出したから、私は笑って、

「心配ご無用、一、二、三！」

と手をたたく、くだんのにわとりは夢からさめたようにポッカリ眼を開けてブルル！　ととさかをふり立てたから、みんなは二度ビックリ。

「やア、君はエライ術を知ってるんだなア！」

と、伝明君がまず感嘆の声をあげたので、村人から私はまるで神さま扱いにされ、とんだくすぐったい思いをしたことがあった。

だが、こんな芸当はだれにだってできる。要はにわとりのバタバタ騒ぐのに恐れをなさず、二本の脚をひとつかみにしてさかさまに掲げ、三—四回上下に激しくゆさぶったら、こいつをテーブルの上に横たえて、左のひとさし指とおや指でにわとりの両眼をおさえ、右手で首すじをやさしくなでてやるだけでよい。——そこでタイミングよく、気合いをかけて手を放す。——ほっとけば何分間でもじっとしているが、ポン！と威勢よく手をひとつたたいてやると、ポカリと眼をあけて立ち上がるのである。

いまは亡き新派の名優小堀誠君は至っておく病者で、いろいろと愛すべき逸話(いつわ)を残しているが、金子洋文氏の

「牝鶏」という劇を上演したときは、「隣のおとう」の役で、生きた牝鶏を抱いて二十分近くも立っていなければならぬのに大弱り、おっかなびっくり抱いているので、鶏の方はよけいバタバタやる。それも長丁場だからたまらない。もがきにもがいたあげく、引っ掻いて飛び立ってしまう騒ぎが毎日続いたので、小堀君は音をあげてしまった。

ちょうどそのとき、楽屋に遊びにいっていた私は、

「よろしい、ひとつ秘伝を教えてあげよう」

と、この手を伝授してやったら、

「おかげさまで楽々とやれるようになりました」

と、大へん喜ばれたことがあった。

霊媒と称する連中のやる、念力で物体を動かすなどという実験（?）に用いられる縄抜け術のごときも、マスターしておけば、強盗に押し入られて高手小手にいましめられても少しも騒ぐことはなく、ゆうゆうとその手を抜いて、邪魔者は縛ったから……と安心して金品を物色している泥棒をやっつけることもできれば、警報器を鳴らすこともわけのないことなのだ。

これは、筆者がNHKの「生活の知恵」その他でしばしば実演、好評を博している。

「縄抜け術」の詳しい方法は心霊術篇で説くこととして話をすすめることとする。

奇術の学び方

タネを知れば簡単

奇術を学ぼう！

明治の文豪国木田独歩は最もたいくつと平凡をきらい、その傑作のひとつである「牛肉と馬鈴薯」の主人公に、「私はアッと驚きたいのです！」というセリフを吐かしているが、昭和元禄の今日では、もう自分ひとりが驚いたところではじまらないのである。

だから、視聴者参加のテレビショーなどには「不死身人間」だとか、「昭和の仙人」だとかの触れ込みで、ナマ身に畳針をズブリズブリと刺してみせるとか、トロトロに焼いた鉄棒を素手でしごいてみせるとか、両手に米俵を掲げて真剣白刃の上にハダシで乗ってみせるとか、etc……の荒業を見せて、まず司会者をアッ！と言わせ、そのオーバーな賛辞を受けては、「何とか山に十何年籠って、木の皮を食い、草の根を噛みながら難業苦行を積んだ結果、このような不死身の鍛錬を成し遂げたのじゃ！」——などと大ボラを吹く連中が続出するかと思うと、「不動金縛りの法」だとか、「人橋術」などの他愛のないインスタント催眠術を見せてブームに乗ろうとしている手合いも売り込みにけんめいだが。これらは大方かんたんな物理現象か生理現象だから、そのタネを知ればだれにだってできる芸当だし、心霊術なども全部が全部トリックといってよいので、奇術を学べばあなたも容易にスーパーマンになれて、天下の人気を占めることも夢ではないのだ。

「バケモノの正体と手品のタネは、いつでも反対のところにある！」と昔から言われているように、衆目を現象に引きつけておいて、その反対のところでタネを操作するのが常識であるから、この原則を心得ておれば、世の中に「不思議」というものはなくなるのである。

まア、とにかくつぎのページをくりたまえ！

奇術の学び方

不器用者ほど上達は早い……●

さて、このようにして、奇術・魔術の知識をひと通り身につけたら、「よし、私もひとつやってみよう！」という意欲が湧きあがるにちがいあるまい。では、時節がら極めてスピーディにあなたをマジシャンにしてあげましょう。

前にも言った通り、熱心でさえあれば、器用・不器用にかかわらず、――いや、かえって不器用と言われる人ほど一度あぶらが乗ってくると上達が早いのである。何はともあれ、興味をもったらやってみることをおすすめする。

松旭斎天勝と言えば、明治・大正・昭和の三代にわたって〃魔術の女王〃と謳われ、嬌名世界を圧した人であるが、この人の奇術界入りもまったくマジック的で、気が付いてみたら天一という大師匠の弟子にされていた！――というのが真相、「生まれつき小手さきが器用で……」などと従来の伝記に書かれたのは一種の伝説に過ぎない。

文字通り、血の出るような修業ぶりは、拙著「松旭斎天勝」に詳しいが、いわゆる「小手さきの器用な人」ではなかった。それがあのような大物になったのである。

だれだって、奇術師たるべく生まれついた人などというものはある筈もないし、今は、名人・達人と畏敬されているプロフェッショナル・マジシャンにしたところで、別誂いの指を持っていたわけではないのだ。みんな、飽かず、たゆまず、稽古に明け暮れ、練習に励んだればこその大成なのである。五度や十度のやりそこないや、三月、半年の練習でうまくできないからといって投げ出すようでは、どんなかんたんな奇術だって自分のも

のにすることはできない。

奇術愛好者に悪人はいない……●

このごろの、いわゆる〝奇術ブーム〟で、地方のターミナル・デパートですら、奇術用具を手に入れることが容易になった結果、その説明書を電車やバスの中で読んだだけで、ただちにその晩の余興にご披露に及ぶという、流行のインスタントぶりを発揮する諸公もないではないが、これではネタバラシにならないのがむしろ不思議というのほかはない。

しかも、一度タネを知ると、「なアんだ！」とバカにするのは、またこういう人たちなのである。おかしな話だが、実際の話である。

〝タネのない手品はご法度〟――という言葉が昔からある。錯覚を利用するとか、死角や盲点を巧みに衝くとか、その他もろもろのトリックを用いて、不可能事を可能ならしめるのが奇術であることはいうまでもない。

観衆もまたマジックにトリックのあることは百も承知で楽しんでくれているので、「ゴマ化された」とか、「まんまとだまされた」とか憤慨するのなどは、決してほんとうの奇術ファンとは言えない。

このトリックをトリックにあらずとし、神の力だとか、霊能力だとか言って人をだまくらかすのは、〝心霊屋〟であり、〝宗教屋〟であって、われわれとは全く別世界に暗躍するペテン師どもである。〝ゴールデン・フィンガー〟などと、曲がって指を自慢するスリなども同類である。奇術の大きな魅力はまた秀れた奇術師の人格からにじみ出る魅力でもある！――といってもよろしいであろう。

われわれは、どんな不思議現象を現出してお目にかけても、不言不語のうちにトリックを用いていることが常識になっているのだから、まさに〝看板に偽りなし！〟防犯に貢献するところは多いが、犯罪者にはなり得ない。緒方博士にならって、「奇術愛好家に悪人はいない」ことを大声に呼号したいと思う。

世にますますはんらんしつつあるマジック・ファン諸君！諸君はこのプライドを忘るることなく、大いにその神技を習得し、誇示されるがよい。

したがって、その初歩のうち、不覚にもしばしばネタばらしをやり、神秘なるトリックの楽屋うらをのぞかれるような失策があっても、決してはずかしがることなく、むしろその失策を逆利用する心構えで、大胆に振舞うがよい。――つまり舞台度胸をつけるのである。そうすることによって、失敗が失敗とはならず、かえってそれが愛嬌となり、座興のタネとなって、拍手を浴びる結果を招来することにもなる。――緒方博士のおっしゃる「奇術の一徳」を加えられるのである。

No. 692—Spirito

SPIRITO

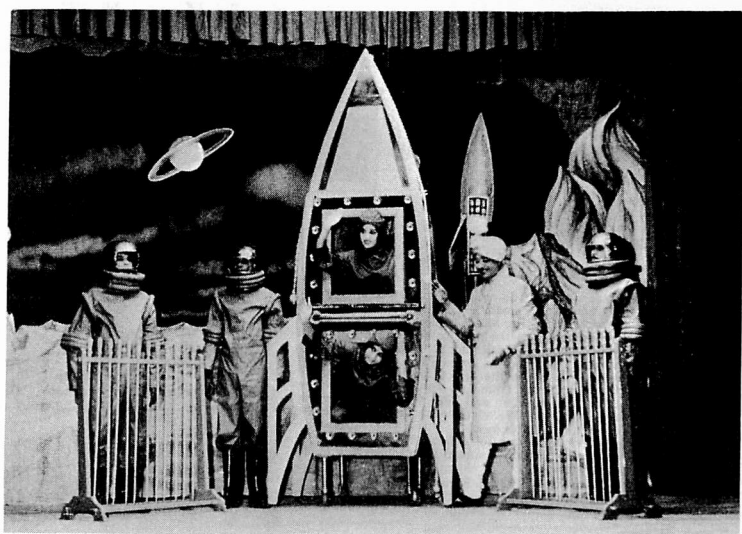
ayer's latest sensation. The radio that tunes in on the "my
appearance, Spirito is a small box as is used in ordinary
a small aerial loop, an ear phone and a single large dial
of questions arranged on the dial, to any one of which th
re no other connections with the box, and there is noth
, any question, either verbal or written, is instantly ans
any question turned to on the dial is answered with prom
any broadcast program from any regular station, either
Spirito with a loud speaker and hear the voice in its nat
atest modern mystery. We claim nothing supernatural f
s the master marvel of the age.
gicians will find that Spirito offers the sum total of a
ing and mysterious. It will insure a new source of unsolv
eans of ready income.
ce, Spirito complete including regular radio broadcast fea
rito, complete but not including apparatus for radio bro
l plans for building and operating Spirito, including su
lecture, etc. ....

スピリチャリズム・トリックのカタログの扉

サーストンの三原則……●

しかし、安易にこれになれてはならない。「このような不思議な現象も、実はこんなトリックを用いると、わけもなくできるのですよ！」と、はじめからネタを割ったのでは、奇術のおもしろみがゼロになってしまうからである。不手際でネタばらしになったときには、おのずからその限度があり、機智が必要で、一から十までタネあかしになってしまっては興覚めになるばかりだ。

有名なアメリカの奇術師サーストンが樹立した「奇術の三禁則」というのがある。

1　あらかじめ演技の内容を説明してはならない。

2　同じ奇術をその場で二度くり返してはならない。

3　タネあかしをしてはならない。

——というのがそれである。

だが、タネあかしをしなければ奇術は普及しない！——と、柳沢義胤氏は嘆いているが、ここが奇術を学ぶ者の英知のはたらかし方だといえよう。

このところ、諸外国から有名な奇術師が続々やって来て、日本はこれらプロ・マジッシァンの好個のマーケットとなっている観があるが、これらのマジッシァンが優れた演技を見せると、マスコミ界は争ってタネの詮索に眼の色を変える傾きがあるが、これは第一エチケットを欠く行為であるし、いいかげんな素人の当て推量は、奇術を知っている者にとっては、噴飯に堪えないナンセンスに過ぎないし、一般観客にとっては、せっかくの好奇心を見ぬ前に失わせる結果となるだけで、得する者はだれひとりないという、バカげた結果をみるだけなのである。

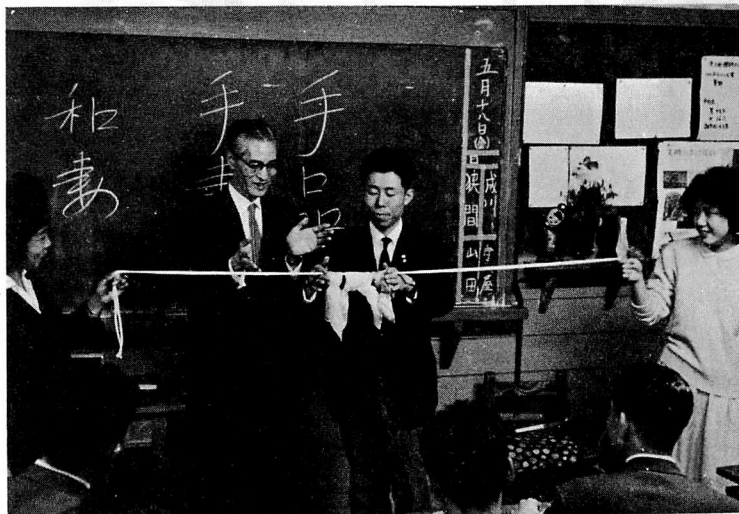
特に外来の芸術家に対して、われわれが代わってその

失礼を詫びなければならぬような、恥ずかしい行ないはもうくり返さないようにして欲しいものである。

奇術・魔術の鑑賞は、アッと驚き、ウムとうなり、手放しで不思議現象に酔うのが一番楽しいのだ、……と思っていただきたい。

しかし、これはもちろん一般大衆の奇術鑑賞(かんしょう)のエチケットをいったのであって、趣味として奇術をマスターし、やってみようという人は、進んでトリックを知り、その演出を学び、さらに新しきテクニックをくふうしなければならぬことはいうまでもない。

だが、そのタネ・シカケを、決してみだりに決して軽々しくあかすべきではなく、またプロ・フェッショナル・マジシァンが舞台で演じているマジックのトリックを公表すべきではない。このケジメをはっきりしておくことを忘れてはならないのである。

プロ・マジッシァンが、いかにタネを大切にするか、――その生きた実例をひとつ挙げておこう。これを知れば、ナマナカの知ったかぶりがいかに罪の深い結果にな

“トランクぬけ” の舞台。演ずるのは松旭斉天花

るかをキモに銘じて刻みつけるよすがとなるに足るであろう。

〝栄冠涙あり〟とは、よく口にされる言葉だが、〝魔術の女王〟として三代に君臨した初代天勝は、それに相応しくオリジナル・アイディアに年がら年中人知れぬ苦労を重ねると同時に、そのタネを文字通りいのちがけで守った人である。

「松旭斎天勝一座」の旗挙げをしたのは、まだうら若き二十六才のときで、舞台は新装成った浅草の帝国館のコケラおとしであった。

記録破りの大当たりで、昼夜二回の約束が三回にしてもつめかける観客のさばきがつかず、最初十日間という予定が、日延べ、また日延べ、延々三ヵ月というロングランとなったのだが、その大当たりの興行中、たまたま隣のルナパークが火災を起こし、煙が帝国館の舞台に流れ込んだことがあった。

このとき、天勝は例のトランク抜けの演技中で、手錠をかけられてトランクに入ったばかりのところ、後見は色を失って、

「先生、火事です！」

と、あわててネタ場に手をかけようとすると、中の天勝はトランクの中から、

「開けちゃいけない！　開けちゃいけない！　どん帳を、どん帳を！――」

と必死に叫ぶのだった。

そこで、大急ぎでどん帳をおろし、トランクを奥に移して、

「先生、もうだいじょぶです！」
というと、はじめてネタ場を開けて悠々と出て来た！
——という有名な逸話がある。ゆめ、タネあかしをせがんではならぬことが了解されるであろう。

しかし、トリックを知らなければ奇術はできない。タネあかしを封じてしまったのでは、奇術趣味の普及はおぼつかない。——まったく柳沢氏の歎く通りであるが、問題はもとよりこれを学ぶ人の良識——たしなみにあるわけで、奇術に限ったことではなかろう。

〃生兵法は大怪我のもと〃というが、なまじのぞいた奇術のトリックを、さも〃通〃らしく振りまわされたのでは、ハタの迷惑一通りでないばかりか、ご本人自身も傷付いて、せっかく楽しもうとした奇術の味を索莫たるものにしてしまうばかりである。

〃知る〃ということは、それ自体が心を豊かにすることで、この上なく、たのしいのであるから、いく度でも反芻してたのしむのはよいが、未消化のままで吐き出すような無作法は禁物と心得ねばなるまい。

〔**P46上写真**―P・C・ソーカー氏（インド）の〃宇宙ロケット〃の舞台。
P47下写真―川崎市成人学校で著者の奇術教授風景（二本のひも）
P49上写真―四方見通しの鉄のオリに観客に施錠させてエスケープする……！　初代天勝の〃ワンダー・ボックス〃〕

タネを尊んでタネに頼るな……●

さて、いかにタネを大事にしなければならぬかについて、いささかくどいほどのべたが、奇術はどんな芸能よりも時代の先端を行く芸術であることも自覚すべきであろう。すでに故人となったが、大日本茶道会の初代会長だった田中仙樵翁は本邦アマチュア・マジシャンの大先達で、福士政一、緒方知三郎両医博や徳川義親元侯爵と共にTAMCの名誉会長でもあった人だが、

……近ごろは人を不思議がらせることだけが、いわゆる〃芸術〃だとして、その不思議さだけがどんどん進んで行く傾向にある。が、私からみれば、その中から

いただく芸はあまりないのである。それは不思議ではあっても、芸になっていないからである。目の先だけ不思議がらせたらそれでよいというのは、芸術の本質をつかんでいない人である。……

と言っている。

同じ材料を使っても、一流の板前が作った料理と、素人の料理では、まるっきり味が違うようなもので、タネを知っているだけでは観客を酔わせる妙技を揮うことができるというものではない。トリックを百も承知でいながら、いく度見てもまた見たくなるのが、いわゆる〝名人芸〟である。奇術に演出がどんなにたいせつであるかを胆に刻むべきである。

したがって、奇術をやってみようという人は、決してタネにだけ頼ってはならないのである。タネはかんたんなほど優秀とされているが、それだけに、それをいかにおもしろく演出するか、――そこが腕の見せどころというべきで、稽古の焦点はそこに絞られなければならない。同じタネを使っても、演技のくふうしだいでまったく新鮮な奇術を生み出すことが決して至難なわざではないのだ。

ところが、タネさえ知れば奇術はだれにも容易にできるものと、極めて単純に思い込んでいる人が案外に多い。前にも言ったが、デパートでタネを買い、電車やバスの中でその説明書を読んだだけで、「なアんだ、こんなかんたんなことか！」と、すぐにその夜のかくし芸として披露に及ぶようなアマチュアも少なくはない。

もとより、奇術は芝居や舞踊とは異なるから、たまたまそれでどうやらお茶を濁ごせるものも皆無ではないが、しょせん、お粗末！　の一語に尽きて、あたらマジックの気品を傷ける結果になることが多く、演ずる本人にも興覚めになってしまう例が稀らしくないのは、まことに困った話である。

〃幽霊の正体見たり！……〃で、バケモノの正体と奇術のタネは、知ってみれば他愛のないものが多いことは事実だが、どんな小さいものでも、このオリジナリティ・アイディアは一朝一夕に考えつくものではない。知ったからとて軽々しく他に公開することは厳に慎しむべきであるのはもちろんである。

とかく世のアマチュア諸君は、その奇術がうまくやれてかっさいを受け、

「いやア実にお見事なお手のうち、感心したよ。しかし、ありゃァ一体どうなっているの？」

などと褒められた上でタネあかしを迫られると、すっかりいい気持ちになって、「実はこういうタネなのさ、ここにこうかくしといて、こうやれば、ほオらこうなるというわけだ！」

といった調子で、得々とあっさり公開に及ぶのが常である。

ところが、この結果は「なアんだ！」とバカにされて、せっかくの妙技もつぎには半分も感動を呼ぶことのできぬ仕儀となる。

本書の読者諸君も、このトラの巻は厳に秘にしておくことをお忘れなく！――

また、どんなに拍手かっさいを受けて「もう一度」とせがまれても、同じ奇術をその場でくり返してはならない。奇術のおもしろみは、見せる方もだが、見る方も、やはり意表をつかれて「アッ！」と思わず目をみはるところにあるのだから、同じもののくり返しでは、この興味が半分以下になってしまう。昔ふうの口上で、長々とその内容を説明することも同様である。

〔**P51下写真**―〃ミリオンカード〃の妙技。演ずるのは渚晴彦氏（日本奇術協会青年部長）〕

新しい奇術の演出……●

本書にもとり入れてあるが、古典手妻の口上には、また一種独特の味があって棄てがたい。けれども今日、無反省にこれを踏襲して、演技の内容を説明していたら、第一よろずスピーディになった現代人は、演技以前にたいくつしてしまう上に、あれがああなってこうなると知らされている結果に驚くはずはない。

だから新しい演出は、まず照明と伴奏をいかに有効に活用するかにかかっていると言ってよかろう。

軽快なミュージックにつれてスルスルとカーテンがあがる。――眼にしみるような純白のワイシャツに蝶ネクタイ、燕尾服とかタキシードなどに容姿を正したスマートなマジシャンがスポットに浮き出したと見る間に、たばさんだステッキをスーッとすべらせると、早くも指間にはカードの花が咲く。

――と、スパンコールの妖しい光をチカチカとまきながら登場したレディが、はなやかなパラソルを逆転させて、そのカードの花の散るのを受ける。

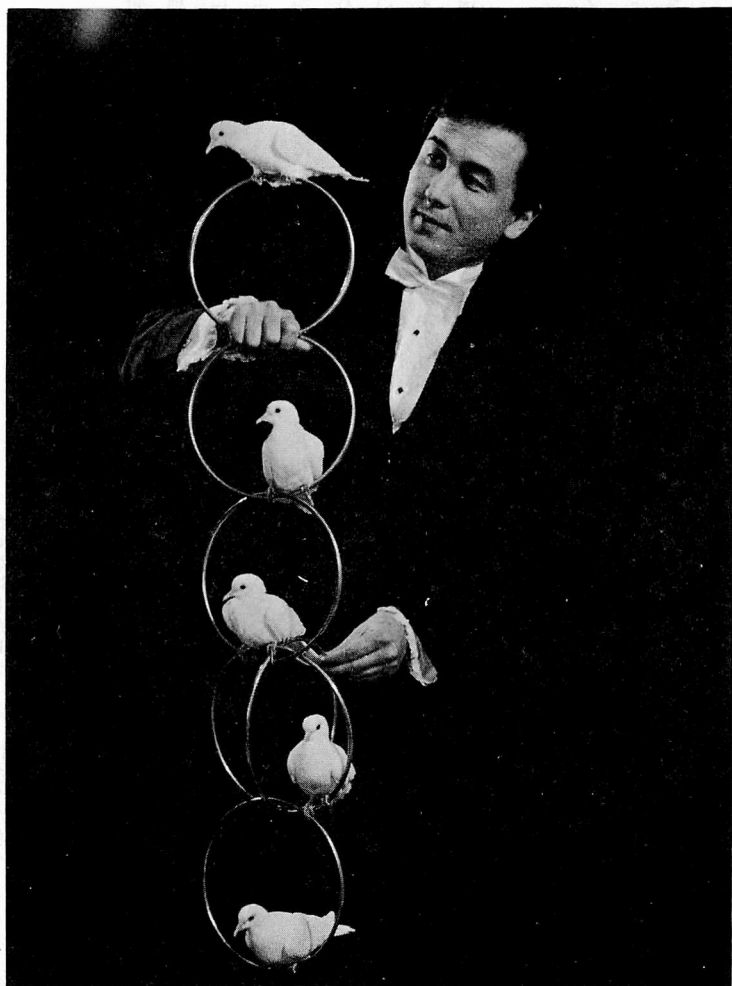
カードの花は無限に開花し、こぼれてはまた開く。

――と、こんどはそのカードの陰から本物の花が無限に出現し、こぼれ、つぎにその花の山から花束を取り出して、それで舞台一めんの花園をつくる。そしてさらにその中から美しい花の精（ニムフ）たちが舞い出て、にぎやかな総踊りとなる、……といったのが、このごろのマジック・ステージである。

したがって、アマチュアの場合も、

「一枚のうすき紙にもうら・おもて、取り出しましたるハンカチも、一応とくとあらためまして、……」

とか、

「これなる小箱の中はこの通りカラッポ、あちらの箱も中を一応あらためます。――ごらんの通り、タネもシカケもない小箱に一ぴきのうさぎを入れまして、ワン、ツウ、スリーのかけ声もろとも、首尾よくあちらの箱に空中飛行を遂げましたらごかっさい！――！」

“リングとハト” 演者は引田天功氏

というような、演技の運びをあらかじめ説明する口上は一切のべないのが、もう常識となった。

演技によく合うミュージックにつれてさっそうと登場、愛嬌を一ぱいにたたえた笑顔で一礼したら、ハンカチのうら表なり、箱の内外を、観衆の顔と相互に見合わせながらあらためてドン！と一発、ピストルを打てば、うさぎなり、鳩なりが通うとか、あるいはもっと思いがけない珍物が出現するとか、——とにかくどんな意外な現象が起こるか？——そこに奇術のおもしろさがあるわけだから、前説明はマイナスになるだけで何のとくもないのである。第一、このスピード時代に長口上は観客をたいくつさせて、興味を殺ぐことと一方でないことを思うべしである。

失敗を活かせ……●

このようにして、マジックをかっこうよく演ずるには、まずスマイルとゼスチュアが第一、オーバーに言えばショーマン・シップを身につけるように努むべきである。そうして、タネの運びを観衆に気付かれないよう、視線を常に現象に注いでいなければならぬ。

ところが、馴れぬうちはとかくタネの方に気をとられ勝ちで、そのために動作はいっそうぎごちなくなり、手順を誤ってはタネばらしをやってしまうことが多い。そこで思わぬ失笑を買い、また、

「タネが見えたぞ！」

などと意地の悪いヤジを飛ばされでもしようものなら、一ぺんに上がってしまって、糸の切れたあやつり人形そのまま、引っ込みのつかぬ不手際をさらし、それっきりで「もうこりごり！」とやめてしまうような向きも少なくはないが、緒方博士のおっしゃる通り、失敗が愛きょうとなってかっさいを浴びるのが素人奇術の一徳なのであるから、そのつもりで大胆にやるべしである。

〝準備は細心に、演技は大胆に！〟

というのが、成人学校の講座でもくり返す私の言葉である。〝失敗は成功のもと〟とは誰もが口にする古来の

金言だが、その失敗が愛きょうとなるのは奇術ぐらいのものではあるまいか。——何ともありがたいことと感謝しながら、いっそう意欲を燃やすべきである。

鏡は最高の良師……●

ところで、奇術の稽古に当たっては、いつ、どこででも最高の良師を得ることができることだ。——それは鏡に他ならない。鏡は遠慮容赦なく失敗の要点を指摘してくれる。そして、それがうまくなれば、共にニコニコと喜んでくれるのである。この厳しい先生がニンマリしてくれるようになればもう占めたものだ。

つぎには家族の前で、そして親しい友だちを観客にして試演をする。——この連中がまた、一切お世辞なしでまずいところを突いてくれる、すごく点の辛い審査員である。この良師と審査員の目がパスできたら、もう公開してもだいじょうぶだ。

デパートで奇術材料を買って、インスタントでその晩のかくし芸に人気を占めよう！——などと甘く考えている諸君も、試みに一度鏡の前で演技をやってみるがよい。いかに他愛なくタネがばれてしまうものかに、しばし呆然とせずにはおられまい。買って来たタネは決してインチキではないのだ。だが、同じ道具を使いながら、先刻売り場で実演していたプロの宣伝マンと、ズブの素人の演技が天と地ほどの差があるばかりに、奇術が奇術にならないのである。

ここであいそをつかして投げ出してしまうようなら、しょせん奇術には〝縁無き衆生〟というのほかはない。

口上と話術と機知と……●

観客の目が、常に演技者の視線を追っているものであることは前にも説いたが、演技者はまたいつでも観衆に背を向けてはならない。後ろ向いてモタモタしていたら、ネタを運んでいることがだれにもスグにおくそくされるのは当然だし、背中や腰に忍ばせたネタは一ぺんに

ばれてしまう。

また、第一お客さまに対して失礼千万であるし、表情はゼロである上に、急所の説明もできはしない。

内容の説明になるよけいな口上は禁物であるが、ときにはウイットに富んだ巧みな話術によって、小さな奇術も大きく生かすことを、日本奇術協会の前会長アダチ竜光氏に学ぶべきだ。

特にアマチュアの場合、この話術がプロの豪華な大道具にも匹敵する効果を挙げ得ることもある。前に引例した安部元章氏や、とんち教室の優等生・長崎抜天氏のごときはその第一人者といってよいが、柳沢よしたね氏は〝浪曲奇術〟の作者としても有名、これを布目貫一氏がじまんのノドを聞かせながら実演するのなどは、まさにアマチュア奇術ならでは……のおもしろさである。

アダチ竜光氏

ウイット（機知）の大せつなことは、ひとり奇術に限らないが、とかく馴れないうちは、うっかり手順をまちがえるとか、タネの仕込みを忘れるかすると、カーッ！と上がってしまって、ただもうおろおろするばかり、……ということが多い。

いつか、アマチュアとしては相当場数を踏んでいる人だったが、〝紙幣印刷機〟の小奇術にとりかかったところ、差し込むべき白紙がないのですっかりあわててしまった。実に正直なひとで、

「アッ、紙を楽屋に忘れて来ましたので、ちょっと失礼します！」

と、アタフタ楽屋へかけ込んだものだから、満場は爆笑の渦と化したことだったが、こんなときはあわてずにその奇術を外してしまえばよいのだ。

さもなければ、そこには次の奇術に使う新聞紙があったのだから、それを切って機械に差し込み、

「新聞紙でも魔法を使えばこの通りたちまちパリパリの真新しい紙幣になります！」

とやれば、かえって効果は上がるのである。

ある老練な奇術家は、テレビで〝空中金魚〟を演じたところ、ネタのマイカ（雲母）をわずかにすべらせて、さかさまにしたワイン・グラスの水が落下してしまった。――このとき術者は少しも騒がず、「ハテナ？」という思れ入れよろしくあってカラのグラスを卓上に立て、悠々と〝魔法のつぼ〟から水を注いでみせたから、一般の視聴者にはおそらく失敗とは見られなかったに違いない。

――こういう、臨機応変の処置もまた大事な稽古のひとつである。最悪の場合は、いっそう思いきって〝タネあかし〟に移行すればよい。ただし最少限度の。……

照明と伴奏……●

それから、照明――といっても、何も舞台を使う大じかけのときばかりではない。どんな小さな手品でも、〝あかり〟を背にしてはならないことも、常に心がけて

おかなければならぬ大切な心得だ。

うっかり照明を背にすれば、ハンカチや白紙にかくしたネタがシルエットとなって映るから、とんだネタばらしになってしまうし、手の運びもきたなくなり、表情も死んでしまうことを忘れてはならない。

また、ネタを糸やジャリであやつる場合は、照明が明るいままだと、それが光って困るものである。ステージでなら手際よく絞れるが、そういう設備のないところでやる場合は電球を絹で覆うとか、あるいはローソクの照明を用いると、神秘感が増して効果は倍加する。

火を吐いてみせるような場合、またはスピリチャリズム・トリック（心霊奇術）を演ずるときは、特にこの照明のくふうに心を用いねばならぬ。

夜光塗料は、もう今日ではあえて珍しいものではなくなったが、著者が初めてこれを多量に使って〃夜光舞台〃を発表したときは、世間がアッ！　と驚いたものだった。

――二代目天勝の襲名披露のとき（1936年4月）の新橋演舞場で、製造元の日本夜光塗料KKと、その子会社の優美ガラスの後援で、技師まで派遣してくれるという力の入れようだったから、背景、衣装はもちろん、メーキャップの化粧料にまで、蓄光性と発光性と、そして発明者の藤木顕文氏の頭文字をとって〃ケンジュウム〃と称んだカラーの自由に出せる液体夜光塗料をふんだんに使い、水銀ランプの不可視光線を浴せ、暗転無しで場面転換もやれば、扮装も一瞬のうちに変え、ちょうど総選挙に直面していたので、「選挙粛正の歌」を南部邦彦がタクトを揮って舞台から観衆に合唱を慫慂、著者作のその歌詞も夜光で空中に映出したから、だれもが眼をまるくして「ワンダフル！」を叫んだことであった。

こんな大がかりな舞台を手がけているので、私からみれば〃心霊現象〃が用いる夜光テープなどは子どもだましとも言えないくらいだが、先年後楽園スタジアムで公演した〃世界魔法団〃のブラック・アートでは、この夜光塗料を塗った骸骨を踊らせたり、生首を客席に飛ばせたりして、なかなかの効果を挙げていた。

二代目天勝襲名披露公演（昭和12年4月．新橋演舞場）日本最初の夜光舞台—吉本三平原作“コグマのコロスケ”

しかし、このカラーの夜光塗料はビックリするほど高価でもあるし、テレビのカラー化とはアベコベに現在ではかえって入手が困難でもあるが、螢光色なら手軽に買えるから、心霊術がかった神秘現象に応用するとおもしろい。不可視光線（紫外線）を浴せるのも、水銀灯だって今日ではかんたんに使えるし、スポットに紫外線用のフィルターをかぶせればよい。アマチュア・マジシャン諸君も大いに夜光のネタづくりに新くふうを凝らしてごらんになることをおすすめする。

つぎに伴奏である。

いわゆる〝心霊現象〟では、「霊の出易いコンディションを醸成するために……」などともったいつけて、レコードをかけたり、あるいはだれにもその場で覚えられる〝十種（とくさ）の祓い〟を合唱させたりするが、実はタネをあやつる時に発する音響をカモフラージュする手段にほかならぬのだ。怪談劇や、お化けの落語も、あのヒュー、ドロドロの伴奏無しではまるで生きない。忍術使いも、ドロン、ドロンで消えてこそおもしろいのである。

無声映画の追いかけが〝天国と地獄〟の伴奏でどれだ

け効果を上げ得たか、サーカスだって、曲ゴマだって、〃お囃子〃無しでは、まるっきり味が出ないことを思うべしだ。

常に、演じようとする奇術に、どのようなミュージックが一番よくマッチするかの研究も怠ってはならない。

このごろはソノシートという便利なものがあるので、手軽に数十曲を持ち歩くことも可能だから大助かりであるが、青空こども会などでやる場合は、だれもがよく知っている〃モシモシ亀よ〃なり、〃メダカの学校〃なり、〃どんぐりころころ〃のようなものをテンポに合わせて一しょに歌いながらやると、案外よい効果をあげることができる。柳沢よしたね氏は〃童謡手品〃と銘打って、これらの替え歌を作ってソノシートにおさめているが、腹話術の名人だけにこれもおもしろい思いつきである。

〃二本のひも〃の応用で、まず太鼓のバチを結わえつけ、おかめとひょっとこのお面を通し、大きく〃祭〃と染めぬいたはんてんのソデを通して抜きとるというアイディアを、バカ囃子をあしらって見事に演出した人があったが、演じものしだいで神楽囃子などは大きな効果を挙げる。

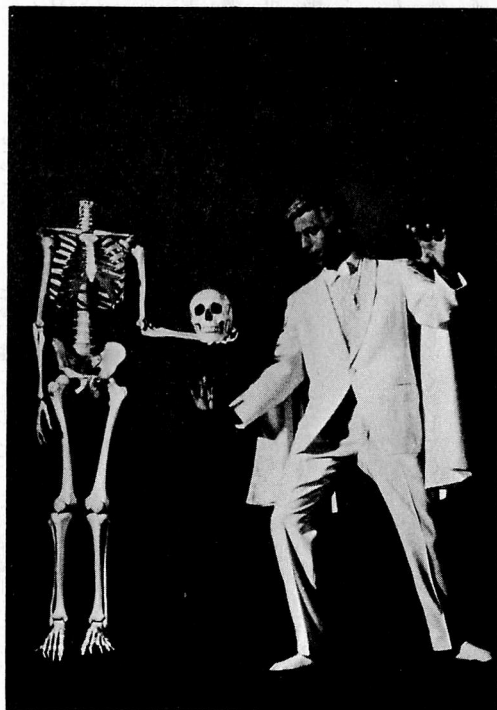
和妻の〃花吹雪〃で、白紙をあらためるときに〃秋のななくさ〃や〃弥次喜多〃の前びきを、火にかけるときに〃つくだ〃を、サッ!とのべ（紙テープ）を投げるときに〃くるわ風景〃などがよく用いられ、天勝の〃水芸〃では、噴水のからかいに〃ちくま川〃、「これより水はさらしにつれて戯れ、玉取の水……」というところで〃越後獅子〃のさらしを、〃若狭の呼び水〃のくだりには〃千鳥〃を使っているが、これらは演技とお囃子がまことにしっくりしていてたのしい。

〃きぬた〃〃米洗い〃〃菜の花〃〃竹巣〃〃香に迷う〃〃吉原雀〃〃桑名の殿さま〃〃こんぴら船々〃などもよく使われる。平岩白風氏がこれらの伴奏曲を編集・構成した〃奇術に強くなる〃というソノシートが朝日ソノラマから出ているが、これは便利だ。

〔**P58下写真**—〃ブラックコーナー〃の照明美。——日本奇術協会青年部芸術祭参加作品〕

マジシャンの服装とメーキャップ……●

さて服装であるが、空中浮游術とか、ブラック・アート（黒技）のような神秘がかったものをやるときは、インド服にターバンを巻いたスタイルで出るとか、ソード・ボックス（剣通し）とか、金魚鉢や火炎皿のような中国ダネの奇術をやるときはチャイナ服を着れば、グンと効果があがることはいうまでもない。

しかし、アマチュアが軽い気持ちで小品奇術を演ずる場合は、もちろん背広でたくさんだ。燕尾（えんび）服（ふく）にしろ、タキシードにしろ、マジシャンの服にタネのかくし場所がつくられてあることはもちろんだが、背広の上衣にも、チョッキ、ズボンにも、ネタ場はくふうしだいでいくらでもつけることができる。すこし凝った人になるとソデの縫い目などにも巧妙な細工をしておくが、ポケットを二重にするとか、道具吊りを仕掛けるぐらいは常識であろう。

オマールパシャの“黒魔術”世界魔法団1958年公演
（後楽園スタジアム）

女性は、ドレスならどんな場所でも通るが、助手として出演するときは、軽快なワンピースなどの敏捷に立ちまわれるものがよい。そして、ドレスにはポケットのないのが常識だから、かくしポケットその他のネタ場をつくっておくくふうが大せつである。

この点、中国服はまことに便利で、また見た眼にもエキゾティックな艶っぽさがたまらなくチャーミングだし、何をやっても違和感を与えないという特長がある。

和妻（わづま＝日本固有の手品）の場合は、やはり振り袖がよく、紅のタスキをサッ！と流してこれを絞るしぐさだけでも魅力は満点、一ぺんに舞台が明るくなって、そこはかとなくお色気が漂うところは、むしろヌードにまさること万々である。日本髪のかんざしやようらくが照明に映えるふぜいも独特の美しさだから、このようなかつらも活用したいものだ。

アマチュア・マジシャンが、へたにメーキャップに凝ると却ってドロくさくなるが、ステージに立てば当然、照明を受けることを考慮に入れて、ドーラン化粧の心得

中国服の効果（初代天勝師）

ぐらいは一応身につけておく必要があろう。

男性にしたところで、ドーランは塗らないまでも、不精髯を剃りもしないで舞台に立つようなことでは興をそぐこと一通りでないし、何よりもマナーを欠くことになることをおもうべしである。

どんな場合にも観客に失礼になるような服装や[illegible]度でステージに立つことは厳に慎しむべきで、このごろテレビの視聴者参加番組に登場するような、ノーネクタイやとっくりセーターなどでノコノコ出るようなことは、奇術の品位を傷つけることが大きいから、マナーには細心の注意を怠らぬようにして欲しい。

〔**P63上写真**—初代天勝（中央の浦島太郎）の水芸〕

マジック・テーブルと道具箱……●

かるい座興に、身のまわりのものを用いて小手先の手品をやる場合は別であるが、かりそめにも余興のひとつも買って出て、ステージに上がるようなとき、ぜひとも

日本古典手妻〃夕涼み〃
向かって右より、小天勝・初代天勝・二代目天勝

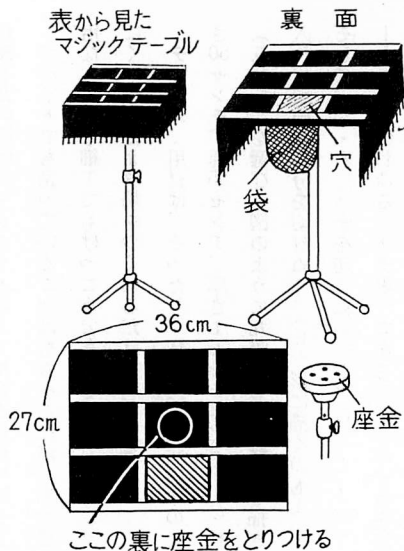
用意したいのは、マジック・テーブルと道具箱である。

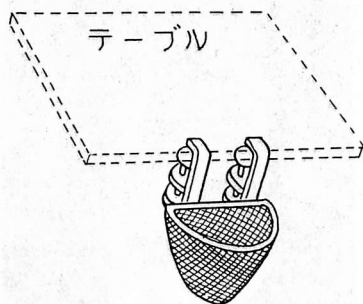
デパートでも売っていることはもちろんだが、少し器用な人なら手細工でもけっこうできるし、やりよいようにくふうしたネタ場をつくれるだけ有利でもある。

テーブル　用材は、そったり、狂ったりしない木の長さ50センチ、幅35センチ、厚さ1センチ半ぐらいの板（五分板）を選び、図のように九等分した碁盤目を描き入れ、斜線の部分を切りぬく。（ヒシ形に描くのもよい、そして、左・右二ヵ所を切りぬいておけばなおよい）——これがいわゆる〃ネタ場〃である。ここにタネを出し入れする袋をつけるのだが、袋は黒のベルベットでつくり、板の表面全体にも黒ベルベットを張る。そして、碁盤目に合わせて、幅2センチぐらいの白テープを張るのである。こうすると、錯覚（さっかく）の利用でネタ場のアナがアナに見えないのだ。また、ベルベットは光を吸収して反射しないので、バックにも、中吊りにも、これを使うのが一番効果的であることも知っておく必要があろう。

こうして、板張りが完了したら、前面と両側にネタ場

のかくれるだけの小カーテン、またはモールなどを張り、裏側の中央に三脚をハメる座金をとりつける。この三脚は譜面台のを利用すればよいが、金魚鉢とか、ジョッキ、フラスコ、ビールびんなども載せるから、相当の重量にたえる、しっかりしたものを選ばねばならない。

ネタ場の袋も、水を入れたカップなどを落としこむことがあるから、ガッチリととりつけておかねばならぬ。

また、補助として図のようなかくし袋を別につくっておくと、相当量のネタを入れておけるし、マジック・テーブルを用いない場合、有り合わせのテーブルに即座に取り付けることができるから便利である。

相当な太さの針金を適宜に曲げてワクをつくり、黒い網を縫いつけるのだが、普通のテーブルにこれを取り付ける場合、必ずテーブル・クロスを使って、前面から見

えぬようにする用意が肝要である。

なお、針金をわらびのように曲げてあるところは、紙筒のようなものを載せる簡易な秘密棚になるわけで、たとえばハンカチの染め分けなどのネタ場に使うのである。

道具箱 道具箱は、単に奇術の材料や用具を順序よく納めておくばかりでなく、極めて自然に見せてタネを忍ばせておくことのできる、鋭い観客の視線の遮蔽物となる、――つまり好個の〃ネタ場〃にすることができる。便利なものである。

大きさ各自適宜の扱い易さにすればよく、小型の旅行ケースを買って来て、ちょっと細工を加えるのもよい。フタにも、ハンカチとか万国旗のような小物を入れる袋を取り付け、ゴムで口が自由に伸び縮みするようにしておく。また、ヘリの手前の一部が倒れる装置をつくっておくと、ネタをきれいに消すことができて調法する。

フタを立てると、相当の面積の遮蔽に役立つから、液体のネタの出し入れなども楽々とやってのけることができる。また、一つの奇術を終了した用具をおさめる手順を利用して、次の奇術のネタをスムーズにとってくることも容易である。

〔**P66上写真**―マジック・テーブルの使い方。松旭斎天暁の〃キャンドル・スタンドと花〃〕

速度・距離・角度……●

以上で、奇術の習得法の大意をのべ得たと思うが、なおぜひ注意しておきたいことがまだ二〜三ある。

奇術を日本で〃手妻〃と言ったのは、〃しなやかな手〃という意味の〃手品〃と〃電光石火の早わざ〃という意

の〃稲妻〃が結びついたのだとは、前にも説いたとおもうが、単に早いばかりがうまい奇術とは言えないことをよくよく心していなければならぬことがそのひとつだ。

スライハンド・マジック、――つまり小手先の手品は、日本人もうまいことはうまいが、とかくスローであるとは、いまだに耳にする評である。長々しい口上がついて、間の味をたのしんだ伝統が尾を引いて、欧米のマジシァンにくらべると何かめまだるい感のする人のあることは否めない。

松旭斎椿の〃浮かれの胡蝶〃

しかし、むやみに早いからいいというものではない。たとえば並足で歩いていた人が急にかけ出したら、だれだって「どうしたのだろう?」と注目するにきまっている。ネタを運ぶとき、意識的にスピードを加えたりすれば、これと同じ結果を招来するであろう。すべてテキパキとスピーディに演技を進めることは大事であるが、要所をこそ素直に、自然な運びにしなければならぬことを忘れないで欲しい。

それから、演技者と観客の距離の測定も大切である。かたちだけでもステージになっているところで演ずる場合は、おのずから多少の距離があるし、一だん高くなっているのが常でもあり、側面や背後からのぞかれることもないから安心であるが、せまい教室とか、宴席などの場合は、つい目と鼻の接近したところで演技しなければならぬことがある。

熟練したベテランならば、デパートの材料売り場や、

街の広場などで四囲を群集に囲まれてもネタを看破されることなく、見事な手さばきをみせることが可能であるが、アマチュアではまず至難と思わねばならぬ。

たとえ一枚の半紙でも、視角の測定を誤まらなければ巧みにネタはあやつれるものだが、そこに達しないうちはゆめ見物を甘く見てはならない。とくに子どもたちの眼は鋭いものだし、大きい会場で二階、三階に客席があるときは、意外な角度からネタをのぞかれる恐れがあるから、細心の注意を払わなければならぬ。

司会は兼ねるな……●

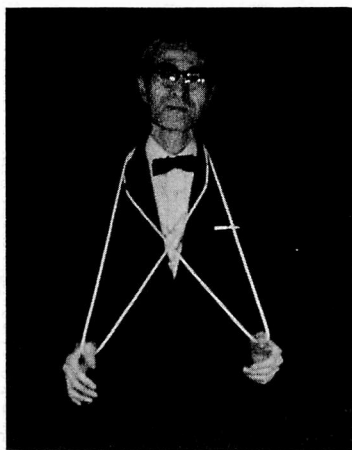
また、司会をやらされる場合には、決してまとまった自分の演技を持つべきではない。予定の出演者が皆スムーズに順番通り出てくれればまだよいが、まずそのようなことは稀で、必ず——といってよいくらい順番が狂ったり、時間の伸縮があったり、ときには思わぬ支障ができて意外なアナのあくことを覚悟しておらねばならぬのが司会者である。

そうしたときには、機智とユーモラスな話術で時をかせぐ必要があるから、かんたんなタネあかしぐらいは用意しておけば、かえってプラスになるけれども、まとまったネタを準備する必要のある本番をひとつ持っていたら、気ばかりもめてうまくいくはずはないものである。練達の士の助手でもあればそのマイナス面をどうやらうまく補ってくれることも可能だが、さもなければ必ずといってよいくらいとちることになる。特に金魚とか、鳩とかの生きものを使う奇術、薬品を用いる奇術は厳封しておかねばならない。

タネあかしの仕方……●

〝タネあかしはすべからず〟というのが奇術の鉄則であるが、それだけに、たまたまその禁を解くことは、ハテナ？　ハテナ？　の連続で緊張している観客の息抜きにもなるので、大へんに喜ばれるものである。しかし、

それはあらかじめこのために用意された、〃タネあかしのためのタネあかし〃でなければならぬことはいうまでもない。

二重・三重に首を締めたように見せて、「やっ！」と引けばスルリとロープがぬける。——ところで、もう一度首を締めてクルリと後ろ向きになる。——と、ちゃァんとロープがはずれるように組まれていることがわかる。……アダチ龍光氏がテレビでもたまたま用いる手だが、ここでどこの茶の間でもどっと笑い声が上がるのだ。

首切りのひも

くっきょうの男を椅子にかけさせ、上半身を覆うに足る布をかぶせて、ドギドギする出刃包丁をグザリ！と突き刺す。——男は手足をバタバタさせて悶絶するように見せるが、やがて布をめくって顔をみせると、出刃の刺さっているのは頭上に載せたキャベツである！——というのなども、パントマイムで爆笑を買う手だ。

——このように、極めてかんたんで、説明なしで笑ってもらえるようなものを選ぶのがコツである。そうして、なるべくユーモラスなものをよしとするが、下品な悪ふざけに堕ちないように気を配らねばならない。特にアマチュアの場合、ドロ臭い道化が過ぎると、奇術の品位を傷ける結果になるからである。

しかし、プロの場合はコミック風にはでな演出をするのが常で、これがピエロの人気の源泉ともなっている。——大きな奇術ショーには、まず、なくてならない一場面である。

写真は、最初内外をよくあらためたシルクハットをテ

ーブルに上向けておく。そうしてしかつめらしくじゅもんを唱えて手を突っ込むと、このカラッポのはずのシルクハットから花が出たり、人形がとび出したり、はては大きな万国旗などがスルスルと出現したりするのだが、おしまいにニョッキリと下にかくれているネタまわしの手が現われ、あわててその手を引き込ませると、今度はテーブルに足が生えてガタガタと歩き出すので、客席には爆笑が起こる一幕である。〔松旭斎天映・天晴所演〕

マジック・ウォンド（魔杖）と扇子……●

応用の広い奇術の小道具には、チェンジ・バッグ（スリ替え袋）、隠現二重箱、透視箱、三重収蔵箱、引き込み筒、吊り具、etc……といろいろあるが、これはそれぞれのタネあかしに詳説するとして、タネを運ぶのに万能の役割を果たすものにマジック・ウォンド（魔杖――マジック・ステッキともいう）がある。この扱い方だけははじめに解説しておいた方が便利であろう。

直径1センチ5ミリ、長さ30センチぐらいの木製の棒で、中央部は黒、両端は白、この境目は金・銀の環で飾られているのが普通だが、この中を空胴にしてハンカチやテープなどを仕込んでおくこともできるし、忍者もどきの発煙筒にも使える。

また、トランシーバーのアンテナのようなシカケをしておけば、暗中にこれを伸ばして相当な距離の物品をあやつることができるので、スピリチャリズム・トリックのような現象には、文字通りの〝魔杖〟となるであろう。

坂本種芳氏は、「神官の笏、武人の刀にも匹敵する、その場の理由の有無を問わず、奇術師に特に携行を許されている唯一の道具である！」と、その万能ぶりを頌えているが、たとえば初めから掌中に玉のようなネタをかくして登場するような場合、このマジック・ウォンドを一しょに持っておれば、極めて自然なかたちでパームがきくし、右手にかくし持ったカードを左手に移すときなども、このウォンドをひとなでして左・右の手が合うようにすれば、何の作為もなさそうに移動させることができる。

また、マジック・テーブルのネタ場やセルバンド（秘密棚）からネタをとるような場合、テーブルに投り出されているウォンドを取ることによって、少しの不自然さもなく一しょにつかめる便宜がある。

消失させるときも同様で、さりげなくウォンドを卓上

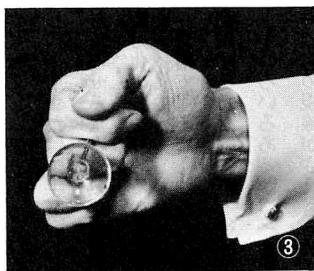
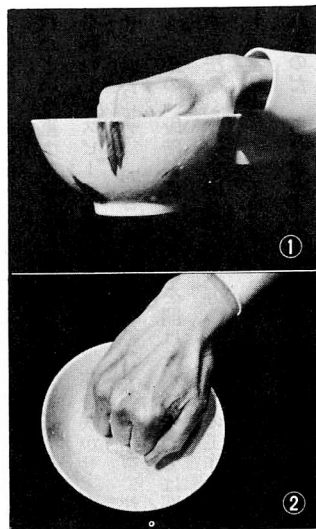
のびる〝マジック・ウオンド〟と著者

に戻すか、あるいはポケットに差し込みながら掌中にかくしたネタを落とせば、観客にはなんら気付かれるおそれがないのである。

和妻の場合は、扇子が同じような役目を相つとめる。特に〃お椀と玉〃の場合など、地紙の間にはタネの玉が楽々はさみ込んでおけるし、ウソ移しでパームした玉を処理するとき、何気なく扇子をとれば、まことに自然な動作となる。

一枚のハンカチ……●

「ハンカチ一枚は手品の定法……」と、かっては口上にもなっていたくらい、ハンカチにいたっては魔杖にいや増す超万能選手であること、いまさらあらためていうまでもあるまい。

しかも、これはだれもが持っていて、いつ、どこでも、気軽に「ちょっと拝借……」という手がきくところも強味だ。

たとえば〃サム・チップ〃などでこの手を使う場合、貸してくれるお立ち合いの方に左手を伸ばしてハンカチを受けとると、観客の眼は一せいにそちらに注がれるので、右手は悠々とズボンや帯の間からネタをとり、おや指に装置して、その指がハンカチの裏側にいくようにして持ち変えれば、もう一度裏と表をあらため

ても、全然気付かれることがないのである。

また、握りこぶしでドンブリなどをつりあげる場合、まず両手を開いてドンブリに漬けてテストするので、ハンカチで一度水気を拭きとることに不審を抱く者はないが、実はこのハンカチにネタの吸盤を忍ばせておいて、本番にこれを使うのだし、火を食った後で、水を飲んで、無雑作にハンカチをとってその口をぬぐうのは、極めて自然の動作である。しかし、やはりこのときハンカチと共にネタを運ぶから、あるいはテープとも化し、またもうもうと火炎を吐くこともできるのだ。

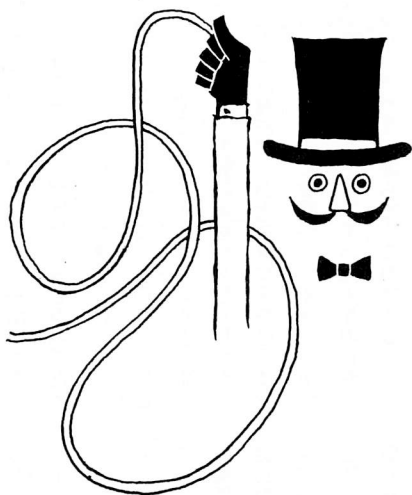
　例を挙げていると限りがないので、あとはタネあかし篇で知っていただくが、とにかくネタを運ぶのにこんな便利なものはないのである。

　これが奇術用の絹ハンカチとなれば、薄くて弾力に富んでいるから、千変万化の妙を極める。

　鳩になり、花になり、旗になり、やがては舞台一面を彩る大まん幕となるのも、もとはといえば奇術師の掌中からもみ出された小さなハンカチだ、何とおもしろいではないか！

　何しろ薄いシルクなので、十枚や二十枚はどこへでもかくせる。一枚のハンカチを二枚にし、二枚を四枚にし、……または両手を合わせてモクモクと無数にもみ出してみせるなどは効果満点、演出のくふうしだいで、千変万化の妙を極めるのも、このハンカチの徳である。

　奇術で、予想もつかない変化の起こる場合は、錯覚を利用するとか、盲点を衝くとか、死角を活用するとか、――いろいろあるが、一番多いのは、何らかの方法で一瞬観客の視線がさえぎられることである。しかし大多数の観客は、その変化の鮮かに飲まれて、視線をさえぎられたという重大な事実を忘れてしまっている。瓜の種子を蒔いて、スピーディに蔓をのばし、花を咲かせ、実らせ、熟らせて、観客に試食させる「草木成長術」なども、その一段階毎にミニ天幕を開けて水をやっては閉ざす手法をくり返すのだが、大方の見物はこの工作に少しも不審を抱かず「不思議！」「不思議！」と感心してくれるのだ。ありがたくて、そしてくすぐったい話である。

ロープの奇術

世界でも有名な

インドのロープの魔術

インドのロープの魔術は、世界でも大へん有名なものである。――魔法使いが、一本の太いロープを手にして現われ、神秘な呪文(じゅもん)を唱えながら、「えいっ！」と空高く投げあげると、ロープは生あるもののごとくシャキッ！　と直立して、引いても落ちない。

そこで、魔法使いは少年を招いて、このロープを伝って空へ昇れ！と命ずると、少年はスルスルと、ましらのようによじ昇って、雲間に姿をかくしてしまう。

すると、こんどは魔法使いが大ダンビラを提げて少年の後を追うのだが、やがて雲間から「ギャーッ！」という少年の悲鳴がきこえ、朱に染った少年の首や、胴体や、四肢がバラバラに落ちてくるのである。

見物は度胆をぬかれ、真青になってふるえ、おののいていると、魔法使いは血刀を振りながらロープを降り、また「やっ！」と号令をかけると、ロープは元の柔らかなものとなって地上にヘナヘナと伸びてしまう。魔法使いは、したり顔で少年のバラバラ肢体をとりまとめ、バスケットに入れて、再びじゅもんを唱えると、少年は間もなく元のままの姿となり、ニコニコしながら、元気にバスケットから跳び出すのである。

――だが、この大魔術にはいろいろの条件があって、まず第一にこれを行なう場所は定まったところでなければならず、それも夕方の〃逢う魔が時〃に限る。それから、それから、それから、……というわけで、〃伝説の魔術〃とも言われているものだが、TAMCの前副会長坂本種芳氏は、わざわざその現場をたずねた結果、あれだけの条件がそろえばやれない魔術ではないと語っている。そして、この魔術からヒントを得て作製した「香炉とひも」は、奇術のノーベル賞といわれる〃スフィンクス賞〃を得たが、オリエンタル・ムード満点のりっぱな作品である。

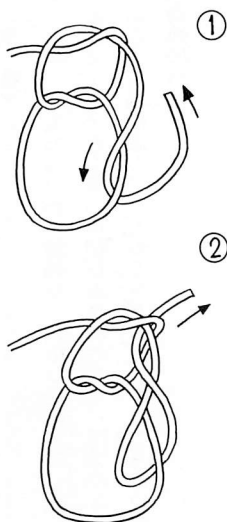
●……ひょうたん結び

《演　技》

長さ二～三メートルのロープを、まず図①のようにひょうたん形に結ぶ。

そして、上の輪の一端を下の輪に通し、それをさらに図②のように上の輪に通して、

「ピリカ　メノコ　ピリカ　メノコ……」

と（じゅもんは何でもよい）唱えながら、ソロリソロリとロープを左右に引っ張ると、このこんがらかったロープの双輪は、ハラリと解けてしまうので、見物は目をみはる。

しかし、

「あなたもやってごらんなさい」

と、ロープを渡してためさせると、これが容易にできないので、だれもが首をひねり、ロープもひねりくりかえすところがごあいきょう！

《ひみつ》

まず下になる輪をつくるときは、右のロープが上になるように結び、上の輪をつくるときは左のロープが上になるように結ぶのがコツ。

そして、その右にきたロープの端をのばして、さらに下の輪の手前からくぐらせて、いま通したロープの上を這わせ、上の輪の後ろ側にぬき出すのである。

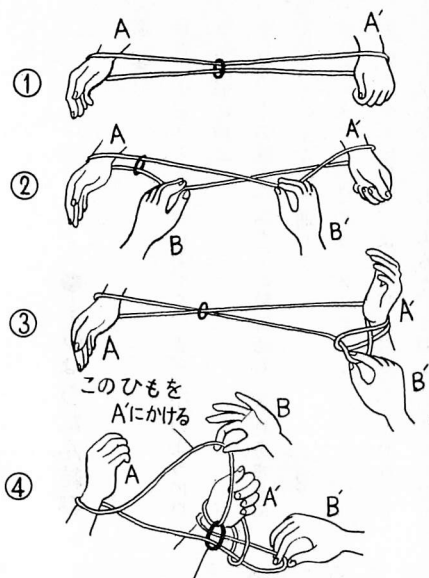
図の矢じるしの通りにロープを通せば、必ずできるから、おためしあれ。

●……リングのぬきとり

《演　技》

まず、お立ち合いから指輪を一個借り受ける。そして、2メートルぐらいの細ひもを輪にして、図①のようにこの指輪を通し、ひものリングの両端をお立ち合いの両腕にかける。

そして、

「アブラカダブラ　アブラカダブラ……」

と、呪文（じゅもん）を唱えながら、指輪を少し左にずらし、右手で、図②のように上のひもをつまんで手前に引き、左手で下のひもをとり、これをあやに組んで、お立ち合いの左手くびにかけると、図③のようになるから、つぎに、こんどは指輪の左側の上のひもを左手につまんで図④のようにお立ち合いの左手くびにかける。

ここで、右手でつまんでいたひもを放し、

「ハイッ！」

とかけ声もろとも、お立ち合いの両手を開いてひもをピンと張ってもらうと、指輪はポロリと抜け落ちてしまいます。

《ひみつ》

図②のように、一度上下のひもを千鳥に組むこと、そして、右手でつまんだひもは最後まで放さないことがひみつ。——この応用法は、他にもいろいろあるから、新手を考えるのもまた一興というもの。

だれにテストさせても、ぜったいにぬくことはできないから、みんなは首をひねる。

●……ロープ抜き

《演技》

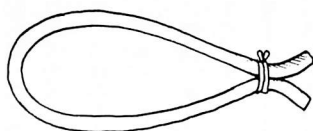
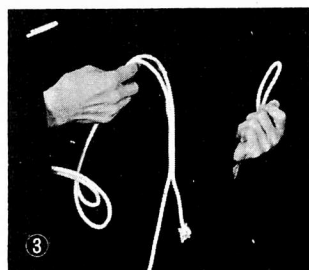
一本のロープ（長さ10メートルぐらい）を二つ折りにして両そでに通し、その上衣を再び着て、その折ったまん中に通した両端をお立ち合いに握ってもらい、

「ワン、ツウ、スリー！」

と号令をかけると、ナンとこのがんじょうなロープがスルリと抜けてしまうのだが。――（写真①―②）

《ひみつ》

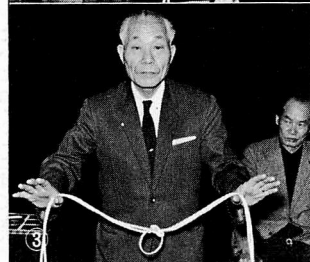
実は同じロープで中央部を折った部分だけを別につくってズボンのポケットにかくしておく、一度テストさせて、二度目に上衣を着るとき、ひそかにこれを握ってそでを通し、ロープの両端をこのタネのロープに通すのだ（写真③）。ロープの抜けきらぬうちに このネタをうまく処理せねばならぬ。

和服なら、たもとにネタを忍ばせることができるの

で、大へん楽である。

●……五つのリングと二本のロープ

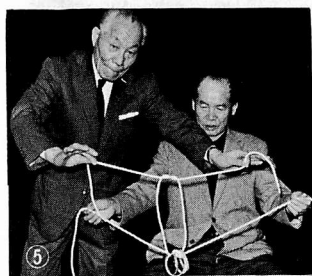
《演　技》

輪投げに使う五色のリングと、二本のロープを手にして登場、お立ち合いに一応ネタしらべをしてもらって演技にとりかかる。（写真①〜②）

まず、一個のリングに二本のロープを通して、しっかりと結びつける。（写真③）そして、残りの四個のリングを、つぎつぎとこの二本のロープに通し、そのうちの一本の両端をとってもう一度リングを結び、そのロープの両端をまた結んで、大きな輪にしてお立ち合いのクビにかける。（写真⑤〜⑦）

そうして、左手を下に、右手を上に、あたかも仏像のような構えにさせて、

「オン　アボギャ　ベイロシャノー　マカ　ボダラマニハンドマ　ジンバラ　ハラハリタヤ　ウン……」

光明真言などを唱えながら、背後でリングを一個ずつ外ずし、一個は右手の指にかけ、一個は左の手のひらにおき、つぎの二個は両耳にかけ、最後の一個は頭の上にのせて、二本のロープは輪になったままではずしてみせ

①
②
③

る。（写真⑧〜⑨）

——そんな演出にすると、ユーモアたっぷりで大うけにうける。

《ひみつ》

〃二本のひも〃の応用である。

最初、ロープの中央にリングを結びつけるとき、図のようにロープを折り返して、一方のロープで一方のロープをゆわえるのである。

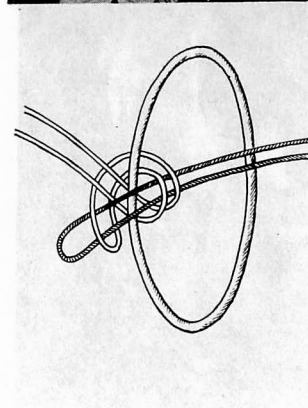
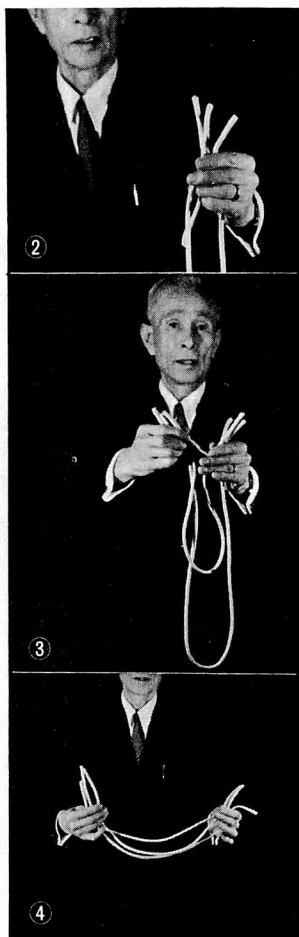
だから、五個のリングを通したら、両方から一本ずつのロープをとってもうひと結びするのを忘れると、ここでネタが割れてしまう。くれぐれもあわてないことが肝要。——あとの演技はどのようにもくふうしだいであるが、二本のロープを大きな輪にしたままで終わるところがミソである。〔演出　宮村忠男・篠原健二氏〕

この二本のロープの原理を応用すると、まだいろいろの新鮮な演技がくふうされる筈。案を練ってください。

●……ふしぎな三本のロープ

《演　技》

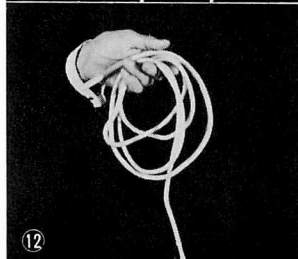
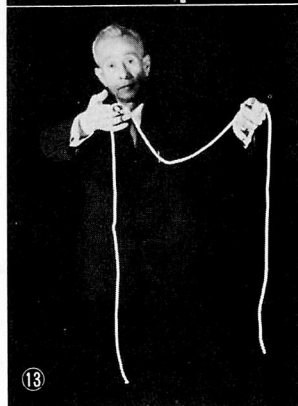
まず、長短三本のロープ上端をそろえて左手に持つ。（写真①〜②）

つぎに、右手で下の端をとり、上端に合わせてスーッと引くと、――ふしぎにもロープは三本が同じ長さになるが、ゴムではないよ！　と、数回パチパチ引っ張ってみせる。（写真③〜④）

そして、一本を引きぬいてポケットに入れ、残った二本のロープを結び合わせ（写真⑤〜⑥）、ひとつ円を描

いて引きぬくと、ロープは一本につながってしまう。（写真⑥〜⑧）そこで、さっきポケットに押し込んだロープを引き出してくらべてみせる。（写真⑧〜⑩）

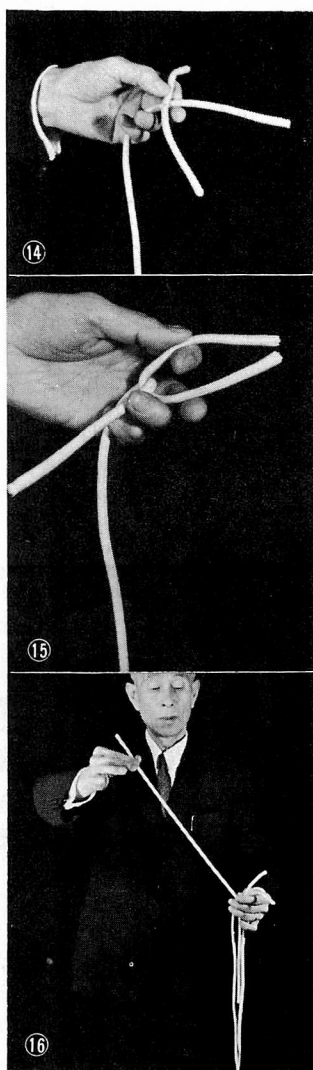
もちろん長短があるが、これを「やっ！」と引っ張ると、また同じ長さになるから、（写真⑨〜⑪）これを一しょにして左手に持ち、写真⑫のようにたぐって、「えいっ！」と

投げると、この二本もまたつながって、長い長いロープに変身する。（写真⑬）

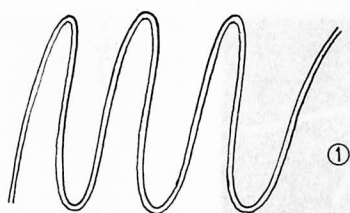
《ひみつ》

長・短三本のロープの、下端を合わせ持って上端とそ

ろえるとき、素早く一番短かいロープを写真⑭〜⑮のように折り曲げて、一番長いロープの中央にひっかけて引っ張ると、中のロープはちょうど一番長いロープの長さなので、三本が同じ長さに伸びたように見える。

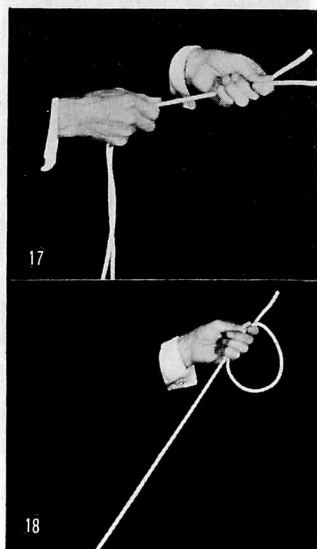
そこで、この中央部に引っかけた一番短いロープを手早く結ぶ（写真⑥）と、いかにも二本のロープを結び合わせたように見えるから、円を描きながら引っ張って、結び玉を右手の中に抜きとってしまうのだ。そして、さっきポケットに入れた中のロープをとるとき、この結び玉をポケットに落とすのだが、このときとり出す中のロープも実は前もってポケットに忍ばせてある。ちょっとシカケのしてあるロープとチェンジして引き出すのである。つまり、一部を折りたたみ、しつけ糸でくくっておくので、このネタの部分を右の手のひらににぎりこんで、写真⑯のように差のあるように見せ、⑰のようにそろえて引っ張るとき、この折りたたんだところを伸ばすと、⑪のように同じ長さになるシカケなのだ。

さて、この二本を⑯のように左手に合わせ持ったら、見物の視線がそちらに注がれているスキに、右手をもう一ぺんポケットに突っ込んで第二のネタを握ってくる。

――それはさらに長いロープを図①～②のように折りたたんでからげてあるもので、写真⑫のようにたぐりながらシンにした端を引っ張ってスルスルと伸ばし、前の二本とこの手の中でチェンジする。〔田島義秀氏所演〕

①

②

●……つながるひも

《演　技》

径1センチ5ミリ、長さ35センチぐらいの竹の棒を二本持って登場。この竹の頭に通っているひもを左右に引いてみせるが、もちろん一本ずつ、別々にである。

つぎに、今度はお尻のところを合わせ、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えて一方のひもを引くと、アラふしぎ！　この離れ離れだった二本の棒のひもは、合わせただけでつながっている！（写真①～④）

二三度引っ張って、つながったところをみせたら、再び離す。そしてこんどは一本をえりに差し込み、一本を手にして、

17

18

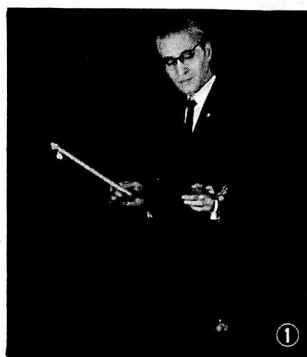
「えいッ！」

鋭い気合いをかけて手にした棒のひもを引くと、えりに差した方の棒のひもがスルスルと引き込む。――二本のひもは空間を通してつながってしまうのである！

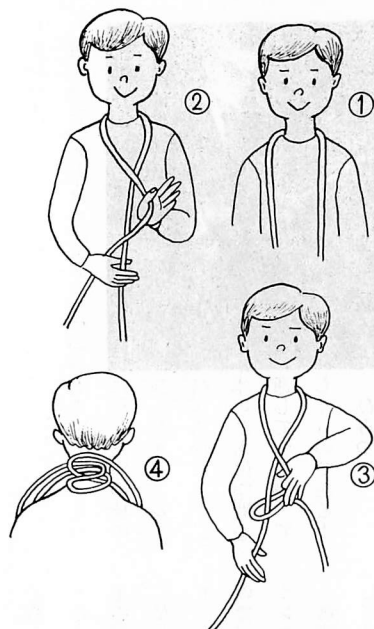
《ひみつ》

実はこのひも、どちらの竹にもU字形に入っていて、その両端が頭のアナから外に出ており、U字形のひもにはナマリ（鉛）の玉を通しておくのだ。

だから、竹を立てて持つとこの鉛の玉の重さに引かれてひもは引っ込み、頭を垂れると玉はそちらにころがるので、ひもを引けば素直にのびるというわけ。――タイミングをうまくやることがコツ。

熟練すると、一本を術者が持ち、一本をお立合いに渡してひもを引かせ、術者の持っている棒のひもとつながる演技なども可能。まことにお愛きょう満点である。

●……首ぬきのロープ

《演技　その一》

長さ3メートルぐらいのロープを首にかけ、両端をそろえて（図①〜②）、図③のように左手で右のロープをとり、左側のロープでこれをからむようにして（図④）、これを首にかけると同時に、左の手もロープをつかんだままで首の後ろにまわして形を正し、ロープを左・右に引くと、さアどうなるでしょう？

――あっけなく落ちるんですよ、……ええ、首じゃなくて、ロープの方が！――

《ひみつ》　図④をごらんください。右のような手順で首にかけたロープは、引けば後ろで交叉(こうさ)したところがはずれるシカケになっているのです。

《演技　その二》

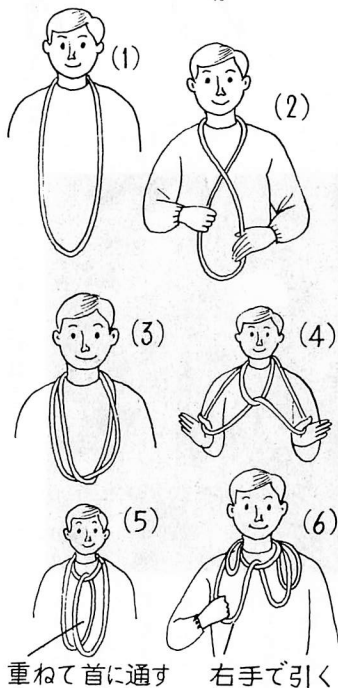
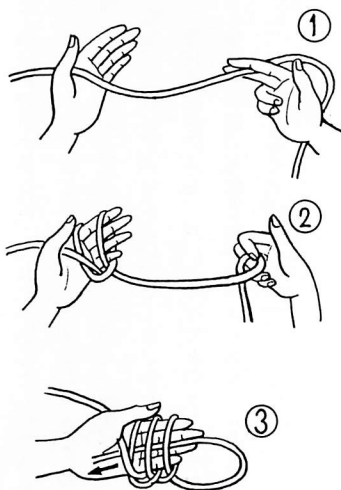
こんどはロープをリングにして首にかけます。（図①）これを前でアヤにして（図②）、内側になったロープを左・右にひく。（③〜④）そして、この長く引いたロープを重ねて、もう一ぺん首にかける。（図⑤）それから、ノドの下に二重になっているロープのまん中をつまんでグッ！と引くと、やはりハラリとぬけるんです。ロープの方がね！

《ひみつ》　これも前と同様、千鳥にしたロープのリングが、首の後ろではずれることになるので、別にひみつというほどのことはないのですが、ロープを引っ張ってしぜんに重なった通りに

首にかけること。ひねって上下を狂わせるとぬけなくなるからご注意。

●……リングの饗宴（きょうえん）

《演　技》

長さ2〜3メートルのロープを図①のように左手にかけ、一方を右手のひとさし指と中指ではさんで、図②のようにひとひねりして左手の四指にかけることをくり返し、リングを五つなり、六つなりくり作ったら、おしまいにその端を左手のひとさし指と中指ではさみ、いままで作ったリングをくぐらせて、サッ！とひと振りすると、ポイ、ポイ、ポイ、——リングがおもしろいように連続してとび出す。

そこで、こんどはこのリングを重ねて、ロープの一端をくぐらせ、スーッと引きぬくと、見事にリングは解消して元の一本の長いロープとなってしまう。（図④〜⑤）

《ひみつ》

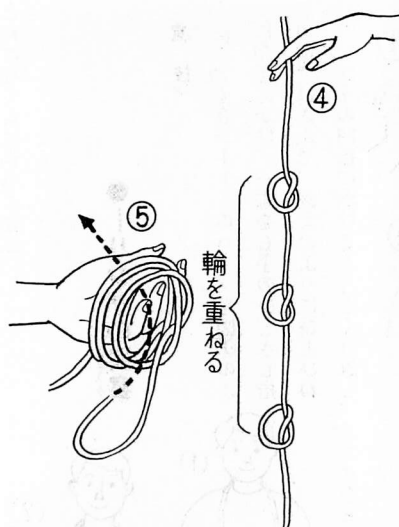
巧みな手さばきで、結んだロープを元に返すだけのこ

と。図解の通りにやれば、だれにもかんたんにできるものので、別にひみつはないのだが、一度ひねりそこねると、こんがらかってうまくいかないから、練習が第一。

なお、これはすべりのよい、レーヨンかナイロンのロープを使うべきである。長いロープでこのリングをたくさん作り、羽織の袖などからスルスルスルスルとリングの行列を出してみせるのもきれいでよろしい。

④

⑤

輪を重ねる

●……移動するハンカチ

《演　技》

長・短二本のひもを持ち出し、まず長い方のひもにハンカチを結びつける。（写真①～②）

そして、この両方のひもをいっしょに持って（写真③）

「ワン、ツウ、スリー！」

号令をかけると、ハンカチは短いひもの方へ移転しているのである！（写真④）

①

《ひみつ》

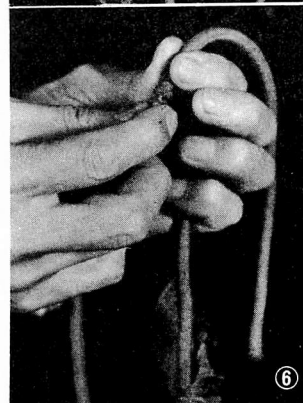
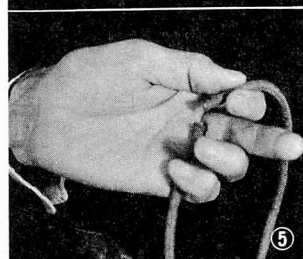
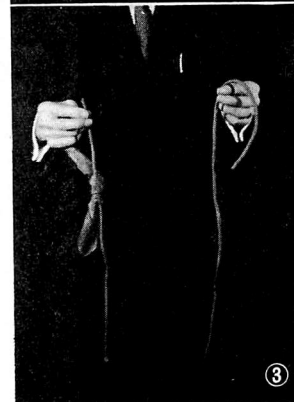
実はこの長短のひも、どちらも同じ長さのところが「継ぎめ」になってい

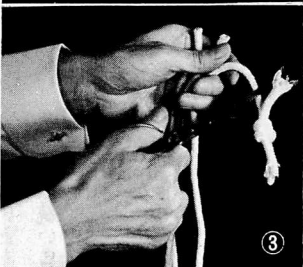
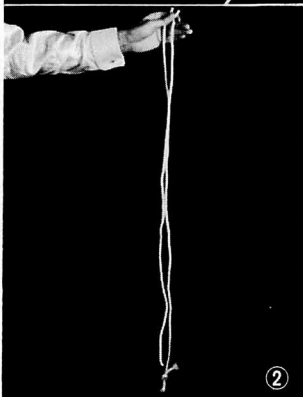
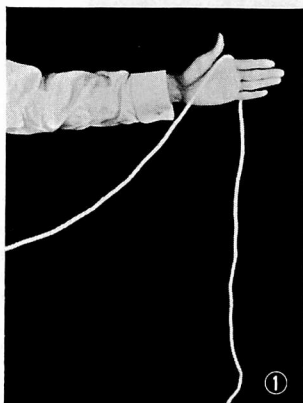
て、余分のところをここで継ぎ替えると、長・短がアベコベになる……というシカケなのである。(写真⑤〜⑦)

継ぎ目にはマグネットをはめ込んでおけば、いともかんたんにこの作業(?)はすむが、スナップを縫いこんでおいても、手際よくやればわからない。

だが、この場合は、長々とじゅもんを唱えたり、ゼスチュアをたくみに加えたりして、時間をかせぐ必要がある。

ロープの継ぎめは、セロテープで巻いてほつれを防ぐ。

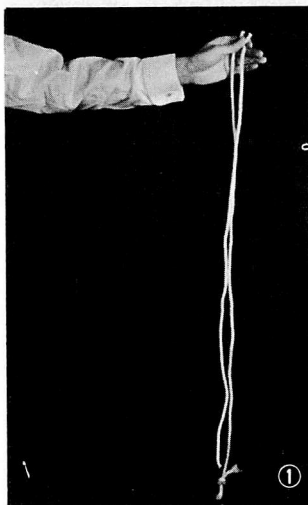
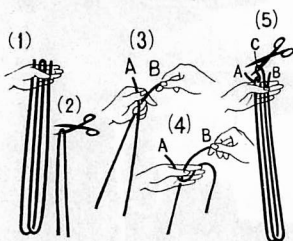
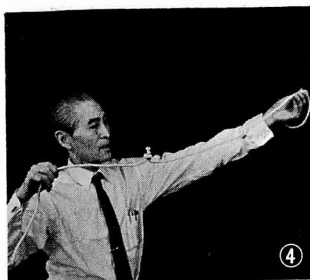
●ロープ切り三種

《演技　その一》

2メートル1/2、ないしは3メートルぐらいのロープ（直径は7～8ミリが好適）と、ハサミを持って登場、まず写真①のごとく手の中を見せて、タネもシカケもないことを実証したら、まん中から二つ折りにし、その折り目を一度ハサミで持ちあげてみせ一度ロープを伸ばして、再びまん中をつまみあげ、そこをハサミでパチン！と切って、ダラリと両端を垂らし、手早く切ったところをひと結びして、「この通りまっ二つ！――」と見物に見せる。（写真②）

そして、この結び目の出張った端をチョン、チョンと切り落し、（写真③）

「ピリカ　メノコ　ピリカ　メノコ……」

と、手の中でもんでスーッと引き出すと、結び目はアトカタもなくなって、無きずの一本のロープになってしまっているのだ。（写真④）

《ひみつ》

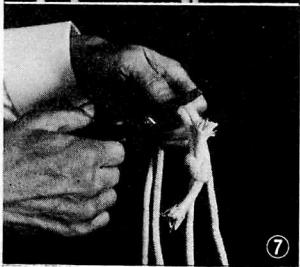
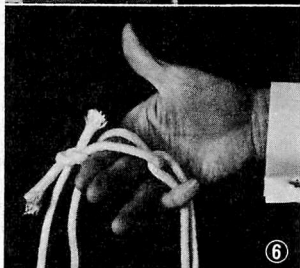
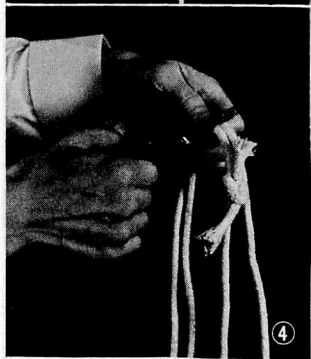
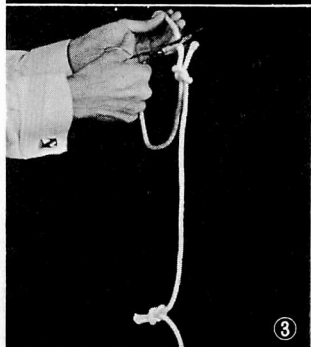
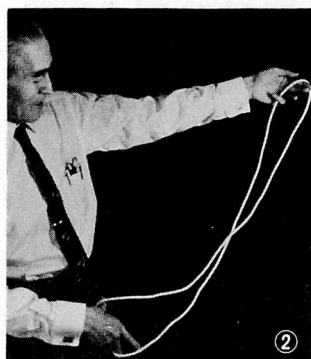
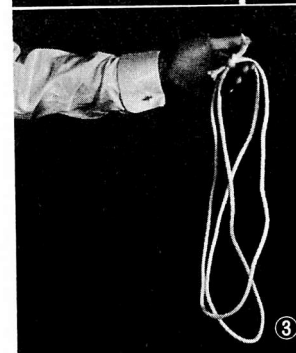
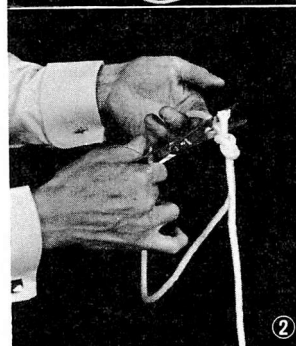
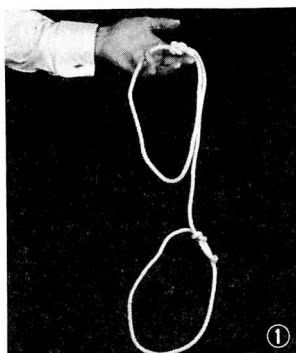
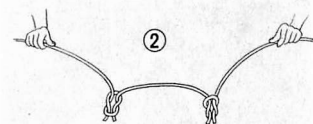
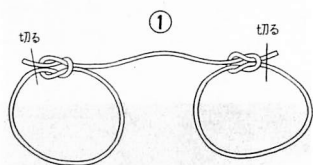
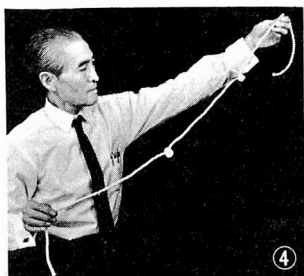
二度目に輪をつくるとき、ロープAの端を左手に、B

端を右手にとって、かなの「の」の字をかくようにもって来てA端にひっかけ、左手のおや指とひとさし指と中指をつかって、さしえ①~②のようにA端を押しあげ、ここをまん中と見せながらB端をとなりに持っていくと③の形となるから、まん中、実はA端の×のところをパチン！と切ってパラリとロープを垂らすと、いかにも中央から真二つに切断されたように見える。

そこで、手早くA端の切りくちを写真⑤のように結んで見物に示し、端を切ると見せて結び目のコブを細かく切って棄て、手の中でもみながらロープを伸ばせばコトは成功する！——というわけだ。（写真⑥）

《演技　その二》

つぎは、このロープを一度輪にし（写真①）、二重にして左手にかける（②~③）。そして、このダブらせたロープを写真④のように勢いよく切断する。——と⑤のかたちになるから、その突端にぶらさがった結びコブも切って棄てる。

そうして、呪文(じゅもん)を唱えながらロープを伸ばすと、これまた無きずに一本になっている。……

《ひみつ》ロープの輪を二重にして手にかけるとき、千

鳥に組むのが唯一のひみつ（写真⑥）。これを手の内にかくして切るのである。そのとき、写真⑦のように結び目の間近を切って、二度目のハサミで結び目も切り棄てると、ロープは写真⑧のように復元するわけだ。

《演技　その三》

こんどは、ロープの両端を無雑作にリングにして、この二つのリングの結び目をパチン、パチン！と切り、アングリと口をあけさせる（写真①～③）。そして、これ

を伸ばすと写真④のように結びコブが残っているから、ロープをさらに一文字に引っ張ると、アーラふしぎや、二つのリングの切り口の結びコブはポン、ポンと吹っ飛んで、素直な一方のロープが伸びているのである。……（写真⑤）

《ひみつ》ロープの両端は図のように、何のへんてつもなく素直に結ぶのだが、この点線のところを切ると、拡大図のようにロープの端が切れることになるので、ロープを一文字に緊張させると、ここだけがはじけて飛んでしまうのである。

●……お手手つないで

《演技》

長さ1メートルぐらいのロープを三本持って登場、まず、そのうちの二本を見物に渡してよく知らべさせた上で両端を固く結んでもらう。

ロープはなるべく赤・青・黄……といった色分けにするがよい。見た眼にもハデだし、トリックも使い易い。

さて、こうして二本のロープの輪を受け取ったら、残る一本のロープは術者が固く結んで手にかけます。

それから、これを寄せて別の手に持ち替え、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えてひとふりすると摩訶不思議！ロープの三つ輪は写真のように手をつないでいるので、見物は「アリャ！」と眼をみはる。

これをたぐりあげて再び寄せあつめ、またじゅもんを唱えると、リングは元のように離れ離れになるから、ここで見物はもう一ぺん感心して、また拍手を送ることに

なるが、……

《ひみつ》

三本のロープのうちの一本はトリックのシカケであるロープである。すなわち、図のようにまん中を切ってマグネットをはめ込んでおくのだが、これは青色が一番目立たない。

まず二本を見物に渡して結んでもらうので、最後の一本は術者が結んでも、見物は少しも疑問を抱かないが、三つの輪を寄せて持ち替えるとき、マグネットのネタ場をチョイとはずしてまたくっつけるのは、ほんの一瞬で事が足りるから、だれにも気付かれないですむ。

マグネットはラジオの材料店でわけもなく手に入るし、これをはめ込んだ切断口にはセロテープを巻いておくと体裁もよく、ほつれもしない。

マグネット

●……離れられない二人？

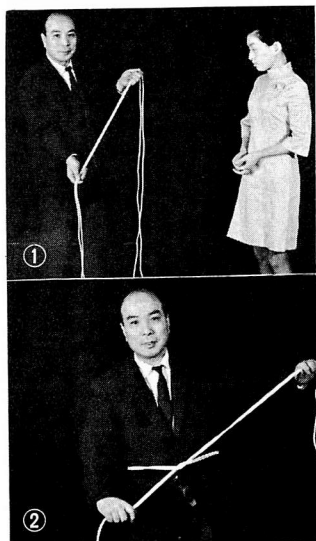
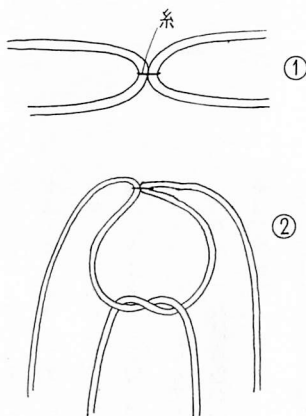
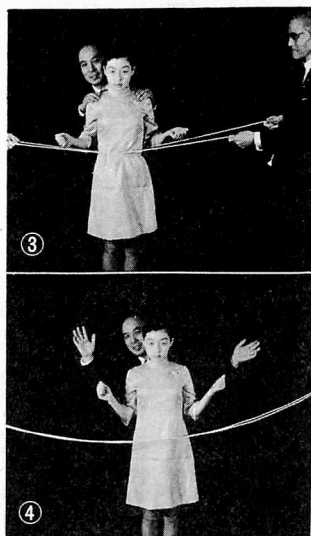
《演技》

長さ5～6メートルのロープ2本を持って登場、写真①のように一応これをしらべて、写真②のようにまず自分のからだをひとしばりする。

つぎに可愛い子ちゃんを抱いて、左右からロープを1本ずつとり、前でしっかりと結び合わせて、

「さア、二人はもう離れられなくなってしまった」

①

②

と、2本のロープの両端をお立ち合いに持ってもらい、
「しかし、このままではお嬢さんがいかにもご迷惑そう

ですから、魔法で解いてあげましょう。ワン、ツウ、スリー！」

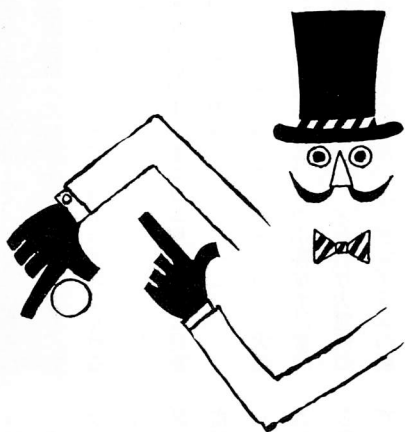
と号令をかけると、結んだロープはそのままだが、両人の身体は離れ離れになってしまうのである。

《ひみつ》

この2本のロープ、実はまん中をしつけ糸で二～三回巻いて図①のようなシカケをしておくのだがしらべるとき、ここを持って両端をうまくさばいてみせると、だれも気がつかない。

そこで、この中央部を折り返して自分のからだをひとしばりするのである。そして、可愛い子ちゃんを抱いて、2本のロープの1本ずつをもう一度結び合わせ、両端をお立ち合いに握らせたら、号令をかけながら、シカケのしつけ糸を強く引っ張って千切ってしまうのだ。

――このしつけ糸のプツリと切れる音をカモフラージュするためには、なるべく大きな声で「ワン、ツー、スリー！」とやる必要がある。（図②）

小品奇術

シックな味が身上

小品奇術

どの新聞、雑誌にも「コラム欄」というのがある。スタイルも、中身も粋なのが身上で、時にこれあるがために全体の紙面が締って生彩を放つこともあり、固い紙面ならばイキぬきになって、肩のコリのほぐれる思いがするものだ。

「小品奇術」番組構成の上でもコラム欄のような役割をつとめるものだと私は思う。

大がかりなマジック・ショーにしたところで、大道具の合い間合い間に見せられる。この小粋な小品奇術やコミック風のタネあかしなどが、どれだけ大魔術の引き立て役を演じていることか、——プログラムの編成者にとっては人知れぬ苦労をするものだが、それだけに成功したときのよろこびも大きい。パーティの幹事や司会者も、この呼吸はぜひ心得ていて欲しいものである。

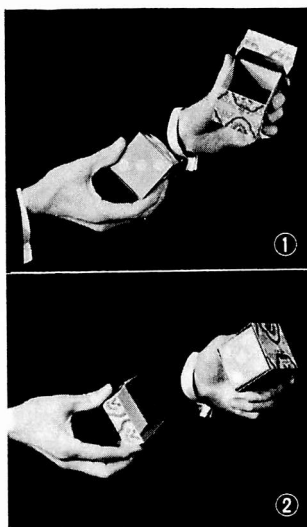
したがって演技する方でも、「小品奇術」の場合はあくまでシックで、スマートで、ウイットの利いた、そしてユーモラスでもあって、常に明るいアトモスフェアを醸成する心がけが必要である。

また、いつ、どこでても、求められたら気軽にオーケーして、身につけたアクセサリーとか、会衆の所持品、ないしはその場にあり合わせの、——たとえばお銚子とか、茶碗とか、皿・小鉢とか、ないしは時計や指輪、タバコ、マッチのような身のまわりの小物を借りて、速座に二手や三手の小品奇術を演じてみせる、ふだんの用意も欲しいものだ。——もちろん、プロなら当たり前のことであるが、アマチュア・マジシァンでこの心構えのできている人には、脱帽せねばなるまい。

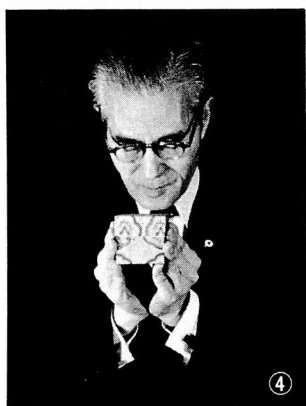
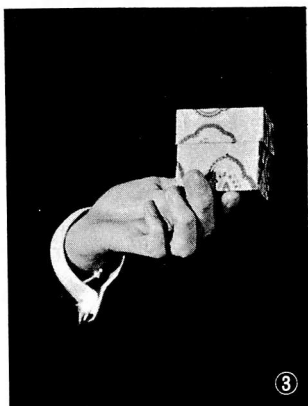
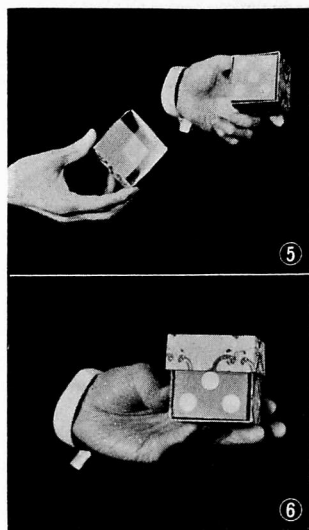
●……ダイスの透視術

《演　技》

大きなダイスと、そのケースを持ち出し、見物衆に手渡して、タネもシカケもないことを確かめさせたら、ついでに、好きな面の選定も一任、ケースに入れてフタをしてもらい、後ろ向きになって受け取る。（写真①〜②）

そして、そのまま前にまわし、しばらく精神統一をする。――と、ケースの中のダイスのどの面が上を向いているかが、心眼で透視できるのである。たとえば⚄とか、⚂とか。……（写真③〜④）

《ひみつ》

ケースをよくみつめるがよい。ダイスは正方形の立体である。それがキチンとおさまるケースも同様だが、フタはそのケースの½よりいく分浅くできていることに気

③

がつくはずである。
　これを背後で一度はずしてケースを横にするのだ。そして、横倒しにしたケースの上部にフタをかぶせて前面にまわし、「精神統一をする」と言って、この横倒しにした面をのぞくのだから、だれにもできる透視術、――否、盗視術だ！（写真⑤〜⑥）

●……ビンとカップの奇蹟

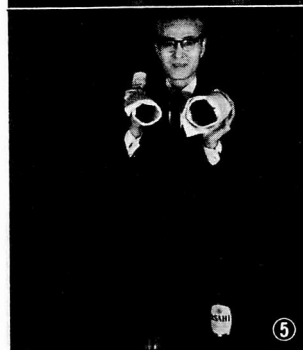
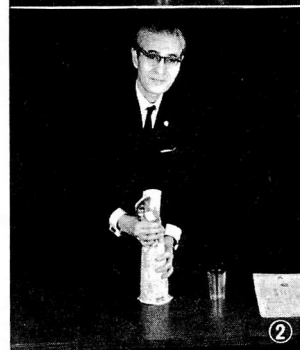
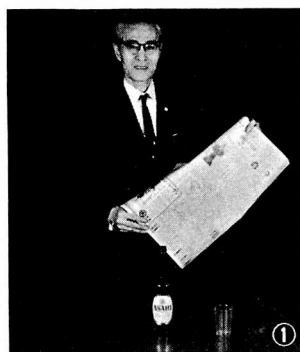
《演　技》

　ビールびんとカップを持ち出してテーブルの上にならべる。つぎに新聞紙のうら・表をよくあらため、まずビールびんにかぶせて、上から両手でしっかりと巻きつける。（写真①〜②）
　そして、そのまま新聞紙の筒をそオッと持ちあげると、③のようにビールびんのカバーのようなものができるから、これをカップの方にかぶせ、もう一枚の新聞紙をまたびんにかぶせてまたびん型を作成する（写真④）。そこで、「チェンジ！」と号令をかけてこのカバーをそっと取り上げてみせると、――オヤ！びんとカップは入れ替わっているではないか！（写真⑤）
　これを何回かくり返してみせると、見物はアレヨ、アレヨと目をこするが。……

《ひみつ》

　実は、このビールびん、外見はいかにもサッポロとか、キリンとかのホンモノそっくりだが、特殊ゴム、またはファイバー製の底のないイミテーションビールびんに、レッテルだけはホンモノを貼ったのがネタである。

——しかもこれが二重になっていて、その中には最初からカップがかくれている、……というシカケだ。

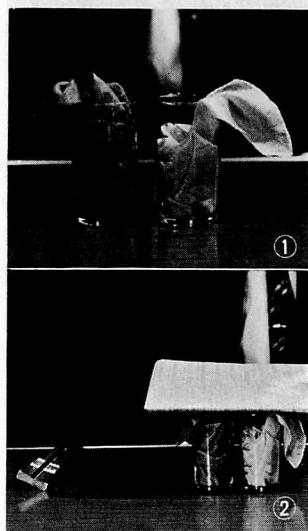
まず、このビールびんに新聞紙を巻いて紙型をとり、そォっと抜きとって、見物に内側も見せる（写真③）。

そして、この紙型をカップにかぶせ、つぎにビールびんにまた新聞紙を巻いて紙型をとり、一度ひきぬいて内側を見せた上で、この二個の紙型でカップとびんを覆って、「チェンジ！」と号令をかけ、両方の紙型を一ぺんに持ち上げてみせると、――見事カップとびんはその位置を交換している！（写真⑤）と、いうわけだ。

写真⑥はそのタネあかし、――イミテーションビールびんの内側にも新聞紙が貼ってあるので、写真⑤のように持ち上げて見せても、ネタはばれないのである。

●……これが奇術だ！

《演　技》

中のよく見える透明のカップ2個を持ち出して、よく内外をあらためる。――扇子の地紙のところを手にして、カナメのところでカップの内部をかきまわすようにするときれいである。

カップしらべが済んだら、30平方センチぐらいのシルクのハンカチを、これもうらと表をあらためて、カップに入れ、一端をのぞかせておく。（ハンカチはなるべく色変わりのものを使いたい。その方が栄えるからだ）

つぎに一枚の新聞紙をとりあげて、これもうらと表をしらべて四つ折りにする。ピタリ！　とよくたたんだら、ハンカチを入れた二つのカップにかぶせ、扇子をとってしばらくおまじないをするゼスチュアよろしく、やがて扇子の柄を握って、地紙のところを二つのカップの間に差し入れて、ソロリソロリと持ち上げる。

二つのカップが首尾よく宙に浮いたら、まず左のカッ

①

②

プのハンカチをぬきとり、こんどは扇子を左手に持ち代えて右のカップのハンカチを同じくぬきとり、カラになったカップを再びテーブルに戻したら、上を覆った新聞紙をとりあげ、ビリッ！　と裂いてカゴに棄ててしまう。扇子も開いてあおいでみせるが、タネはどこからも現われはしない。（写真①〜⑧）

《ひみつ》

実は、写真⑨のような形の弾力に富んだ鉄脚をつけたタネを秘密棚にかくしておき、新聞紙をたたんでカップを覆うとき、これを二個のカップのへりにはめるのである。そして、カップの間に扇子を差し入れて、この鉄脚と扇子でカップのへりをはさんで持ち上げるわけだ。

演技を終わって新聞紙を裂き、「タネはありません」と見せながら、このネタを包んでカゴに棄てるのだが、あとで取り出すことはいうまでもない。

このネタもどこのデパートでも売っている。題して

〃これが奇術だ！〃

●……不死身のハンカチ

《演　技》

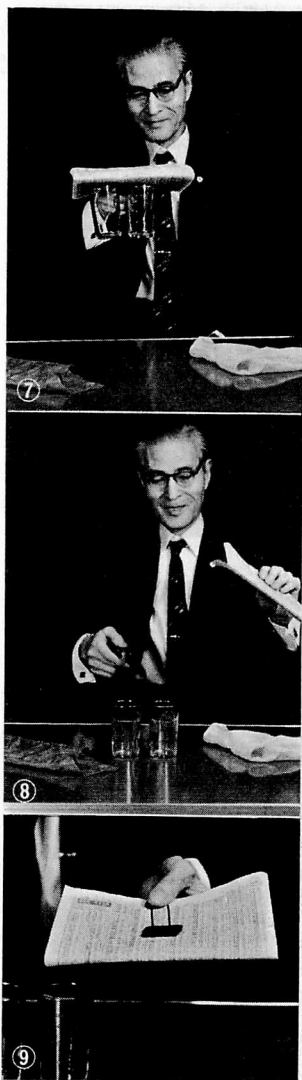
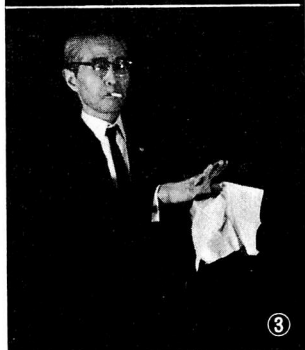
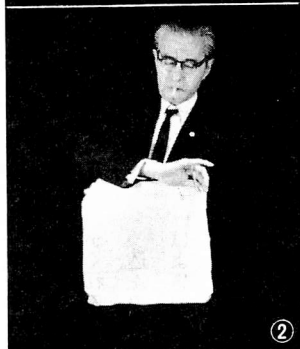
まずハンカチを拝借する。これは自分のものを使うより、ぜったいに拝借の手を用うべきである。ナゼ？——それはおしまいまで読めば、ナルホド！　と合点がゆくはず。

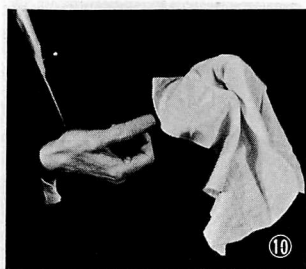
拝借したハンカチは、型のごとくうらと表をあらため、左の手にかけたら、右のおや指をまん中に突っ込んでアナをこしらえる。（写真①〜⑤）

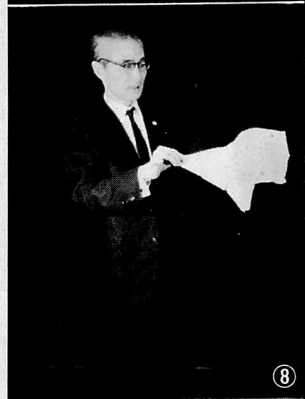
つぎに空中から何か一品招ぎ入れる、——というゼスチュアをやってアナに指を入れると、真紅なハンカチが首を出すから、これを引き出し、ここでもう一ぺんハンカチをあらためる。（写真⑥〜⑧＝このハンカチあらためは省略してもよい）

それからもう一ぺんハンカチにアナをつくり、こんどは吸いさしのタバコを押し込む。このとき、

「これだから、自分のハンカチは使えないのです！」

などとやると、ドッ！　と笑い声があがるからゆかい

だ。

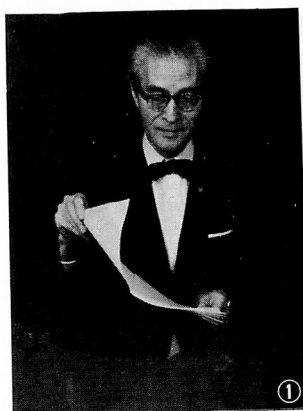
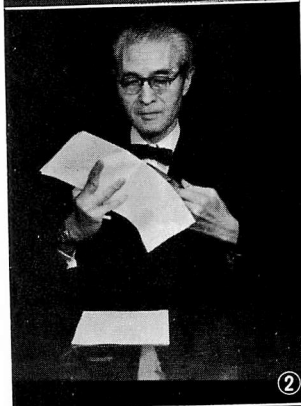
さて、こうしておどかしておいて、ゆっくりとハンカチをあらためるが、もちろん、ハンカチに焼けアナなどはあいていない。(写真⑨)

《ひみつ》
サム・チップという、おや指の第一関節にはまる大きさの金属製のネタに、小さな色ハンカチ（または小国旗）を突っ込んで、ズボンのバンド（和服なら帯）の間に忍ばせておくのである。

る。ハンカチを拝借、――と片手を伸ばして受けとるスキに、これを素早く右手のおや指にとって、ハンカチの一隅をおさえるのだが、写真①〜②のようにハンカチをうら返してみせると、このネタをはめたおや指はうまくかくれるから、お立ち合いには気が付かない。これを突っ込んでハンカチにアナをつくったら、中へ残してくればよいのだ。小ハンカチを出したあとにタバコの吸いさしを強く突っ込むと、火はわけもなく消えるが、長いとやりにくいので、この奇術をやるときはタバコをくわえて間をつくると手際よくできる。

このサム・チップは、どこのデパートにも売っているが、自分の指に合わせて日本紙を張り重ねてつくり、乾

いたら肌色の塗料を塗れば、タダで一番優秀なものができる。蛾のぬけ出した繭を使うと、いっそうりっぱである。

●……ノリ無しで紙をつなぐ

《演　技》

テーブルの上においてある一帖の半紙をとりあげ、無雑作にその一枚を剥ぎとる。そして、例によってうらと表をあらため、ハサミをとってこれを八枚に切り離し、

「一枚、二枚、三枚……」

と数えながら、残った半紙の上に重ねる。（写真①〜④）

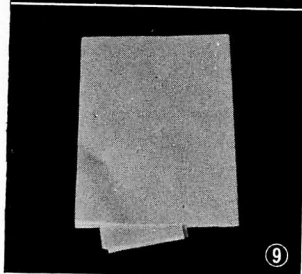
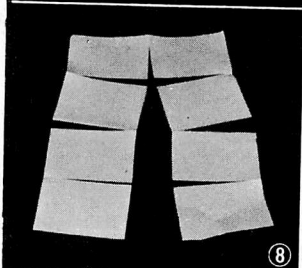
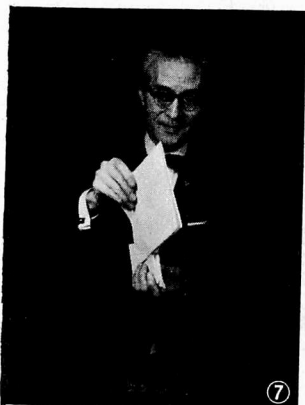
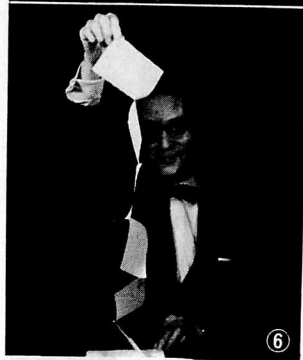
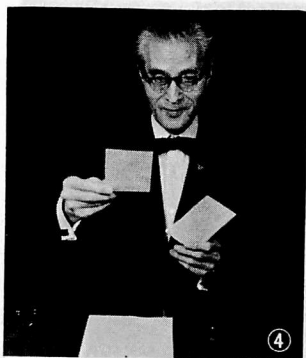
つぎに、その数えた小紙片を左手にとってよくそろえ

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カタブラ……」

呪文を唱えて、そろそろと引きあげると、ふしぎにもこの小紙片はつながっているのである。（写真⑤〜⑥）

《ひみつ》

ひみつは、半紙をまずタテに折ってハサミを入れ、その一端をほんのちょっと残し、つぎにその二つ折りにし

た半紙をまた二つに折って、ハラの方からハサミを入れ、それをもう一度折って、こんどは背の方からハサミを入れる。そして、いずれもホンの一端を残して切る。――これをひろげると、写真⑧のようにハサミが入るわけだから、これをよく折りたたんで一帖の半紙を二つに折った中にはさんでおくのだが、すぐ手中に落ちるように端の方にはさ

むこと。（写真⑨）

さて、切り離した小紙片を「一枚、二枚……」と数えて二つ折りの半紙の上に重ね、これをまとめて左手にとるとき、写真⑦のように、この中に秘めたネタを一しょに落とし、ネタの方を上にしておまじないをかけるのである。

まことにやさしい手品で、少年少女の学芸会に演じるにも適当であるが、これを前芸にして「花吹雪」に移るもよく、また、熟練すれば見物の目の前で紙を切るとき、いかにも切り離したように見せて一端を残しておき、これをちぎって復活させる、……というのにも使える。新しい演出をいろいろとくふうしてください。

●……時計の消失

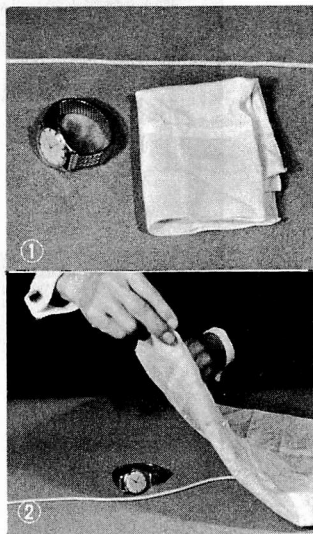
《演技》

金属バンドのついた腕時計を借りて、これにロープを添えてテーブルの上におき、ハンカチで覆う（ハンカチ

も借りた方が効果的）。そして、

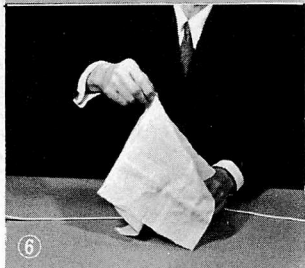
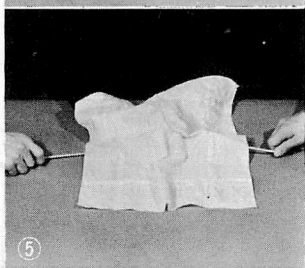
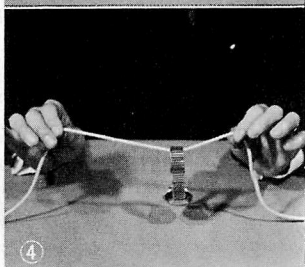
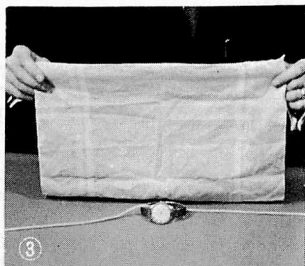
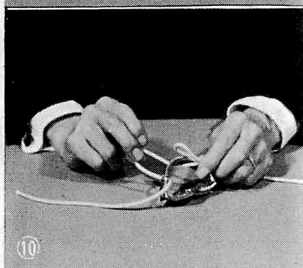
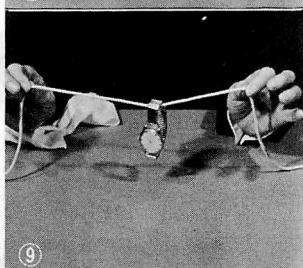
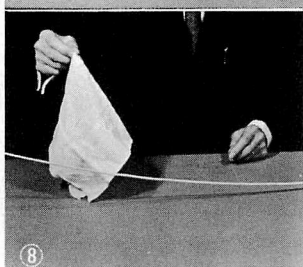
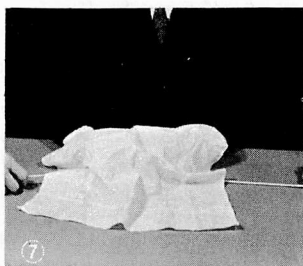
「ちょいとひみつの工作をいたします」

と、ハンカチの下に手を入れてモゾモゾやるが、ハンカチを剝ぎとってみると、時計バントにロープがひと結びされているだけで他奇はない。（写真①〜③）

しかし、奇蹟の起こるのはこれからで、ロープの一端を時計バンドに通したら、もう一ぺんハンカチをかけるそして、ロープの一端をお立ち合いに持ってもらうのである。これを、ちょっと強く引っ張ると、相手はロープを放すから、

しっかり持っていていただかなくっちゃァ！――」

と、叱るように持ち直させ、

「お放しになれば奇術になりませんよ！」

と念を押して、

「ワン、ツウ、スリー！」

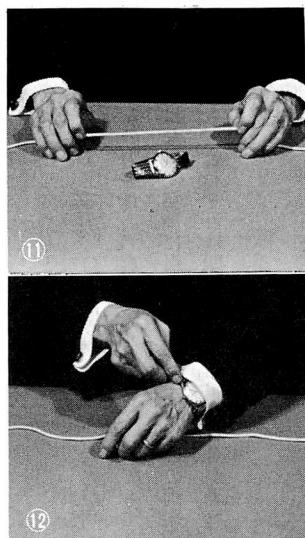
号令をかけると、時計は消失してしまっている。（写真⑤〜⑧）

——もちろん、時計の貸し主はあわてるから、

「あなたの時計は浮気者ですね、もっと愛してやらないと、だれかの手に移るおそれがありますぞ！」

などと、術者は自分の腕からはずして返すのである。

《ひみつ》

一度ロープを時計バンドと結びつけたところを見せるのがカンどころで、二度目にちょっと強く引っ張って相

手がロープを放したら、「もっとしっかり握っていないと奇術になりませんよ！」ともったいづけ、持ち直させるとき、ハンカチの下を素早く写真⑥〜⑨のようにロープをバンドから抜くのである。そして、大急ぎで自分の腕にはめ（写真⑫）、ハンカチの下でまた何かをやるようなゼスチュアをやれば、見事時計の消失現象となるわけだ。〔田島義秀氏演〕

●……布のノリ無し接着術

《演技》

一本の日本手ぬぐいを持ち出して、よくうら・表をあらため、

「ごらんの通り、タネもシカケもございません。手ぬぐいの両端をこう合わせまして、私は二本の指でつまむだけでございますが、一度気合いをかけますと、これが盤石ノリで固めたようにしっかり密着して、どんな力じまんのおひとでも引き離すことはできません。そんなこ

と、できるはずがあるもんか！とおっしゃるお方がございましたら、どうぞご遠慮なくお試しください！」

とやる。（写真）

「よし、おれが試してやる！」

と出る人が必ずあるが、口上にウソはなく、大男が両腕にこんしんの力をこめ、真赤になって引っ張っても離れることではない。無理に引っ張れば、手ぬぐいの両端が千切れても、合わせ目は開かないから、だれもが恐れ入る。

《ひみつ》

手ぬぐいの両端を合わせたら、茶袋の口を閉じる要領で、1センチ半、ないし2センチぐらいのひだをとり、これを山形にたたみ込む。

――こうして、二本の指でつまむだけで、この驚くべき強靱な粘着力が発揮されるのだ。木綿の吸着性と摩擦力が相乗的に働くからである。

●……開運お守り当て

《演　技》

豪華なプレゼントのアキ箱を利用して、ひとつ開運のお守り当てを試みてはいかが？――

当てるご守護札は、ご信心の神さま、仏さま、何でもご自由にお選びになってけっこうですが、いま仮に、「八幡大菩薩」「稲荷大明神」「成田山不動尊」としよう。

ホンモノがあればなおよろしいが、それではもったいない！――というお方は模造札を謹製して演技にとりか

かるがよろしかろう。
高級ネクタイの桐箱などがあれば最高、この中央部に太目のまるひもを装置することを第一条件とする。色はなるべく紫がよい。これは高貴な色とされているので、いかにも神秘感が漂うからである。箱の裏側に接着剤でまん中を貼りつけ、ズルズルと動かぬようにし、両端にはぜひ羽織のひものような房をつけたい。
さて、この神々しい箱に、三枚のご守護札のいずれかをお立ち合いは術者にナイショで入れ、この紫の太ひもをしっかり結ぶのである。（なるべくは術者を別室に去らしめるがよい）済んだら術者を招じ入れ、
「さア、何さまのお札が入っているでしょう？」
ときく。術者は冥目して精神統一につとめることしばし、やがて目をあけると、
「成田山のお札です！」
「八幡大菩薩！」
というふうにズバリ、ピタリと当てるのだが、それが何回やっても百発百中だから、お立ち合いは恐れ入るのだが。……

《ひみつ》
それぞれのお札の中に、新五十円玉か五円玉を、——たとえば八幡さまなら頭の方、稲荷大明神ならまん中、成田山なら下の方に、——といったぐあいに貼りつけておくのだ。
すると、そのお札の重みで、箱がいずれかにかたむくことは理の当然。——だからなるべく太いひもを装置しておくのである。

5円玉か50円玉

八幡大菩薩のお札が入ったとき

●……歌うどんぶり

《演　技》

いささか大きめのドンブリのうらと表をよくあらためたら、これにちょろちょろと少量の水を注いで、ヘリを静かになでていると、やがてドンブリはさわやかな音楽を奏で初める。

一曲終わったら、こんどは水をなみなみと注いで、にぎりこぶしを突っ込み、

「えいッ！」

鋭い気合をかけると、これはふしぎ！ドンブリは高々と宙に浮くのである。

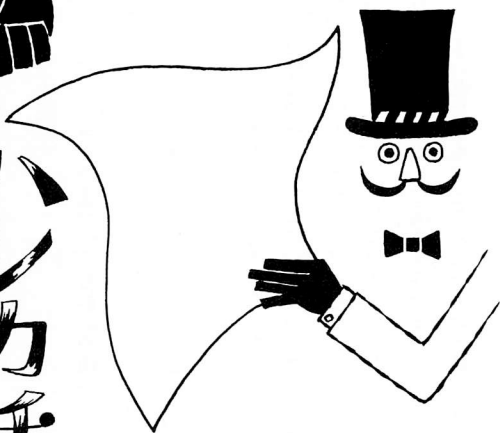
《ひみつ》

ドンブリは、なるべく上質の薄手のものを用意したい。指先を少し濡らしてヘリをなでると、やがて微妙な音を発するようになるから、少し練習すると、どんぐりころころぐらいは演奏ができるようになるが、曲はべつにまとまったものでなくともよい。まずだんだん高音に鳴らせるように努めるべきである。

そこで、ハンカチをとりあげて一度手を拭くのは、極めて自然の運びだから、誰も不審の目をもってみる者はないが、このときひそかにハンカチに秘めた吸盤を中指にはめるのである。「えいっ！」と気合いをかけながら、この吸盤をグワ！とドンブリの底に押しつけると、水がたたえられて相当に重くなっているドンブリでも、わけなくつりあげることができるのだ。

——終わったら、またハンカチで手を拭くこともあたりまえのこと、——ネタはこのとき始末すれば、だれにも気付かれる心配はない。吸盤は、いまやマスコットのつり下げ用にも、台所の小物入れにも使われているので、どこででも入手できる。

〔P73参照〕

ハンカチ奇術

一枚は手品の定法

ハンカチは万能選手

「ハンカチ一枚は手品の定法、……」

という言葉がある。ハンカチはまったく万能の奇術用具といってよい。

早い話が、えりに真紅な大輪のバラの花を飾って登場、ニッコリと一礼して、このバラの花をとり、ハラリ！　とひと振りすると、それがハンカチになったような場合、観衆の視線は期せずしてこの一枚のハンカチに集中するので、このハンカチをクルクルと絞って結んでみせるが、何度結んでも、左右に開けばサッ！と解けてしまう！――というような演技をみせると、どんなにざわめいていた会場も、とたんにシーンと静まり返るからありがたい。

また、ハンカチ一枚の操作で、どれだけネタが楽にとれ、また消失もできるかは、ハトの奇術をごらんになればよくわかるであろうが、えんえんと燃えさかっている火を食べて水を飲み、再び口中から火炎を吐く。――というようなトリックの場合、水を飲んだ後の口を、ハンカチで拭くのはきわめて自然な動作なので、だれ一人怪しむ者もないが、実はこのハンカチの中に吐く火のタネが忍ばせてあるのであり、カップや水鉢をあらためた手を拭くのも至極あたり前のことだし、手を拭いたハンカチをポケットにおさめるのも、少しの不自然さを感じさせないが、この間に楽々とタネを運び、観客の視線をさえぎって、あの神変不可思議な現象を、つぎつぎと見せることができるのである。また、

「私のハンカチを使いましたのでは、いかようにもタネがかくせると思し召す方もございましょうから、……」と、観客から借りるのもひとつの手段で、その上に親近感を盛り上げる徳もある。

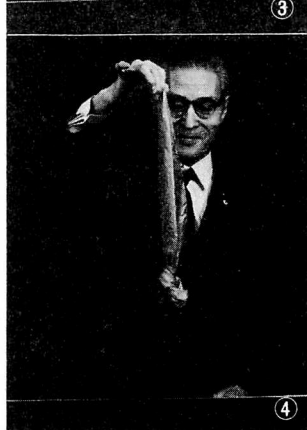
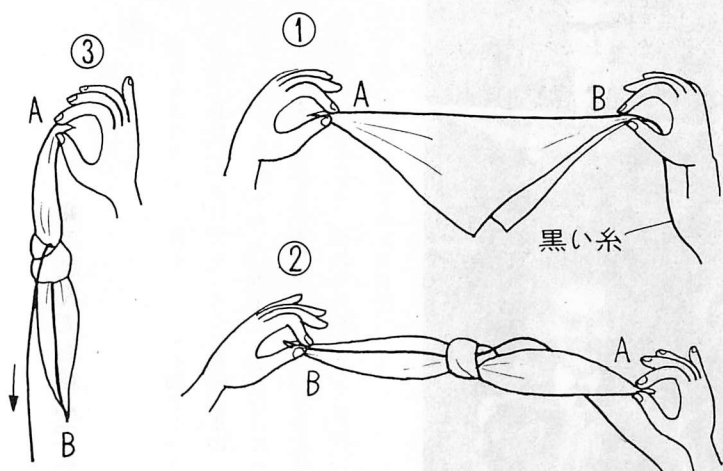
●……結んでも結んでも

《演　技》

まず、燃えるような（？）紅のハンカチを胸ポケットからのぞかせて登壇しただけでも、そこに視線が集中して、会場がシーンとなるから（写真①）、おもむろにその紅いハンカチを引きぬき、両角をとって二つ折りに持つと、写真②のようになる。これをクルクルとまわして、あたり前の真結びにする（写真③）。そうして、この一端をつまんで、その腕をクーンと前にのばし（写真④）、パッ！とひと振りすると、結び玉は写真⑤のように下って、やがてハラリと解けてしまう。

——何回結び直しても、あっけなく解けて

①

②
③
④

しまうから、見物の興がいよいよハンカチ一枚に集まることになる。

⑤

《ひみつ》

ハンカチの一隅に黒い絹糸を縫いつけ、その糸の端を上衣のボタンに結んでおくだけのこと。——ハンカチを三角形に折って結ぶとき、上図のようにこの糸を一しょに結び込むのである。

だから、糸のついていない方の端をつまんで、適当の距離に腕を伸ばせばこの糸が引っ張られて、結びこぶは解けてしまうのが当たり前の話。

このくらいならタネあかしをしてもお愛きょうになるだけだが、しかもぜったいに受けるからゆかいだ。

●……カメレオン・ハンカチ

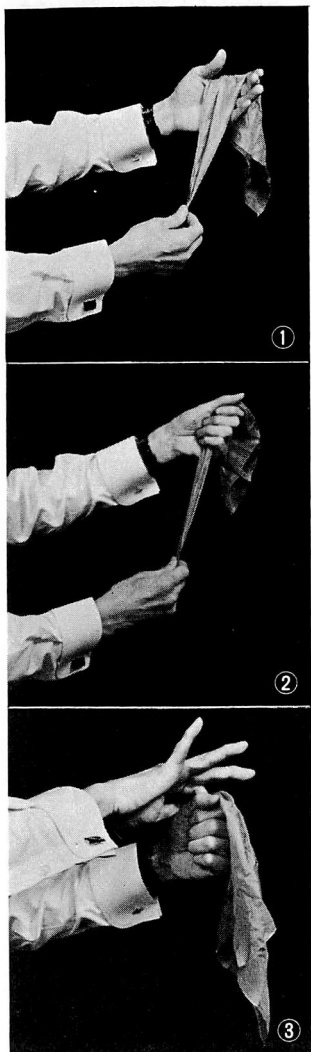
《演　技》

左手をひらいて赤いハンカチをしごきながら登場する（写真①〜②）。そして、左手を軽くにぎり、上から赤いハンカチを写真③〜④のようにもみ込んで、下から引き出すと、ナンと青色に変わって出てくる（写真⑤）。そして、完全に赤が手の中に消え、下から青いハンカチになって出てくるが、左手を開いてみてもタネを発見することはできない。

《ひみつ》

実は写真のような厚紙（またはプラスチック）製の筒を右の中指にはめておくのだが、ハンカチの隅をにぎってしごきながら登場するから、見物の目はもっぱら左手に注がれていて気がつかない。もちろん、この筒の中に青いハンカチを詰めておくので、上から赤いハンカチを押し込めば下から青いハンカチが出てくるわけだ。

そうして、赤と青が完全に入れ代わったら、写真⑥のように、また右の中指にはめ、これを青いハンカチの後

①
②
③

ろにかくして、持ち出し、この色の変わったハンカチに包んでポケットにおさめれば、ネタはぜったいに気付かれない。

このタネはどこのデパートでもかんたんに手に入れることができる。

●……ニュー・染め分けハンカチ

《演　技》

幅20センチ、長さ40センチぐらいのケント紙、または模造紙を持ち出して、うらと表をよくあらためる。

そして、これをおや指が入るくらいの太さにクルクルとまるめて左手に持ち、白いシルクのハンカチを、一枚ずつあらためてはこの紙筒の下から三枚ほど中へ押し込む。（写真①〜③）

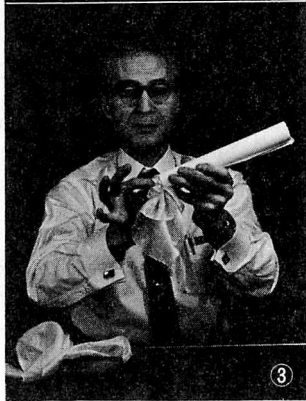
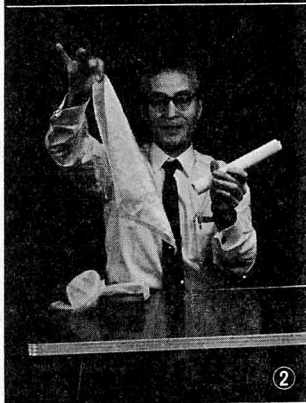
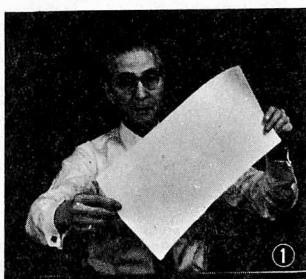
入れ終わったら、右手のひとさし指とおや指を輪にして、紙筒を弾くと、紙筒の上部からまず赤く染まったハンカチが顔を出すから、なおも弾きつづけると、次には黄色に染まったハンカチが飛び出す。（写真④〜⑤）

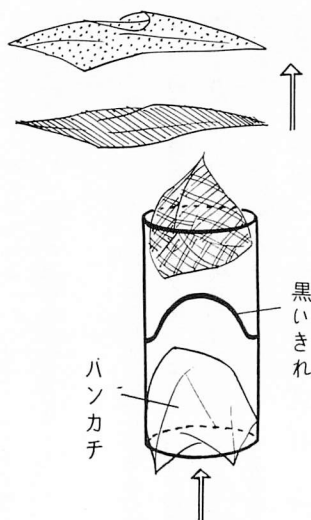
そこで、むらさきの三枚目は筒の下からフッ！と吹

いて高々と空中に飛ばす。（写真⑥）
三枚ともに見事に染め上がってハンカチが出たら、巻いた白紙をひろげてみせるが、いうまでもなく先に押し込んだ三枚の白いハンカチは影も形もありません。

《ひみつ》

実は、図のようなタネの筒を手早く白紙に巻き込むのだが、筒は金属製で、中は黒く塗ってある。内部の中央部には黒色の布がU字型に張りつけてあって、この上部には前もって三色に染め分けたタネのハンカチが詰め込まれていて、下から白いハンカチを押し込めば、しぜんにこれ上部に押しあげられて紙筒の中に出てしまう。
そこで、外部から指で紙筒を弾くと、弾力に富んでいるシルクのハンカチは、急にひろがって外にとび出すのである。
しかし、紙筒の中には白ハンカチを押し込まれたネタ筒が残っているわけだから、弾きながら紙筒を持っている左手をゆるめて、用具箱の中にこのネタ筒をすべり落としてしまう。——すると、もう紙筒の中は完全にカラになるので、最後の一枚は下から吹いて、勢いよく空中に飛ばすといっそう効果が挙るが、——というわけだ。

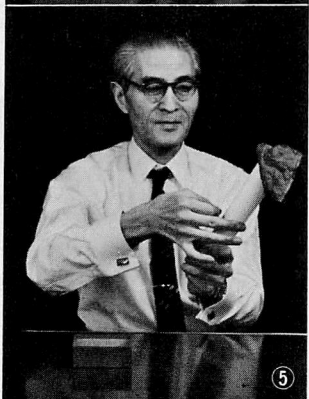
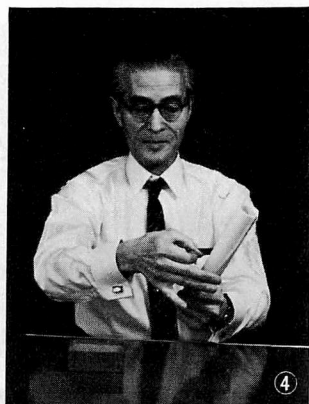
黒いきれ

ハンカチ

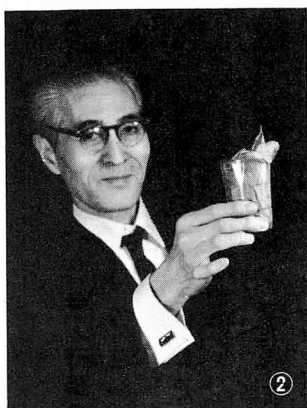
――このため、用具箱はぜひそばに置く必要があるが、白いハンカチをこれから取り出すので、何の不自然さもない。また、ケント紙の一方を10センチぐらい折っておくと、ネタを楽に巻き込める便宜（べんぎ）がある。

●……飛び込みハンカチ

《演　技》

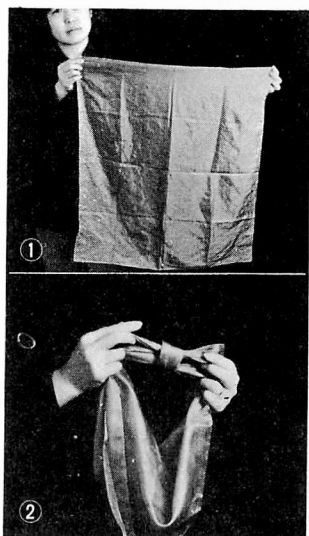
一個のカップを持って登場、内外をよくあらためて、

「えいっ！」

と気合いをかけると、――不思議！　カップの中には真赤なハンカチが出現している。――（写真①〜②）

《ひみつ》

実はこのカップ、底に近いところに小さなアナがあけてあって、ここに通した黒い絹糸（きぬいと）の一端にハンカチが縫いつけてあり、これを胸ポケットに押し込んでおくのである。そして、絹糸のもう一方の端を上衣のボタンに結びつけておく。こうして、距離をかげんしながらカップを操作し、かけ声と共に腕をサッ！　と伸ばせば、ポケットのハンカチはカップの中に飛び込むわけだ。ハンカチが出現したら、さらに腕を伸ばして糸を切ってしまえばよい。

●……奇蹟のハンカチ

《演　技》

交通信号でおなじみの、青・赤・黄三色のハンカチを持ち出し、まずゴーの青いハンカチのうらと表をよくあらため（写真①）、角ちがいの三角形に折って、左右のスミをしっかり結び合わせる。つぎに黄色のハンカチをとりあげて、同様うらと表をあらためてスミを結ぶ。そして、最後に赤いハンカチをとりあげて、この二枚に通し、この三色三枚のハンカチを連結する（写真①～③）。

そして、これを前もってよくしらべたアキ箱か帽子に投入して、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

例によって、ありがたいアラビアのじゅもんを唱えながら、まずゴーの青いハンカチを輪になったまま抜きとる。つぎに注意の黄ハンカチを抜きとって腕に通す。そして、最後にストップの赤いハンカチを、やはり輪になったまま出して腕に通し（写真④）、容器のカラ箱、または帽子をあらためるが、もちろん何も現われはしない。

③

《ひみつ》

実は最後に通す赤のハンカチを三角形に折った両スミを結んでまん中にかくしておくのだが、前に二枚のうらと表をよくあらためて結ぶので、三枚目はそのままですんなり青と黄のハンカチの輪に通して結んでも、もはや見物には気にならないのである。（図①）

ところで、このタネのハンカチに、他の二枚を通して結ぶのには、何のトリックもないのだが、ただしっかり結ぶように見せて、実は一方のスミを立て、図②のようにネクタイ結びにしておく。

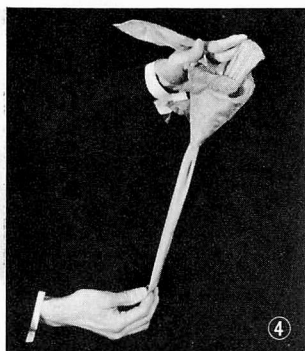
したがって、アキ箱の中でこの結び目を一方に引くと青と黄の二枚のハンカチの輪はわけもなく外れる。そして、もう一方の、――シカケをしたタネの結び目はそのままで残ることになるというわけ。

●……チェンジする結び目

《演技》

この演技には、なるべく大型のシルク・ハンカチの方が適している。1メートル平方のものなら仕事は楽だ。

ハンカチは対角線の両角を持って三角形に二つ折りにし、A端を左手のひとさし指と中指に挟み、端を右手のひとさし指とおや指でつまんで、左手のおや指とひとさし指の間に持っていって、ハンカチの輪をつくる。（写真①～②）

つぎに、この輪に右手を突き入れてA端を左の中指に

引っかけて輪を通すのであるが、そのとき、左の中指とくすり指にB端の中ほどをはさんで、きゅっと引き締める（写真③～④）。こうして結んだら、指を抜いて端を左手に持ち、右の甲にもう一枚のハンカチをかけて（写

真⑤)、両手をひと振りすると、左手の結び玉は右手に移転し、見事にチェンジするのである！(写真⑥)

《ひみつ》

右手の甲にかけたもう一枚のハンカチは、ひとふりするとき、素早くA端をひとさし指と中指にはさんでS字を描くと同時に、B端をひとさし指とおや指に摘んで、このS字形の上部をくぐらせるのだ。(写真⑦～⑧)

そして、左手に持ったハンカチの結び目は、これにタイミングを合わせて強くひと振りすれば、わけもなく解けてしまう。

●……ハンカチをつなぐ

《演　技》

2枚のハンカチを持ち出し、一枚、二枚、……と数える。もちろん二色のものを使いたい。(写真①～④)

そうして、これをまとめて再び左手に持

ち替え（写真①）、おまじないをかけて右手でサッ！と一端を持ちあげると、二枚のハンカチは手をつないでいるのだ。（写真⑤～⑥）

《ひみつ》

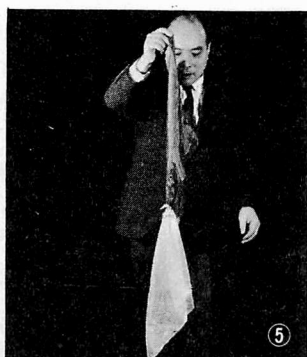
②

③

④

⑤

⑥

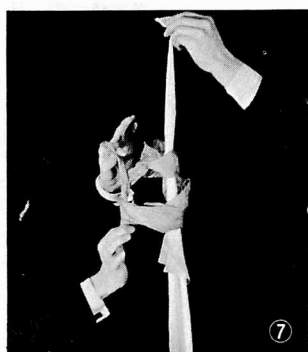
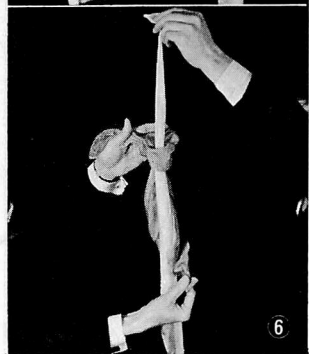
⑦

内々で、写真⑥～⑦のように小さな輪ゴムを左のおや指とひとさし指と中指にかけておき、二枚のハンカチをまとめて写真③のように左手に持ち替えたとき、写真⑦のように二枚のハンカチをまとめ持った一隅に深くはめ込むのである。——あとは一隅をつまんで手際よく引きあげてみせればよい。

●……結び玉の奇蹟

シルクのハンカチを二枚使う。（小さくとも60センチ平方以上のもの、紅・白とか、赤と青とか、色の異なったものにしたい）

《演　技》

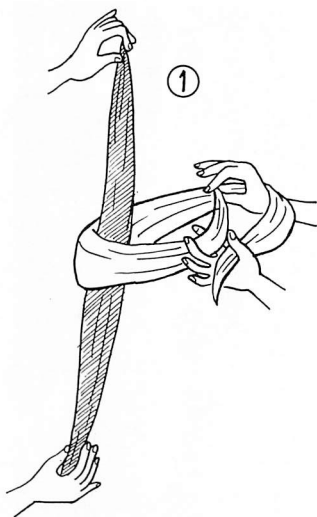
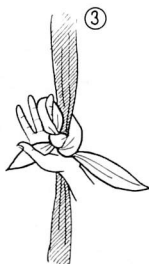
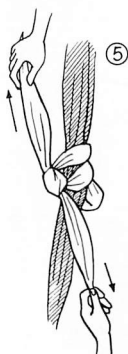
まず一枚をお立ち合いに渡し、対角線の両角を持ってシャキッとタテに棒状に引っ張ってもらう（写真①）。術者も、別のハンカチを同じように持って、お立ち合いの持ったハンカチに通し（写真②）、下の隅を持ちあげてひと結びする。（写真③～④）

そして、結び目をきゅうっと締めて、もう一ぺんお立ち合いのハンカチを巻き（写真⑤～⑥）、さらにもうひ

と結びしたら（写真⑦～⑧）、相手にもひと結びしてもらう（写真⑨）。さて、ここで、

「ワン、ツウ、スリー！」

号令をかけて引っ張りっこをすると、摩訶不思議！

二枚のハンカチは、結ばれたまま別れ別れになってしまうのである！（写真⑩）

《ひみつ》

さしえをごらんになりながら、けいこをくり返してください。まずA端を、左のひとさし指と中指にとって、相手のハンカチに通したら、右手にもったB端を左のひとさし指とおや指の間に持っていく。（図①～②）

次に、右手をこの輪にくぐらせて、A端を左の中指にひっかけて右手で引きながら、B端を右の中指をくすり指ではさんでぎゅうっと締めると、図③のように結びコブができる。

このA端を右手で一ぱいに引き、相手のハンカチにS字形にからんで（図④）、もう一ぺん結ぶのだ（図⑤）。ここで相手にもハンカチをひと結びしてもらい、引っ張りっこをすれば、結び目はそのままで、二枚のハンカチが別れ別れになる。

③

④

●……会うは別れの

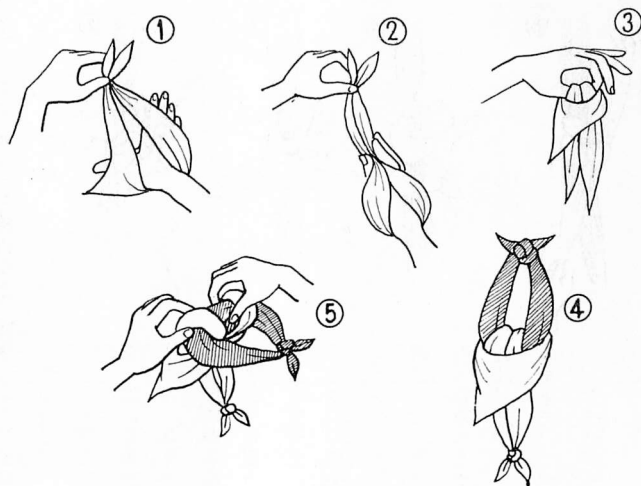
《演　技》

一枚のハンカチをひろげて、よく裏と表をあらため、三角形に二つ折りにして両端をそろえる。

つぎに、図①のように、左手に両端をつまみ、右手をハンカチの輪の中に差し込んで指をひらく。それから、その手を図②のように返して、まん中を引き上げると図③のようになる。

そこで、この二つの輪に、別色のハンカチを通して、その端を図④のようにしっかりと結び合わせる。――つまり二枚のハンカチは輪ちがいになって結ばれたわけだ

これを、後ろにまわして「ワン、ツウ、スリー！」号令と共に両手をひらくと、ハンカチは結ばれたまま見事引きぬかれて、術者の手に一枚ずつ持たれている。（図⑤）……

《ひみつ》

図⑤をごらんになればよくわかる通り、この二つのハンカチの輪は、引けばぬけるのが当然なのであるが、一

方を輪にした中に通して、またしっかり結ばれたままですっぽり抜けるのが、見物にはナンとも不思議なのである。——つまり、一種の錯覚の応用といえよう。手さばきひとつで、とてもきれいな小品奇術である。

ハンカチは大判のものなら木綿でもできるが、なるべく絹のすべりのよいものを用いたい。女性のスカーフを使ってもあざやかである。

●……手をつなぐハンカチ

《演　技》

美しい〝魔法の玉手箱〟を持ち出し、まず後と前を開いて、中には何のシカケもないカラ箱であることを承認させる。(写真①〜③)

道具しらべがすんだら、つぎには色替わり(青・赤・黄など)のハンカチを、右側のアナから一枚ずつ差し込み、

「アーブラ　カダブラ、アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えて左側のアナから引き出すと、ナンとハンカチは、この玉手箱の中で仲よく手をつないで出てくるが、再び箱の前後を開けてみせるが、一枚ずつ差し込んだハンカチなどは残っていない!(写真④〜⑤)

《ひみつ》

実は、後ろのフタに筒がついていて、〝手をつないだハンカチ〟は前もってこの筒の中に入れてあるのだ。そ

④

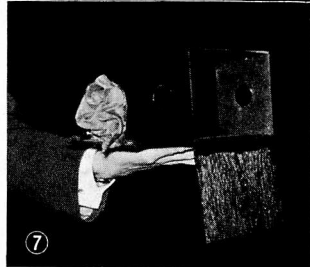
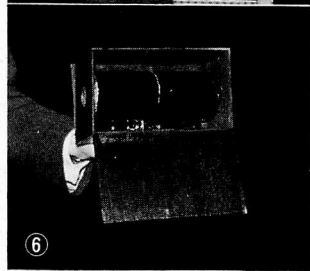
⑤

⑥

⑦

して、一枚ずつ入れるハンカチはこのひみつの筒の中におさまるのである（写真⑥〜⑦）。——色替わりハンカチの、入れる順序と出す順序を間違わないように注意せねばならぬ。

一番たいせつなことは、この箱の両ブタの開け方で、必ず後ろをさきにはずし、前ブタを後に開けることだ。うっかりして、前ブタを先にはずしてしまうと、中のタネがまる見えになってしまう。

なお、この〝ひみつ筒〟をうまく利用すれば、ハンカチばかりでなく、いろいろの物を箱の中で変化させることができる。短かく切ったテープを突っ込んで、一巻のテープを長々と引き出し、このテープの山を築いて、その陰から薬玉（くすだま）やバネ花を出したり、またはパン！　パン！　とクラッカーを飛ばすとか、鳥かごを出現させるなど、いくらも手はある。

これもデパートの奇術用具売り場で買えるが、器用な人なら日曜工作で作成するのも容易である。

●……六枚ハンカチ

《演　技》――口絵カラー写真参照――

まず、ハンカチは、交通信号になぞらいて、青・赤・黄の三色を二枚ずつ用意する。なるべく大きい方が、見た眼にもハデだし、やり易い。少なくとも60センチ以上のものが欲しい。

この六枚のハンカチ三色ずつの二組にセットして、写真①のように左手に握って登場する。そして、写真②のように右手で、

「一枚、二枚、三枚、――」

と数えて右のテーブルに置く。（写真③）

つぎに、もう一ぺん

「四枚、五枚、六枚、――」

と数えて、こんどは左のテーブルにおく。

つぎに、この三枚を写真④のように結び、写真⑤のように結び目をハッキリと見物に示して一度ひき締め、それをクルリとまるめて左のテーブルにおいて、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

呪文（じゅもん）を唱えて、ゼスチュアよろしく

「チェンジ！」

と号令をかけ、先刻一枚ずつ数えて重ねておいといた右のテーブルのハンカチを、ソロソロと持ちあげると、ナンとあのバラバラの三枚が、仲よく手をつないでいるではないか！そこで、固く結んで左のテーブルにおいといたハンカチを一枚ずつ持ちあげてみると、――これはしたり、いつのまにかバラバラになっていて、見事チェンジされている（写真⑥）。

「どんなもんです！」という思い入れよろしく、たったいま手をつないでいた右のテーブルのハンカチを持ち上げてみると、これもまた一枚ずつになってしまっているので、やんやのかっさいを浴びるというわけだ。

《ひみつ》

六枚のハンカチを二組のセットにして、写真①のようにヒシ形に折った一隅を握るのであるが、そのうち一組は写真④のように結び合わせておくのである。これを写真②のように、左手のひとさし指とおや指でおさえて内側に持ち、バラバラの三枚を、中指とくすり指ではさん

で外側に垂らしておく。

そうして、

「一枚、二枚、……」

と、右手で外側のハンカチを数えて取り、

「三枚、――」

と数えるとき、素早く内側の結んである三枚とチェンジして取ってくるのだ。だから、このときすでに右のテーブルにおく三枚はつながっているのだが、見物にはバラバラの三枚としか思われていない、――というわけ。

そこで、チェンジしたバラバラのハンカチを左のテーブルにおいて、一枚ずつとりあげて結ぶのであるが、まず結びにした結び目をしっかり締めるように見せて、一方のミミを写真⑦のように立てる。――と、これが〝ネクタイ結び〟となるから、立てたハンカチを下に引くと、かんたんにスルリと抜けてしまうが、これを気付かれないように手早くまるめて元のテーブルにおくのである。手順は、写真⑦のようにまん中のハンカチを手の甲の方に垂らし、手のひらに二つの結び目をならべておき、引きぬいた内側の二枚でまん中の一枚をくるむようにする。

こうして、左手の、あらかじめすみを結び合わせておいた方をソロソロと持ちあげてみせるのだが、これも結び目を手の内に見せるつもりで、素早く引き抜いてまるめておく。――そして、さも魔法をかけたようなゼスチュアよろしく、一枚ずつとりあげて腕にかけてみせるのである。

――これは、リハーサルを十分にしてあざやかに演ずると、宴会(えんかい)でもトリ(最終の呼びもの)芸として人気をとることができるものだから、伴奏ともよく合わせておくがよい、洋装で演ずる場合は、軽いワルツ風の曲も合うが、お座敷ではなやかにやるときは、「竹巣」「吉原雀」または「こんぴら船々」のような三絃をにぎやかに入れてもらう。笛・太鼓の入るバカ囃子(はやし)にのせてユーモラスに演ずればいっそう引き立つ。

このとき、バラバラした六枚ハンカチを二本のひもに結び、はんてん(伴天)抜きなどを加えると、興は一だんと増すであろう。

コイン・マジック
100

手近かな小奇術

コインの魔力をマスターしよう!

お金のことを「おあし」というが、まったくこれなくしては動きのとれぬのがわれわれ人間である。すなわち、金そのものが大きな魔力をもっているわけだが、こんな手近かな小奇術の材料もあるまい。

しかも、別に買うには及ばないのだ。マジックで人のドギモをぬいた上で、好きなものを買えばよいのだから、無利子で大金を動かすのと変わらないわけである。いつ、どこででも、ポケットに手を突っ込めば百円玉の五つや六つはころがっているはずだ。

一ぱいのコーヒーから……という歌もあるが、クラブやキャバレーでも、このコインのマジックで彼女たちを驚ろかせれば、一度で注目のマトとなるから、ナマでいささかのチップをバラまくよりもはるかにモテるという得もある。一個のコインから恋のチャンスをつかむなどは、人生の大魔術といってよかろう。

いや、それよりもこのごろは、国鉄・私鉄の切符もほとんどが自動販売になったし、百円玉一個を入れると、おかんのついた全国の銘酒が味わえる〝銘酒コーナー〟なども出現した。五十円玉を入れると、おつまみも出る。

娯楽センターにはタバコやジュースなどの自動販売機がならんで、コインを入れてくれる人を待っているし、百円玉二個を入れると恋の占いをささやいてくれるコンピューター占いも行列をつくるほどの大繁昌ぶりだ。

何だかコインそのものが魔法使いのようでさえある。

――コイン・マジックをマスターして、この魔性のコインを、君の自由にするのも、ナンとゆかいではないか!

拝借の百円はおあきらめ願いましょうか！」
などと笑わせて、
「イヤ、マジシァンにあんなタチの悪い奴は一人もおりません。魔法で消したものは、また魔法で呼び戻しますからご安心を、——」
と、もう一ぺん三重に包み、Ⓐから順々に開けていくと、コインはちゃァんと元に戻っているのである。

《ひみつ》

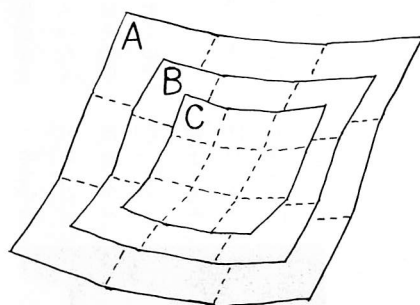
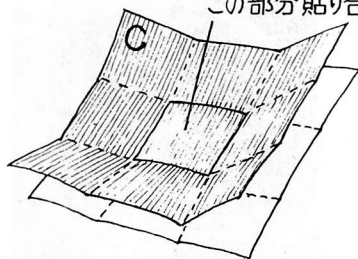
●……コインの忍術

《演　技》

一枚の紙を、タテ・ヨコともに三つ折りにしたものを大・中・小の三枚（二枚でもよい）用意する。

まず、一番上包みにするⒶからうらと表をよくあらため、つぎに中包みのⒷも同様にしらべ、最後の小Ⓒを開いて、お立ち合いにコイン（百円玉でも、五十円玉でも、十円玉でも）を一個のせてもらう。

そして、これをヨコ・タテから折りたたんでⒷの上にのせ　さらにⒶで三重に包み、おまじないをしてトン！とたたき、さておもむろに開いてみると、——オヤオヤ、Ⓒに包んだコインはどこへやらトン走してしまっている！——お立ち合いは目を皿のようにしてあたりを探すが、もちろん発見されない。

「三億円事件のミニチュア版と思って、まァ

はじめに、ⒶⒷと二枚のうら・表をしらべて異状がないから、最後のⒸはもう裏をひっくり返してしらべなくとも、お立ち合いは疑念を抱かないが、この実はその中央部だけを背中合わせに貼りつけて二重にしておくのである。

だから、やはり三枚を使う方が効果百パーセント。

——すなわち、このまん中にコインをのせてもらって折りたたみ、これをⒷでまた包むとき、ひそかにひっくり返して包むと、反対面のカラのところが上になるから、開けてみるとコインは消失しており、つぎに再び包み直すときは元の通りに返しておけばコインの出現となるわけだ。

●……まぼろしの銀貨

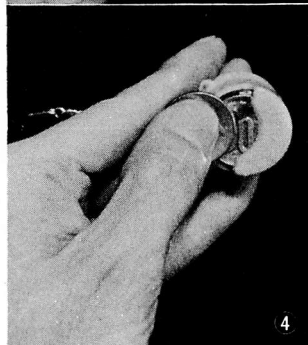
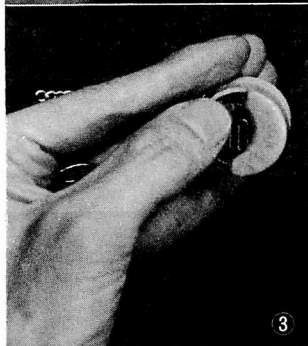
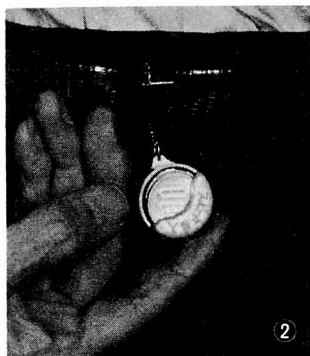
《演　技》

両手のうら・表をよくあらため、金属製のハット（帽子）またはバケツを、見物に渡してよくしらべてもらいます。

さて、道具あらためが済んだら、片手に帽子（またはバケツ）を持ち、片手をうちふりながら客席をまわる。——と手がちょいと上衣のすそに触れたとおもうと、指先に十円玉が吸いついている。

①

——それをガチャリ！　と容器に投り込む。すると、もうつぎの瞬間にはレディのハンドバッグから百円玉を抜きとってガチャリ！　紳士のそでから、坊やのポケットから、お嬢さんのえりもとから、……手が伸びたと思うと十円玉や百円玉がホロリ、ガチャリ！　と、みるみるうちに抜きとられて容器にたまるから、ニンマリ笑って銀盆にジャラジャラとあけて見せ、

「ハッハッハッハッ、お客さま方、目の色を変えてポケ

ットやハンドバッグをおさえていらっしゃいますが、私はマジシァン、ドロボーではございませんから、あなた方のお宝をぬきとったのではございません。このマジックも〝マイザーズ・ドリーム〟すなわち欲張りの夢と申します通り、これは皆マネーのまぼろしなのでございますよ。ハイ！」

と引き込む。ゆめ「懐中物にご用心！」とか、「ごゆだんなさると、この手でみんなちょうだいいたします」などというセリフは吐くべからず！（写真①）

《ひみつ》

両手のうら・表をあらためるので、もちろんはじめからネタは持てない。これは左・右の腰にドロッパー（コイン・ホルダー）をいくつも吊っておくのである（写真②）。一個のドロッパーにはコインが十枚ぐらいは楽に入るから、写真③〜④のようにおや指でバネを押してこれをとるのだ。容器をもつ方の手には、あらかじめ十枚ぐらい握っていて、一方のひとさし指と中指をのばして観客の上衣やハンドバックから抜きとり、これを投り込むように見せて、実はこの握っているコインをガチャン！と落とし、指先のコインはおや指のつけ根にサムパー

②
③
④

ムするようにすれば、実にスピーディに運んでおもしろい。容器は両手に代わる代わる持つようにすると、ネタがとり易いが、これは人の得手、不得手があるからやりよいようにすればよい。もとより練習が第一。

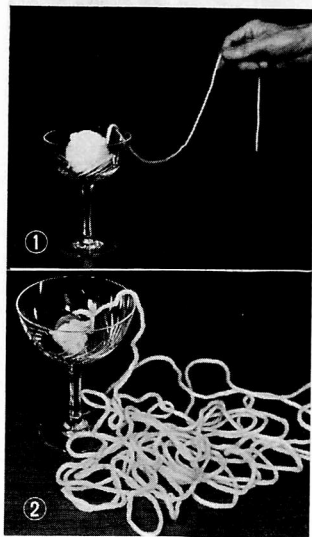
●……もぐり込む銀貨

《演　技》

「おそれ入りますが、お持ち合わせの百円玉を一枚拝借させてください。替え玉を使うのではないか？とのお疑いを受けたのではおもしろくございませんから、その銀貨の鋳造年号を覚えておいていただきます」

　と、後見の助手に客席をまわらせて、百円玉を借りたら、その貸し主に持参の小袋に入れてもらう。（銀貨に何かしるしをつけてもらえば、もっと効果的）

　助手が舞台に戻ったら、術者はその銀貨を袋から手のヒラに受けて、

「ただいまお客さまに拝借いたしました銀貨、しかもしるしをつけて、ご本人が直接この袋に入れてくださいましたものですから、確かなものでございます」

　と、よくあらため、助手に毛糸の玉をカクテル・グラスに入れてテーブルの正面に安置させ、

「月世界の着陸にもめでたく成功できた現代、お前があの毛糸の玉にもぐりこむのもわけはあるまい。ソレ行け、ワン、ツウ、スリー！」

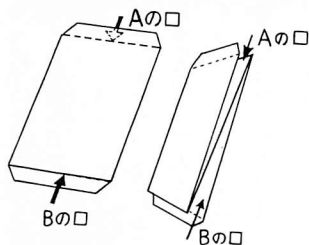
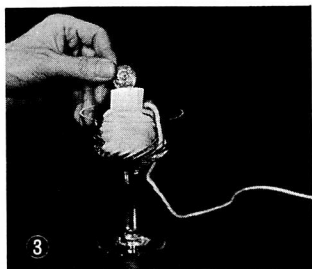
　と打ち込む。――そして、写真①～②のように毛糸の端を引いてクル、クル、クル、クル、カクテル・グラスの中で玉をほぐしていくと、百円玉はそのまん中から出

現する。

「確かに拝借の百円玉でございますね、よくおしらべください」

と貸し主に返すのだが、鋳造年か、本人のつけたしるしが代替のコインでないことを証明するから、見物一同は驚嘆の目をみはる。

《ひみつ》

まず、見物に百円玉を入れさせる袋だが、これは図のように中仕切りをはすっかいに貼り合わせてあるから、Aの口から入れさせて、Bの口から出すのは代替のコインだが見物には全然気付かれない。

従って、助手は見物が入れてくれた百円玉の入った袋をもって一時退場するわけで、毛糸玉には写真③のような漏斗(アルミ板、または厚紙でつくる)を突っ込み、見物から借りたコインを中心に入れ、素知らぬ顔でテーブルに安置すればよいのである。毛糸は弾力性に富んでいるので、この薄っぺらなじょうごからすべり込ませたコインを呑んでも何の変化もない。端を引っ張れば、玉はころころとカクテル・グラスの中で躍って、やがてはだかん坊になった百円玉が出てくる！――というわけだ。打ち込むと見せた代替の百円玉はもちろんサムパームしてポケットに入れてしまうのである。これは後見役の助手が如才なく立ちまわってネタまわしをしなければならぬ奇術のひとつである。

Aの口
Bの口
Aの口
Bの口

●……銀貨かくし

《演　技》

①

「おそれ入りますが、ちょっとお手伝いくださいませんか。——」

と、まずお立ち合いのご登場を乞う。二人上がってもらったら、上手と下手の椅子にお控えを願って、下手の一人に銀盆を渡し、その上に十枚の銀貨をのせる。

「一枚、二枚、三枚、四枚、五枚……」

目の前で念入りに数え、お立ち合いが承認したら、こんどは両手を出させて、その中にザラザラとあけ、

「この十枚の銀貨をあなたにお預けしますから、しっかりにぎっていてくださいよ。一枚でも紛失したらあなたの責任ですからね！」

と、ハンカチでしっかり結わえる。（写真①〜③）

つぎにじょうずに控えてもらったお立ち合いの前に進んで同様に十枚の銀貨を数えて握らせ、その銀盆を持って、下手のお立ち合いの前にとって返し、

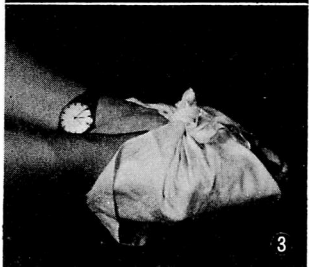
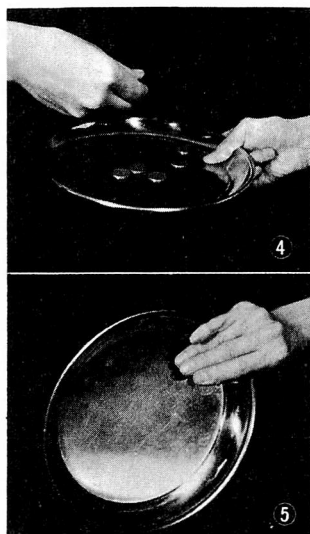
「さきほどお預けした銀貨をお返しください」

と、ハンカチを解いて銀盆の上に一枚ずつのせてもらう。

——ところが「一枚、二枚、……」と数えさせると、八枚で終わってしまう。（写真④）

「あなた、どうなさいました？——さっきは確かに十枚お預けしたはずですが。……」

とやると、お立ち合いはあわててきょろきょろあたりをさがすが、もちろん銀貨はこぼれてなんかいない。

②
③

そこで、上手の方のお立ち合いの方に行って同じように数えてもらうと、こちらはナンと十一枚に殖えている
「あらあら、今夜はお客さまの方が私よりもずっと奇術がおじょうずでいらっしゃいますわ！　お二人でへらしたり、ふやしたりしていらっしゃる！――」
天勝はこんなふうに愛きょうをふりまいてすっかり青い目の人気をとったものだが、二代目もそっくり承け継いで同じ演出をやっている。
「けれども、こちらが十一枚で、あちらが八枚、合わせて十九枚しきゃございませんね。一枚はどこへ雲がくれしたのでございましょう？――」
と、お立ち合いのからだ中を探り、ポケットからつまみ出すとか、またはテーブルの上の花びんの花を抜いて、その中からとり出し、
「いやはや、この銀貨、とんだ浮気者でございまして、いつのまにやらこんなところに忍び込んでおりました！……」
などとやる。初代天勝が初めてアメリカに行ってこれをやったとき、
「ワン、ツウ、スリー、フォア、ファイブ、……」
と、ダラーを数えるが、つぎの「シックス」の発音がどうしてもできず、「セキース！」と言ってしまう。すると、お多分にもれず、ここでドッ！と客席が沸く。われわれが外人タレントのカタコトの日本語に興味を覚えるのと同じ心理だが、この「セキース」はまた別の意味もあるので、これが爆発的人気をとり、馴れて満足に「シックス」と言えるようになったら、かって「ノー、ノー、セキース！」と声がかかり、道で出会っても「ハ

ローセキース！」と呼びかけられる始末だったという。

——これはそれほどの人気をとった愛きょう満点のステージ・マジックである。演出に新奇なくふうをこらせば、さらにおもしろくなるはずである。

《ひみつ》

銀貨を十枚数えて、はじめにお立ち合いの手にあけるとき、二枚を素早くフィンガー・パームするのである。だが、ひろげた手にザラザラとあけて、「しっかり持っていてくださいよ！」と、両手をしっかり合わさせてしまうので、お立ち合いは疑いもせず十枚握ったと思っている。あけた銀盆は写真④のように持ってテーブルの上におき、代わりにたたんだハンカチをとってくるから、このとき一枚の銀貨をパームしてきて、ハンカチをひろげながらポケットに投りこむのも容易だし、花びんにすべり込まさせるのはもっとやさしい。

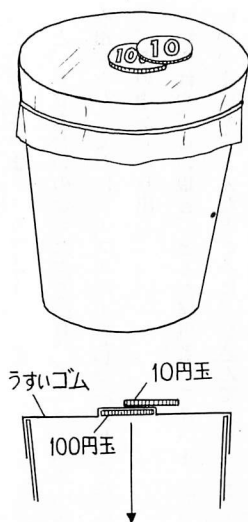
そして、二番目にお立ち合いに銀貨を預けるとき、もう一枚の銀貨をフィンガー・パームして銀盆を持っていけば、当然十一枚になるはずである。

（助手を使えば、最後に出す一枚の銀貨をフルーツ皿のリンゴやみかんの中からもとり出せる。いろいろに演出をくふうして、せいぜいお愛きょうたっぷりに効果をあげることが望ましい）

●……百円玉とん走

《演　技》

「ゼニは一名〝おあし〟と申しまして、止めて止まらぬ逃げ足の早いやつだそうですが、……」

などといいながら、透明なカップと、手術用の薄いゴムをお立ち合いに渡してしらべてもらい、カップにこの

薄いゴムを張り、周囲を輪ゴムで止め、百円玉を一個載せ、十円玉をお立ち合いから借りて重ね、

「アーブラ　カタブラ　アーブラ　カタブラ……」

例によってアラビヤの呪文を唱えながら、重ねてのせた二個のコインをトン！と突くと、なるほど百円玉は密閉したカップの中にチャリーン！と落ちるが、再びお立ち合いにカップを渡してしらべてもらっても、薄ゴムはピーンと張られたままで、もちろんアナなどはあいていない。

「やっぱり、ゼニは魔性でございますなア！――」

《ひみつ》

この手術用の薄ゴムは最高のものですから、どんなに伸ばしても破れない。――それを利用した小品マジックである。何彼と言いながらこのゴムを伸ばし、百円玉のギザを活かして、これを支え、うら返しにしてカップにかぶせ、四囲を輪ゴムで止めておくのだが、ゴムが極度に薄いので上に載せてあるようにしか見えない。そこで、もう一枚のお立ち合いから借りた十円玉はその下になるように重ねておいて、強く突くと、もともとうら側に止めてある百円玉は、見事カップの中に落ち込む。

――というシカケである。

手術用のうすゴムは薬局に頼んで頒けてもらえばよい。

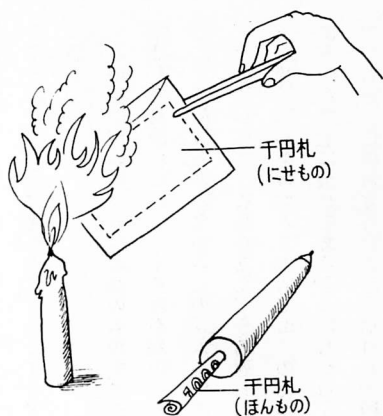
●……紙幣焼き

《演　技》

「まことに恐れ入りますが、お持ち合わせの千円さつを一枚拝借させていただきとうございます。ニセさつとスリ替えるのではないかとお疑いがかかったのではおなぐさみが薄うございますので、念のため番号をお控えおきください」

と、助手に客席をまわらせ、札が借りられたら、

「ついでに、あなたのお手で封をしていただきましょう。その方が一番確かでございますから。……」

と、貸し主に封筒に入れて封をしてもらって舞台に持ち帰らせる。

そうして、助手から受け取った紙幣入りの封筒をためつすがめつ、しらべながら、

「お客さまご自身の手で封をしていただき、しかも番号もお控え願ってありますので、インチキの余地はぜんぜんございません」

と、一たん銀盆にのせ、

「お札はこの通り、確かに入っております」

とすかしてみせるが、なおも見物に確認してもらうつもりで助手を招くと、助手はキャンドル・スタンドに大きなローソクをたてて出てくるので、そのローソクに火を点けて、封筒をかざす。――すると、中に紙幣の入っていることがよくわかるのはよいが、何しろ勢いよく炎があがるので、アッ！ という間にその紙幣入りの封筒は燃えてしまう。術者はあわてて、

「あっ！ 念には念を入れて――と思いましたのが仇となり、とんだ大失敗をやらかしてしまいました。まア、ご災難と思し召しておあきらめください」

と頭を下げる。――しかし、千円紙幣の貸し主はそうあっさりと引きさがるはずはない。弁償（べんしょう）してもらわぬと困るとねばるに違いないから、

「いや、何と申しましてもこれは私の責任、では元の姿をとりもどしてお返しすることにいたします」

と、ローソクを抜いて、細い火ばしでお尻の方から突きあげると、炎の中からキリリと巻かれた千円紙幣が現われるので、急いで火を吹き消し、ていねいにひろげると、まさに先刻焼いてしまったはずの紙幣である。

「どうもお騒がせいたしました。お控えの番号と合っておりましたら、ご安心の上お引きとりくださいませ」

と返す。見物はまったくキツネにつままれたような表

情で拍手を送るからゆかい。

《ひみつ》

「ニセさつとスリ替えるのではないかとお疑いがかかってはおなぐさみがうすうございます……」などと言いながら、実は助手が舞台に立ち戻る途中で、まったく同じ封筒に千円紙幣大に切った新聞紙を入れた代替品とスリ替えるのである。そうして、術者がその代替の封筒をひねくりまわして見物に確認を求めているうちに、幕内で大急ぎで本物の千円紙幣を細く巻き、ローソクのシンに押し込んでキャンドルスタンドに立てて持ち出すのだ。

あとは前記の通りの運びとなるのだが、この日本ローソクはだんだん入手が困難になってきているので、リンゴやみかんの中から取り出す方法が多く行なわれている。その場合は、いささか不自然になるが、マッチなり、ライターなりで封筒の中をすかしてみせるといって火を移すようにする。

リンゴや柿は、ヘタの方をナイフできれいに切りとってシンをえぐり、その中にお札を小さく折りたたんで入れ、元通りにヘタをしっくり密着させておけばわからない。

●……溶ける銀貨

《演　技》

透明なカップを持ち出し、

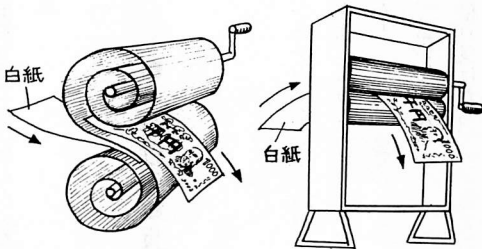
「おそれ入りますが、どなたか五十円玉をひとつお貸しくださいませんか。百円玉でもよろしうございますが、もしニセ金を返されたら大へん！　とお思いでしたら、念のため鋳造の年号をおぼえておいてください」

と、お立ち合いから銀貨を借り受けたら、ハンカチのうらとおもてをよくあらため（このハンカチも借りると一そう効果は上がるはず）、これで銀貨をつまんでカップの上にかぶせ、カップがかくれるように四すみを垂らして、つまんでいる指を放すと、銀貨はチャリーン！　とカップの中に落ちるから、同時にパッ！　とハンカチをとって振ってみせる。そうして、カップをとりあげて

みると、——ふしぎ！　銀貨は影も形もない。
「アレ！　たしかにチャリーンと落ち込んだ銀貨が、いつの間にか溶けてしまいました。貸したが因果とおあきらめいただくほかはございませんね。——え？そんなのないとおっしゃるんですか。では私も魔術師、何とかいたしましょう」
と、傍のリンゴをとりあげ、これもよくしらべてナイフで真二つに切る。——と、ナンと、先刻の銀貨がその中から出現するのである。

《ひみつ》
実は腕時計のガラスを一枚テーブルの上に置いとくのである。見物から借りた銀貨をよくしらべてハンカチをかけ、つまみあげるのはこの時計のガラスなので、カップの中には二〜三滴の水をおとしておく。するとチャリーンと落ち込んだとたんにカップに吸いつくから、さかさまにしても落ちないのである。
さて、ナイフの裏にはバターをひとつまみ塗りつけておき、ここを銀貨の上にのせると銀貨は密着するから、そこにひとさし指をあてて、リンゴを切ると、いかにもリンゴの中から銀貨が出現したように見える。——というわけだ。

●……紙幣印刷機

《演　技》
「かせぐに追いつく貧乏なし」とは古いコトワザですが、すべてがスピーディな現代では、どんなにかせいでもジャンジャン上がる物価高には追いつけず、啄木は〝働けど働けどわが暮らし楽にならざり、じっと手をみる〟と嘆きましたけれど、とてもじっと手を見ているひまなどあったもので

はありません。そこで、こんな機械があったなら……という、夢の発明がこれでございます。ごらんください。紙だって高くはなりましたが、まさかこの小紙片なら、モトはしれたものです。それがどうです。この通り!……

……」

などといいながら、白紙をかんたんなミニ・印刷機にかけてハンドルをまわすと、真新しい千円紙幣がぞくぞくと刷り上がるのである。

《ひみつ》

A・Bのロールに一枚の黒布を反対に巻きつけておくだけの、至ってかんたんなシカケ。そして、Ⓑの方にホンモノの千円札を五～六枚巻きつけて仕込んでおき、白紙をⒶに差し込んでハンドルを巻くと、さきに仕込んであった紙幣がいかにも刷り出されるように反対側から出てくるのである。

この装置を大きくつくり、Ⓑの方に写真で拡大した百万円札とか、品袋屋か編みもの教室の看板に使われていそうな巨大なタビや手袋などを仕込んでおき、何でも即座に百倍になるスピードひきのばし機などと謳えば、いっそうユーモラスでゆかいな舞台奇術となる。

●……十円玉の空中飛行

《演　技》

一枚のハンカチと、五個の十円玉（百円玉でもよい）を持って登場。（ハンカチは、借りられたら借りた方がより効果的）例によってハンカチをあらためた上で四隅をつまみ、これをお立ち合いに預ける。（写真①～②）

①

②

そして、写真③のように十円玉を一枚ずつ数え、写真④〜⑤のように離れているお立ち合いのハンカチに通わせて、ハンカチの下に右手をのばし、突きあげると、チャラ、チャラ、……お金は確かにハンカチに通っている。

そこで、そのハンカチを受け取ってサカサマにすると、十円玉はパラ、パラ、パラ、パラとこぼれ落ちるのである。（写真⑥）

《ひみつ》

写真③のように、一枚ずつかんじょうをして、四枚まで左手に移し、「五枚！」と最後の一枚を移すとき、実はアベコベに左手の硬貨を右手に移して写真④のかたちになるのだ。――つまり、このとき五枚の硬貨は右手に握られているわけである。そこで、素早くこの右手を相手のハンカチの下に当てて鳴らすと、一般の観客にはいかにもハンカチの袋に入っているように思われるから、ハンカチを返しながらお金をパラ、パラと床に落と

せばよいのである。――この硬貨の空中飛行をよく練習さえすれば、だれにも容易にできる小品奇術だ。〔演ずるは宮村・篠原両氏〕

●……投げ銭の妙技

《演　技》

「ご存知銭形平次親分は投げ銭の名人であの人気をとりましたが、ボクも親分にあやかりたく精進をつづけた甲斐がありまして、近ごろでは平次親分にも劣らぬ腕前となりました。

今晩はどうあってもかくし芸を出せと幹事の厳命、能あるタカがかくしていたツメを、とうとう出さねばならぬハメとは相成ったので、ひとつお目にかけようというわけでございます。エヘン！」

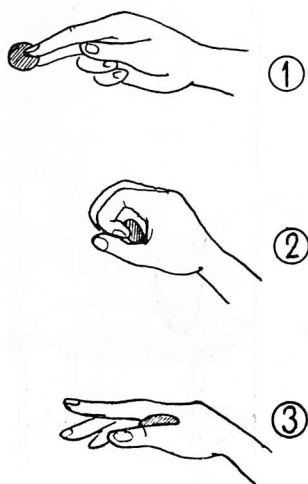
てな口上をのべながら、一個の深い湯飲みを借りて内外をよくあらため、遙かに離れたテーブルの上に安置する。

そして、お立ち合いに、

「恐れ入りますが、お持ち合わせの十円玉を五、六枚拝借させていただきます」

と借りた十円玉を左手ににぎり、右手で一枚ずつつまんで、

「エイッ！」

と、鋭い気合いをかけながら、遙か彼方の湯飲みをねらって投げると、ゼニはチャリーン、チャリーンと音も高く湯呑みの中に飛び込む。――それがまさに百発百中だから、見物一同、思わず拍手を送って、

「お見事！」

と讃めそやすことはいうまでもない。

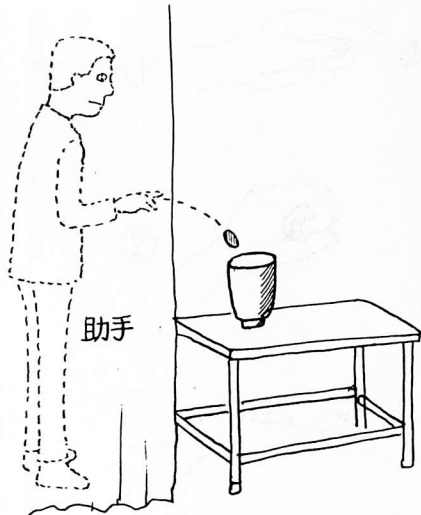
借り受けた十円玉を全部投入してしまったら、ツカツカと壇上に進んで、湯飲みからそのゼニをザラザラと手にあけ、

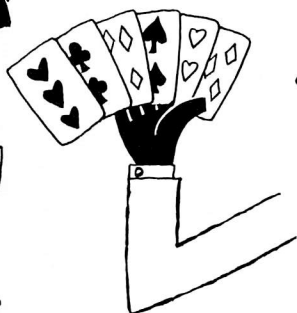
「ありがとうございました」

と、返してまわって演技を終わる。

《ひみつ》

実は投げ込んだと見せ、図①〜③のように、十円玉は右手のひとさし指と中指でつまみ、素早くおや指のつけ根にはさむ、——という動作をくり返すのである。

そして、湯飲みを置くテーブルの背景の黒幕か、あるいはフスマの陰に助手が控えていて、「エイッ！」とかけ声のかかる度に、もう一個の湯飲みに高いところからチャリーン！　と替え玉のゼニを落すのである。五十円玉のようなアナあき銭に糸をつけておいて、落しては引きあげるようにすると、まちがいなく湯飲みに入るから安心である。

借りた十円玉は、一枚ずつ右手でつまむように見せながら、見物の視線がそちらにいっているスキをうかがってポケットに通わせておき、湯飲みをとりに行く途中でひそかに取り出し、湯飲みからあけたように見せればよい。（本当にあやつる十円玉は一個で足りるのだから）

カード・マジック

千変万化の夢幻の世界

カード・マジック

〃トランプ〃(Trump) とは、本来「切り札」のことなので、プレイング・カード (Playing Card) を総称してトランプとよぶのは、世界中で日本だけであるが、しかし、この呼び名のナンとエキゾチックな魅力に富んでいることとか!

奇術のポスターやプログラムにも、必ずといっていいくらい、このカードが描かれているし、燕尾服やスパンコールのドレス姿のマジシャンが、このカードを手にしてさっそうと舞台にあらわれると、ただそれだけでもうカードの不思議な魅力のとりこになってしまう。——まったくカードと奇術は切っても切れない深い間柄といってよかろう。

言葉が通じなくとも、見ればおもしろいのが奇術である。カードものは言わないが、この五十二枚のカードがくりひろげる、千変万化の夢幻の世界は、ときに大道具、大ジカケの大魔術よりも、ファンの心をしっかりつかんでしまうことも少なくない。

第一、現代人ならだれしものポケットにも一組のカードは用意されているはずだから、いつ、どこででも手にしてけいこもできるし、そうして会得したトリックを、ひと手、ふた手披露するならば、あなたはたちまち人気者となること、うけ合いである。

トランプは、ゲームよりも占いのためにつくられたカードであるという人もあるが、私はマジックのためにつくられたチャーミング・カードであると主張したいくらいだ。したがって、カード・マジックだけでゆうに立派な全集になるほどのあの手、この手があるのに、スペースの関係で、だれでも読んで覚えられる初歩向きのものだけをご紹介するに止めるほかなかったのは、残念だが仕方のないことである。

カードの基本技法

カードの魅力は、まず手ぎわのよいシャッフルから始まるといってよろしかろう。

シャッフルとは、切り交ぜること、――ゲームでも、占いでも、まずカードをよく切ることが第一だが、奇術の場合には、いささか趣を異にして、ウソ切り、ウソカットを必要とすることが少なくないから、まずこの技法から心得ておく必要がある。

つまり、見物にはいかにもよく切れているように見せながら、その実カードの順を狂わさない方法や、カットしたと見せて、もとのままにしておく方法など、いろいろあるが、いずれもまず手さばきをきれいに見せることが観客を酔わせる必須条件であるから、少なくとも一日に一回はこれを手にしてもてあそぶことを習慣とするくらいの熱心さが欲しいものである。

このごろ、アマチュアでもプロはだしの達者な演技を見せる人が多くなったが、こういう人々はみな、夜床に入ってもカードを放さず、いろいろと技法をくふうしながら眠りに入るという凝り方で、カードを手にしない日がいく日もつづくと、目に見えて手のナマることがハッキリとわかると言っている。

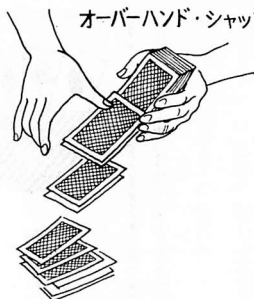
美しい切り方

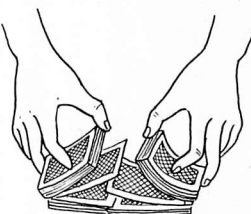
シャッフル（切りまぜ）は、普通日本のカルタや花札を切るように〝おくり切り〟にしてもいっこう差し支えはない。

しかし、一組のカードを片手に持って、一方の手のおや指で一～二枚ずつ移していく〝片落ち切り〟（オーバーハンド・シャッフル）や、一組のカードをほぼ二分して両手に持ち、ひとさし指と中指でテーブルに角ちがいに押しつけ、おや指のハラで交互にパラパラとおとしていくか、あるいは両手を宙に浮かして、カードを橋のよ

うに反らせ、端を双方から交互に食い合わさせてきれいに交ぜる〝両落ち切り〟（リフル・シャッフル）という、カード独特の美しい切り方に、ぜひ熟練して欲しい。

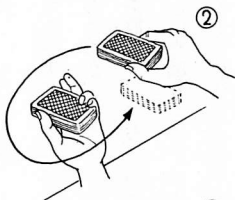
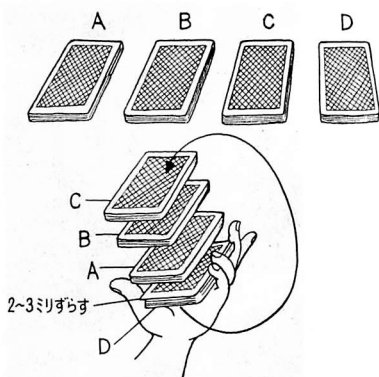
このように、「手をきれいに見せる」ことが、カード奇術の効果をどんなに高めるかは、いうだけヤボであろう。占いにしても、カードさばきのきれいな人により、信頼感をおぼえるのも人情というものだ。

オーバーハンド・シャッフル

ヒンズー・シャッフル

リフル・シャッフル

うそのカットとパス

二分法

一組のカードを、ほぼまん中から二分し、下の半分を右手でぬきとり、左手に残っている半分の上に大きく円を描いてテーブルの上におく。

つぎに、左手に持っていた分を右手に持ち替えてその上の上におくと、いかにも上半分と下半分が入れ替わっ

たように見えるが、その実元のままの姿になっているわけで、つまり、錯覚を利用したウソのカットなのである

四分法

よく切った一組のカードを、¼ぐらいずつに分けて、四つの山をつくる。

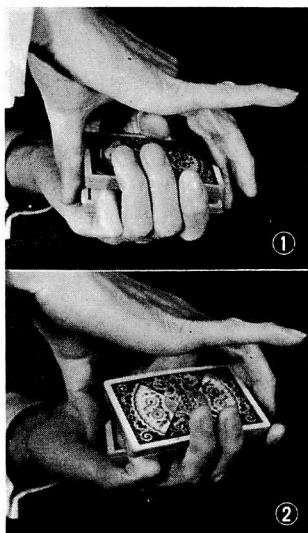
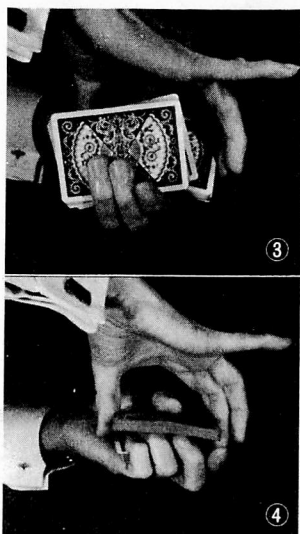
そして、まずDの山の上にAをもっていき、その上にBの山を、それから、Cの山をのせたら、カードを再び左手にとって、最後にDの山を下から引きぬいて左手の山の上にのせると、いかにもよくカットしたように見えるが、順序は少しも狂っていないのである。

ただ、この場合はDの山のトップ・カードを覚えておき、DへAをのせるとき、2~3ミリ、ずらしておくことを忘れてはいけない。——

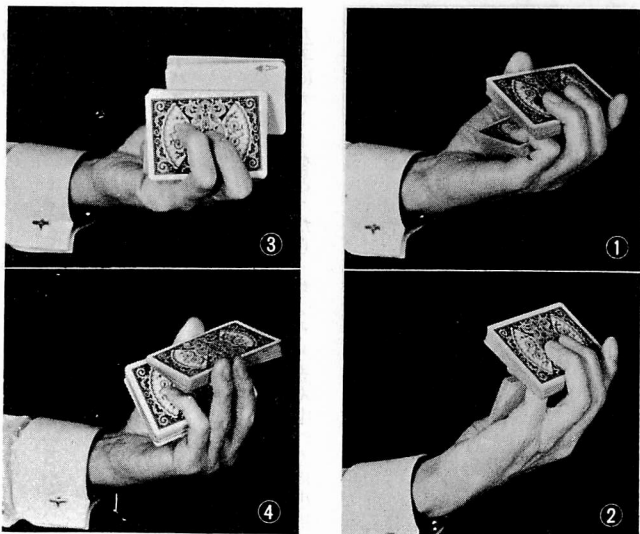
この方法でウソのカットをやると、カードの順が狂わないばかりでなく、トップ・カードがわかっているから、アテモノはいうまでもなく、いろいろなトリックに応用しておもしろい効果をあげることができる。

両手パス

また、これと反対に、二分した一組の上・下を入れ替えるのを、変化するという意味で〝パス〟という。

左手にカードをとったら、ちょうどまん中へんに小指

の第一関節よりやや深目にさしこみ、右手の中指とおや指で下半分のカードを支えると同時に、左手の中指とひとさし指をカードの上半分にかける。そして、この二指と、さっき突っ込んだ小指で上半分のカードをはさみ、指を一ぱいに伸ばす一方、下半分のカードを右のおや指と中指で左のおや指のつけ根に押しつけ、上半分をこの下にすべり込ませると、上・下は極めてスムーズに入れ替わるのである。（写真①〜④）

片手パス

以上をマスターしたら、こんどは片手でやるパスを練習しよう。

前と同様、左手にのせたカードの手前におや指を当

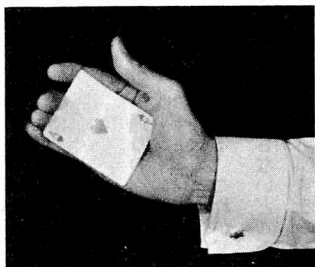
て、反対側に中指とくすり指を当てて、おや指のハラで中央部からパックを二分し、上半分を押しあげる。

その間に小指を差し込み、この小指を起こして、くすり指と中指とで上半分をはさんで立て、すぐにまた倒して下半分の下にすべり込ませるのである。

このとき、おや指でささえた下半分を小指のハラにすべらせるようにして上にもっていけばよい。実際にやってみると、案外容易にのみこめる技法だ。(写真①〜④)

パーム法

つぎに、ぜひ覚えておかなければならぬのはカード・パームの方法である。

何気なく手の中にカードをかくす技法で、写真のように、おや指のつけ根と、小指の第一関節で、カードの対角線をささえると、あとの指は楽に自然のかたちで動かせるから、観客にカードをパームしていることは気付かれない。

馴れないうちはとかく固くなって、手の動きがぎごちなくなるので、「実はここにカードをかくしているんです」と白状するかたちにもなりかねないが、熟練すると、三〜四枚のカードは楽にパームできるようになるものだ。こうなると、まったく想像も及ばぬおもしろいトリックが、自由自在に駆使できるから、ゆかいこの上もない。

ポイントを両すみの対角線におくことは第一の要点だが、同時に客席に向ける手の角度に細かな注意が必要である。

あるときはカードを軽くささえて四指をしなやかに伸ばし、あるときは中指やくすり指をグッとわん曲させて、ひとさし指で何かを指さすようなしぐさに馴れると、カードをパームしていることを見やぶられる心配はない。よく、手が小さいから……と、おく病になる人があるが、角度に気をつけると、案外見物の視線をそらすことができるものだし、はばのせまいブリッジ・サイズ

なら、どんな小さい手でも、まずたいていはだいじょうぶである。

カードの強制法

〃強制法〃というのは、演者の思い通りのカードをお立ち合いに抜かせる技法のことで、カード・マジックにはぜひ知っておかねばならぬひみつである。これが、見物から強制だと気付かれたのでは効を成さないどころか逆効果を招来するから、これもよくよく熟練することが肝要である。

いま仮に、♥のQをお立ち合いに抜かれようという場合を考えてみよう。

何気なくカードを切っていって、その目的の♥Qをボトム（底）にまわし、一度カットしてパックの入れ替えを行なうとき、上半分のカードのトップ（一番上になっているカード）を、カードを持っている左手の小指でおさえ、その上に下半分のカード（底に♥Qがある）を前のめりに重ねると、見物にこのトリック的技法は少しも気付かれないから、素知らぬ顔でサラサラとカードをくり、お立ち合いの目の前に扇形にひろげる。

そして、お目あての♥Qを、おや指で心もち押し出すようにして突きつける、――というよりは取りいいように仕向けるのだ。そうすると、どれにしようか？――と迷っているお立ち合いは、そのひときわ広く開いて突き出ているカードを、誘われるようにひょい！と抜いてしまうものである。

しかし、万一それが不成功に終わっても、そのときはお立ち合いの抜いたカードをトップにおかせて、手早く見覚えの♥Qをその上に重ねる手もあるし、思わぬ個所に差し戻されたときも、例の小指を使ってそのカードをおさえ、開いたカードをまとめるときにインデックス（隅の見出し）を見てとることもできる。

あとは前にのべたウソのカットとパスでどのようにも処理することができようというわけだ。

とにかく、この一枚のキー・カードさえわがものにしておけば、失敗が失敗にならない。これも大切なコツのひとつである。

ついでながら、カードにインデックスのあることは、奇術をやる場合、特にありがたさを痛感するものだから、この活用法を心がけておくがよい。

たとえば、このようにしてお立ち合いが好みのカードを抜いてファンに開いたカードの中に、うまく演者の目に止まらぬように戻したつもりでも、カードをそろえるときにちょっと手かげんをしてそのカードの角度を変えると、ぴょこんとインデックスがとび出すから、わけもなく見てとることができるものである。これも実演してみると、「なるほど!」と合点がいくであろう。〔写真は「ライジングカード」参照〕

●……ファン・カード(Fan Card)

美しいと言えば、〃ファン・カード〃(扇形にひらくこと)のけんらんさに目をみはらぬ人はないので、若いカード愛好家の間には特にこのけいこに打ち込む人が多くなったが(口絵参照=演者はSSMC・篠原健二氏)、これをやるカードはぜひとも最高にすべりをよくするための加工が必要である。

変化をつけるために、裏模様のデザインもファン・カード用にくふうされた専用のカードがあり、これには特製のパウダーも添えられているが、上質の粉石鹸か、スキー用のパラフィンなどを少量塗布することによって、相当になめらかになるものである。

これにも、両手操作と片手操作があり、熟練すれば二組のカードを同時に使って千変万化の妙を展開、これだけでも人気を独占することができるが、最近ではマグネット加工も巧妙になったので、手法も一だんと複雑化し、ますます魅力を加えて来た。

しかし、読んで学びとることは特別に至難な、いわゆる〃高等技法〃に属するが、マグネット・カード以外には別にタネもシカケもあるわけではないから、一にも二にも飽かずに練習に努めていただくほかはない。

そして、アマチュアのための講習会は、どこのクラブでも繁々開催されているから、実際に学びとられるがよい。

●……ライジング・カード（強制法の活用）

《演　技》

カードをよくシャッフルして、ファン（扇形）に開き、

「どれでもお好みの一枚をお抜きになってください」

と、とらせたら、

「そのカードをよくお覚えになっておいていただきたいのです。——そう、そう、皆さまにもお見せして、証人になっていただきましょうね。……お覚えになりましたらお戻しください」

と、カードをもどしてもらって、またよく切り、ガラス張りのカード・ケースにおさめて、

「いまのカード、上がって来い！　アー

ブラ　カダ

ブラ　アー

ブラ　カダ

ブラ……」

呪文（じゅもん）を唱えて手をかざし、吸いあげるゼスチュアをよろしくやると、そのお立ち合いの抜いたカードは生命を与えられたように静々と上がってくるのですが。……（写真①～③）

②

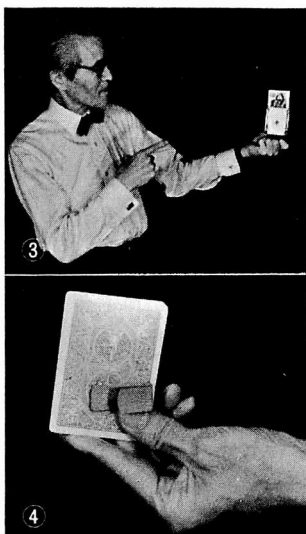
《ひみつ》

このカード・ケースに、実はちょいとしたひみつがあるのです。写真④のようなツメが装置してあるので呪文を唱えながら、一方の手で「上がれ！　上がれ！」のゼスチュアもたくみに、その方に観客の視線を集めておいて、実はケースを持った手のおや指で、このひみつのツメを押しあげる！——というシカケ。

しかし、どうしてお立ち合いに抜かせたカードがとび上がるのかというと、これはカード・マジックに欠くべからざる「強制法」を活用するからに外ならない。

すなわち、カードをサラサラと繰って、観客に、

「どうぞお好みの一枚をおぬきください」

とつきつけるときの呼吸が大切なのです。お立ち合いは、だれだって「どれにしようか？——」と迷っているので、そのとり易い位置に手ののびたとき、サッ！　ととらせたいカードを突き出すようにすると、必ずそれをとるのが心理、まず十回に一回の失敗もないといってよいくらいのものです。

これを戻してもらったら、ひそかにそのカードのお尻のところに左の小指をかけ、その上に右手に持ったカードを前のめりに重ねて送り切りをすると、見物には気付かれないが、この小指でおさえたカードは、いつでもボトム（底札）またはトップにすることができるから、切りながら盗視することも何でもない。

そこで、そのカードの背にツメを当ててケースにおさめ、これをおや指でよろしく操作すればよいのです。（ツメは写真でわかるように露出させたが、この上に他のカードを重ねると、裏を返してみせてもわからない）

《簡易ライジング・カード》

道具はなくとも、かんたんにライジング・カードを試みることができます。すなわち、同じ強制法でカードを

抜いてもらったら、残しておいたカードの山をよく切ってパラパラとひろげ、その中に差し込んでもらい、同じようにおまじないを施すと、お客さまに抜いてもらったカードはスーッと上がってくるから「おぬきになりましたカードはハートのセブン！　まちがいありませんね」

とやると、「おお、ワンダフル！」ということになるのですが。……

実は、カードの二枚にセロテープでゴムバンドを貼りつけたものを用意し、ひそかにこのネタカードを交ぜて切り、パラパラめくるとき、このシカケのあるカードのところで指を止めるようにすると、ひみつを知らぬお立ち合いはそこへカードを入れてくれるから、素早く術者がそれを押しこんで持ち、にぎりをゆるめると、ゴムの弾力でカードはとび上がる、……というわけ。

●……変幻カード

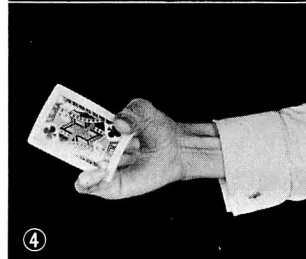
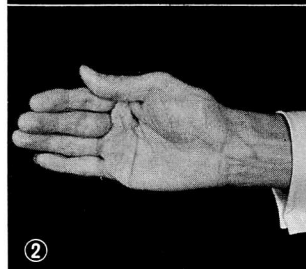
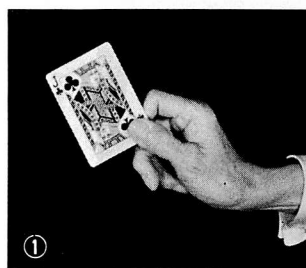
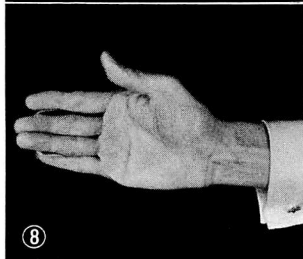
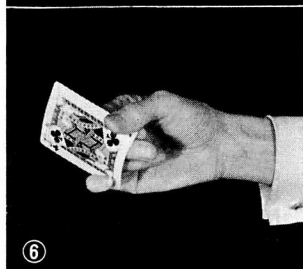
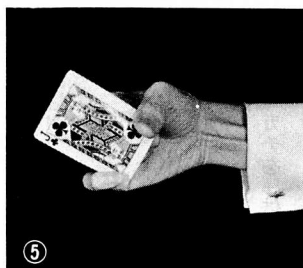
《演　技》

とりあげたカードが、「やっ！」というかけ声とともに空中に消失してまう。（写真①～②）――帽子やカラ箱などを使って、打ち込むという手もよく用いられるが、かんたんで、ちょっと練習すればだれにもあざやかにやってのけられる。きれいなカード奇術の入門課程のひとつである。

お立ち合いのえりやそでを借用してやるのもお愛きょう満点。

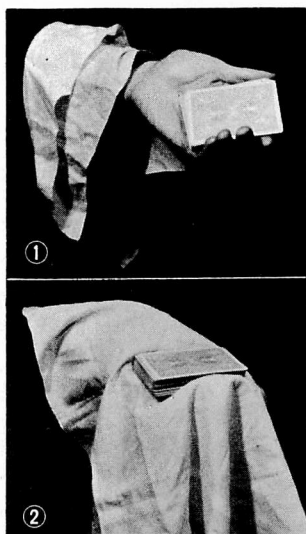
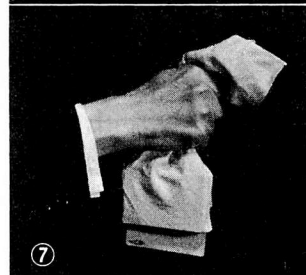
《ひみつ》

まずカードをおや指とひとさし指でつまむ(写真③)。つぎに四指を前に曲げてカードの一端を小指でとり、く

すり指との間にはさんだら、間髪を入れず五指をそらすと、カードは手の甲にかくれるから、手のひらを全開すると消失したように見えるわけだ。（写真④〜⑧）カードの出現は、これを逆にすればよい。指の屈伸(くっしん)の

練習が第一だが、鏡に向かって練習を重ね、完全に変幻自在と確信がついたら公開してよろしい。

●……とび出すカード

《演　技》

まずハンカチを拝借しましょう。――自分のを使ってもよいが、タネもシカケもないことを強調するためには借りものを使うのが効果的だ。拝借のハンカチを左の腕にかけてカードを切るのもカッコがいい。

さて、こうしてきれいにシャッフルしたカードは、ファン（扇形）にひらいて、お立ち合いに好みの一枚を抜かせ、お客さまにも覚えてもらった上で、ハンカチを左の手のひらにヒシ形にひろげてその上に載せてもらう。そして、右手を開いて一度見物の方に向け、その手を返してヒシ形

にひろげたハンカチの対角点をつかんで柏餅のようにカードを覆う。(写真①〜④)

つぎに、左右の角をとって、カードをすっかり包んでしまい(写真⑤〜⑥)、この四隅を握って、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えながらこれを振ると、摩訶不思議にもカードが一枚ハンカチを抜けて落下するが、これをひろって調べてもらうと、——ナンと、それは先刻お立ち合いが好みで抜いたカードである！(写真⑦)

《ひみつ》

お立ち合いに抜いてもらったカードはトップに載っている。一応見物に向かって開いてみせた右手で、このカードをひろげたハンカチのまん中に載せ直すとき、そのトップを素早くパームして、向かい側に垂れているハンカチのスミをとってくるのだ。そして、パームしたカードをその二つ折りにしたハンカチの上に置いて左右のスミをとり、写真⑦のようにきっちりと合わせてにぎるのである。——これを強く振れば、二つ折りにしたハンカチの上に載っているカードが飛び出すのは当然！——というわけ。

ってしまうのである。

つぎにお立ち合いからハンカチを拝借してうらと表をあらため、この十字にしばったカードにかけたら、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

例によってアラビアのじゅもんをとなえながら、この十字しばりにしたカードを一枚ぬきとって、うらと表をしらべ、ハンカチをとり、つぎにテープをかけた残りのカードをハダカにしてうら・表をあらためるが十字にはめたテープに異状はない。

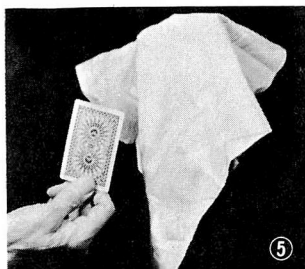
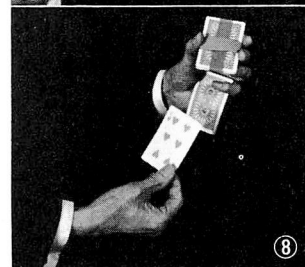
そこで、再びハンカチをかけ、またじゅもんを唱えな

●……カードの十字ぬけ

《演　技》

カードを五～六枚（何でもよいが、絵札を一～二枚加えておくとはなやかでよい）ファンに開いて裏と表を見せる。

そして、一枚ずつ数えてそろえたら、まずタテにテープ（赤色がよい）の輪をはめ、つぎにヨコに同じテープの輪をはめる。――つまりカードをテープで十字にしば

①
②
③

がらカードを一枚抜きとって同じことをくり返し、最後には残りのカードを見物に渡し、

「どうぞお調べください」

と、あらためてもらうが十字の帯はしっかりとはまったままである。（写真①～⑤）

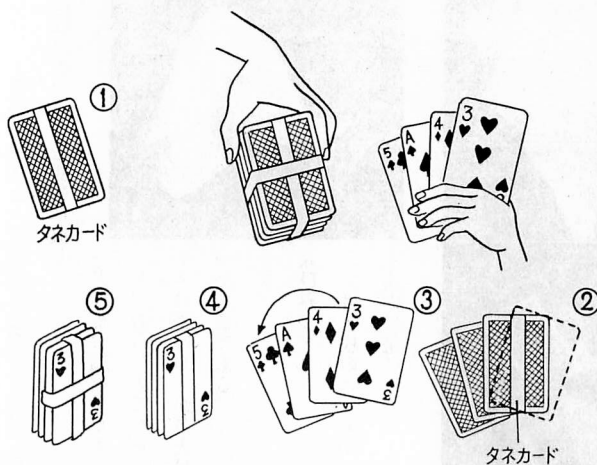
《ひみつ》

実は一枚のネタカードのまん中に帯にするテープと同じ赤いテープがタテに貼ってあるのだが、うらを見せるとき、これを最後から二枚目に入れておくと、ファンに開いて示しても見物にはわからない。（写真⑥～⑦）

そして、一枚ずつ数えるときそろえるとき、このネタカードを最後に置き替えて、タテの帯は表から二枚か三枚にかけるのである。つぎにヨコの帯は全部にかける。

――こうして、再びうらと表を返してみせると、いかにも全部が十字にしばられているように見える。

そこで、ハンカチをかけて、最後と二度目に引きぬくのは、もちろんタネ・シカケのないカードで、これをぬ

きとった上でうら・表を返して見せるから、三度目にネタカードを抜きとっても、これはうらを返して見せずとも見物は納得してくれる。(これは奇術家の心得ておらねばならぬ観客心理である)

——そこで、残りのカードは十字にしばられたままで見物の検査も無事にパスするというわけだ(写真⑧)。

●……たずねびと

《演　技》

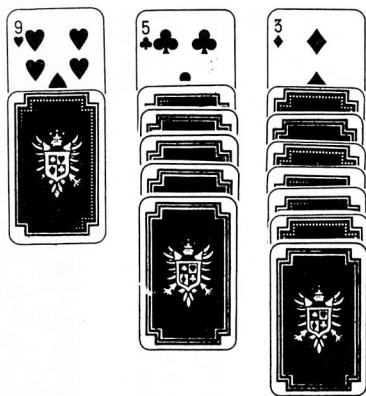
ジョーカーと絵札(K・Q・J)を除いた40枚のカードを軽く切りながら、

「私はこの中からハートのAを探し出したいのですが、何枚目にかくれているでしょうか?——」

と、カードをファンに開き、

「どうぞお客さまのお三方が一枚ずつお好みのカードをお選びになってくださいませんか。——おひとりで三枚おとりくだすってもけっこうです」

と、抜いてもらう。

そして、これを表向けてならべるのだが、いま仮りに3・5・9のカードがぬかれたとすると、3のカードに

は7枚、5のカードには5枚、9のカードには1枚と、三列がいずれも10になるように、うら向けたカードを重ねるのである。

この工作が済んだら、

「ご協力によって見当がつきました。ハートのAは17枚目にかくれているようです。おしらべになってみてください」

と、残りのカードの山をお立ち合いにめくらせると、

——何とも不思議なことに、まさに17枚目からハートのAが出現するから、みんなが「アリャ!」と目をみはるにちがいない。

《ひみつ》

カードをシャッフルする前に、うら向けて持つパイル（山）のトップから33枚目に探し出したいカード（この例では♥のA）をセットしておくことがひみつ。40枚の33枚目だから、たいていはだいじょうぶだが、これだけは抜かれず、また順序を狂わさず、必ずトップから33枚目にあるように切らねばならぬ。これが第一の条件だ。

さて、見物が抜き出した3枚のカードには、3の上には7枚、5の上には5枚、9の上には1枚、——というふうに、合わせて10になるようにカードをうら向けて重ねる。10が出たらハダカでおくのである。

こうして、インデックスに出ている見物の抜いてくれた数カードを合計する。——この例では3＋5＋9＝17である。そこで「17枚目にかくれているようです!」とやると、ピタリ的中! というわけだ。

●……小さくなるカード

《演　技》

まず両手の内外をあらため、テーブルから6～7枚のカード（トランプ）をつかんで一度数えてみせる。（写真①）

つぎに右手でこれを覆って、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

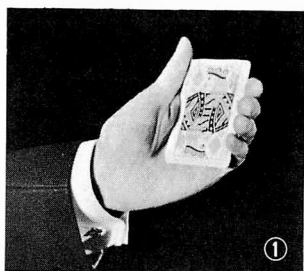
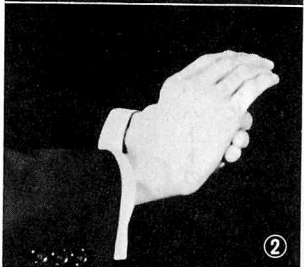
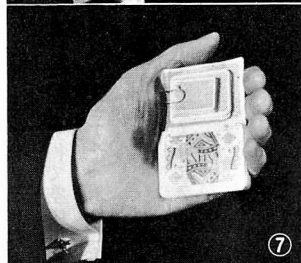
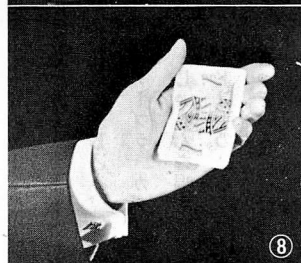
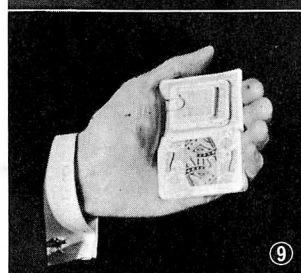
呪文(じゅもん)を唱えながらひとなでするると、カードはたちまちその半分ぐらいに縮小される。（写真②～③）

そこで、それにまた右手をかぶせて呪文を唱え、手をのけてみると、カードはまたその半分になっている。（写真④～⑥）

こんどはポケットから魔法の粉をつかみ出してパラパラとふりかける。――カードはさらに小さくなってしまう。

「まだまだ小さくなりまアす！……」

と同じゼスチュアをすると、もう見物の目には見えないほど小さくなってしまっているので、

①
②
③
④

「フッ！」

と空中に吹き飛ばして手を開けてみせると、もうカードは影も形もなくなってしまっている。……

《ひみつ》

最初つかむカードは6～7枚だが、一度数えてもう一度左手にとりあげるのは、写真⑦～⑭のように小さなカードのセットされたネタ・カードである。

呪文を唱えながら、右手でこれをなであげると、まん中から折れるから½大になる。つぎにまた呪文を唱えながら、今度はその½になったカードの背にセットされてある小カードを左のひとさし指とおや指でファンに開き、見物の目がそこに集中しているすきに½にたたんだカードを右手にパームして来てポケットにおさめるが、ただポケットに入れたのでは怪しまれるから、「魔法の粉をこうかける……」というゼスチュアを用いるのだ。

つぎには同じしぐさをくり返しながらネタを右手にパー

ムしてきてポケットにおさめ、「もう見物衆の目には見えないほどに小さくなりました」という見得で空中に飛散させたように見せるのである。ユーモアたっぷりに演出すると、愛きょうのあるお座敷手品としてりっぱなものとなる。タネはどこのデパートでも安く手に入る、手軽なものである。

●……吸いつくカード

一組のカードを手にしてよく切り、表を向けて左手にとったら、カードを一枚ずつとって底辺に写真のように花形に差し込み、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えて、ささえていた一本指を放すと、カードは手のひらに吸いついたまま、いつまでも空中に止まっている。

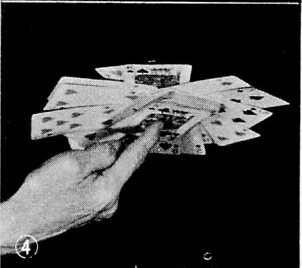
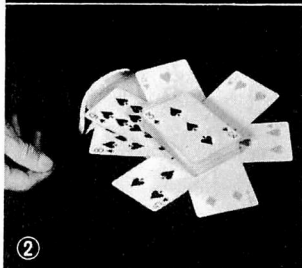
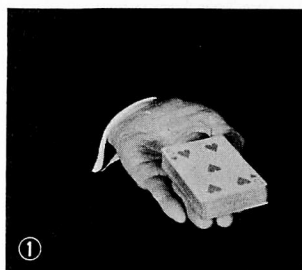
しかし、「えいっ！」――鋭い気合をかけて、手をひとふりすると、カードはパラパラと飛散するが、タネはどこにも発見されない。（写真①〜⑥）

《演　技》

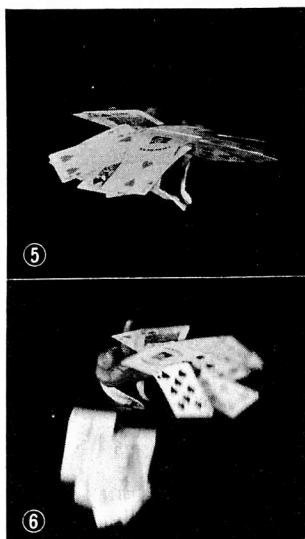
①

②

③

④

《ひみつ》
実は一枚のカードの裏にセロテープを凸形に貼りつけて、ひとさし指と中指にはさんでおくだけのかんたんなトリック、タネも一しょに振り落せば、ぜったいに気付かれない。
〔田島義秀氏所演〕

●……カードのリモコン

《演　技》
10枚のカードを持ち出し、うら向けのままよく切って相手に渡し、おもむろに眼をつぶって、
「この中からあなたのお好きなカードを心に思ってください。それが何のカードで、上から何枚目にあるかをよくおぼえていてくださいね。——皆さまにもお目にかけて証人になっていただきたいものです。お覚えになりましたら、また元通りにしてください」
と、そのカードを戻してもらって、さらさらとファン（扇形）にひらいて調べ、
「あなたのお思いになったカードは、私の霊感でもうわかりましたが、私が答えたのではおもしろくありませんので、そのカードをあなたのお手に残すことにいたしましょう」
と相手にカードを返し、
「では、まずあなたのお思いになったカードまでの枚数をトップから一枚ずつボトムにまわしてください。それがすんだら、またトップのカードをボトムにまわしてください。そして、つぎはテーブルに、つぎはボトムへ、つぎはテーブルに……」

C

Bのトップから6枚をボトムにまわしたときの順序

B

カッテングして5枚ずつ上下を入れ替えたときの順序

A

最初の山（このトップから6番目は♡のK）

とくり返すと、最後に一枚が手に残るから、

「それ、それがあなたのお思いになったカードです！まちがいありませんね」

とやる。もちろんピタリ的中で、何度やっても当たるからだれでもその霊感（？）に敬服するのだが。……

《ひみつ》

「お覚えになりましたら、元通りにして、――」と一度戻してもらって、しらべたカードを再び相手に返すとき、素知らぬ顔で五枚ずつカードをカッティングして上・下を入れ替えるだけで、至極簡単にこの魔術はできるのである。

たとえば、最初Ⓐ図のようになった十枚のカードを心に思ったとする。これを順序を狂わさぬように重ね持って、カッテングし、五枚ずつ上下を入れ替えると、図Ⓑのようになるから、これをさらに「トップからお思いになったカードまでの枚数をボトムに順序通りまわしてください」といって、その通り操作してもらうと、図Ⓒのようになるわ

け。今度はこれのトップ（♠の10）をボトムに、つぎ（♥のK）はテーブルに、つぎ（♣の3）はボトムに、つぎ（♥の9）はテーブルに……とくり返していくと、結局最後に相手の手に残る一枚は♥K、――すなわち相手の思ったカードとなるのである。循環の理を応用したトリックだが、初めから終わりまで相手に操作させるところがミソで、いかにも神秘めいた感を与えるからおもしろい。

●……愛の牽引力

《演　技》

「ここに、ダイヤ氏、クラブ氏、ハート氏、スペード氏という、有名な愛妻家がおりました」

と、♦♣♥♠のKを示し、あとのカードを裏向けて持ち、

「この四組のおしどり夫婦が、ある日さるホテルのパーティーに招待されましたが、奥さま方は途中美容院にまわって、おめかしをなすった上でいくというので、お早々とお出かけになってしまいましたから、旦那さま方ばかりが同じ車で定刻にホテルにいらっしゃいました。

さて、会場に着いてみますと、招待状のナンバーによって、入り口もそれぞれ異なっておりましたから、まずダイヤ氏は南のお車寄せから、……」

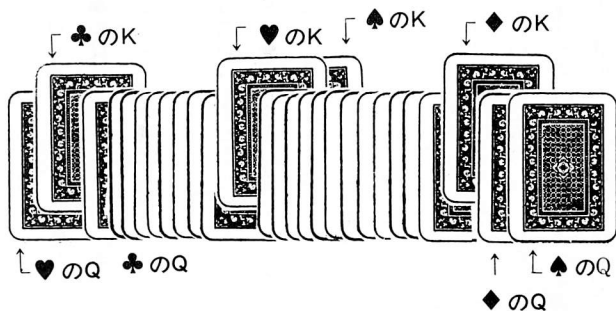
と、♦Kをパックの上の方に突っ込み、

「クラブ氏は北口から……」

と、♣Kを下に入れ

「ハート氏とスペード氏は正面玄関からの入場でしたが、――」

♣のK　♥のK　♠のK　♦のK

♥のQ　♣のQ　♦のQ　♠のQ

と、♥Kと♠Kを一しょに、まん中ごろに差し込み、

「しかし、何分にも大変な盛会で、ご夫人方を捜すのがひと通りの苦労ではございませんでした。会場はまことに紅紫とりどり、……」

と、ここでカードを何回かよく切りまぜ、

「それに、奥さま方は美容院で念入りにおめかしをしていらっしゃることとて、わが妻ながらなかなかに見出しかねるというしだいでしたが、さすがは自他共にゆるすおしどり夫婦、間もなく睦しく手をとり合って現われたのは、友人一同も感嘆のためいきをもらすばかりだったということでございます！」

と、カードをさらさらとファン（扇形）にひらいてみせると、――なるほど◆のKは◆のQと、♣のKは♣のQと、♥のKは♥のQと、♠のKは♠のQと……四組のKとQは見事におそろいになっていらっしゃいました。

これには、そのパーティーのお客さま方一同も、思わず感嘆の拍手を送らずにはおられなかったとのことでございます。――と、お立ち合いを煙に巻くのだが。…

《ひみつ》

まず、ひそかに四枚のQを選び出しておく。そして、カードの山のトップに♠のQ、二枚目に◆のQ、ボトム（底）に♥のQ、ボトムのすぐ上に♣のQをセットしておくのだ。

だから、「ダイヤ氏は南のは車寄せから、――」といって、トップから三枚目に◆のKを差し込むと、ここに早くも◆のカップルができている！――というしだい。

つぎに、「クラブ氏は北口から、――と、♣のKをボトムから二枚目に差し込むと、ここにも♣のカップルができるわけ。そして、「ハート氏とスペード氏は正面玄関から入場しましたが、――」と、まん中辺に突っ込んだら、その下にひそかに左の小指を入れて、いま突っ込んだ♥のKと♠のKが上半分のカードのボトムになるようにカッティングして上半分のトップ（♠のQが載っている）に重ね、この二枚を残して下半分を抜き、その上に重ねると、このボトムには♥のQがあるはずだから、そのまま表向けてカードをひらくと、四組のおしどり夫

婦が見事におそろいになっていることになるわけだ。

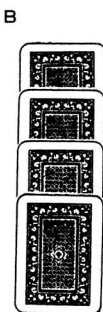
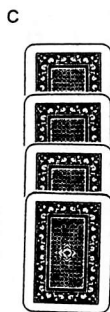
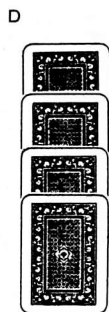
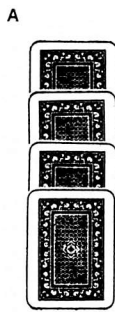
しかし、このような一篇の物語りを、ゼスチュアたっぷりに語りながらカードのカッティングをくり返していくと、いかにもメチャクチャに切り交ぜるように見えるので、お客さま方はただもう摩訶不思議な妖術（ようじゅつ）に魅せられてしまうのである。これもまた「言葉の魔術」のひとつといってよろしいであろう。

●……四国会談

《演　技》

「ダイヤ、クラブ、ハート、スペードの四ヵ国では、今年も平和会議をもつことになり、ここに四人の王さま方がお集まりになりました」

と、◆♣♥♠のKを選び出して見物に手渡す。そして、

「おしらべいただけましたら、この上におのせになってください」

と、カードの山をさし出して、その上に伏せて載せてもらう。つぎに、

「さて、王さま方は、せっかくこうしてはるばるとやっ

て来たことであるから、この国の民情視察をしようではないかと、ご相談が一決いたしました。では、どなたか最初のおひと方のお手を引いてあげてください」

と、トップを一枚とらせ、Kのカードにまちがいないことを確認させた上でテーブルに伏せてもらい、

「このようにおならびになりましたが、――」

と、あとの三枚は術者がならべ、

「王さまともなりますと、とかくきゅうくつなもので、お四方にはそれぞれ三人ずつの侍従がお側はなれずついているものですから、……」

と、それぞれに三枚ずつのカードを山から取って載せ

「王さま方は何とかしてこのうるさい侍従を巻いてしまおうと知恵を絞り、とうとうあるところに王さま方だけがひそかにお集まりになったというのですが、さて、その王さま方ばかりがお忍びでお集まりになっておられるのはどのグループでしょうか？――」

と、四枚ずつ重ね、

「さア、どれでございましょう？――皆さまの鋭い推理眼でピタリと当てていただきたいのですが、……」

と座を見まわすと、見物衆は、

「Aの山！」とか、

「Bグループ！」

とか、思い思いに声をかけるから、それがもし「A」だったら、

「おお、まさにここにお集まりになっていらっしゃいました、お見事です！」

とやり、B・C・Dだったら、

「おやおや、ここには侍従同士が集まって、アブラを売っていましたよ！」

と、鼻をあかし、最後にAの山をオープンする。

《ひみつ》

実は、はじめに四枚のKを見物に渡して調べてもらっているスキに、ひそかにネタのカード（何でもよい）を三枚、右手にパームしておく。そして、何食わぬ顔でカードの山に四枚のKをのせてもらい、物語りを進めていって、

「どなたか最初のおひと方のお手を引いてあげてください」

と一枚とらせて、その表を返して確めているスキに、パームしていた三枚のネタカードを山に載せるのだ。

だから、「このようにおならびになりましたが……」

とならべる三枚のカードは、実はこのタネのカードなのである。そして、

「お四方には、それぞれ三人ずつの侍従が、……」

と、山から三枚ずつとって載せていく、その最初の「A」の山はKだけが重なるわけで、他の三つの山は、どれをオープンしてみても、侍従になぞらえた他のカードばかり、――ということになるのだが、これはおもしろおかしい物語りで生きる奇術だから、「語り」のくふうにひと苦労もふた苦労も重ねていただきたい。

●……仲よし四人旅

《演　技》

「あるところに、同じAというイニシアルのつく仲よし四人組がありました」

と、一組のカードから四枚のAを選び出して相手に見せ、この四枚をそろえて、さりげなくカードの山に載せる。（図Ⓐ）

「この四人組が、あるとき一しょに旅行することになりましたが、この日は好天気に恵まれた土曜日だったものですから、どこも大へんな車の洪水で、四人が四人とも駅にかけつけたときは発車時間ギリギリ、ちょっとでもまごまごしていようものなら乗り遅れてしまわなければなりませんので、四人はバラバラに列車に乗り込むのがせい一ぱいでした。……」

と、図Ⓑのように、うら向けて持ったカードの、一枚は前部に、一枚はまん中ごろに、一枚は後部に差し込み、最後の一枚はヒラヒラ返してみせて、Aのカードにまちがいないことを示しながら、山のトップから四枚目に差し込む。そして、

「どうやらやっと乗り込むことはできましたが、列車の

A

B

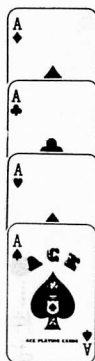
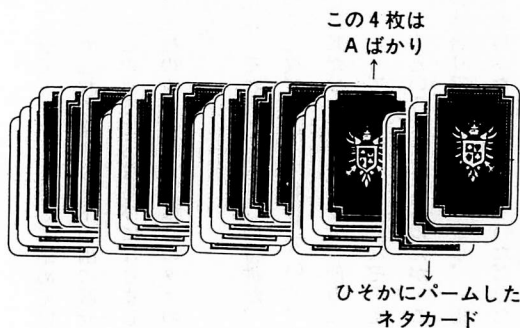
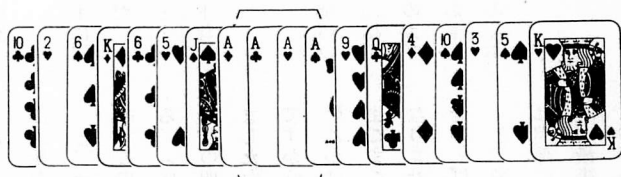
この４枚は
Aばかり

ひそかにパームした
ネタカード

C

仲よし
四人組

中もまたものすごい込みようで、だれがどこにいるのかさっぱり見当もつきません。しかし、この仲よし四人組は、何とかして早く一しょになりたいものと、超満員列車のすし詰めの人波をおし分け、かき分け、――」

と、カードをめちゃくちゃに切って、さらにカットして上・下を入れ替え、

「汗ダクダクになって探し合いましたが、さて、うまく顔を合わせることが叶いましたでしょうか?……」

と、カードの山を表向けてサラサラとひろげてみると、ナンと四枚のAはまん中ごろにちゃァんと集合しているではないか!

「いや、さすがに仲よし四人組、おみごとというのほかはありませんね!」

とやる。——見物衆は、思わず拍手を浴びせること請け合いである。

《ひみつ》

実は、カードをくりながら四枚のAを探し出すとき、別に他のカード（何でもよい）を三枚、最後のAに重ねて持つのである。つまり七枚を手にするわけだ。

これを素知らぬ顔でそろえて山に載せるのだから、トップから三枚まではAでないカードなのである。（最後にヒラヒラ見せるのだけがA）ところで、これを、

「発車ギリギリにかけつけたので、まごまごしていると乗り遅れてしまいます。四人は散り散りバラバラに…」

といいながら、方々へ差し込むわけだから、山には依然としてトップから三枚までAがそろって載っているわけだ。そこで最後にトップから四枚目に差し込むと、ここですでに四枚のAはそろっているのである。

そこで、この四枚のAが離れぬように手かげんをしながら何回か切り、最後に一度カットして上下を入れ替えると、ちょうどまん中にAのグループが入るわけ。——しかし、見物の眼には、いかにもうまくAが集合できたように見える……というしだいだ。

これも、発車まぎわにかけつけて、超満員の列車に散り散りバラバラに乗り込むという話を、ゼスチュア巧みに進めながら演ずると、いかにも友情の奇蹟が実現したように思わせるからゆかいである。

●……霊　感　力

《演　技》

「ここに一組のカードがございます。これをお客さまにお預けして、私は厳重に目かくしをしていただきますから、カードを私のいう通りに動かしてみてください」

と、演者は見物に手ぬぐいを渡し、ぞんぶんに強く目をしばってもらう。そして、

「カードは、52枚全部お使いになりましてもけっこうですし、あるいは45枚とか、36枚とかをお使いになりましてもよろしうございますが、とにかく等分して三つの山

をつくっていただきたいのでございます。もちろん、何枚お使いになろうと、私にそれをおっしゃってくださる必要はございません。

さて、三つの山ができましたでしょうか?——残ったカードは別のところへお置きになってください。

では、まず右と左の山から3枚ずつとって、まん中の山に重ねてください。それがすみましたら、右の山に何枚残っているかを数えてください。そして、まん中の山からそれと同じ数のカードを左の山に移してください。つぎに左の山から5枚とって右の山にのせてください。

——ところで、まん中の山にカードが何枚残っているでしょうか?——それを私は霊感で当ててごらんに入れようというのです。アーブラ　カダブラ、アーブラ　カダブラ、……わかりました。9枚です!」

とやるのですが、これが百発百中なので、だれもがビックリする。何しろ、術者は目かくしをしてもらって、カードはお立ち合いが動かすのですから。……

《ひみつ》

巧妙な言葉の魔術です。たとえば30枚のカードを使ったとしましょう。右と左の山から3枚ずつとって、まん中の山に重ねると、まん中は16枚になり、右の山は7枚となるはず。そこで、まん中の16枚から7枚を左に移せば、まん中の山には9枚残るのが当たり前なのですが、このままではトリックを見破られるおそれがあるので、「左の山から5枚とって右の山にのせてください」とやるわけ、したがって、3枚でも4枚でもよろしい。まん中の山には関係ないのですから。……

●……あなたの好きな女王さま

《演　技》

「ここに、ダイヤ、クラブ、ハート、スペードの女王さま、おん四方にお出ましをねがいました」

と、この四枚のカードをみせ、

「あなたはどの女王さまにあこがれをお持ちでいらっしゃいますか?——一番お好きなクインを一心にお思いに

なってください」
　と、数回これを切ってポケットにしまいこむ。そして、
「さア、そのあこがれのクインにあなたの思いを送ってください。――おもう念力巌をも通すで、その思いはきっと通ずるはずでございますから。……」
　と、せいぜいおごそかに、神秘的なゼスチュアをこらす。そうして、
「これはあなたがお思いにならないお三方です」
　と、三枚のカードを取り出して、手早くカードの山に交ぜてしまう。
「さて、私のポケットには、あなたが一心に思いをお送りになっている王女さまお一方が残っていらっしゃるはずです。――それはどなたでしょう？」
　と問いかける。すると、お立ち合いは
「ハートのクインです！」

というぐあいに答えるから、おもむろにポケットを探って、
「ハイ、まさしくハートのクインがあなたにお会いするのをお待ちかねでございました。まことに念力というものは恐いものでございますナ！」
　と、そのカードを取り出すのである。

《ひみつ》

　実は前もってひそかに三枚のカードをポケットに秘めておく（何でもよい）。そして、「これはあなたがお思いにならなかったお三方です」と取り出す三枚は、すなわちこのネタカードなのである。だから、もちろん表を向けることは禁物、うらを向けたまま手早くカードの山に交ぜてしまうのだ。
　そこで、――ポケットには依然として四枚のクインのカードが忍ばせてあるわけだから、ハートと言われようがダイヤと指名されようが少しもあわてることはない。
「ハイ、まさしく……」
　と取り出せばよいのだが、目のない指でポケットから

さぐり出すことだから、順序を間違えたらおしまいである。そこで、よく切り交ぜるように見せながら、実は「ハ(♥)ク(♣)ダ(◆)ス(♠)」というように(またはダ・ク・ハ・スでも何でも、覚え易い暗号を自分できめればよい)順序をそろえて入れておくのである。「ハ・ク・ダ・ス」なら「白蛇巣」というふうに覚えると迷わずにすむ。なおポケットは二重にしておくと、ネタカードとまちがえるようなこともない。

●……寝返りをうつカード

《演　技》

一組のカードをよくシャッフルし、うら向けてファン(扇形)にひらき、お立ち合いに好みのカードを一枚抜いてもらう。

「何のカードをお抜きくださいましたのやら、私にはさっぱりわかりませんが、皆さまにお見せして確かめておいてください。私はぜったいにのぞくことのできないように、失礼ながら後ろ向きになってそのカードをお戻しいただきますが、その前に、私も一番好きなカードを一枚選ばせていただきます。——それは♥のクインでございます。……ではどうぞ、——おとりになったときと同様、うら向けて山に差し込んでください、どこへでもご自由に。——」

と、後ろ向いて伏せたカードの山に差し込んでもらう。そうして、そのカードの山をテーブルに置いて、

「この中には、いまお客さまに抜きとっていただいたXのカードと、私がひそかに思ったハートのクインが入っておることはご承知の通りでございます。では、この二枚に号令をかけて、寝返りを打ってもらうことにしたいと思います。——お抜きくださいましたカードは何でございましたか?」

とたずねる。たとえばそれが♣のAだったとする。

「アーブラ　カダブラ、アーブラ　カダブラ、クラブのA、ハートのクイン、上向けい!」

こういってカードの山をポン!とたたき、サラサラと

開いていくと、――ナンと不思議千万にもこの二枚だけが表を向いて出てくるので、お立ち合いは「アリャ！」とばかり驚くが。……

《ひみつ》

カードをシャッフルするとき、ひそかにボトム（底）の一枚をみてとる。――いまの場合はハートのクインである。そうして、お立ち合いに好みの一枚を抜かせ、後ろ向きになってカードを戻してもらうとき、このボトムの一枚（ハートのクイン）をひっくり返してトップにすると、あとの全部は表向きにして持っていてもうら向けカードの山のように見える。

そこへ、その抜いてもらったカードを「うら向けたまま」差し込んでもらうのだから、この山を再びひっくり返せば、その一枚だけが表向いていようというわけだ。

――こうして、カードの山を前にまわし、一度カットして上・下を入れ替えると、ほどよいところに二枚だけが表向いて入っているようになるというしだい！

●……霊感予言カード

《演　技》

一組のカードを相手に渡して、思うぞんぶんよく切ってもらう。そして術者が受け取ったら、さらに一度カットして、五つか六つの山に分ける。

「このように念入りに切っていただいたカードを、またカットして、五つ（または六つ）の山に分けたのですから、どこに何があるかわかろうはずはないのですが、私の霊感は百発百中それを言い当てるのですから、ナンとりっぱなものではありませんか！」

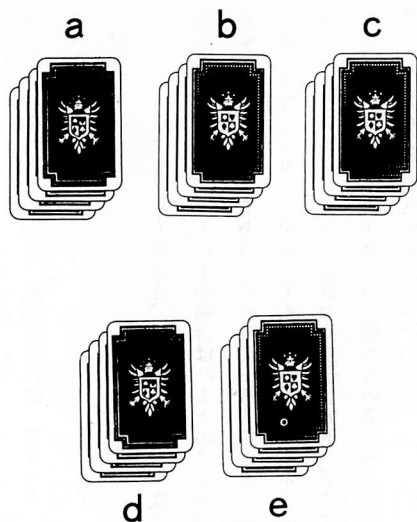
と、ゼスチュアたっぷりに目をつむって精神統一の体よろしく、

「これはハートの7！」

とAの山のトップ・カードをとる。――が、見物にはもちろんすぐに見せない。そして、つぎに、

「これはクラブのクイン！」とBの山のトップをとり、

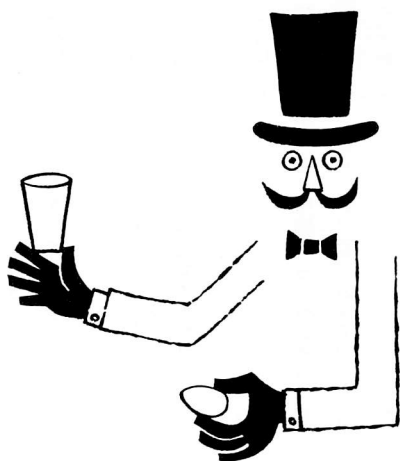
「ダイヤの10！」とCの山から
「スペードのジャック！」とDの山から、
「ハートのキング！」とEの山から、……というふうに、一枚ずつハッキリ予言して各山のトップ・カードをとって、左手に扇形に持ち、
「やはり霊感に狂いはありませんでした。この通り全部的中しております！」と披露する。

a b c d e

《ひみつ》

お立ち合いにシャッフルしてもらったカードをカットするとき、素知らぬ顔でボトム・カードをちらりと見てとることがまず第一。そして、五つなり、六つなりの山をつくったとき、最後の山（図ではE）のトップに、その覚えておいたカードをおくのである。

さて、予言するのは、実はこの見覚えておいたカードのことなので、――たとえばそれが♥の5だったら、「ハートの5！」といってAの山のトップをめくる。――と、それが♣のJだったときは、「これはクラブのジャック！」といってBの山をめくり、それが◆のAだったら、「ダイヤのエース！」と予言してCの山のトップをとるのである。

――こうして、いまめくったカードをよみあげてはつぎの山をめくるのだから、当たるのは当たり前なので、最後にめくったカードをファン（扇形）に開いて持っている手の頭初に持っていって、「この通り、全部的中していました！」と披露すればよいのである。

身のまわりの材料でできる大奇術

タバコやマッチの奇術

アマチュア・マジシャンとして、多少でも知られていると、なにかの会合でよく「ぜひ一手見せてください」と懇請（こんせい）されるようになる。このとき、
「きょうはあいにくなにも用意して来ませんので、……」
と辞退するのでは曲がなさすぎる。
「では皆さんのなにかを拝借させていただいて、二つ三つ——」
ということにしたい。
タバコでも、マッチでも、指輪でも、ハンカチでも、あるいは食卓に出ているカップ、盃、お銚子、ないしはフォーク、ナイフ、はし、ｅｔｃ……目に触れるもの、身につけている小物、何でも手品のタネにならぬものはない。
これを取り上げて即座にいくつかの小品奇術を演じてみせれば、あなたはたちまちその場の人気をさらってしまうことができるのである。
たとえば、節分の日のタマゴは立つ……などと話題になったことがあったが、ひそかに食卓塩をテーブルに撒くことによって、いつ、いかなる時にでもタマゴを見事に立ててみせることができるし、素知らぬ顔でみかんのヘタのところから妻楊子をさかさまに差し込んで、その先端を一ミリぐらいのぞかせておくと、指先の玉乗りができ、コップを二つ重ねて、素早く左右の指で上下を持ち代えれば、たちまちコップくぐしの奇術となる。
なんとゆかいではないか！

女性のきものをはいでいく一連の奇術

女性をハダカにする！——などということははなはだおだやかでない。まず難事中の難事といってもよろしかろう。たとえ相手が芸妓とか、ホステスであったところで、ストレートでいったら、とてもすんなりと承知するものではない。

しかし、有り合わせの身のまわり品を使って奇術をやりますから、ちょっと、——と頼めば、これはもう極めて気軽に、羽織や帯止めぐらいは二つ返事で貸してくれるし、ついでですから、……とたくみにもちかけると、先方もだんだん興がのってくるから、帯だって解いてくれ、腰ひもまでも「どうぞ——」と貸してくれるようになるものである。

まことに、奇術の徳のすばらしさよ！

●……抜けるリング

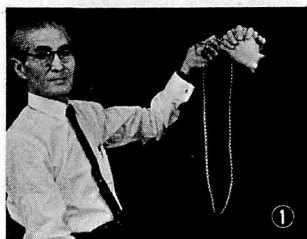
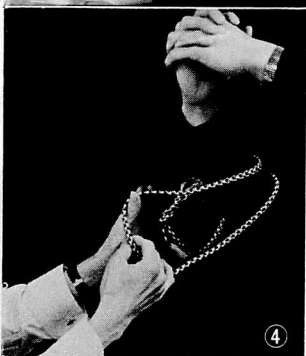
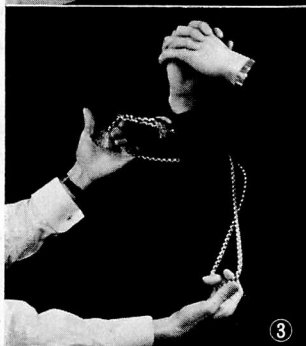
《演　技》

帯止めなどは、どんなレディだってかんたんに貸してくれる。たとえばＰＴＡの会合の席でのかくし芸披露にしたところでだ。

さて、帯止めを借りたらまず両端を結んでリングにする。そして、

「おついでですから手伝っていただけませんか。——恐れ入りますが奥さまの両手を握り合わせて、——そうそう腕で輪をつくってください。そこへこの帯止めのリングを通します。組んだ両手は途中で放さないように願いますよ。……ハイ、ワン、ツウ、スリー！」

①

⑤

と、その帯止めのリングを抜きとってみせる。――すぐ目の前で抜きとるんだから、たいていは、「ん、まァ！――」とビックリしたり、感心したりすること請け合いである。

《ひみつ》

帯止めのリングを、腕を組ませた相手に通すとき（写真①～②）、あなたの左・右の手は一ぱいに開いて、輪をひとさし指、中指、くすり指、小指の四指にかけて持つ。そして、「ワン」と両手を合わせたら、右手にかけた輪を左手のおや指にかけ（写真③）、同時に四指からリングを外すのである。それから「ツウ」と両手を合わせて「スリー！」と開くとき、両手のおや指にリングをかけて張れば、写真⑤のようにリングは見事に抜けてしまっているのである。

っ張ると、写真⑤のように二つのリングがならぶから、これを両眼に当てて、

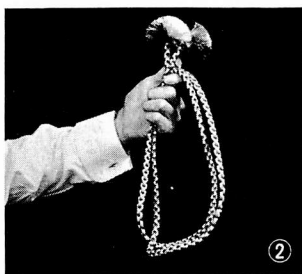
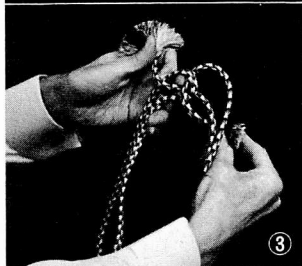
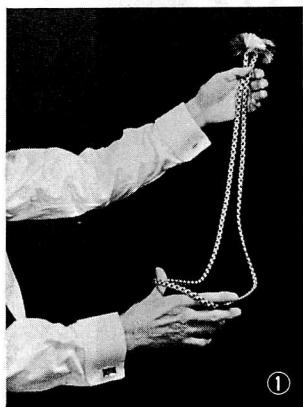
「インスタントでソフトなメガネができあがりました！」

とお愛きょうをふり

●……即製めがね

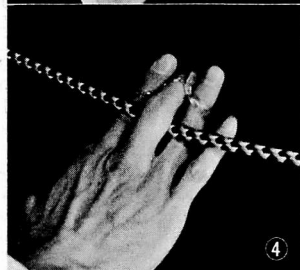
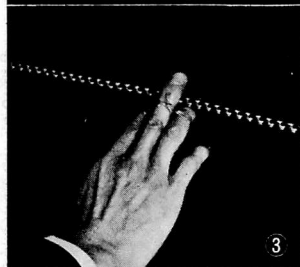
《演　技》

つぎは、帯止めの両端をそろえて左手に持ち、右手のおや指とひとさし指とで、垂れた中央部をひろげて（写真①）持ち上げ、両端にかけると、写真②のかたちになるから、こんどはその手前の端を右手でとって、中央の輪に通し、一度ぐっと手前に引いてから二重になった輪をくぐらせ（写真③〜④）、そろり、そろりと両端を引

まく。

（註）このごろ革製の帯止めも多く愛用されているが、革製はなかなかしっかりとは結べず、演技の中途で解けがちだから、避けた方が無難。

●……非常線突破！

《演　技》

帯止めを、お立ち会いに両手でピンと張ってもらいます。そして、術者はひとさし指と中指とくすり指の三指を太ひもでしっかり結び合わせ、うらと表を何度かひっくり返してよくしらべ（写真①〜②）、

「ワン、ツウ、スリー！」

と号令をかけると、このしばった指が帯止めの一線を突破してしまっているが（写真③〜④）、さて、これを引き抜こうとすると、いくら引っても外れない。

しかし、もう一度、

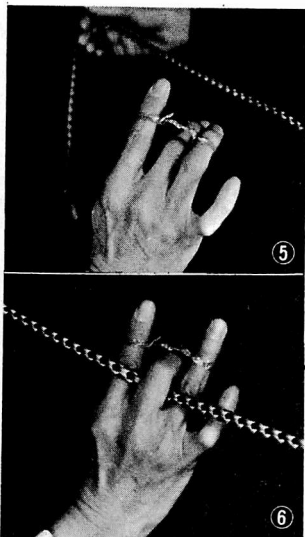
「ワン、ツウ、スリー！」

と号令をかけると、指はスルリ！と抜けてしまうが、両のうら・表をいく度ひっくり返してみせても、三本の

指は、依然として緊くしばられたままである。

すぐ目の前でやられるのだから、お立ち合いは首をひねり、目をこすって不思議！　不思議！　と感心してくれるからうれしくなる。

《ひみつ》

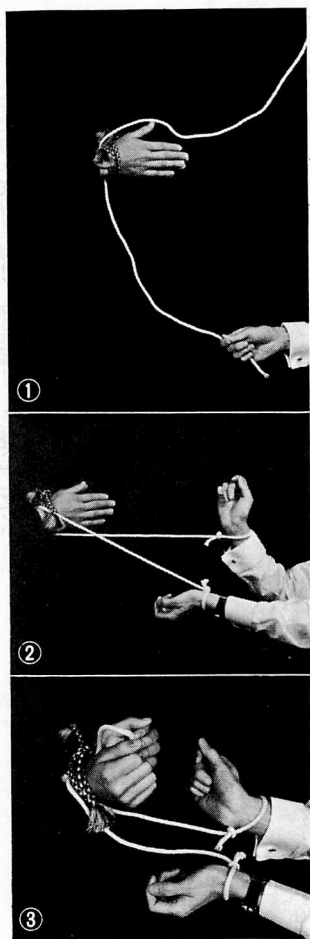
実は三本の指、しっかりと縛ったように見せるが、ほんとうにしっかりと結んであるのは、ひとさし指とくすり指だけで、中指は遊んでいるのである（写真⑤）。これを甲を見せるときは素早く中指の背にピタリとくっつけ、ヒラを見せるときには中指のハラに密着させるわけで、馴れるとお立ち合いにはぜったいにわからない。

「ワン、ツウ、……」と号令をかけながら、中指をぬき出してはピンと張られた帯止めをくぐらせ（写真⑤）、また三本の指を密着させるのだ（写真⑥）。成功のコツはこの指の機敏な運動を十分に練習しておくだけのこと。

（この指をしばる準備には、多少の時間が必要だから、その間アドリブで適当につなぐこと。三指をしばるひもは、前もってひとさし指とくすり指にはめるひきくぐしの輪をつくってポケットに入れておく。）

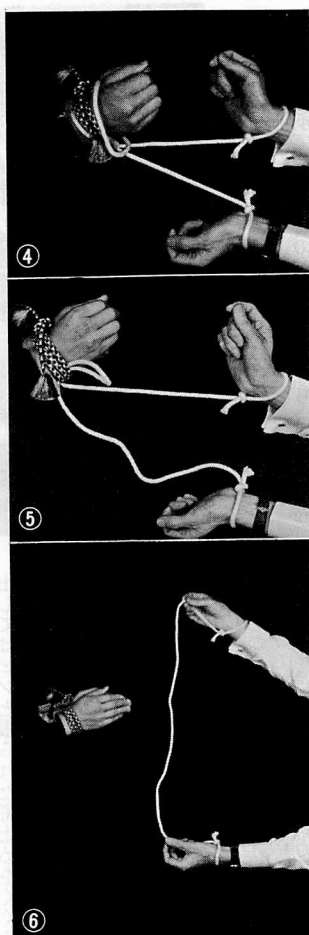
●……離れられない二人

《演　技》

こんどは両手を合わせて、その手くびを帯止めでしっかりしばってもらう。そして、もう一本別のひもを借り、これをしばった両手の間に通して、お立ち合いの両手くびをしばる。

「さァ、これで二人は離れられない仲となりました！」

しかし、いつまでもこうしていたのではお客さまに叱られてしまいます。あなたもきまりがわるいとおっしゃる。――では魔法でぬきとりましょうね」

というようなことをいって、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ、……」

とやると、ここでまずドッ！と来る。（なるべく女性と組みたい）

呪文を唱えながら、しばられた両手をしばらくこすり合わせ、

「ワン、ツウ、スリー！」

と号令もろともサッ！　と引くと、両人の手くびはしっかりしばられたままなのに、ロープは見事に抜けてしまっている。

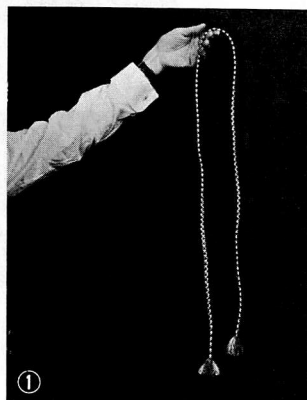
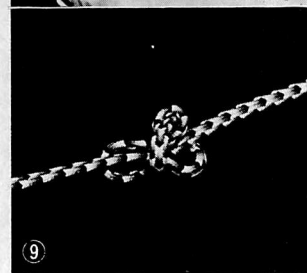
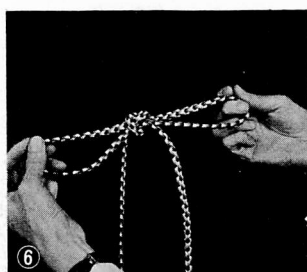
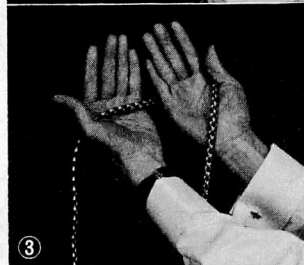
《ひみつ》

しばられた両手をひらいて、じゅもんを唱えながら相手に近付き、相手のロープをたるませて、しばらく手くびをこすり合わせていると（写真①〜②）、まん中から相手のロープのまん中が首を出す（写真③）から、これを小指にひっかけてひろげ、左・右いずれかの手くびをくぐらせて甲の方へまわす（写真④）。そうして一気にグッ！としばられている両手を引くと、ロープはスルリ！　とぬけてしまうのである。

●……結んでも締めても

《演　技》

借りた帯止めを、写真①のように左手にとり、右手を反対に伏せてかけると写真②の形になる。このとき右手のおや指にひも（帯止め）をかけて右手を一回転させてひらくと、写真③のようなきれいな形になるから、そのまま右手を下にして両手を重ね、両方のひとさし指と中指でひもをはさみ、左右にすウっと引くと（写真⑤）、花結びとなる。

そこで、写真⑥のように結び目を締め、花結びにした双方の輪の上から両端をとる。写真⑦そして、もう一度結び目をしっかり締めてみせる。写真⑧——しかしこのとき、ほんとうに力を入れて両端をひくと実は締まらずに解けてしまうから、さもきつく締めるようにみせるだけなのだが。（写真⑨）

そうして、この結びコブを手のヒラでつかんでかくし、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

と、もったいぶって呪文(じゅもん)を唱えながらしごくと、結び

目は解消してごらんの通り！（写真⑩）

《ひみつ》

タネはべつにない。要するに、結んだものをもとにもどすのだから、解けるのが当たり前なのだが、ひとつひねると金輪際解けなくなってしまうから必ず十分の練習が必要。

《応　用》

これを二〜三度手際よく演じて、こんどは両端を花結びの輪の上から下に通して引っ張ると、結び玉は緊く締まるばかりで解けなくなるから、結婚式の余興などには「いや、こりゃァ失敗ではございません。こんにちは、一度結ばれたものが解けてはならないのでございます。ハイ、おめでとうございます！」

とやると、やんやのかっさいを受ける。

なお、結び目を手の中にかくしたまま、両端をお立ち合いに引っ張ってもらう手もあれば、両端を左右の手にしっかり握って強く引きながら、「フッ！」と結び目を吹き消す演出も効果的。

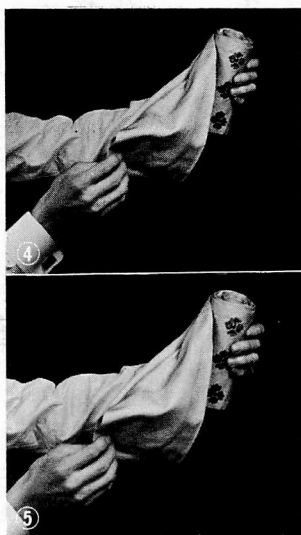
また、どんな手順でも花結びになりさえすればよいのだけれども、この写真の手さばきが一番きれいなので、私は推奨する。初代天勝師匠直伝の手法なのだ。（これは帯あげかしごきを借りて演技すると、いっそうあでやかできれいです）

●……帯のスピード巻き替え

《演　技》

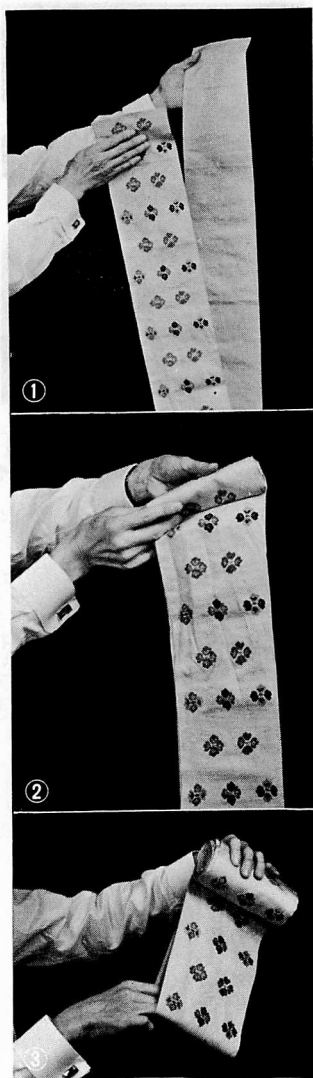
「ことのついでです、こんどは帯を拝借さしてください。おもしろい早わざをごらんに入れます」

と、いささか強引に出る。——帯止めの奇術で、十分

に興をそそられているので、こういって手を出すと、割にたやすく帯を解いてくれるからうれしくなる。

「××子さんのお締めになっていた帯です。もとよりタネもシカケもあるはずはございません」

とひろげて、これをまん中から二つ折りにして両端を合わせ（写真①）、合わせた方からクルクルと中央部に向けて巻いていく。（写真②）――とまん中の折り目が袋になるから、これを背後にまわして、

「ワン、ツウ、スリー！」

と号令をかけたら前にもどして、サッ！　とひろげる（写真⑥）。――帯のうらと表は見事に全部巻き変わっているから、拍手かっさいはうけ合い。

《ひみつ》

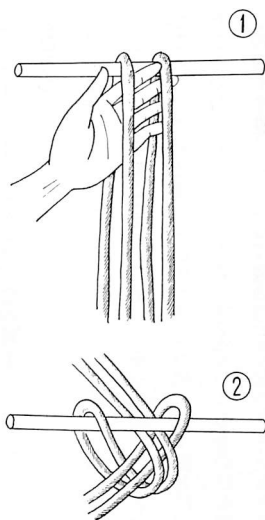
両端を合わせて、二つ折りにしたまん中に向けて巻いていくだけのこと――

こうして、少しゆとりのあるうちに背後にまわして、この中央の袋になったところに指を差し込んで（写真③）、クルリとひっくり返す（写真④）のだ。

そして、サッ！　と流すようにひろげると、帯のうらと表は見事に全部アベコベに巻き変えられているのである！

⑥

●……キモノのぬきとり

《演　技》

「乗りかかった船です。つぎには腰ひもを二本お貸しください。お礼に後でタネあかしをいたしますから。…」

と、さらに強引に出ると、これもたいていは成功する。

借りた腰ひもは二本一しょにしてよくしらべ（これは必ずおそろいのものでないと困る。別々のだったときのために、あらかじめ二本のロープを用意しておく必要がある）まん中から二つ折りにして、図①のように左手に持ち、有り合わせのボールペンなり、おはしなりを結びつける。（図②）

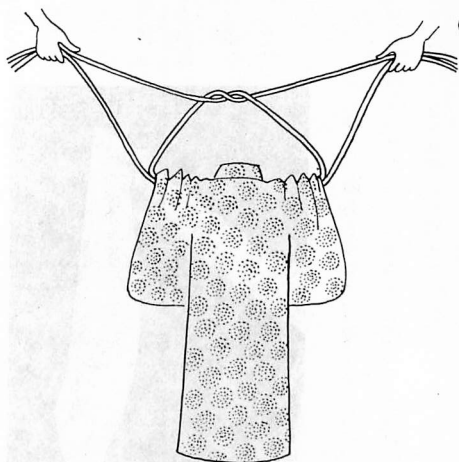
そして、脱いでもらったキモノ（羽織ならもっとかんたんに借りられる。背広の上衣でもよい）の袖を通し、

①

②

（図③）

「ちょっとお手伝い願います。このひもの端をしっかりと持っていてくださいよ。――いや、その前に念には念を入れよと申しますから、もう一度結び合わせましょうね」

と、左・右から二本のひもの一本ずつをとって図③の

ように一度交叉（こうさ）させて再びお立ち合いに渡し、

「さてどういうことになりますか？――しかし、ご大切なお召し物を損傷するようなことはぜったいございませんが、もしかしたら、ほころびぐらいはできるかもしれませんが、それは貸した因果とおあきらめ願ぅんですナ！」

とハラハラさせながらまずおハシを抜きとり、つづいて

「ワン、ツウ、スリー！」

と号令とともに着物をサッ！　とぬきとる。二本のひもはお立ち合いの手にしっかり握られたままだから、とたんに拍手がドッとくるハデな一幕！

《ひみつ》

「ここがまん中です」

というようなことを言っておハシを一本結びつけるのがひみつ。このとき、（図①）のように、二つ折りにした二本のひもの間に中指を差し込んで、下の方のひもで上のひもを巻くようにして図のごとくおハシを結ぶので

ある。

だから、このままでおハシ（またはボールペンなり、万年筆なり）を抜きとると、ここでひもは割れてしまってネタばらしとなるから、「念には念を――」と左右から一本ずつとってもう一ぺん結び合わせることを忘れてはいけない。

こうして、握らせた両端を引っ張らせると、袖を通したキモノは中央から見事にぬきとることができるが、二本のひもはお立ち合いの手に握られたまま残るので、ヤンヤのかっさいを浴びることとなる！――というしだい。

●……キャップの行方

小物なら、口紅のキャップをちょっと拝借、――

《演　技》

キャップを右のひとさし指にはめ、左手を開いて握りとる（写真①～②）。ところが、指をぬきとると、キャップはもうない（写真③）が、左の手のひらをあけてみても残っていない。

ところが、そのひとさし指を左手の甲にまわして（写真④）もどすと、キャップはいつの間にか指にはまって出てくるのである。（写真⑤）

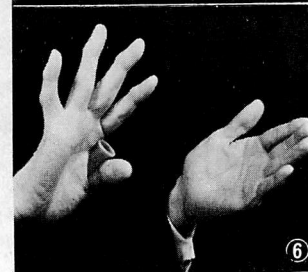
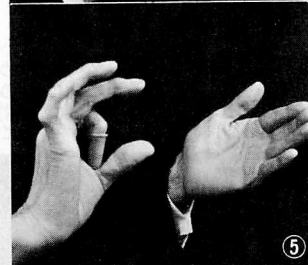
《ひみつ》

はじめに握ってみせるときはスローに、本番に握ると

③

④

⑤

⑥

きはスピーディにやるのがひみつ。このとき、素早くキャップを写真⑥のように右手のおや指のつけ根に挾(はさ)んで、すでにキャップの抜けた指を左手に握るのである。だから、左手の甲の方で、この挾んだキャップを再びひとさし指にはめて、悠々(ゆうゆう)と出してみせればよいのだ。

これは〝シンブル〟技術のほんの初歩。熟練すると五指に五色のキャップ（シンブル）をはめるハデな技となるのだが、この手の応用で口中に消したように見せ、おヘソから取り出すなどはご愛きょう。ただし、下品にならぬように。——

一番手近かなネタ・タバコ

タバコとマッチもまた、いつ、どこででも必ず身辺にある奇術のネタである。

——タバコは生きてるアクセサリー！——

というのは、専売公社のキャッチ・フレーズだが、華やかな社交場裡のゼントルマン・アンド・レディのポケ

ットやハンドバッグにおさまっているのが、シガレット・ケースとライターである。

しかし、「ライターは耳かきの代用にはならない」という有名な皮肉を吐いたダンナがいたように、マッチはまだいかなる大宴会場のテーブルにも凝ったデザインの名入りのものが出ているし、喫茶店やバーでタバコをくわえると、ホステスがしゃれたポーズで点火してくれるのが常だ。

また、よしんばタバコはたしなまぬご仁にしたところで、至って気軽に「ちょっと一本、――」という手が使える。こんな便利なネタはない。

そこで、何のタネもシカケもない、ほんの指さきのトリックから、ポケットに秘めておける、ほんの小さなネタ。――それも、いまやどこのデパートでも手軽に買うことのできる奇術材料を使えば、だれにもできる、タバコとマッチのバラエティーを展開してみたい。

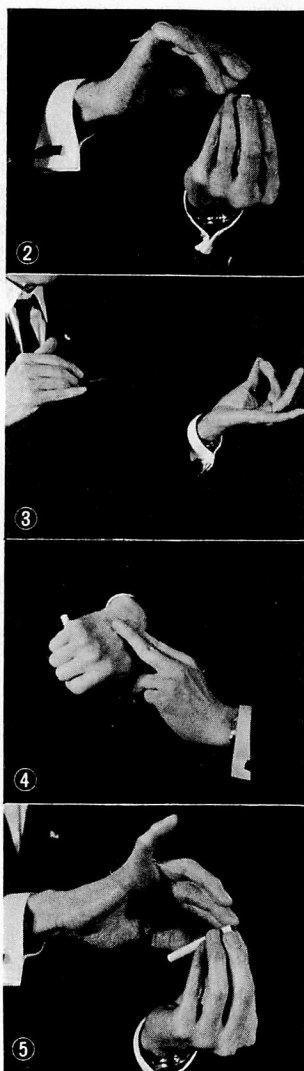
スペースの都合で、順序不同に述べるから、その応用と組み立ては、賢明なる読者諸君の手腕と機知におまかせする。

これを知っていると、旅行にもたいくつを知らないで済むし、社交の場では黙々とやっていてもたちまち衆目を集めて人気をさらうことができるという徳がある。

●……うわ気なタバコ

《演　技》

まず、一本のシガレットを借りたら（これはお立ち合いに借りた方が効果百パーセント）、左手の五指を朝顔形にして、そのまん中に差し込む（写真①～②）。これを二～三度出し入れして、左・

①

いつの間にか姿を消している。（写真③〜④）

そこで、右手を軽く握って、甲を左手でこすると、いま左手の中で消えたタバコがスルスルとせり上がってくるのである。（写真⑤）……

《ひみつ》

タバコを二〜三回すぼめた五指の中に入れたり出したりしたら、そのタバコの頭を、右手の中指の先端で左手のひとさし指と中指に押しつけるようにすると、タバコは横倒しになって、ひとりでに右手の中に入ってくる。（写真⑦）それを何食わぬ顔で軽く握り、写真⑥のよう

右の手を離し、すぼめた朝顔の蕾形の左手を、小指から順々に指を開いていくと、——これはしたり、タバコは

に甲をさすりながら右手のおや指でタバコの頭を押しあげると、きれいにせり上がるのである。

●……タバコ倍増術

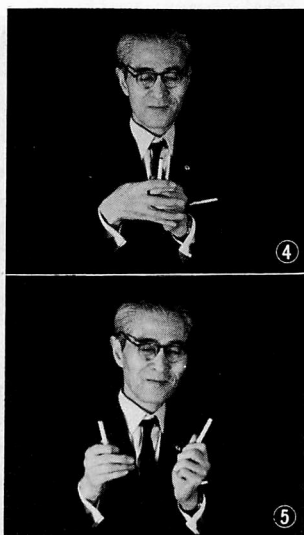
《演　技》

「値上げ攻勢はタバコにも及んで、われわれしがないサラリーマンは、ああ疲れたと一服するにつけても考え込まざるを得ないという情なさ！——そこでこんな手を発明したというわけで。——しかし、何をやるにもモトは必要、ちょいと一本だけ拝借さしてください」

と、この場合もお立ち合いから借りた方が効果的。

さて、こうした左手をさしのばして一本のタバコを借りるが、これに右手を重ねたトタン、タバコはたちまち二本に倍増しているのである。（写真①〜②）

そこで、いま増殖したタバコは右手でポケットにおさめるが、その手を重ねるとまた倍増。——つまり両手に一本ずつタバコが出現するから、これをまたポケットにしまう。（写真③）

「やァ、こりゃァいい調子！——」

とニッコリして、何回となくくり返し、
「一本のモトでこんなに殖えました。これはささやかながら利子でございます」
と、五～六本添えて借りたタバコを返す。
（このごろ、フィルター付きのタバコが多くなったので、いささか扱いにくくなったが、フィルターの部分も白いものなら、心配なくきれいにできる。借りるときに注意するとよい）

《ひみつ》

左手をのばしてモトのタバコを借りるとき、ひそかに右手をポケットに差し入れて、もう一本のタバコをおや指のつけ根にしのばせてくるのだ。そして、手を重ねて左手のモトのタバコを右手にとったら、左手でこのタネのタバコをぬきとって（写真②）のようにそろえてみせるのである。

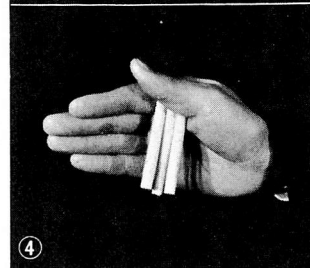
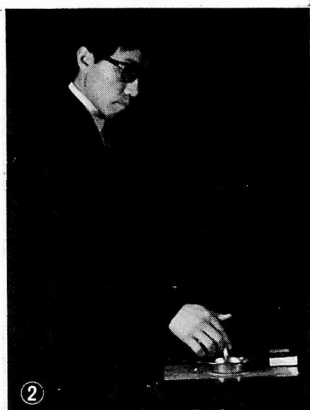
　そうして、「たちまち倍増いたしました」と、その一本をポケットにおさめるように見せながら、実は再びこれをおや指のつけ根にフィンガー・パームしてくるので、要するに二本のタバコがあれば何十本にも増殖したように見せられるわけだが、右のポケットには前もって十数本のタバコを秘めておいて、
「おかげでこんなにたくさん殖えました」
　とつかみ出し、五～六本を〃利子〃と称して添えて返すのである。

●……ミニ・ミリオン・シガレット

これに引き続いて、つぎには、少々念を入れて、火の

ついたタバコにしてみよう。

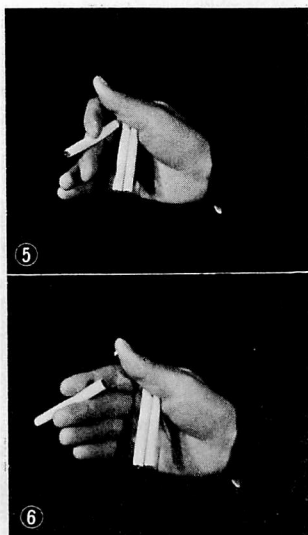
《演　技》

まず、手の内にタネもしかけもないところを見せながら、一本のタバコに火をつけて一服吸う(写真①)。——スパスパやったら灰皿に棄てる。(写真②)——と、とたんにまた一本、新しい火のついたタバコがもう指の間に出現しているのだ。(写真③)これをまた一口吸って灰皿に棄てる。——一本棄てればまた一本!——火の付いたタバコがつぎつぎに指間に現われるのだから、お立ち合いはショックだ。アレヨ、アレヨと目をみはるばかりだが。……

《ひみつ》

はじめの一本は手の内を見せなければならぬから、右手はカラにしておく。そして、一本吸って灰皿に棄てるとき、さりげなく左手から四~五本の火のついたタバコを右手に移すのである。(写真⑤)

②

③

④

そして、これを写真⑤～⑥のような手順で、一本ずつひとさし指と中指にはさんでは吸って棄て、またはさんでは吸って棄てるのだ。

ただ、この場合注意しなければならぬのは、右手の中から火のついたタバコの煙の立つことだが、たとえ一口でも、たっぷりと吸って煙を吐いておくと、これがりっぱにカモフラージュできるから、この演技の練習が成功のコツである。

また、何しろ火のついているタバコのこと、左から右へ移す運びに過ちのないよう、これも練習第一。

●……お化けシガレット

《演　技》

シャンとした箱からシガレットを一本抜いて口にくわえ、もう一本ちょいとのぞかせて、

「いかが？」

とすすめる。友人が、

「や、すまん！」

と手を出したとたん、そのシガレットがスーッと箱の中に引っ込んでしまったらどうだろう？――

錯覚かと思って眼をこすると、タバコは確かに頭を出している。そこであらためてつまもうとすると、またしてもスーッと箱に入ってしまうのだ。だれだって気味が悪くならずにはすむまい。

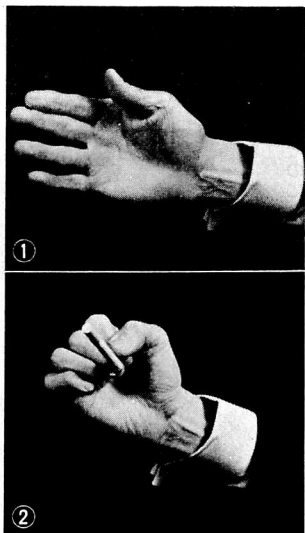
《ひみつ》

箱の裏側のよきところを、安全カミソリの刃でタテに5～6センチ切ってミゾをつけておく。そして、画ビョ

ウを中のシガレットの一本に差しておくのだ。
相手が手を出したら、この画ビョウを、カミソリで切ったミゾに沿って引けば、タバコは箱の中に引き込まれ、同じ手で押し出せば頭を出す、――というしかけ。
他愛のないいたずらだが、うす暗いところでやると、相手は完全に煙に巻かれる。

●……天から降ってくるシガレット

《演　技》

〽ワン、ツウ、スリーと、手を振れば、
天から降ってくる、シガレット……
サッ！　と空中に手をのべれば、たちまち指先に出現するシガレット、――それを一方の手でもぎとってポケットに入れる。また手をのばす、指の間には新しいシガレットが出現する。ポケットに入れる。そして手をのばす、また空中から、……否、幕の陰から、見物の上衣のえりからも、すそからも……シガレットは無限に出現するのである。（写真①～③）

《ひみつ》

このタネは、写真④のような、かんたんな指キャップを中指の背にはめておくだけのことだ。このT字形のお尻のところにタバコを一本深く刺し込んでおく。――指を写真①のように、まっすぐに伸ばすと、タバコは手の甲の方にかくれるが、写真②のように曲げると、いかにも空中からつかみとったように見えるから、左の手で代わりのタバコをつかんでもって行き、写真③のように出してみせながら、右手はもとのようにまっすぐに伸ば

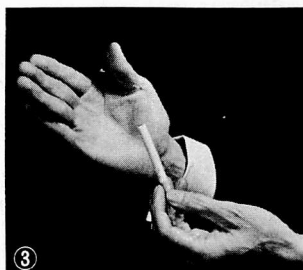
①

②

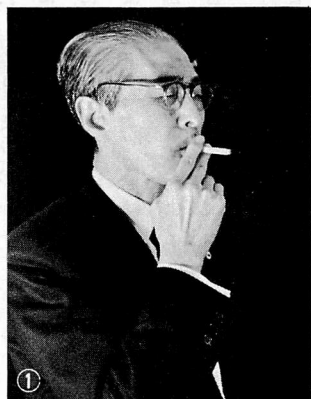
すと、タネのタバコは再び指の後ろにかくれるから、これをくり返せば、何本でも空中から出現したように見えるわけだ。

こうして取り出したタバコに火を点けてまず一服、……それからどんな風にバラエティーに富んだ演出でもできようというものである。

●……タバコの消失

《演　技》

空中から出現させたタバコは、再び空中へ消失させるのもおもしろい。

火を点けて、まずうまそうに一服吸ったら、左の手を軽くにぎって、そのにぎりこぶしの中にタバコを突っ込む。（写真①〜③）

そうして、そのにぎりこぶしを口にあてて、煙をプカ

リーッと吐き出し（写真④）、とたんに両手を開いてみせる（写真⑤）と、たしかに突っ込んだはずのタバコは完全に消失しているのである！

《ひみつ》

これは〃引きネタ〃を使う。すなわち、ゴムひもをつけたシガレット・キャップを、安全ピンで背広の裏に吊っておくのだ。タバコをくわえて火をつけ、二口ほど吸ってみせながら、そ知らぬ顔で左手を後ろにまわし、引きネタのキャップをつかんできている、——というわけ。吸いさしのタバコをキャップに突っ込んだら、左手はすぐに放す。そして、空になったこぶしを口にもっていき、口中に溜めておいた煙をフーッと吐くのである。（写真⑥〜⑦）

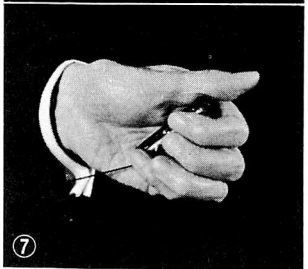
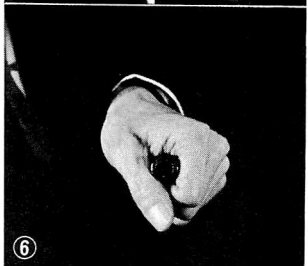
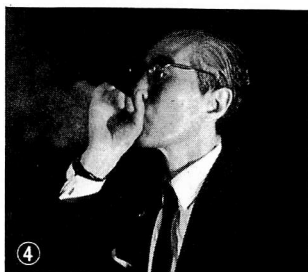
この、にぎった左手を煙筒にして白煙を空中にただよわせ、おもむろに両手を開いてみせるのが、この奇術のヤマ場だから、吸った煙をあわてて吐いてしまわないように気をつけること。

んにはタバコの煙が一ぱいに満ちているのである！

《ひみつ》

アキびんの底には、ひそかに塩酸を5、6滴たらしておく。そして、フタには同量のアンモニア水を入れておくのである。だから、このフタをしたとたんに化学変化を起こし、びんにはたちまち白煙がたちこめるから、手早くハンカチで覆わなければならない。

だが、びんはサカサマにして調べても、ゆっくりと気をつけてナナメに倒せばこの量の塩酸は外まで流れ出すほどではないからだいじょうぶである。

もちろん、薬品はアベコベにしても効果は同じだが、塩酸は誤って皮膚(ひふ)に触れると炎症を起こすおそれがあるが、アンモニアなら無難なので、フタの方に入れておくわけだ。

●……煙の空中飛行

《演　技》

使用するのはウイスキーの角びんなら最適。ただし無色のものでないといけない。

これをよくあらためてテーブルの上に安置し、大判のハンカチのうらと表をよくしらべてびんにかぶせる。一度かぶせてから、

「おっと、フタをするのを忘れた！」

という思い入れよろしく、手早くフタをしめて再びハンカチで深々と覆(おお)う。

そして、遙かに（7、8mから10mぐらい）離れて、やおらタバコを深々と吸っては煙をアキびんに吹き込むのである。——二、三度くり返して、十分吹き込んだら、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

呪文(じゅもん)を唱えてびんに近寄り、おもむろにハンカチをとればこはいかに！　フタもきちんと締めたはずのアキび

●……煙をつまむ

《演　技》

自分の吸っているタバコでもよいが、友人の吸ってい

るのはなお効果的。——とにかく、シガレットの先からゆらゆらと立ち上がっている煙を、ひょいと手をのばしてスーッとつまみとってしまうのである。

そして、その煙をつまみとったひとさし指とおや指をこすり合わせていると、また新しい紫煙がゆーらり、ゆーらり、……

怪談ばなしでもやっているときなら、黙々とこの芸当をやるだけで一座がシーンとなることうけあいである。

《ひみつ》

マッチ箱の側面の黒い発火剤のところを五・六枚集める。そして、灰皿のヘリの裏側で静かにそれを燃すと、ねばねばしたヤニのようなものが残るから、その黒い粘液をひそかにひとさし指かおや指で拭きとってきて、いかにも煙をつまみとるゼスチュアよろしく、指のハラをこすり合わせていると、紫の煙がゆらゆらと立ちのぼるのである。

——赤燐のしわざだが、何とも神秘ムードが一ぱいでおもしろい。

●……変現タバコ

《演　技》

タバコの封を切って、中箱をスーッと引き出すが、中身はカラだ！

「アリャ！」

けげんな顔で中箱をおさめ、あやしげな手つきでおまじないを施し、こんどは下から押しあげると、タバコはゾロリとそろって顔を出すのだが。——

《ひみつ》

中箱の七分・三分のところを切断して、もと通りにおさめ、外装のセロハンをもとの通りに貼っておく。買って来たばかりのもののごとく、封を切るところがミソである。

ただし、持っている角度を注意しないと、詰まっているタバコの頭が見えるから、気をつけること。

マッチのあしらいで

マッチも、素直に軸木を抜きとり、箱の側面をすって火をつけたのでは、何のおもしろ味もない。箱を空高く投りあげて、落下の途中で発火させる……という曲芸的手法も多く用いられるが、これはしかし一朝一夕のけいこでは無理。

だが、ポケットに手を突っ込んでも入ってなかったという表情で、空中に手を伸ばしてサッ！　とつかみとるぐらいの芸当はだれにもできよう。

それから、箱の表面に玉をすりつけて発火させるとか、あるいは上衣の襟に、または足をぴょんとあげて、靴の底にサッと擦りつけ、パッと点火する、——などもわけのないことだ。

空中からマッチをつかむのは、タバコの同巧異曲で、小型の広告マッチならお茶の子さいさい。中指とくすり指の背にかくして、ひとさし指と小指で支え、ひょいとこの指を前に曲げたら、おや指とひとさし指で箱の一端を捕えればよい。

中箱を抜き出して、外箱の上部に右のひとさし指の頭を差し込み、左手を開いて握りとり、再び開くと消失するシンブルの手法もおもしろい。

箱の表面を擦って火をつけるというのも、実は箱の端の、発火剤がいくらかハミ出しているところに擦りつけるのだが、上衣の襟や靴の底には、前もって発火剤のところを切りとって貼っておけば、このようにかんたんに人をビックリさせることができる。おためしあれ！

●……ペテン・マッチ

《演　技》

3個のマッチ箱を持ち出し、1個ずつ振ってみせる。

——2個はカラッポで応答なし、そのうちの1個だけに

軸木が入っているので、カラ、カラと音がする。

これをお立ち合いの目の前でゆっくりと置き替える。

5～6回おき替えたら、

「さア、中身の入っているのはどれでしょう？」

とやるのだが、これが何度やってもぜったいに当たらないから不思議である。

《ひみつ》

タネをあかすと、マッチ箱は3個ともカラッポなのである。それがどうして1個だけ振ると音がするのか？

――このネタのマッチは腕に輪ゴムでとりつけてある。だから、このネタを装置した方の手で振れば、カラのマッチ箱もカラカラと鳴るわけだ。

「この二つはカラッポ」と、振るのはタネ・シカケのない方の手、「これには軸木が入っています」と振るのは別の手なのだが、お立ち合いには気がつかない。

●……ビックリ・マッチ

《演技》

「君、マッチ持ってるかい？」

と言われたら、

「ああ持ってるよ！」

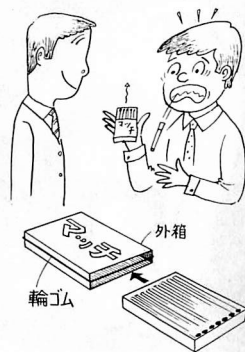
と、ポケットからとり出して、その友人の手の上に載せる。――と、とたんにそのマッチの中箱がスーッとぬけ出すので、友だちはビックリ！　気の弱い者なら、

「うわーッ！」

と投げ出すからゆかい。

《ひみつ》

中箱を一度ぬき出して、外箱に輪ゴムを図のようにかけ、その輪ゴムを中箱で押し込んで上下を指でおさえておくのである。こうして友だちの手のひらに載せたら手を放す。中箱はそろり、そろりとおもむろにぬけ出す！

……というわけだ。愛嬌たっぷりのいたずら。

●……マッチの兵隊

《演　技》

「マッチの棒で五重の塔や航空母艦などまで見事に組み立てる人さえあるが、たった一本のマッチ棒はなかなか立てにくいものじゃよ。ものはためし、やってごらん！」

　というと、だれだって一応は立ててみるが、なるほど尋常では至難のワザだ。

　そこであなたが、何本か林立させて、

「なアに、わけもないことさ！」

とアゴをなでる！――というわけだが。……

《ひみつ》

マッチ棒のお尻をちょいとナメるだけのこと。――まことにもって他愛のないひみつではある。

　こぼれた紅茶やコーヒーで濡らせばもっとかんたん。しかもコトは極めてスムーズに運ぶからゆかい。

●……おどるマッチ

《演　技》

　無雑作に手のひらに載せたマッチが、口笛のマーチで見事に行進を開始、止まったかとおもうと、今度はスックと立ち上がって、ひとりでに中箱がニューっと抜け出すのだ。これを中指で押し込み、箱を寝かせるが、再びマーチをはじめると、マッチ箱はまたかっぱつに運動を開始する。――空いている一方の手で、リモ・コンのゼスチュアをやるのもおもしろい。（写真①～④）

《ひみつ》

　実は、マッチ箱に、（さし絵）

①

②

③

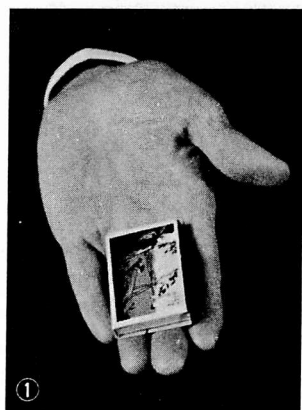
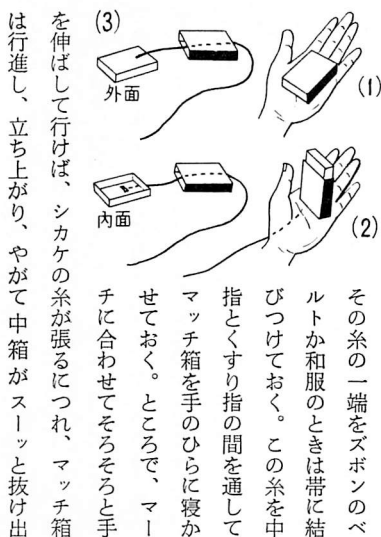
④

(1)

(2)

(3)

外面

内面

のように黒い絹糸を通し、その糸の一端をズボンのベルトか和服のときは帯に結びつけておく。この糸を中指とくすり指の間を通してマッチ箱を手のひらに寝かせておく。ところで、マーチに合わせてそろそろと手を伸ばして行けば、シカケの糸が張るにつれ、マッチ箱は行進し、立ち上がり、やがて中箱がスーッと抜け出す、……というわけ。そこで中指でこれを押し込み、シカケの糸をゆるめてマッチ箱を寝かす。——これをくり返すのだが、無心のマッチ箱が、まるで生あるもののようにおどるところがまことにご愛きょう。——しかけもかんたんだし、小集会向きの小品奇術として推せんするに足るとおもう。

●……ソデ抜けの風

《演　技》

さて、マッチに点火したら、腕を一ぱいにのばし、上衣を開いて袖のつけねを「フッ！」と吹く。——と、その息は見事に袖をぬけて、マッチの火を消してしまうのである。マネをしたところで、なかなかこううまくはいかぬ。そこで、お立ち合いはあらためてその神技（？）に感心してくれるという段どりになるのだが。——

《ひみつ》

実は、ひとさし指と中指にはさんで持っているマッチのお尻を、おや指で弾いて消すのである。どんなに肺活量の多い人でも、細い洋服の袖を吹きぬいてマッチ棒の火はうまく消すことはできない。お立ち合いの視線を袖の方に引きつけておいて、マッチ棒のお尻を強く弾けば火はわけもなく消えるのである。

食卓奇術

バースデーとか、あるいは父の日、母の日、老人の日、……と、このごろはホーム・パーティの催されることが多くなった。クリスマスなども、外でバカ騒ぎをしたのはすでに昔語りとなって、家庭で楽しいイブを過す向きが年々増している。

そこで、食卓を囲んで、アマチュア・マジシャンの腕じまんを鑑賞するチャンスもまた頻りである。では、その場ですぐにできる食卓奇術をご紹介することにしよう。

●……魔法のお手もと

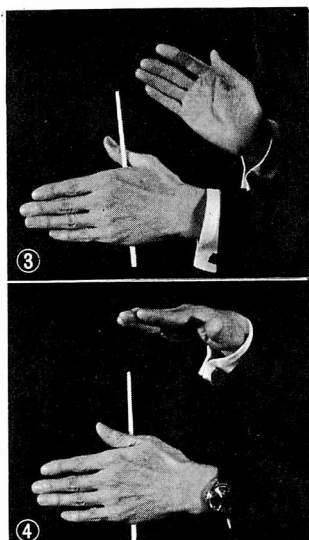
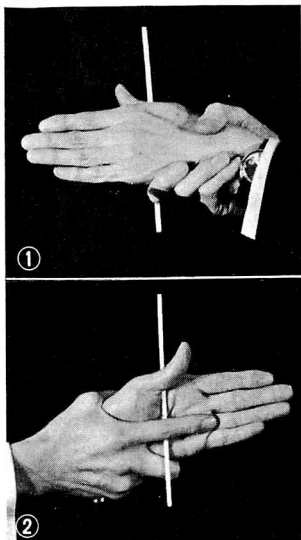
《演　技》

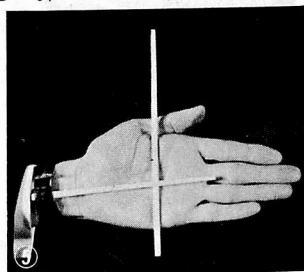
まず一番手近な〝お手もと〟の上に左手を開いてかぶせ、

「えいっ！」

と気合いをかける。——おはしは見事に手のひらに吸いついてしまうが、術者は右手で、その左の手くびを握っているので、「指で支えているんじゃないか！」と声

のかかるのが常だ。（写真①）

そのときはニッコリ笑って「おっしゃる通り！」と、

手のうらを返してみせる。（写真②）——と、とたんに爆笑が起こるから、こんどは手くびを握っていた右手を放して持ちあげてみせる。（写真③）

そうして、押したり、引いたりしてみせる（写真③〜④）が、ハシは左手に吸いついて落ちないから、ここでドッと拍手がくる。

得意のおももちで二〜三度これをくり返し、「さて、そのうらは、——」と手を返してみせる（写真⑤）。ナンと「ひみつ」は、腕時計のバンドにはさんだもう一本のハシだから、二度目の大爆笑とともに大かっさいを浴びることになる。

これはお愛きょうのタネあかしである。

●……ローソクを食べよう

《演　技》

バースデー・ケーキの可愛いローソクは、一度火をつけても吹き消してしまうが、たとえばクリスマス・イブのパーティーのような場合、大きなキャンドル・スタンドに勢いよく炎をあげている大ローソクを、ムシャムシャと食べてみせるのはどうであろう？——完全にお客さま方のドギモをぬくこと、うけあいだと思うが。……

《ひみつ》

この「食べるローソク」の正体はバナナなのである。まず大きなバナナを選んで皮をむき、ナイフでローソクの形に切り調える。そうして、ナマクリームを厚く塗って、キャンドル・スタンドに立てておくのである。

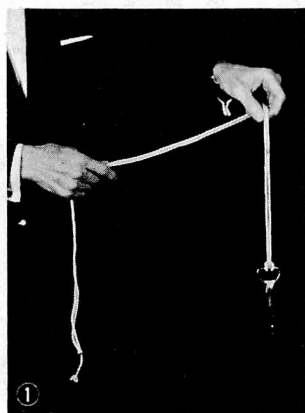
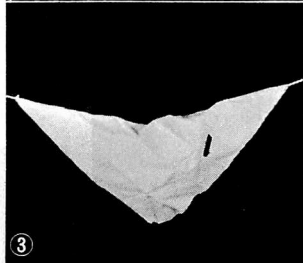
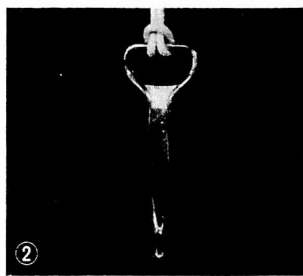
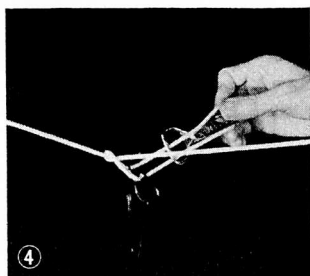
火をつけるシンはクルミだ。これもアマ皮を剝いで、形よく切り調えて頭にさしておく。——マッチで火をつけると、よく燃えるから、まさか、こんなつくり物とは思わないので、これをいきなりパクリ、ムシャムシャ食べてみせると、まるで魔法使いのように信じ込まれるから、ゆかいである。

「青い鳥」の魔法使いのお婆さんにでも扮してこれをやったら、効果はまことに百パーセントであろう。

●……センヌキの怪

《演　技》

ありあわせのひもとビールのセンヌキを使っての小品奇術、即席に間に合うところがミソ。

まず、センヌキに写真①～②のようにひも

を通し、お立ち合いに心ゆくまできっちりと締めさせる。そして、これをまん中にしてもう二、三個のセンヌ

キを通したひもをもうひと結びして、両端をお立ち合いに持ってもらう。

つぎに、ハンカチを一枚拝借して、例の通りうらと表をあらため、センヌキにかぶせて（写真③）、

「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

アラビアの呪文を唱えると、センヌキは全部抜け落ちるが、ひもは結ばれたままでお立ち合いの手に残るのである。

《ひみつ》

写真⑤のように、ハンカチの下でセンヌキに通したひもをゆるめると、センヌキのAはわけもなくはずれる。

Aがはずれたら、BもCも、他愛なく抜けるのは当たり前。しかし、お立ち合いに持ってもらっているひもの結び目は、いっそう固く締まるばかりだから、ひみつを知らない見物衆は、ただもう感心してかっさいを送る。

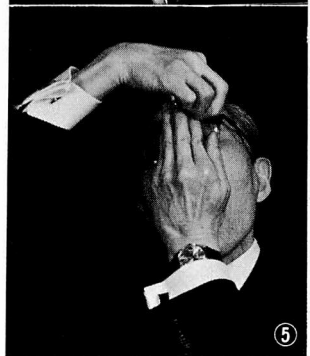
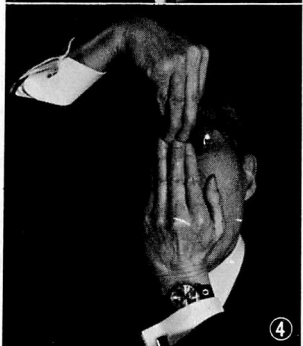
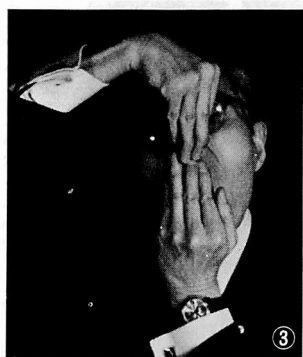
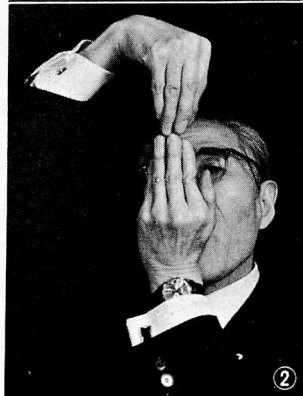
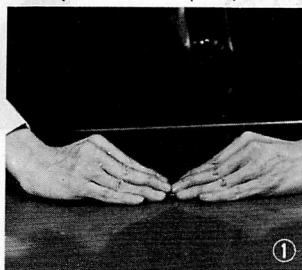
（センヌキを全部抜きとるときは、BもCも、ひもを二本一しょにして通すこと。一本ずつに通すと、Aだけが抜けて、BとCは結び玉とともに残る。）

●……ナイフをのむ

《演　技》

ホーム・パーティーなどでデザート・コースに入ったら、使用済みのナイフとフォークを残しておいて、ナプキンでよく拭き、これを使って小奇術を演じよう。

まずテーブルの上にナイフを水平に置いたら、両手のうら表をよくあらためて、写真①のようにナイフの上に伏せる。そして、これをそろそろと持ち上げて、写真②のように開いた口の上に持

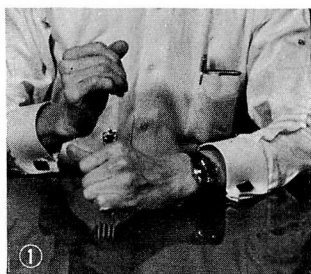
①②③④⑤

っていって、写真③〜⑤のように呑んでみせると、たいていのお客さまはビックリする。

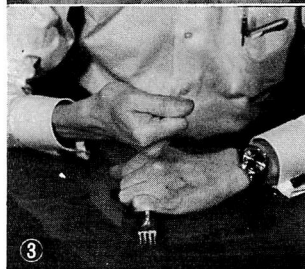
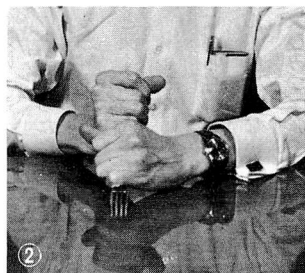
《ひみつ》

もちろん、本当に呑み込むわけではない。ナイフは左のそでの中に落としこむのである。

●……フォーク折り

《演　技》

フォークをとりあげて、左手で写真①のように握り、写真②のように右手を柄にかけ、

「えいっ！」

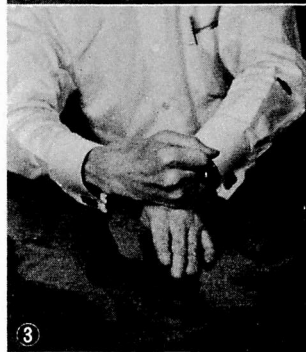
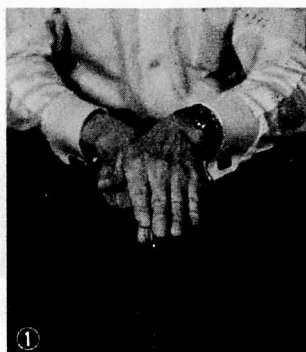
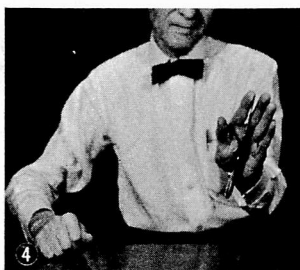
と、写真③のようにギクリ折り曲げてしまう。——銀製のじまんのフォークなどをこの手で曲げて見せると、ホスト、ホステスの顔

色がサッ！と変わるが。……

《ひみつ》

実は右手のにぎりこぶしを前にグッ！と曲げると同時に、左手のおや指を柄の上にまわして後ろに倒すだけのこと。——これをうまくやると、いかにもフォークがグニャリ！と曲がってしまったように見えるから、いたずらには好適。

●……手のひらザックリ！

《演　技》

まずナイフをナプキンできれいに拭きましょう。そしてテーブルに刃を上に向けて寝かせ、これに手のヒラをあてて、

「えいっ！」

と上からたたき、そろり、そろりとその手を持ちあげると、――アナむざん！ナイフの刃は手のヒラにグッ！と深く食い入ってしまっている。

――その柄を一方の手で握って、いかにも気を持たせながら「やっこらせ！」と抜きとるのだが。……もちろん、血は出ないけれど、すご味は十分。

《ひみつ》

柄は相当に重いから、そのつもりで刃の方を指の第一小節より上にいくようにして手のヒラを当て、肉に深く食い込ませる。そして、ひとさし指と中指ではさみ、柄に近いところを母指丘ではさんで持ちあげるのである。

肉用のナイフだから、刃はついていないも同様、いくら手のヒラに深く食い入らせてもだいじょうぶだが、ゼスチュアたくみにこれをやると、みんなが「アワヤ！」の緊迫感でザワめくからゆかいである。

いうまでもないことだがフルーツ・ナイフはおやめなさい！

●……フルーツの奇蹟

《演　技》

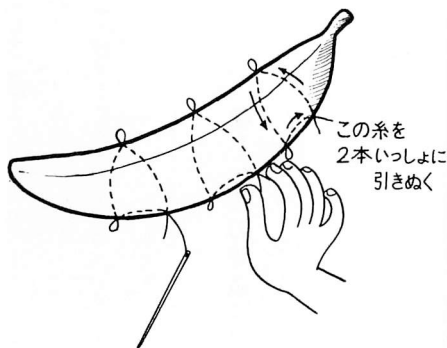
デザート・コースに入って、おのおのが好みのフルーツをとったら、そのうちの二つか三つに、「えいっ！」「えいっ！」といきなり鋭い気合いをかける。

「さァ、その皮をむいてみてください。どのような異変が起こっていますか？――」

お客さまは、けげんな顔でフルーツ・ナイフをとるであろう。そして、――やがて、

「アッ！」

と、驚愕（きょうがく）の声をあげるであろう。――その気合いをかけられたバナナやリンゴは、皮に何の異状もないのに、中身が五つにも六つにも切れているではないか！

これを神がかりでやると、いっそう大変なことになる。高知市郊外宇津野山上の〝鳶岩大明神〟の別当、〝大膳狸〟こと田岡某は、神前に供えた果物に、この手を用いて、かくもいやちこなるご

神徳をいただく上は、大願成就疑いあるべからず！　とお籠り堂に三日三晩の祈願をこめさせて、〝子授け〟の霊験日本一の大評判をとり、一時は四国随一の流行神となったが、あまりにも祈願者が押し寄せすぎて一人では授けきれなくなり、数多くの弟子たちにも授けさせたために、高知署の手に太い尻尾をつかまれるに至った！

――という、うそのような実話があるのだ。

――そう言えば、一度テレビのニュースショーでも、「手刀切り」と称して得々とこれをやってみせた、何とか仙人というインチキ老人が現われたが。――

《ひみつ》

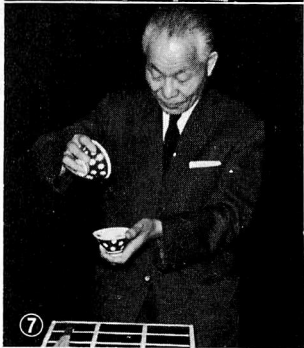
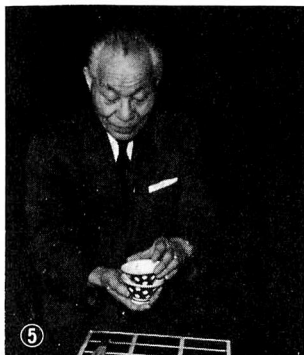
細い絹針に絹糸を通して、バナナなり、リンゴなり、柿なり、……果肉のやわかな果物なら何でもよい。図のように表皮を刺し通して四、五ヵ所を縫い、最初に針を通したアナから最後の針を抜いて、糸の両端を一しょに持ち、そろそろと引き抜くと、表皮には小さなアナがあくだけだが、中の果肉は見事にいくつかに輪切りになっている！――というわけだ。

ひみつを知れば「なアんだ！」と腹の立つようなトリックだが、〝神業〟に仕立てあげると、世にも不思議な奇瑞として天下をふうびすることができるのだから、世の中は甘いものだ。

●……お茶の間造幣局

《演　技》

大きめのお茶わんを二個持ち出したら、（写真①～②）のように内外をあらため、つぎに、（写真③～⑤）のように茶わんを重ね、写真⑥のように、ハラ合わせにして振ってみせると、ナンと、チャ

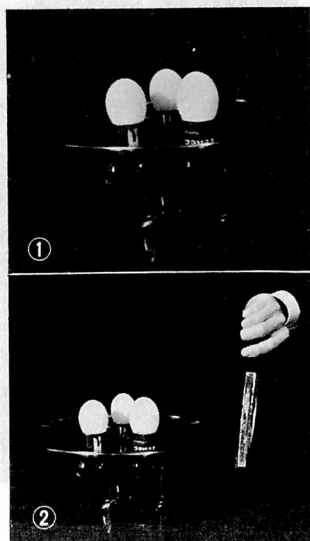
ラ、チャラと景気のいいお金の音がする。昔なら「梅が枝の手水鉢、たたいてお金が湧くならば、……」というところだが、「現代風には、インスタントお茶の間造幣局とでも申しましょうか！――」と、（写真⑦）のよう

に湧き出たお金をジャラジャラとあけてみせる。

《ひみつ》

ひとつの茶わんの糸底に百円玉を四〜五枚入れておく。これをおやゆびでおさえて、写真②のように茶わんの内側を見せたら、これを伏せて、写真③のようにシカケのない方の茶わんを上にのせ、写真④のようにひっくり返すと、糸底に秘めたお金が外側の茶わんに入るわけ、これを写真⑥〜⑦のように腹合わせにして振ってみせれば、いつの間にかお金が沸いたように見える、まことにかんたんな手品。〔宮村氏所演〕

●……卵の水浴

《演　技》

まず、中のよく透けて見えるガラスのカップ三個〜六個を用意しよう。カップの各個には七分目ぐらいの水を注いでおく。

そして、この上にへりの低いアルミニュームのお盆、あるいは厚手のプラスチックの下敷などを載せ、その上にシガレット、またはキャラメルなどの空箱を、高さ3センチぐらいに切り、円形にした台を、カップの数だけ、ちょうどカップ各個の真上になるように置き、その上に卵を立てる。

――これで準備はOK、さて、卵をじいっとにらんで、「ワン、ツウ、スリー！」

手刀でもよし、マジック・ステッキでもよし、また扇子を使ってもよい。それでお盆（または下敷）を力一ぱい水平にたたき飛ばすと、卵は見事に下のカップに水浴

①

②

としゃれるからゆかい。

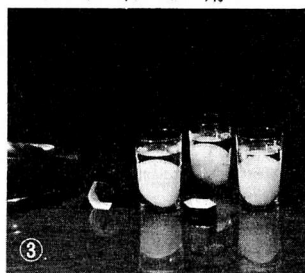
《ひみつ》

物体の重力と慣性を利用したもので、別にタネ・しかけはない。熟練さえすればだれにも必ずできる、やさしくて効果百パーセントの奇術だ。

はじめはまず一個から三個ぐらいでけいこをして、四個、五個、六個……とだんだん増していくとよい。卵とカップの増すのに正比例して拍手も倍増すること、請け合いである。

●……歌うドンブリ

《演　技》

うすでのドンブリをとりあげて内外をあらため、タネもシカケもないところをお認めいただけたら、傍らの水差しをとって底に少量の水を注ぐ。

そして、これにちょっと手をひたして、おもむろにドンブリのへりをなでると、アーラ不思議や、ドンブリは微妙な音楽を奏ではじめる。

音響はしだい、しだいに高まって、やがて部屋中にひびき渡るので、お客さまはビックリするやら、感心するやら、――熟練すると、ちょっとしたマーチぐらいは演奏できるようになるので、興はいっそう高まるが。……

《ひみつ》

ほんのちょっぴり手を濡らすのがひみつと言えばひみつ。あとは練習しだいで、だれでも一応鳴らすことはできる。その後の上達は熱意と努力にまつばかり!――

●……針を水に浮かす

《演　技》

「細しといえど、針はりっぱな鉄製品です。しかも、空間はわずかに糸を通す小さなアナが頭にあるだけ、——これが水に浮かぶ筈があろうか！……というのは常識でありましょう。しかし、不可能事を可能にするのがすなわち手品であり、奇術であります。私なら何でもないことですが、ちょっとお待ちください。お前にできることがおれにできぬことがあろうか！　とおっしゃる方がございましたら、どうぞお試しください」

　と、水をなみなみとたたえたカップ、またはドンブリと縫い針を出して試みさせるがよい。普通に入れたのでは、針はめったに浮かぶものではない。

　そこであなたのお手なみ拝見！——ということになる。

《ひみつ》

　まず、サイノメに切った豆腐(とうふ)ぐらい細かく切った吉野紙を水上に撒(ま)き散らす。そして、その上に針を静かに横たえ、

「ピリカ　メノコ　ピリカ　メノコ……」

と呪文(じゅもん)（何でもかまわない）を唱える。——と、こま切れにした吉野紙は、水の浸みるにしたがってカップの底に沈んでいくが、その上に寝ていた針は不思議に沈まないからゆかいである。

　水の表面張力を利用した豆手品だ。少年、少女諸君の理科の実験としても好適。

ステージ奇術

余興に最高

奇術は時代の花形芸

術をみせるから」と言えば、至って気軽に貸してもらえ、帯も解けば、腰ひもも解き、ついには長襦袢まで脱がせてギャンブルならずともハダカにすることさえできるという余徳まである。これは、ぜったいに望んでも無理な、奇術ならではの芸当である。余興を引き受けて、あっぱれじまんの腕を見せようというときは、もちろん準備怠りなくきらびやかな道具の用意も必要だが、これとていまやデパートの奇術用具売り場に行けば、相当手のこんだシカケ物まで売っていて、専門家の指導までサービスしてもらえるし、アマチュア奇術のクラブは全国にも多く、また筆者等の開拓した成人学校の教科になっているところも少なくない。

道具もお師匠さんも、みんな諸君のすぐ手のとどくところに存在するといううれしいものになったのだから、懇親会に、忘年会に、新年会に、あるいはバースデーその他のホーム・パーティに、大いに活用して人気を一身に集めていただきたいものである。

「アッと驚くタメゴロー!」

というセリフ、まことにアッ! という間に天下の流行語となったのが、ウルトラマンをもって自任する現代人なら自分が驚いただけではもう満足ができない。

ところで、人のドキモを抜く法といえば奇術をおいて他にないであろう。——かくて、かつては〝かくし芸〟といえば〝のどじまん〟であり、〝どじょうすくい〟とか、〝腹おどり〟〝皿まわし〟のたぐいがかっさいを博したものだが、いまや奇術がその真打ち格となった観がある。

何よりの強味は、すぐ身近かにマッチとかタバコとか、あるいは時計、万年筆などが直ちに材料となるし、ホステスとか芸妓の身につけている物までも「奇

●……のびるヤシの木

《演　技》

一枚の新聞紙をタテに二つに裂き、まずその一枚をおや指一本入るくらいのゆとりをとってクルクルと巻く。

そして巻き終わろうとするちょっと手前で、もう一枚の端を5〜6センチ重ねてまた巻きあげる。（写真①）

巻き終わったら、その先端10センチぐらいをひらべったくつぶして四つに裂き、エンピツなり、おはし（箸）なりをシンにして写真②のようにカールする。

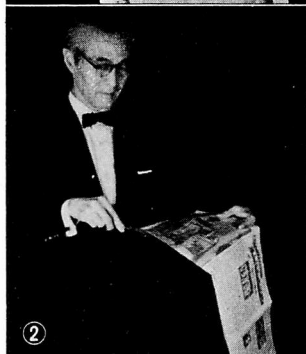
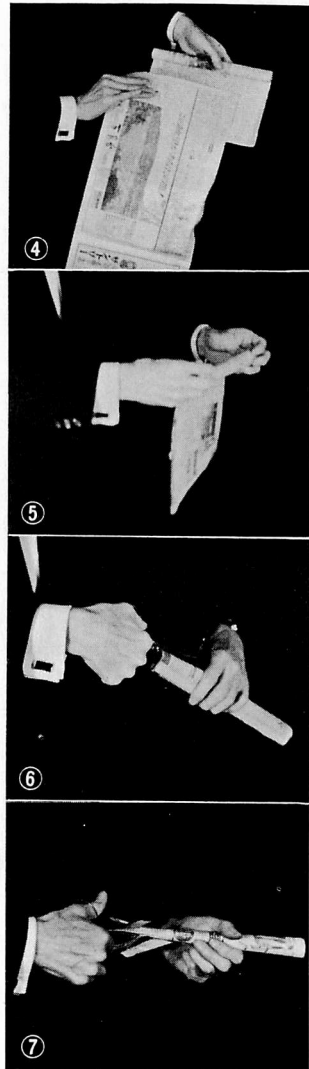
そして、そのまん中にひとさし指を差し込み、おなじみのメロディーに合わせてクルクルと指をまわしながら巻いた新聞紙を中から引きあげていくと、見事なヤシの樹が即座にできあがる。

クリスマス・イブのパーティなどでは、ジングルベルでも歌いながら、スルスルと伸ばしていって、

「インスタント・クリスマスツリーとござアい！」

などとやれば、大かっさいはうけ合い。

《ひみつ》

①
②
③

これにはべつにひみつはない。前にのべた手順でやれば、だれにも容易にできるが、あわてて引きのばす途中に新聞紙を千切らぬよう、気をつけることである。指で巻きとるようにナナメに伸ばしていけば、うまくいく。

●……数の霊感術

《演　技》

「これから私の霊感術をごらんに入れます、近ごろは霊感がグンと冴えてまいりましたので、きようは電子計算機そこのけという数当ての実験をやってみようと思います。これから助手に九個の○（マル）を描いたメモを持たせて、皆さまの間をまわらせますから、そのマルの中にお一人が一つの数字をお書き入れください、数字は同じものでなく、なるべく別々の数をお願いいたします」

こういって、助手にメモとサインペン、またはペンシルを持たせて客席をまわらせる。

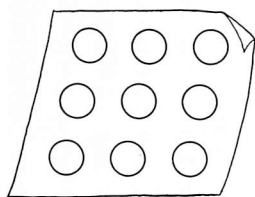
見物衆の九人が、それぞれに好みの数字を○に書き込んでくれたら、こんどはその三ケタ九つの数字の合計数を、やはりお立ち合いに出してもらうのだ。だれかにいまのメモを渡して

「恐れ入りますが、この計算をお願いします。しかし、すぐに答えをおっしゃらないでください。その前に霊感による答えを出してもらいますから。——」

と依頼する。

このとき、たとえば

	③	⑧	①
	⑨	②	⑤
＋	④	⑦	⑥
1	7	8	2

となったとする。——これをしばらく伏せておいても

らって、

「さア、九人の皆さまに思い思いの数字を入れていただきました。この三ケタの数字の合計数はいくらになりますか？」

と訊く。

遙かに離れたステージにいる術者は、もったいぶった精神統一のゼスチュアよろしく。

「その答は1782！」

と当てるのだ。——まさにピタリ！だから、みんなはそのすごい霊能力（？）にビックリ仰天して拍手をおくるのであるが。——

《ひみつ》

前もって、メモの最終ページにこの数を書いておくのである。しかし、お立ち合いに好みの数を書き入れてもらう第一ページには、もちろん○だけを九個ならべておくだけ。

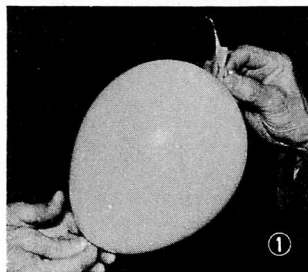
何しろ一人に一字だけ、九人に記入させるのだから、だれも全部の数字を記憶している者はいないわけ、——そこで助手が、いままで数字を書いてもらわなかったもう一人のお立ち合いに計算を頼むのだが、その人のところに歩を運ぶ途中、クルリとメモをひっくり返して最終ページを剝ぎとり、前に術者の方で記入しておいた数字を計算させるのだから、これはアタルのが当たり前！

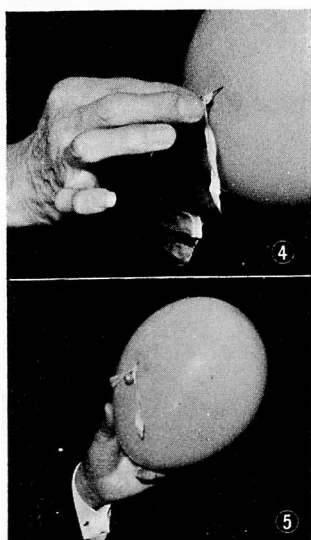
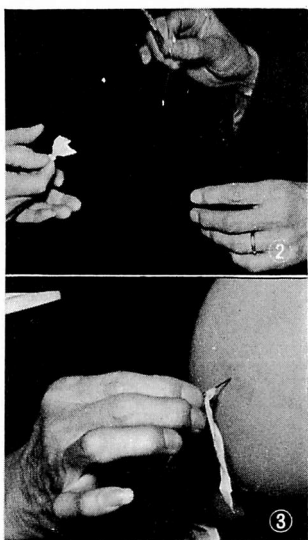
——というわけだ。

●……不死身の風船

《演　技》

適当にふくらませたゴム風船を五～六個用意しよう。そうして、太目のハリか、ハットピンなどで、お立ち合い衆にこれを突かせるのだ。

〽恋は　真赤なゴム風船ハリでつつけば、すぐし

ぼむ……

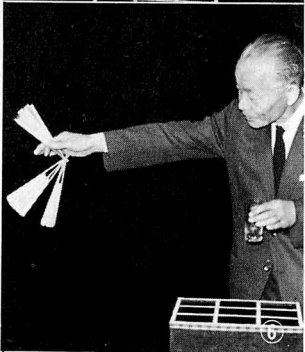
ゴム風船がハリのひとつきでパンクするのは、あまりにも当然すぎるはなしだが、ひとたび術者の魔法の息がかかるときは、どこからハリを刺しても破れぬ〝不死身の風船〟となるから不思議！（写真①～⑤）

《ひみつ》

術者がハリを刺すところには、実はセロテープが貼ってある！——というのがそのひみつ。長いハリを使って、向かい側に貼ってあるセロテープのところからハリ先を突き出せば効果は一段とさえよう。

同じ手で、生タマゴの串刺しを試みるのもおもしろいものである。

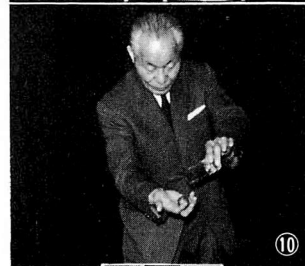
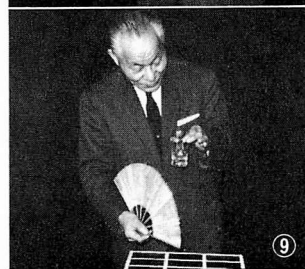
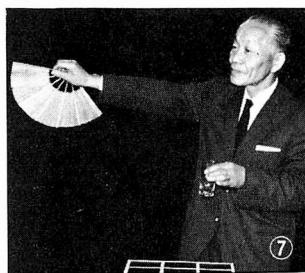
●……ボールの入魂（つけたり、ナンセンス）

《演　技》

マジック・ウオンドをツウーっとひとなですると、一個のボールが出現する（写真①）。これをポン！　と空中に投げ上げてかるくあしらい、一応ポケットにおさめる。（写真②～④）

つぎにカップと扇子をとりあげ、ひとあおぎするが、
これがナンと破れ扇子である。（写真⑤〜⑥）

「や、や、こりゃどうじゃ！」
という思い入れで、扇子をたたみ、再び開くと、完全

な形に復している（写真⑦）。――といった余興も入って、さてカップを持ちあげると、もうこのときは先刻ポケットにおさめたはずのボールがいつのまにかカップに入っている。――そこで扇子であおぎたてると、摩訶不思議！　カップのボールに魂が入って、扇の風のままに、上がったり、下がったりする（写真⑧〜⑩）のだが……〔演ずるは宮村忠男氏〕

《ひみつ》

この生きているボール、実は替え玉で、上衣の内側に黒糸で吊ってあるのだ。見物が扇子のバラバラ事件に気をとられているスキに、カップにこの糸のついた玉をすくい、その手を上下すれば、ボールは糸に引かれて上がったり、下がったりする……というわけ、一通りの演技が終わったら、このひもつきのボールをぶら下げてタネあかしに及ぶのもおもしろい。

バラバラ扇子は、「ナンセンス」という名でデパートに売られているが、ホネが二重になっていて、反対に開けばつながるようにできている。

しかし、普通の扇子を使っても、もちろんできる。お愛きょうたっぷりなユーモア奇術である。

ひっくり返しておまじないをかけると、こはいかに！　米はたちまち倍になってあふれ出すのである。（写真⑥～⑩）

ここで、もう一度道具あらためをして、こんどはカップに水を満たす。そして、同じ手順をくり返すと、水もやっぱり倍になって、両方のカップから出るのである。（写真⑪～⑳）

しかし、これはステージ用で、もちろん専用のカップを用意しないとできないから、あり合わせの茶わん二個を用いて米を水にする演技をご紹介しよう。

まず、白米を盛ったお盆と深めの茶わん二個を伏せて

●……米と水

《演　技》

二個の金属製のカップを持って登場、例によってネタしらべ。――カップの中は、どちらも明らかにカラッポである。（写真①～②）

そこで、一方に米をザラリと盛り上がるほどに入れ、マジック・ウオンドをとかき（斗掻き）として、米を口きりにならす。（写真③～④）

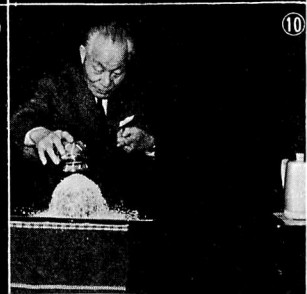
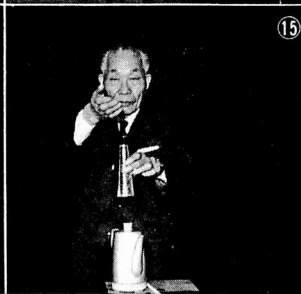
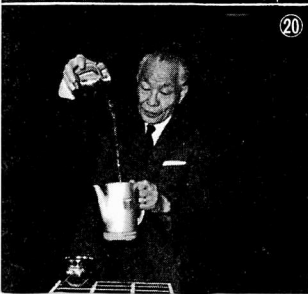
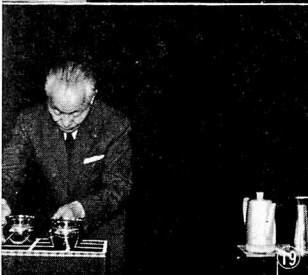
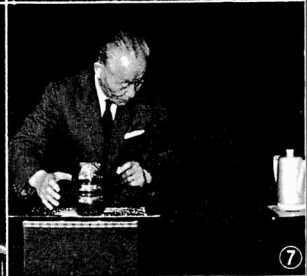
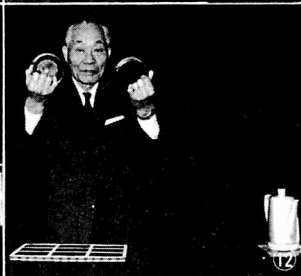
つぎに、もう一個のカップをしらべてこれにかぶせ、

①

②

③

④

⑤

あるお盆を持ち出し、そのうちの一個をとりあげて中をあらため、これにお米を山盛りにして、トカキ（またはマジック・ウオンド）で平にならし、もう一個の茶わんをかぶせて、前同様図のように持ち、クルリと一回転させて上の茶わんをとると、米は倍に盛り上がってあふれ出すから、これを再びトカキでかきおとしながら、

「オン　マダ　マーダヤ　ハン　サウン　フリーン　スワカ……」

と、じゅもんを唱え、フタにした方の茶わんをおこしてかたむけると――ナンと水が一ぱい注がれるのである。〔演者は宮村忠男氏〕

《ひみつ》

実は、二個の茶わんの一個に前もって水を一ぱい満たし、茶わんの口径と同じ大きさに切ったマイカ（雲母板）で覆っておくのだ。これは照明に注意すれば持ちあげて内側を見せても見物にはわからない。これを米を満たした茶わんの上にかぶせて、ひっくり返すのだから、米の方は倍増してあふれるのは当然、そこでマイカの上に盛り上がった米をかき落とすとき、マイカを一しょに除けば、中の水が出るのも不思議はないわけである。

この水を酒に代えて〝インスタントで酒を造る魔法〟とうたい、お立ち合いに試飲してもらえば、さらに大かっさいを博するであろう。

酒を満たしてマイカで覆った茶わんは、盆に伏せておくと吸いついて容易に持ち上がらず、失敗するおそれがあるから、妻ようじを二、三本ならべて、その上に伏せておくとよい。

●……四次元の証明（ツーリングス）

《演　技》

幅10センチ、径1メートルぐらいの布のタスキ（色は赤が一番栄える）を持って登場、まずまん中にハサミを入れてタテに真二つに裂く。（写真①）

そして、一方のリングのまん中にまたハサミを入れて二つに裂くと、……オヤ、オヤ、写真②のような輪つな

ぎができました。

さて、もう一方のリングのまん中に、三度ハサミを入れてタテに裂いていくと、——アリャ！こんどは二倍の大きな輪になりました（写真③）——三次元の世界で、平行線は、どこまでいっても相変わらないのが物理学の原則だときいているんですが。……

《ひみつ》

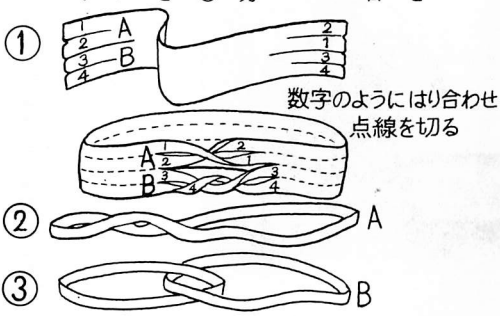
この双生児のリング、実は一方Ⓐは端をひとつひねって縫い合わせておき、Ⓑは二つひねって縫っておく。この縫い目を手前の方にして持ち、はじめⒶⒷの二つに裂き、つぎにまたどちらもタテに裂いていくのである。（初めにハサミを入れるのはゼスチュアである）——、と端をふたつひねって縫い合わせてある方は輪つなぎとなり、ひとつひねって縫い合わせてある方は二倍の大きさとなるのである。——まさに四次元の世界の実証というわけだ！。

① 1 A 2 3 B 4 2 1 3 4

数字のようにはり合わせ
点線を切る

A 1 2 B 3 4 2 1 3 4

② A

③ B

〔実演はＳＳＭＣの中西常之助氏〕

●……チャイナ・チューブ

《演　技》

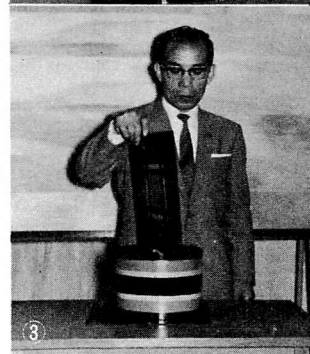
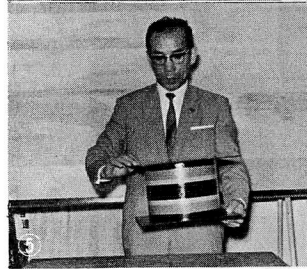
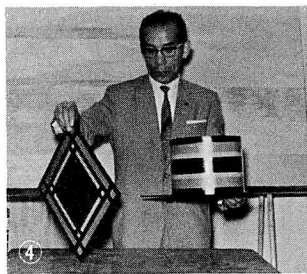
二枚の薄い板と、底のないチューブを持って登場、まず型通りの道具あらためを行なう。

写真①のように一枚の板とチューブをあらためたら、写真②のように上にした板を立て、写真③のように一回転させて、うら、表ともに何のタネ、シカケのないところを承認させ、これを写真④のように持って、もう一枚の板をヒシ形に立ててクルリとまわしてみせ、これをフタにしてもう一ぺんチューブを置き替える。（写真⑤）

そうして、このカラのはずのチューブから、写真⑥のようにハンカチや万国旗、あるいはリンゴ、バナナ、パインなどを取り出し、テーブルせましとならべてみせるのだが、生きている兎などを出現させるとなおおもしろい。

《ひみつ》

一枚の板に、写真⑦のようにネタ袋をつるしておくの

①
②
③

だが、この袋の口を締めたひもを板の中央上部のアナに通し、隅にひっかけるようにしておくと、チューブの中に袋を落として身軽になつた板を写真⑥のように助手に渡して物の取り出しができる。しかし、写真⑧のように糸で吊ったままでも、写真②のようにチューブの上に板を立てて一度まわしてみせると、見物には納得(なっとく)してもらえる。

リンゴとか、バナナ、パインなどはみんなゴム製のイミテーションだが、中に一〜二個のホンモノを交ぜておいて、皮をむいて食べてみせるとよい。

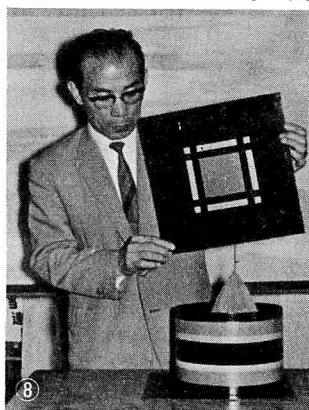
ネタ袋は最後に旗やテープを出すとき、その陰にかくして処理するのが一番無難だが、うさぎなどの場合は板を二枚合わせてその間にかくし、片手にチューブを持てば、少しも気付かれずにすむ。

〔演者はSS MC・桜井隆太郎氏〕

個取り出して、飲んだり、飲ませたりすると、いっそう光彩を放ち、りっぱな舞台芸となります。（写真⑥〜⑨）

《ひみつ》

このネタ場は、写真⑩のように、A面のうらに折りたたみ式にしてとりつけておく。道具しらべのとき、写真②〜③のように、両手を千鳥に組んで返すと、たくみにこれがかくれるから、素早く写真⑤のように三角形にして、左手をネタ場にかけて捧げ持つのだ。

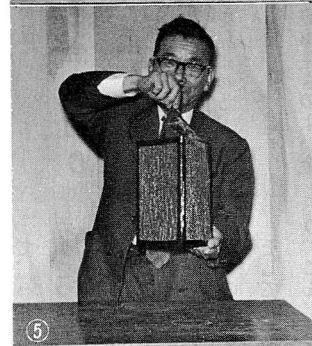
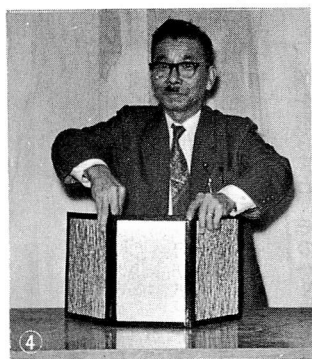
取り出しは他の場合と同様だが、よく伴奏に乗せて手をきれいにやれば、すごく栄える芸である。

●……三枚びょうぶ

《演　技》

美しいデザインの三枚びょうぶを持って登場、写真①〜④の順序で道具しらべを終わったら、写真⑤のようにこれを三角形にたたみ、左手に持って取り出しをはじめる。

——まずハンカチ、万国旗、テープなどを出し、つづいてジュースとか、ビールとかの入ったカップを二〜三

仕込んだだけのネタを出し終わったら、この蛇腹を折りたたんで、写真⑨のように片手でつりさげ、うらと表を見せる。写真⑩はうらから見たネタ場である。

〔演者はＳＳＭＣ・小林勝義氏＝道具も同氏の手作り品〕

●……金魚釣り

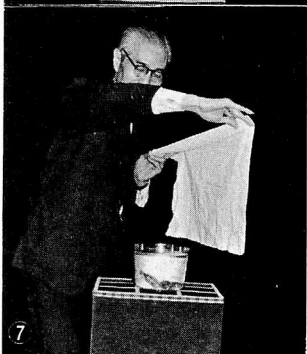
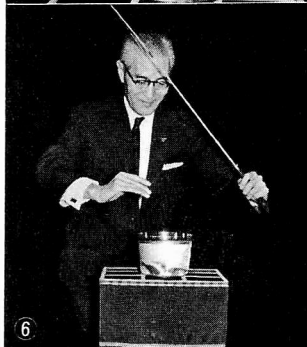
《演　技》

長さ一メートル余りの釣りザオを持って登場、何回となく糸を張り、餌をつけながら観客席を見まわし、

「やっ！」

と、糸を垂らすと、そのハリ先には見事生きのよい金魚が釣られてピョン、ピョンと踊っている。――マジシァンは、そのままよく観客に金魚を見せながら舞台に帰って、ハリから外ずし、テーブルの金魚鉢に放し、またエサをつけてサッ！　と客席に投ずる。――あるいは帽子から、あるいは女性の胸もとから、また「あっ！」と驚いてアングリ開けている口の中から、……アレヨ、アレヨという間に、三尾、四尾と金魚を釣りあげては鉢に泳がすのである。（写真①～⑦）

そして、やがて、一尾ずつではめんどうだ！　とばかり、こんどはタモ（網）に打ち代えて、空中から数十尾の金魚をすくいあげて、同様金魚鉢に泳がせる。

そうして、こんどは大きなハンカチをとり出し、うら

と表をあらためて金魚鉢にかけ、

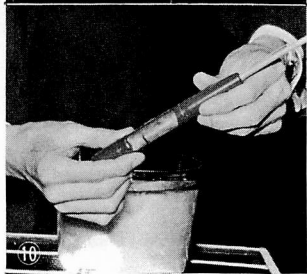
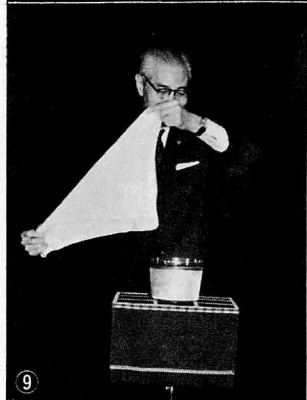
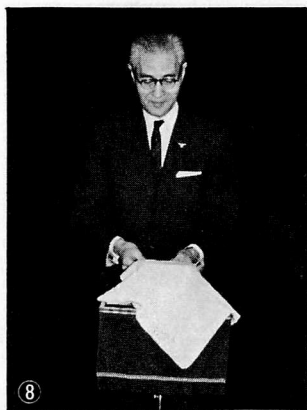
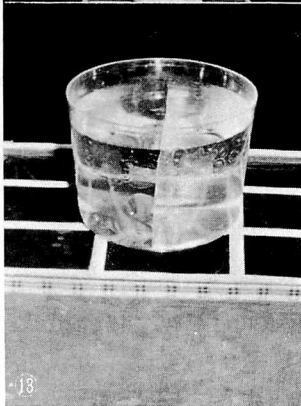
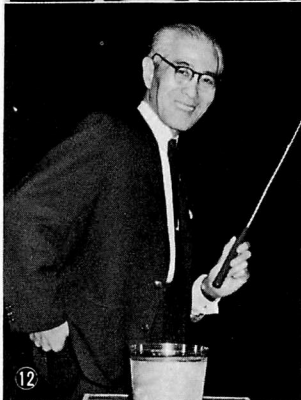
「アーブラ　カダブラ　アーブラ　カダブラ……」

じゅもんを唱えてパッ！　ととりのけると、摩訶不思議！　あれほどたくさん泳いでいた金魚はどこへか消え失せてしまっている！（写真⑦〜⑨）

《ひみつ》

実は、この観客のふところから、口から釣りあげる金魚、はじめから釣りバリにつけて、サオの柄の空洞に入れ、ここを握つてサオを振るのである。（写真⑩〜⑪）

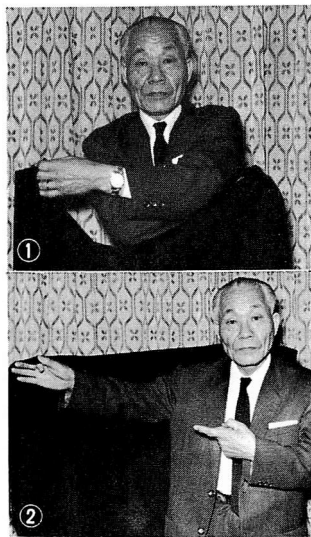
糸を張り、エサをつけると見せるのはゼスチュアだけで、この右手に握っているネタの金魚をパッ！　と放すのだから、どんなところからでも釣れるわけである。

そして、ハリ先におどる金魚に見物の瞳が集まっているスキに、腰に吊したポリエチレンの袋に入れてある金魚をつかみ出し、いかにもハリから外ずすように見せて金魚鉢に放すのである。（写真⑫）

また、鉢に元気よく泳いでいるたくさんの金魚を一瞬に消すのは、この金魚鉢の中央に両面鏡を装置しておくので（写真⑮）、ハンカチの陰で鉢をひとまわしすれば金魚の入つた半面と、水だけの半面がアベコベになるから、鉢はたちまちカラッポになったように見える、——というわけだ。

この鉢を二個使えば、「ワン、ツウ、スリー！」で左から右へ、右から左へ、——金魚群の空中輸送もかんたんである。（写真⑬）

●……金　魚　鉢

《演　技》

おなじみの金魚鉢。——まず大きなテーブル・クロースをとりあげて、うらと表をあらためる（写真①～②）。肩にひっかけて、「タネ、シカケ、何もない！」と手をたたいてみせ（写真③）、もう一ぺんクロースを肩にかけ、

「ワン　ツウ　スリー……」

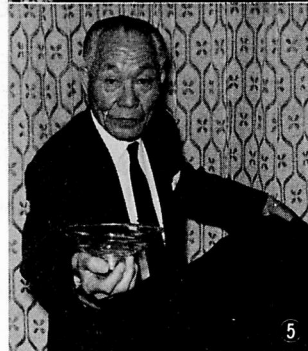
と号令をかけると、見事十数ひきの金魚が泳いでいる水鉢が出現する。（写真④～⑤）——

アマチュアでも、二個までは楽々と出せる。この演技者の宮村忠男氏は、この小鉢を三個出した上で、つぎにはテーブル一ぱいになる大鉢に錦鯉まで出してみせて、NTVの〝紅白何でも合戦〟ではチャンピオンの座を占めたが、ここまでの十八番芸に仕上げるには、相当の年季を入れなければならない。

《ひみつ》

この水鉢も、このごろではプラスチック製の軽快なものができたので、大へん演じ易くなった。いうまでもなくゴムのキャップがしっかりとかぶせてあるので、季彩のようにトンボを切っても大じょうぶだ。

――これをタスキで胸の両脇にピッタリと吊っておくのだ。テーブル・クロースには何のシカケもないが、これをかぶせてゴムのキャップをむしりとるのだから、鉢を出す前に更のクロースを用いる必要がある。

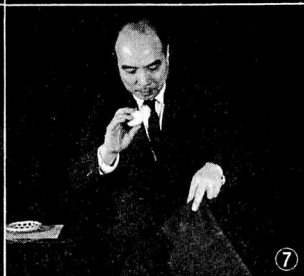
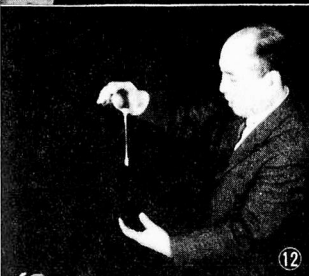
この道具も、今ではデパートの奇術用品売り場で売っているが、大鉢を出す技法は未だ秘にしておかねばなるまい。

なお、先年来日した中国の楊小亭氏は、大小十八個の水鉢をズラリとならべて見せて、人々の度胆を抜いた。しかし、これは中国服を着てこそできる芸当である。

（写真⑥）

●……帽子玉子

《演　技》

まず、手ごろ（ヨコ35センチ、タテ25センチぐらい）

⑪
⑥
①
⑫
⑦
②
⑬
⑧
③
⑭
⑨
④
⑮
⑩
⑤

の袋を持ち出して、内外をよくあらためる。（写真①〜⑤）

そして、空中から何かを招き入れるゼスチュアよろしく（写真⑥）袋をゆさぶると卵が出現する（写真⑦）

これをくり返して、卵を五個ぐらい出したら、そのうちの一個をカップに割って、ハシでよくかきまわす。（写真⑧〜⑨）

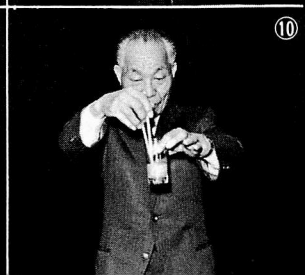
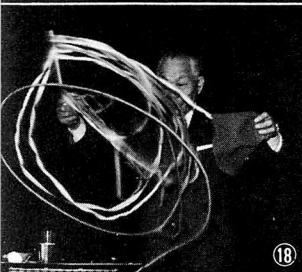
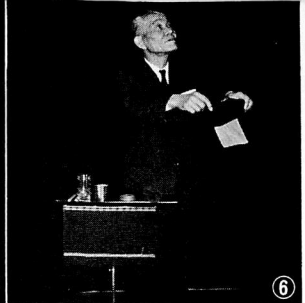
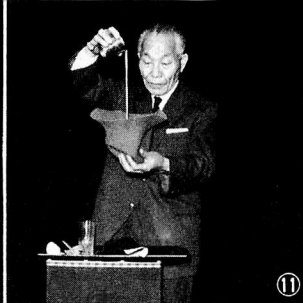
つぎに、見物から帽子を借りて、一応よくあらため、この中へ卵を溶いたカップを落し込む（写真⑩〜⑪）が「これは早まつた」という表情でカップを一度取り出し、帽子へジカに卵の溶液をあけて、よくゆさぶる。（写真⑫〜⑬）と、帽子の貸し主の顔色が変わる。

そこで、いきなり貸し主にその帽子をかぶせて、もう一度驚かす手もあるが、写真⑭のように術者がかぶってもよい。そうして、脱帽してあらためる（写真⑮）が、中はよごれていない。ハテ卵の溶液はどこへ行ってしまったのでしょう？〔清水長次郎氏所演〕

《別　法》

この袋、このごろでは片面がナイロンで半透明になったものができて、写真①〜⑤のように、中に入れてあらためるとき手がよく透けて見えるから効果は倍増した。

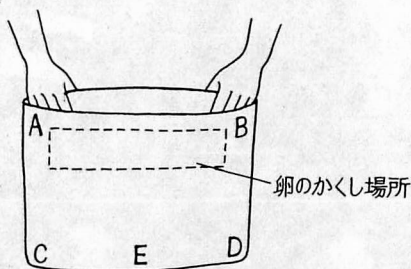
こうして、袋の口をひらき、魔法を施すと、このナイロ

⑯
⑪
⑥
⑰
⑫
⑦
⑱
⑬
⑧
⑲
⑭
⑨
⑳
⑮
⑩

ン張りの窓に、突如として卵が出現する（写真⑥〜⑦）から、これを取り出してカップに割り込む（写真⑧〜⑨）。かきまわして帽子に流し込む（写真⑩〜⑫）までは前と同じだが、こんどは扇子であおぐと、卵の溶液は花吹雪となって飛び散ってしまう。（写真⑫〜⑭）

そこで、再び帽子を絞ってあらため（写真⑮〜⑯）、ハデに紙テープを出して終わる。（写真⑰〜⑲）

〔演ずるは宮村忠男氏〕

《ひみつ》

袋は、いうまでもなく二重になっていて、タネの卵は、どんなに乱暴に扱ってもだいじょうぶのようにプラスチックか、木製のイミテーションを使う。後で割ってみせるのは、もちろんホンモノだが、これはテーブルのネタ場に用意しておいてスリ替えるのである。（熟練すれば初めからホンモノも使えるが）

A B C D E
卵のかくし場所

袋のつくり方にもいろいろあるが、初歩の人にも一番楽にできるのは、底のE部にタネ卵の出入口をつけ、袋の手前になる方のうらにサカサ袋を縫いつけておくのである。

最初、袋あらためのときは、このタネ卵が袋の口の方に来ているようにしておき、これを左、右いずれかの手の内に入るように袋を持ち、両手を千鳥に組んでさかさまにすると、ネタ場は依然として手前になる。そこで、この一方をくわえて袋をしごきテーブルの上でたたいてみせ、二つ折りにしついでキリキリと絞るが、このときタネの卵はいつも手の中に入るようにすると見物にわからない。〔口絵宮村忠男氏の演技参照〕

そして、さらに一方の手のひらにたたきつけて、袋がまったくカラであると見せ、袋を正常に持って、空中から何かを招き寄せるゼスチュアをしながら手をゆるめると卵は底に落ちるから、これをネタ場から取り出せば

よいのである。(消すときは手順をこの逆にする。そして割る方のホンモノをテーブルのネタ場からとるのだ)

さて金属製のカップは、図のように二重になっていて、初めに帽子の中へ入れたとき、外側を中において取り出すのだから、トロトロに溶いた卵を注ぎ込むのは、この外側のカップなのだ。そこで注ぎ込んでしまったら、再びカップを重ねて取り出せばよいので、紙吹雪や、テープは帽子あらためのとき、テーブルのネタ場からたくみに運んでおく、——というわけである。

●……魔法の時計

《演　技》

厚い一枚ガラスの、——よく見透しのきく時計を提げて登場、なおも念入りにうらと表をしらべるが、もとよりタネのかくしどころのないガラス時計だ。

針も、とりはずし自由なので、これを何回かグルグルとまわしてはずし、

「この通りタネ、シカケの余地のないガラス時計ですが、私の言うことは実によくききわける、可愛いいやつでございます。論より証拠、お客さま方からお声のかかったところで針を止めてごらんに入れましょう。さア、何時にいたしますか。——」

とやる。——とたんに、

「8時!」

「5時!」

「10時!」

と声がかかるから、

「はい、ではまず8時で止めてみましょう」

と、針を中央にはめ込んで勢いよく、クルクルクル！と弾いてやる。

針は文字盤をいく周かして、だんだんスローになり、そのうちにどっこい、どっこいと行き戻りするが、とど指定の時間を指してストップする。——時間を変えてなん回やっても、針先は必ず指定通りのところに止まるから、その度毎に見物は首をひねりながら拍手してくれるが。……

（写真①〜⑤）

《ひみつ》

新しいこのガラス時計は実に巧妙にできている。が、要は針をはずして口上を述べながら、指定される時間に合わせて針の重心を変えるのがひみつで、目盛り通りにずらせばよいのである。きれいで、見栄えのするステージ・マジックだが、ネタの操作はいたってかんたんであ

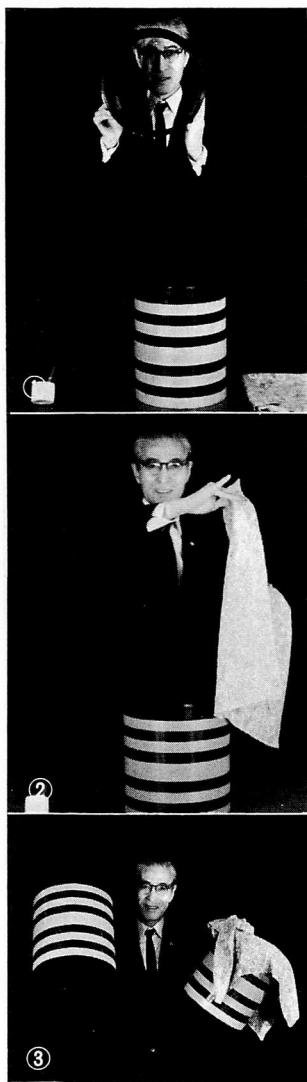
る。これもまた、たいていのデパートで手に入れることができる。

●……支那せいろう

《演　技》

二つ重ねの支那せいろうと大判のハンカチを持ち出し、せいろうは一つずつ、交り番こに、ハンカチも例によってうらと表をあらためる。（写真①〜⑦）

そうして、ハンカチをとりのぞくと、せいろうからはまずランタンが四個ほど出現する。これを架台につるしたら、せいろうをもう一ぺんあらためて、つぎに布ざらしを見せ、またせいろうをあらため、こんどはせいろうを二個ともに持ちあげると、水がめが出現する。（写真⑧〜⑫）

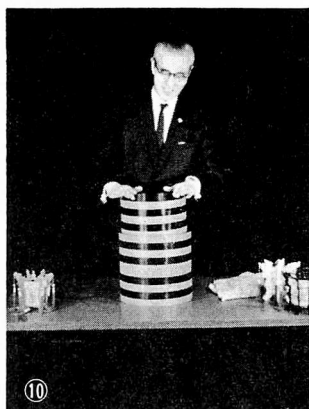
水がめの水はひしゃくですくってみせ、これに内側の小さいせいろうをかぶせようとしても、そうはならない（写真⑬〜⑮）。が、外側の大きいせいろうをかぶせて、ハンカチをかけ「えいッ！」と気合いをかけるとはまってしまうから、ここで二個のせいろうを一しょに持

ち上げて見せるが、タネは発見されない。（写真⑯〜⑱）

——これはもうりっぱな舞台奇術だ。伴奏には「太胡船」「支那の夜」などがよくマッチする。中国服を着ると一そう引き立つことはいうまでもない。

《ひみつ》

中国ムード一ぱいの華麗（かれい）な奇術だが、このセットも現在ではデパートの奇術材料売り場で入手することができる。折りたたみ式のランタンやシルク、あるいはバネまり、ゴム製品のバナナ、パイナップルなどもとりそろえることが可能だから、大型のせいろうを求めると相当量を取り出してビックリさせることができる。

——これらの品々は水がめの中にかくしておく。水の入っているのはかめのクビのところだけ、ひっくり返せば中はガラン胴なのである。

せいろうのしらべ方は、はじめに重ねて持ち出し、まず外側を抜いて写真①のように見せ、これを元に戻して、内側を抜き出して同様に見せる。このとき、水がめは逆に入っているから、内側のせいろうと一しょにつかみあげるのだが、このネタをカモフラージュするために大判のハンカチは実に微妙（びみょう）な働きをするわけである。

⑩

中でセットした品物を取り出し終わったら、内側のせいろうを逆にして水がめを出現させる。そうしてせいろをはめてもつかえて中におさまらないのは、もちろんせいろうの上下の口径が違っているからだが、クルクルと回転させて、その差異を気付かせないようにするところが手練（しゅれん）である。

ランタンには、豆電球と小型電池が入っていて、灯のともるようにできている高級品があるから、これを使うといっそう栄える。〔口絵参照〕

●……ふくろ抜け

《演　技》

人間一人がすっぽりとおさまる大きさの袋を持ち出してまず内外をよくあらためる。――もちろん、どこをどう引っ張ってもぬけ口はないし、縫い目もしっかりしている。お立ち合いに中に入ってしらべてもらえばなおのこと納得してもらえるはずである。

そこで、術者はお立ち合いに手錠をはめてもらい、そのカギをお立ち合いに預け、袋に入って、口をしっかり締め、ロープを固く結んで、その結び目を解くことができぬように、お立ち合いのハンカチを結びつけてもらう。（写真①〜⑤）

さて、こうして袋に入れられたまま、助手と共にキャビネットに入り、カーテンを閉めて顔だけ出し（写真⑥）

「このように、手錠をはめられた上袋に閉じ込められましたが、これから私がワン、ツウ、スリーと号令をかけますから、そのスリーのかけ声と同時に私をおつかまえになった方には、わずかでございますが金壱万円也の賞金を進呈いたします。よろしうございますか、ハイ、ワン、ツウ、スリー！」

とお愛きょうをふりまいて、ヒョイと顔を引き込める。お立ち合いは大急ぎでカーテン越しに袋をつかむが、――ナンとカーテンをあけてみると、袋に閉じ込められているのは助手で、マジシァンはその後ろから悠然と立ち現われるのだ。（写真⑦）

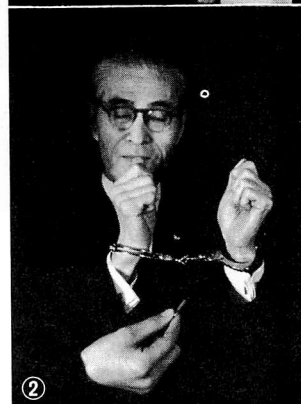
「いかがでしょう。袋の口がゆるんではおりませんでしょうか、あなたの結んでくだすったハンカチに異状はございませんか、よくよくお調べください。……異状ありませんね、では解いてください」

と、袋の口を締めたロープを解かせる。中から現われた助手は、念入りに手錠がはめられているから、これも預けてあった合い鍵で外してもらう。（写真⑧〜⑪）

――このままの姿でトランクに入れるのがトランク抜けだが、アマチュアならこの袋ぬけ程度で十分たんのう

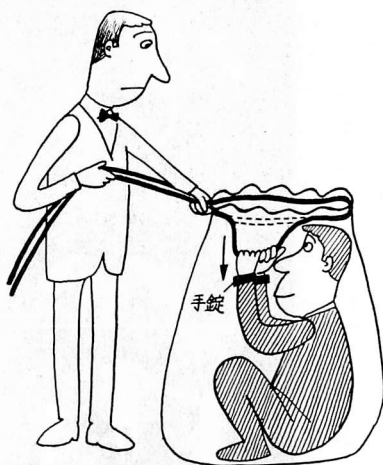
してもらえるであろう。

《ひみつ》

この不思議な袋も、手錠も、奇術材料店で入手できる。実は口を縮めるロープを図のように中から二、三十

センチ引っ張って結んでもらえば、どんなにきつく縮められても、楽々と袋の口をぬけられるし、トリックの手錠はシカケのボタンをSTOPの方へ押しておくと、ある間隔以上縮まらないのでカギはそのままで手を抜くことができるのである。

カーテンを閉めて顔だけ出し、懸賞付きの口上をのべるのは、この間に助手と入れ替わる時間をかせぐためなのだから、タイミングよく号令をかければ、もちろん賞金は出す必要がないというわけだ。

(註)この奇術は、未だにプロマジシャンも舞台で演じているので、タネあかしを遠慮して来たが、既刊の他の奇術書に発表されたことだし、材料も市販さるるに

至ったので、公開に踏み切った。また、近ごろ舞台で使われているのは、これよりも遙かに進歩したトリックである。

●タンバリン

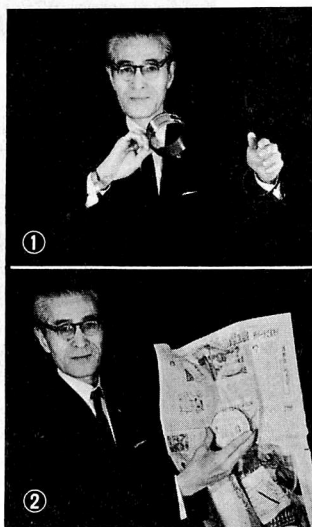
《演　技》

形が楽器のタンバリンに似ているのでこの名がある。

このタンバリンの胴と、それにはめるタガを両腕に通して登場、新聞紙のうら、表をよくあらためて、この胴に貼り、タガをはめる。（写真①～③）

つぎに、うらを返して中が空であることを確かめ、もう一枚の新聞紙を貼ってタガをしめ、はり合わせた二枚の新聞紙をきれいにむしりとってタンバリンを左手に持つ（写真④）。そして、右のひとさし指でタンバリンのまん中をポン！と突き破り、まずシルクを三枚ほど（いうまでもなく色変わりにして）引き出し、ついで万国旗などを出し、最後にテープを引き出し、しだいにスピードを加えながらマジック・ウオンドでからめてテーブル

①

②

にテープの山を築いたら、これの陰から大きなくす玉を取り出す。（写真⑤〜⑩）

――くす玉の代わりに、パン、パン！とクラッカーを飛ばしたり、あるいは大国旗を振り出したり、いろいろ

趣向をこらすと、またひとしお栄えるはなやかなステージ・マジックだが、道具さえ手に入れば、誰にも容易に習得ができて、かっさいを浴びることができる。

⑨

⑩

《ひみつ》

タンバリンは二重になっていて、取り出す材料はもちろんこの中に入れる方にセットしておき、マジック・テーブルのセルバント（秘密棚）か、用具箱の陰に忍ばせておく（写真⑪〜⑫）。そうして新聞紙を二枚貼り合わせたとき、その新聞紙の陰でこれを手早くはめ込み、このタネの仕込みが終わったら、周囲の新聞紙をきれいにむしりとるのである。

紙テープはマジック・ウオンドにからんで大きく巻きとり、これを山にすれば相当のカサになるので、その陰からバネシカケの薬玉や折りたたみ式の国旗などを振り出すのはわけのないことである。紙テープは、中央のシンを抜き、10センチぐらい引き出しておくと取り出しが容易である。

なお、これは伴奏がないと引き立たないから、ぜひレコードを使いたい。地方のこども会などでやる場合は、だれもが知っているわらべ唄などを一しょに歌いながらやると喜ばれる。シルクや万国旗の引き出しには、サクラサクラでも、モシモシ亀よでもよく合うし、テープになったら汽車、汽車、シュッポ・シュッポなど、だんだん調子を早めながら歌うと、りっぱに伴奏の役目を果せる。

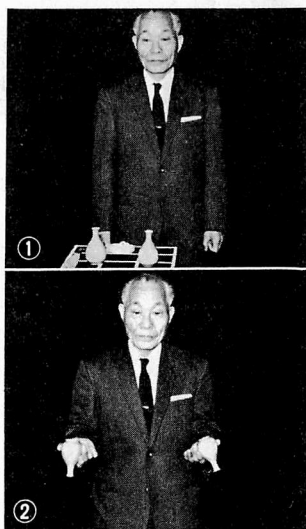
このごろでは、このネタ筒も両面紙貼りになるシカケのものができ、セットした内容物を取り出した後、再びタンバリンを腕に通してみせることのできる優秀なものも会員組織で頒布(はんぷ)されている。

●……若狭の水（日本古典手妻）

《演　技》

おなじみ古典手妻「若狭(わかさ)の水」は昔から有名な舞台芸である。正面は一双の金屏風、左右のテーブルには高脚の台に二本のお銚子、もう一個の台に水差し、そして両脇に金蒔絵の燭台が立っていて、真新しい百目（三七五グラム）ローソクが差してある。……というのが本来の道具立てだ。

幕があくと口上言いが下手から登場して、白扇を前にかまえ、

〽東西、舞台高うなござりますれど、不弁舌なる口上なもって申し上げ奉りまする。さてもご当所は花の都、あまた諸芸人衆入り代り、たち代り、いろいろさまざまご覧に入れましたるその後にござりますれば、いかようなる芸当をお目にかけましょうとも、これをもってお目に止まる儀はござりませぬ。なれども、下手（へた）は上手（じょうず）の引き立て役、蝶々とんぼも鳥のうち、枯木も山の賑わしとござりまする。

したがいまして、ただいまは一番太鼓打ち込みましたるばかりにて、楽屋にては太夫身ごしらい、舞台にては後見道具しらべの間、いまひとはやしはごようしゃ。……

ここで再びにぎやかにお囃子(はやし)が入って、その間に口上言いがローソクに火をともす。――というのが定法だ

①
②

が、お座敷でこれは少々ぎょうぎょうしすぎよう。

〽東西、長らくの間うち囃しまして、さぞお耳やかましういらせられましたことと恐縮に存じまする。太夫身仕度な相調いますれば、まず正座までは控えられまァす。

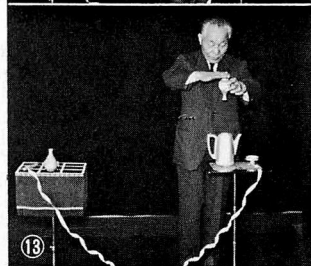
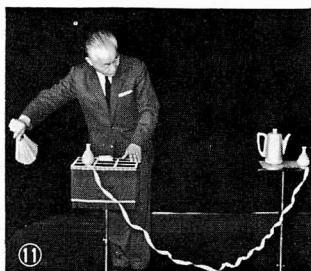
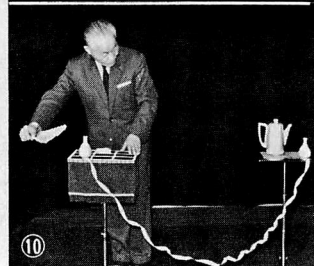
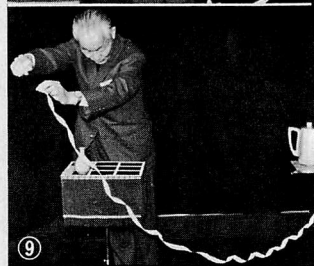
ここで太夫登場、見物に向かってうやうやしく一礼する！と、また口上言いが、

〽控えられましたるは当一座の花形、昇玉斎天月にござりまする。お目見得相すみますれば、さっそくながら二、三番とりたてましてごらんに入れます。まずは口上さよう。……

と太夫を紹介、こんどは太夫が代わって、

〽手前受け持ちは相変わらずの手妻とござります。持ち出しましたるはお銚子が二本、ご当所にて拝借の品にござりますれば、もとよりタネ、シカケのあろう筈はござりませぬ。

と、これより道具しらべとなる（写真①〜③）。太夫はカミシモ姿、女太夫なら、前髪のようらくに大ローソクの灯が映えて、舞台にはようやくたいとうたる気分が漂う……ということになるのだ。

そのつもりで、よろず古風な演出をすることが、この

古典手妻を引き立てるとおもいたまえ。

さて、ネタあらためも済んだら、

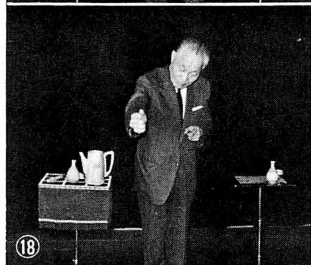
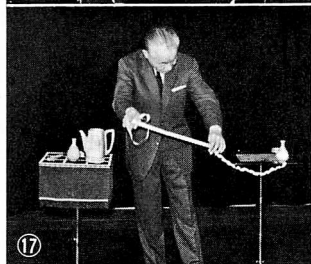
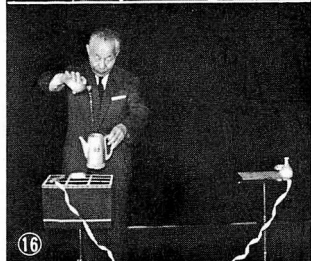
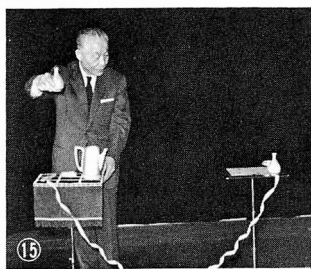
〽こちらはこの通り水無しの井戸

と、一方の銚子をさかさまにして振ってみせ、

〽これなるお銚子には水気なみなみと注ぎ入れまァす。

と、水差しをとって一方の銚子に水を満たす（写真④〜⑦）。つぎにふところから一折りの半紙をとり出して一枚をはぎ、

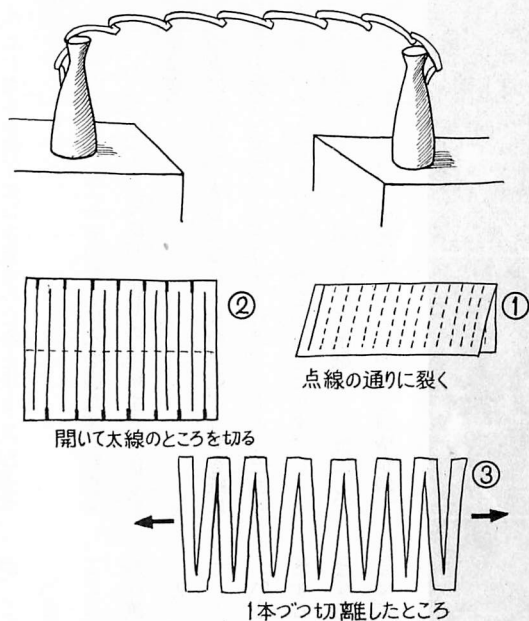
〽つぎに取り出しましたるは一枚の半紙、うすき紙にもうら・表のたとえもござりますれば、一応とくとあらためまして、えにしの旗一流れをしつらえます。

と、お囃子にのって、図のように半紙を二つ折にし、つぎつぎと裂いて引きのばすと、いっそう風情が増すが、このごろはたいていテープで間に合わせる。

〽渡るに由なき天のかけ橋、ただいましつらえましたるえにしの旗、こなたのお銚子よりかなたのお銚子にとかけ渡しまァす。

と、写真⑧〜⑨のようにしたら、おもむろに扇を開いて、

〽さて、奈良は二月堂に若狭の水と申す井戸がござりまする。この井戸は毎年一月は十と六日、海の潮が満ちまするると遠く若狭の国よりこの井戸へ水が通うとござりまする。いささかこの儀をかたどり、彼方の銚子からこ

なたの銚子へ水を通わせるのでござりまする。空中電信通いの水、稲穂を伝う露の玉水、エエショー……プレートウパス！

と、〃えにしの旗〃をあおいで水を通わせるかたちよろしく、扇をおさめたら、さっきの「水無しの井戸」の方のお銚子をとってさかさまにすると、水がドクドクと出てくるが、「水気なみなみと注ぎ入れた」方はいくら振っても出て来ないのである。（写真⑩〜⑯）

〜大じょうぶ通いましてございます。

と、ここで〃えにしの旗〃をとり外し、手の中にまるめて絞ると、雫がポタポタと垂れる（写真⑰〜⑱）ので、またかっさい!!——というところで終わるのだが。……

《ひみつ》

実は、さきに「水無しの井戸……」といってさかさまにしてみせるお銚子には、水を一ぱい入れて、口に上質の京花を張っておき、「水気なみなみと注ぎこむ」お銚子には海綿を小さくちぎって⅓ぐらい入れておくのである。

海綿は見事に水を吸ってくれるし、京花を張った方は指でチョイと突けば一ぱい水が入っているのだから、「待ってました！」とばかり出てくるというわけだ。〃えにしの旗〃をたぐっ

て絞って出る水は、これも海綿にたっぷり水をふくませて耳の後ろにはさんでおく。扇子をたたんで襟（えり）にさし、返す手でこれをにぎって来る…という手順なのである。

〔宮村忠男氏所演〕

●……人気の反映（霊感術）

《演　技》

「このごろ霊感女優などという人が出現して話題をにぎわしておりますが、私の霊感術もソートーなものでございます。ここでひとつ実験してお目にかけることにいたしましょう。

ところで、皆さまのお好きなスターはだれですか？――これからカードをお配りしますから、どうぞお好きなスターのお名前をお書きになって他人に見えないように折りたたんで箱にお入れください」

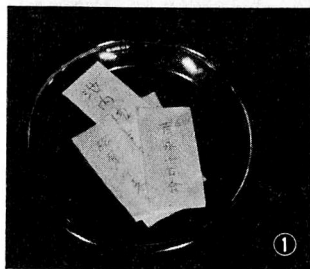
と、助手にカードとサイン・ペンを持たせて客席をまわらせる。何人でもよいが、まず六、七人から十人ぐらいでよろしかろう。スターの名を書いて折りたたんだ投票紙をよくかきまわして、

「では、この中から一枚を選んでいただきます」

と、書かなかった見物にとらせ、助手が舞台に戻ったら、残りのカードを銀盆の上にあげて燃してしまう。そして、――

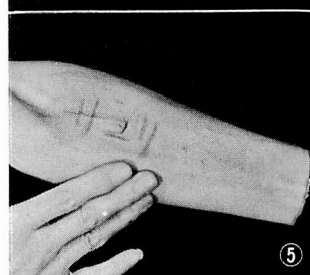
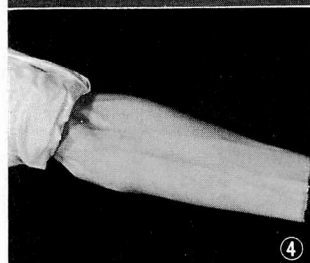
「さア、どなたがだれの名をお書きになり、その中からだれが選ばれたのか、私にはまったく知る由もないのでありますが、人気というものは恐いもので、いま私が精神統一をしてこの灰を腕になすりつけますと、その選ばれたスターのネームが、アリアリとこの腕に反映をみせるのでございます」

と、アブラ　カダブラのじゅもんを唱えながら腕をまくりいま燃したカードの灰をなすりつけると、……まこと、そこには入れ墨でもしたかのごとく名前が浮き出すが、お立ち合いが抜

①

きとったカードと照らし合わせると、それがピタリだから、客席からは感嘆のため息と共にかっさいの起ることとうけあい。

《ひみつ》

実は、前もって石鹸(せっけん)のカケラをちょっと濡らして腕にだれかの名を書いておくのである。だから、抜いてもらうスターの名前はそれと同じものでなければならない。――したがって、もちろん替え玉である。

このチェンジの方法はいろいろあるが、一番手ぎわよくいくのは、箱の底を二重にしてネタになる替え玉を下に入れておく。見物に書いてもらったのはその上げ底をめくればその陰にかくれてしまうので、選んでもらうのは、そのネタの替え玉だから、どれをとっても腕に書かれたネームとピタリ合うのはあたり前だが、このひみつを知らないお立ち合いには、まったくもって不思議なのは人気の反映!――と感心されるわけだ。世の霊感術などというものの正体はおおむねかくのごとしと知りたまえ!(客席に「さくら」を忍ばせておいて、まずあらかじめ腕に書いた名前を最初に読みあげてもらい、全カードにその名ばかりを記入するという手もある。)

●……おなじみ花吹雪（古典手妻）

《演　技》

半紙一帖、カップ、水差し、マッチ、舞扇（白扇でもよい）を前にして一礼（写真①）、

「東西、これよりご存じ日本固有の手妻・花吹雪をごらんに入れます」

と、半紙をとりあげて一枚を剝ぎとり（写真②）、

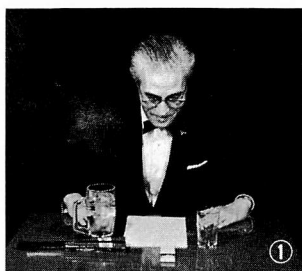
「とりいだしましたる一枚の半紙、うらと表をとくとあらためまァす。……タネ、シカケのございませんところ、お目に止まりましょうならば、これを小手のうちにて折りあげ、剣の形にといたしまする」

と、写真③のように折り、

「邪悪調伏・悪鬼退散、これを炎にかけますれば、不動明王は火焔の体とございます」

と、マッチをすって白紙の剣先に点火、大きくふりまわしながらハデに燃して、残りを手の中でもみ、

「燃えのこりましたる白紙、小手のうちにてよりあげ、はるか彼方に投げますれば、しばらくはそよ風にゆらぐ

⑤ ⑥

川辺の柳のてい、——」

と、手中のテープを投げる（写真④〜⑦）。そして、

「柳の梢は一枝、二枝、ギヤマンの水にと浮かべ、扇のかなめにと移しとります」

テープをたぐり、ほどよいところで千切ってカップに入れ、水差しから水を注ぎ扇の柄にからめとったら、左の手を添えてしっかりと絞り、よく水を切って軽くにぎり、品よく腕を伸ばすと、持ちかえた扇でポン！　とその腕をたたき、扇をサッ！　と開いて、

「さても都の春はらんまん、嵐山は落花のかたちとございまァす！

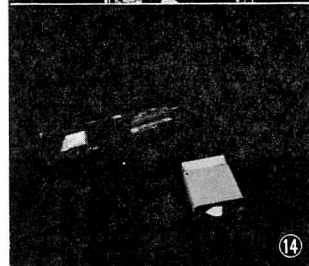
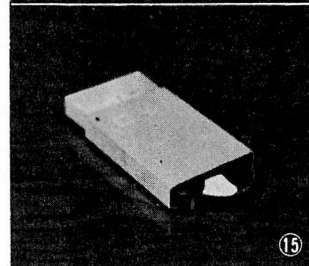
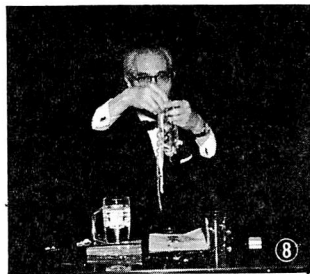
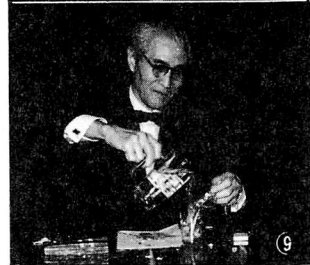
——」

と、あおぎ立てれば、左のにぎりこぶしから見事に花吹雪が飛散するのである。（写真⑧〜⑬）

⑦

《ひみつ》

〝川辺の柳〟と変わらせる投げテープ（まき）は、マッチ箱を半分あけた空間にかくしておくのだが、白紙をあらためて剣の形とし、これに点火して箱を閉めると、白紙を持った手の中に自然に落ちこむから、燃え残りをもみ消すと見せながら、このテープの外輪を指にかけ、まん中を押してパッ！と投げるのだ。

そして、たぐり寄せてほどよいところで千切り、水を注いで扇のかなめですくいとり、これを絞って、扇を持

ち変えるとき、何気なく左手で地紙をしごき、この間にかくしてある紙吹雪を手の内ににぎるのである。——だから、もし手が濡れすぎていると思ったら、素早くハンカチで拭くがよい。しかし、しっかり絞ればその心配はま

ずない。(写真⑭〜⑯)はそのタネのかくし方である。

なお、この古風な口上を入れるときは、やはり和服で演じたいもの、写真のような姿でやるときは口上ぬきで伴奏だけでいくべきであろう。洋楽でもけっこうマッチする曲がいくらでもある。

口上入りで古風に演ずるときは下座囃子の「柳橋のおくり」などで出て「佃」「くるわ風景」「千鳥」等を適宜にアレンジして用いるとよい。

⑯

●……お皿の行方

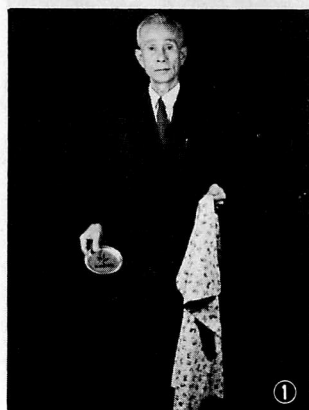
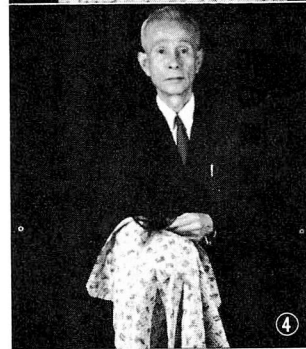
《演　技》

とり出しましたるは一枚のふろしき。うらと表をあらためたら、つぎに一枚の小皿をとり出して、これにあらためたふろしきをかける。上からたたいてみせると、カチカチと音がして、皿の存在は確実である。

そこで、「ワン　ツー　スリー!」

号令をかけてふろしきを除けると、皿は行方不明になってしまう。

①　②

ここで、「こんなところに……」という思い入れで、

ポケットから消え失せた皿を出してみせたり、皿を二枚に倍増させる手もあるが、これは略した方が効果的な場合もある。臨機応変にやるがよい。（写真①〜⑧）

《ひみつ》

ほんとうのひみつは、ふろしきのうらにポケットをつくっておき。ここに皿を入れるわけだ。もう一枚の皿は前もって上衣のポケットに忍ばせておくので、これもタネあかし用の演技として好適のもののひとつ。——ふろしきの裏模様は細かながらものを用いること。（写真⑨）〔田島義秀氏所演〕

●……花の饗宴

《演　技》

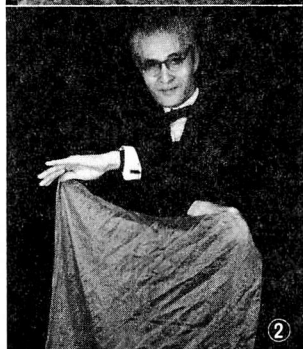
例によってハンカチのうらと表をあらため、そのハンカチをさっ！と引くと、空手（からて）のはずのにぎりこぶしに見事な花が咲くのである。銀盆をさし出させて、ひとつ落とせばまたひとつ。——紅・白・黄・緑・むらさき……と、五色の花は無限にこぼれる。それも、右が終わったかとおもうと左から、左も尽きたかとおもうとまた右から、……みるみる銀盆に山と盛られ床にあふれるから、きれいである。

《ひみつ》

ご存じバネ花である。15～16個をひと束にして輪ゴムをかけたやつを、えりのポケットにしのばせておくと、ハンカチをひろげたときにかんたんにとれるから、これを右手にパームして、写真①～②のようにハンカチのうらと表をしらべ、③～④のようにハンカチをとると、もう指頭には花が咲くのである（写真⑤～⑥）。片手操作が容易であるから、だれにもかんたんにできる。

そして、右手に見物の視線が集まっているうちに、左手をポケットに突っ込むと、そこにもネタを忍ばせておき、左手から花を出しているときに右のポケットから新しいネタをとるようにすれば、無限に花は咲き、そして

こぼれ、あふれるのである。

（スプリング・フラワーは、どこのデパートの奇術用具売り場にも売っている。本書巻末に紹介した奇術材料店には常備がある筈。）

●……火炎のごちそう（火食いの術）

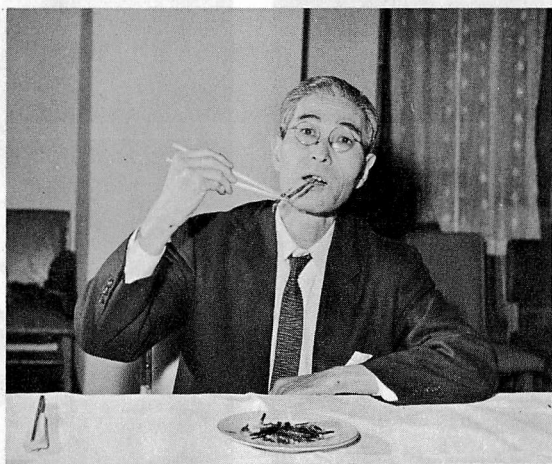
《演　技》

あるアマチュア奇術の会では、キャンプ用の携帯こんろを使ってこれをやった人があった。ハデに炎があがって、効果百パーセントであったが、これは用意がいささか大げさ、お座敷の余興では、かんたんなマッチで点火することにしよう。

借用するものは銀盆か大皿、これに割ばし五～六ぜんの、まず袋を重ねて敷き、おはしをポキポキ折ってその上に積み、マッチで火をつける。

「心頭を滅却すれば火もまた涼し、会社のためなら火の中へでも飛び込んでみせますよ！――などというゴマすりはもう古い。ボカアその火を食ってしまうモーレツ男の意気をお目にかけようというんです！」

てな気焔（きえん）を挙げるのもゆかいだろう。

さて、割ばしの火はえんえんと燃えあがる。（はし袋だけで火付きが悪かったら、新聞紙をひねって使うがよい）から、もう一ぜんのはしでそのよく燃えたオキをはさみとり、フー、フーと吹いてパクリ！　と食ってしまう。三本、四本……さもうまそうに平らげたら、「ああ

燃える火をうまそうに食べる著者

うまかった!」というこなしでゴクゴクと水を飲み、ハンカチで口のまわりを拭くと、こんどはどうやらハラが熱くなったという思い入れよろしく、やおら口を開くと、――ナンと炎の大饗宴、早打ち花火のように火の粉が噴出するのである。(このときはぜひ照明を絞りたい、その設備のない場所でやるときは、せめて演者の周囲の電灯のスイッチを切っていただきたい)

また、火炎の代わりに真紅の紙テープをハラハラハラハラと吐いてみせる手もある。お座敷の場合はこの方が無難でもあり、優雅で美しい。

《ひみつ》

思いきって火を食ってしまうだけのこと。――ただし、くちびるに火を触れない注意が肝要、つまり歯で受け止めて、急いで口を閉じるのである。口を閉ずれば酸素の供給がたたれるし、口中は水分が一ぱいなので、火はすぐ消えてしまって、少しも熱くなどはない。

しかし、燃料は、杉とか、桐とか、あるいは京花紙か綿のようなやわらかなものに限る。割ばしはたいてい杉だから、一番安全な材料だが、高級な竹製などは敬遠すること。

また、よく燃えきっているものを食うべきで、燃えさしでは噛み切れないから体裁がわるい。炭はいくら食べても、かえって胃の薬になるくらいのもので害にはならない。

――こうして、火を食べて水を飲み、その口をハンカチで拭くのは、極めて自然の運びだから、何の不審も抱かれないが、実はこのとき、ハンカチに秘めたネタを含むのである。

火焔のモトには懐炉灰を使う。ちょうどこの懐炉灰の入る青竹の筒か、竹の皮(人造竹皮でよい)を二枚合わせて、その中にミソ(味噌)をはさんだもので懐炉灰を巻き、二センチ半ぐらいの長さに切り、懐炉灰のまん中にトロトロに熱した千枚通しを突き通しておく。――すると、懐炉灰のシンに火がつくので、これをくわえてフーッと吹けば、美しい火の粉が一めんに飛ぶわけだ、身体をナナメにして、首を振りながら吹くと、効果はいっ

そう高まるが、日本座敷でやる場合は、前もって古いゴザでも敷いておくようにしなければならない。

火を食って吐く怪僧ヤンコ（世界魔法団）

だから、その場合は紙テープをおすすめしたい。これはデパートの奇術材料売り場で売っているから、詳しい説明書がついているが、巻きのシンを二〜三センチ引き出しておき、はじめ力を入れて一メートルぐらい引き張ると、あとは下を向くとこぼれるようにほぐれてくれるからきれいである。

なお、第二段は省略して、火を食ってみせるだけでも人のドギモをぬくには充分。この一芸で上司の注目を集めるに足ることは、ためしてみればよくおわかりになるはずである。

●……無重力状態

《演　技》

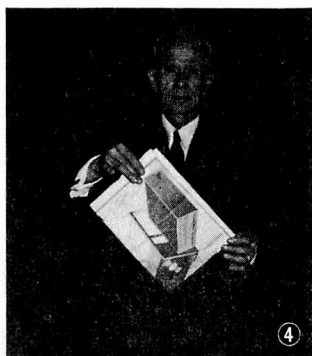
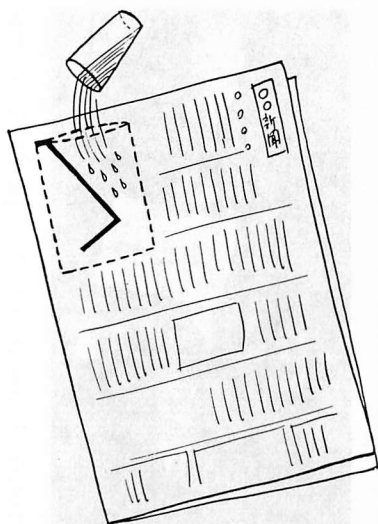
「月ロケットの中で、宇宙飛行士が水を飲むところをテレビでごらんになったことと存じます。いささかこれになぞらいまして。――」

と、一枚の新聞紙をもち出して、うらと表をあらため

る。そして、四つ折りにしたら、その一隅から水を注ぎ入れ、これをまず横にし、さかさまにするが、水はどこへいってしまったのか出て来ない。新聞紙をひろげても落下しない。——まさに無重力状態である。（写真①～⑦）

⑦

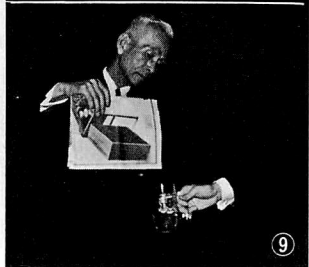
⑧

⑨

ところで、「ワン　ツウ　スリー!」——号令をかけて新聞紙をふたたび四つに折りたたんで傾けると、——水はどこからか出てくる。(写真⑧〜⑨)

「これで皆さまも月ロケット内の生活を、インスタントにちょっぴりお味わいになれたとおもいますが、いかがでございましたでしょう?」

《ひみつ》

実は新聞紙の半分(一ページ分)を二枚貼り合わせにし、その合わせ目に近い上部に、図①のようなビニール袋を貼っておくのである。

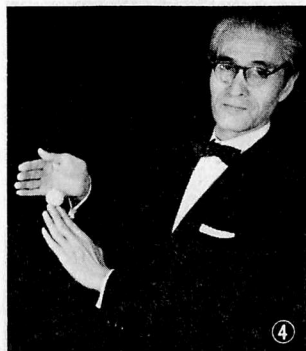
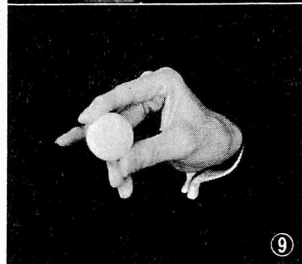
いうまでもなく、このビニール袋も、短波工作で内部

を図②のように熔接しておく。だからⒶの口から注ぎ入れた水はさかさまにするとⒷを通ってⒸに入るから、外へは漏れないが、新聞紙を元の位置にすると、再び出てくるのである。〔SSMC・田島義秀氏所演〕

●……四つ玉入門

《演　技》

演者はにこやかにハンカチをしごきながら登場する。——と、その手の間から可愛らしいピンポン玉のような白い（または赤の）ボールがこつぜんと出現する（写真①〜④）。演者は、これを一〜二度空中に投り上げてまた受けとめるが、三度目に投り上げたボールはもう戻って来ない。（写真⑥）

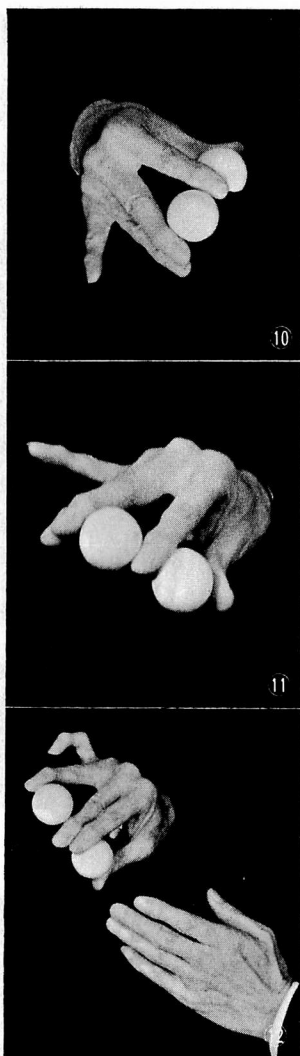
ところが、えりに手をあててちょっとこすると、ボールはそこから出現する（写真⑦）。——そこで、これを両手でしらべ、右のひとさし指とおや指にとってひとふりすると、ボールはたちまち二個になる（写真⑧〜⑪）から、右手でこの一個を中指とくすり指の間に移し（写真⑫）、もうひとふりすると、こんどは三個になる。

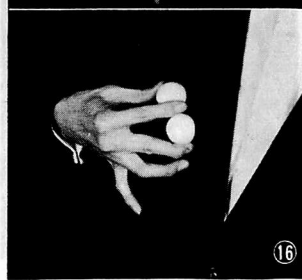
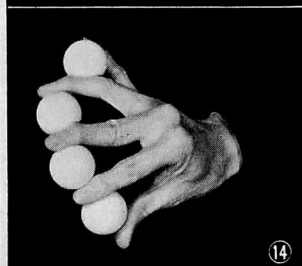
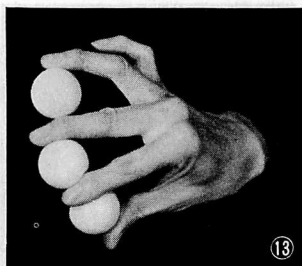
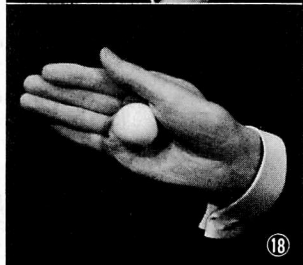
（写真⑬）。そこで、同じ手順で一個をくすり指と小指の間に移し、またひとふりすると、ボールは四個に殖えて、五指の間は満員になってしまう。（写真⑭）そこで、こんどは減らしていくのだが（写真⑮）、消え

たボールはえりの陰にかくれていたり（写真⑯）、ポケットをこすりあげると現われたり（写真⑰）、……そしてついに元の一個に返り、また消失してしまうのであるが、白い玉が消失したと思うと、代わって赤い玉が出現するとか、あるいは左、右に白と赤のボールを見事にならべてみせるとか、小さいボールがひとふりするごとに膨脹していくとか、――この四つ玉の技法は、それだけで一冊を成すに足るほどたくさんあり、またすでに石田天海氏・金沢天耕氏他いろいろの人の高等技術の伝授書も出版されているが、基本さえのみこめば、あとはその人のくふうしだいで、この上にも数々の新技法を生み出していくことができるはずである。

原名を"Perfection Multiplying Billiard Balls"（無限に増殖する撞球の球）といって、もう古典奇術といってもよいと思うが、日本で初めてこれをマスターして来たのは〝四つ玉の鬼人〟といわれた松旭斎天二（後の二代目天一）であった。――以来「シカゴの四つ玉」の名で親しまれ、アマチュア・マジシャンの間にも愛好者はおびただしい数に上がっている。用具はどこのデパートの奇術材料売り場でも売られている。

⑬ ⑭ ⑮ ⑯

⑰ ⑱ ⑲

れている通り、ボールにはめる半円形のキャップだが、これひとつのために、このような変幻自在の演技がたの

《ひみつ》

ひみつは、一個のキャップである。「おわん」といわ

しめるのだから、そのアイディアの妙には敬服せざるを得ない。

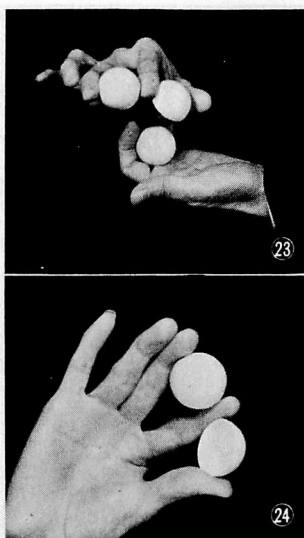
　この奇術をやるには、まず上衣にネタ場をつくる必要がある。――写真⑳のようにこのキャップを止めるバンドとボールを入れる袋と、上衣の左うらに縫いつけておくのだ。ボールの袋は三個がおさまる大きさにし、下の口にゴムひもを通し、ここから一個ずつ絞り出すようにつくる。

　ハンカチをしごきながら登場すると、ハテ玉はどこから出現するのだろう？――とだれもが不審がるが、これがすなわち奇術の極意で玉はハンカチの端と一しょに右手ににぎっているのだけれども、観客には少しも気付かれないのである。これはマジック・ウオンドを使っても同じことだが、こうして二～三度しごいてハンカチを棄て、玉を手の間に出してみせると、いかにも空間からこつぜんと出現したように見えるからおもしろい。

　さて、これを空中に投りあげて、これも一～二度手にとり三度目に投りあげるときはゼスチュアだけ、実は写真⑱のように手のひらにパームしておくのだが、見物の眼は常に演者の視線を追うものだから、写真⑥のように

⑳　㉑　㉒

空中を見上げていると、いかにもはるかに空中に溶けてしまったように思いこむのである。

　この、玉をパームしている手でえりをなでる。——玉はその間から出現したように見える。……こうして見物の視線を右手に集めておいて、その間左手で上衣のうらをまさぐり、まずキャップをとり出す。（写真⑲〜⑳）そして、写真⑧の姿勢に返って玉にキャップをはめるのである。これを右手のおや指とひとさし指で持ち、さっ！と弧を描きながら、ひとさし指と中指で玉をはさみとると、写真⑩〜⑪の姿となって、玉は二個に殖えたように見えるが、ひとさし指とおや指の間にあるのはキャップなのである。

　このとき、演者は見物の方に右前を見せて立つと、左前はかくれるから、左手はゆうゆうとネタ袋を絞って第二の玉をとることができる（写真㉑〜㉒）。そこで、㉓のように持っていき、第二の玉をキャップにはめ、第一の玉を中指とくすり指の間に移す。そうしてまたひとふりするとき、第二の玉がひとさし指と中指の間にとるのである。（写真㉔）

　——こうして「三つに殖えました」とまた右を前にして見物に示し、左で第三の玉をしぼりとって持っていき、第二の玉をくすり指と小指の間に移動させる。……というふうにすれば、玉は四個に増殖したと見えるわけだ。消失は、この逆にやればよいのだが、減らすときは堂々と玉をポケットにおさめて少しも不自然ではない。ただ、その間にキャップを活用して、ポケットにおさめたはずの玉を、その外からとってみせるとか、写真⑱のように上のポケットからせり上がらせたり、一個を二個

に、二個を一個に……というふうに変化させて、見物を煙に巻くのである。

そして、終局にはキャップをボールと見せてポケットに落とし、最後に一個のボールだけを残して終われば知らない人にキャップのひみつはぜったいにわからないが、一度手順を狂わせると、この大事なキャップの始末がつかず、とんだネタばらしになってしまうから、鏡の前でよくよく練習を重ね「これならだいじょうぶ！」と確信のついた上で公開することがたいせつです。

●……おわんと玉

《解　説》

これは純然たる日本の古典手妻のように思われているが、実は二千年も昔から演じられていたという世界の古典奇術で、それが、インドから中国を経て日本に伝わったもの。宝暦年間（西暦1751～63年）に出版された〝放下筌〟という、古いタネあかしの本に詳しい手順が説かれているが、日本では日本ふうの手妻として新手がくふうされ、初代天勝も得意とした。

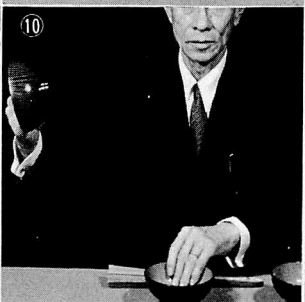
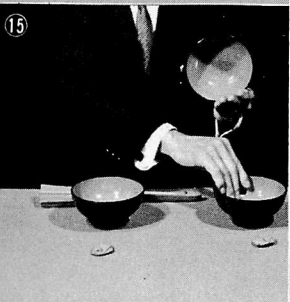
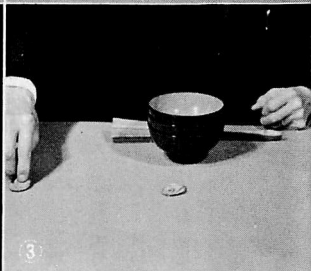
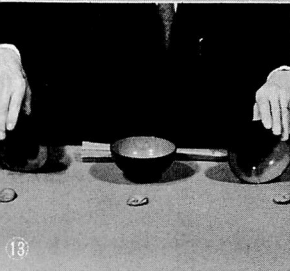
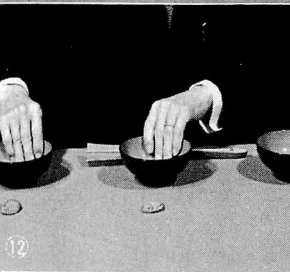
しかし、広いステージよりは、むしろこじんまりした寄席の高座にふさわしく、それだけに日本座敷の宴会でアマチュアがかくし芸として腕を見せるには、まことにかっこうのものなので、くろうとそこのけの至芸を見せる人が少なくない。

《演　技》

◇おわん返し◇

まず、はば1メートル、長さ2メートルぐらいの小机にクロスをかけた台を用意し、大きめのおわんを三個、この中に出し入れする玉（真紅のモミに柔らかい毛髪、または細いナイロンを入れて縫い合せたもの!!そら豆大が適当）それに扇子を添えてならべ、うやうやしく一礼。（写真①～③）

「これより古典手妻〝品玉〟をごらんに入れます」と、おわんあらためからはじめる。

①　最初に玉を三個前にならべ、つぎに三つ重ねたおわ

んの一個ずつをとり、左右の見物に中を見せてタネ、シカケのないところを承認させる。（写真④〜⑦）

② こんどは右のおわんを返し、中のおわんと左のおわんと一度ずつ返し終わったら、左と右のおわんを立て、中のおわんの上で一度カチ、カチとフチを触れさせて見物におわんの中を見せる。（以下、左、右は演者の方からの位置と思ってください）

これを「おわん返し」という。（写真⑧〜⑭）

◇**第一段**◇

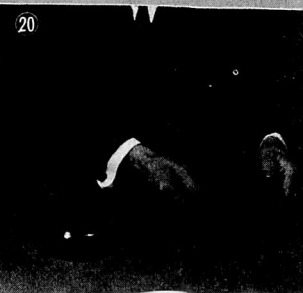
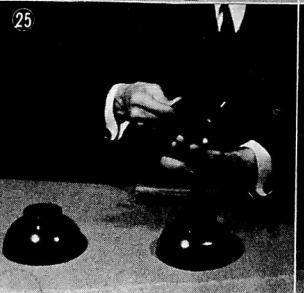
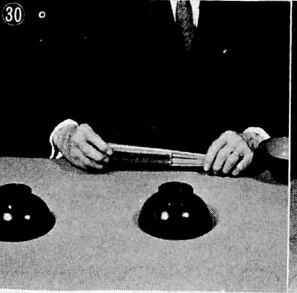
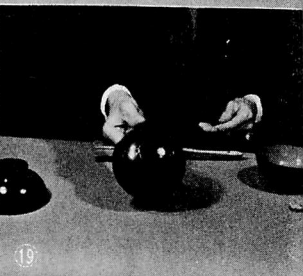
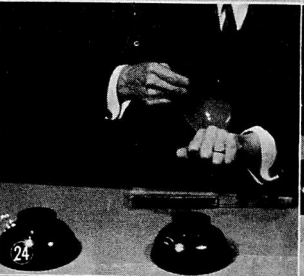
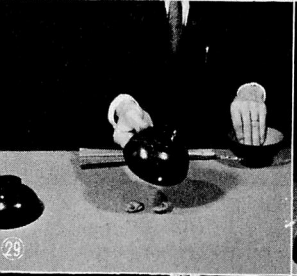
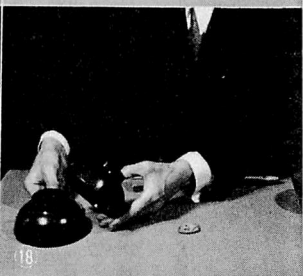
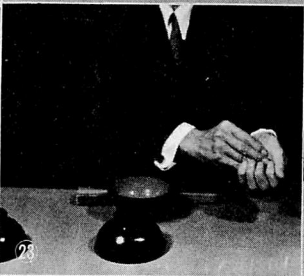
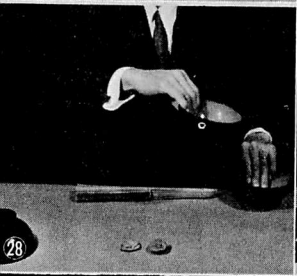
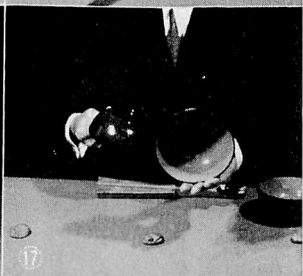
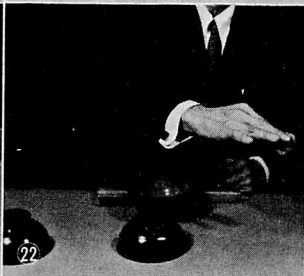
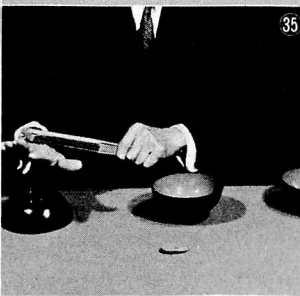
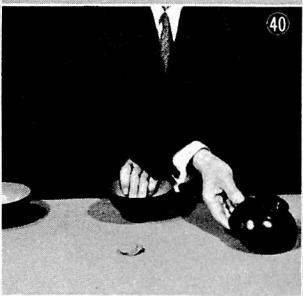
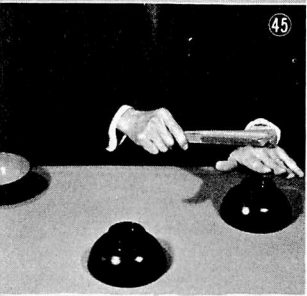
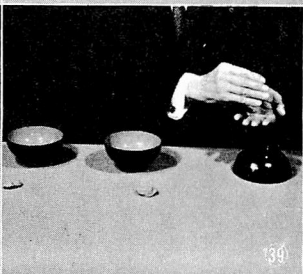
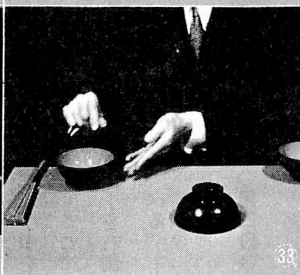
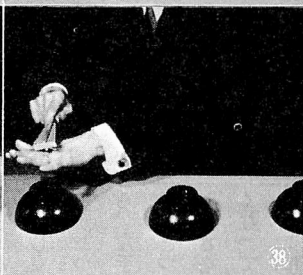
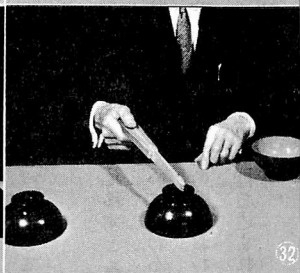
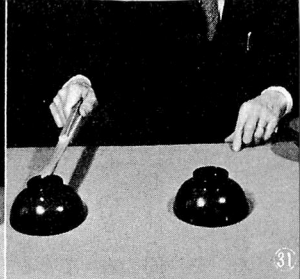
以下は手順がこんでいるので現象とタネあかし（ひみつ）を同時に説くことにする。それでもこんがらがりがちだから、よく味読してください。

① 右わんを左のわんの位置におくと同時に、左のわんを伏せて右手に渡し、左の手で中のわんをとって、これも中を見物に見せ（写真⑮〜⑰）、右わんを右の玉に伏せ（写真⑱）、このとき右の玉を右手の中指とくすり指でサムパームし、右にひきながら中わんを右手にとって中の玉の上に伏せ、いまパームした右玉も同時に残してくる（写真⑲）。すると、中わんの中の玉は二つになり、右わんの中はカラになる。

② ついで、右手で左わんをとって左玉の上に伏せて（写真㉑）、両手で左わんを中わんの上で起こす（写真㉒）。そして、右手のひとさし指と中指で左の玉をはさみとり、これを左手に移すと見せ、実は右手にサムパーム（指の間にかくすこと）し、右手で中わん前の左わんをとり、左手で中わんに玉を打ちこんで中わんを起こすと、中わんの玉は二個になっている。（写真㉓〜㉗）

③ そこで、中わんと左わんのわん返しを行ない、左わんを起こして左わんの定位におき、中わんを中玉二個の上に伏せ、扇をとって逆に持ち、右わんから中わんに玉を通わせるゼスチュアをして右わんを起こすと中はカラになっており、つぎに中わんを起こすと、三個の玉がここに集まっている。（写真㉘〜㉞）

④ ここで、扇子を左手に持ち変えるが、このとき扇の地紙にはさんであるもう一個のタネ玉をパームし、扇

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

は右側に正位におく。

◇第二段◇

① タネの玉を右手にパームしたままで「おわん返し」を行ない、おわんはみんな起こしておく。左わんを左の玉の前に伏せるとき、パームしていた玉を入れる。そうして、右手で左の玉をとり、左手に渡すしぐさをするが、もちろんこれはウソの移しで、実はサムパームして扇子の柄をにぎると、いかにもしぜんで、玉をパームしているようには見えない。

② そこで、左の手をパッ！ と開いて、その扇子で甲をたたく。——いかにも左わんの上から中に玉を打ちこんだように見える。そこで右手で中わんを返してみせて伏せるのだが、このときパームしていた玉を入れてくるのである。

③ つぎに右の玉を左手にウソに移すとみせてパームし、前と同様扇子で甲をたたいて右わんに打ちこむゼスチュアをやって右・中・左の順におわんを起こすと見事各わんには玉が一個ずつ打ち込まれている。（写真㉟〜㊴）

◇第三段◇

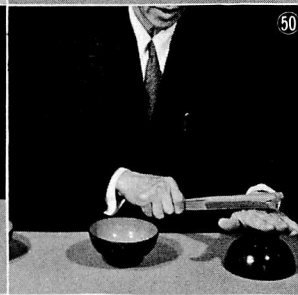
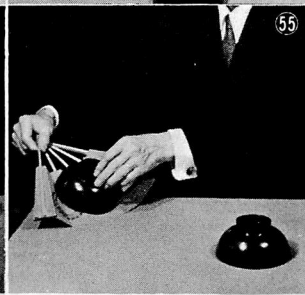
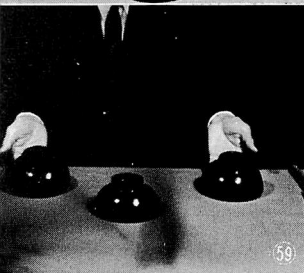
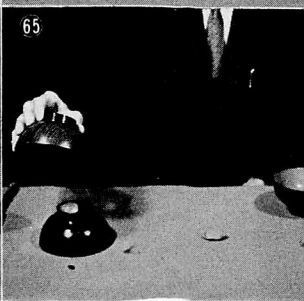
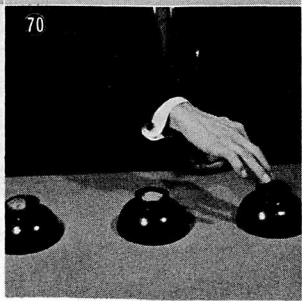
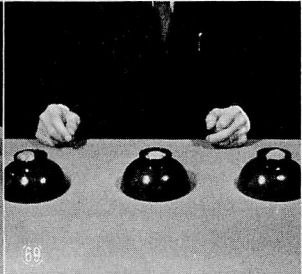
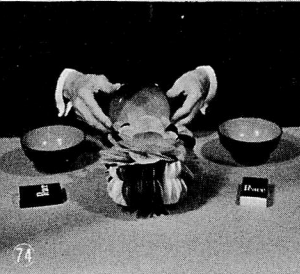
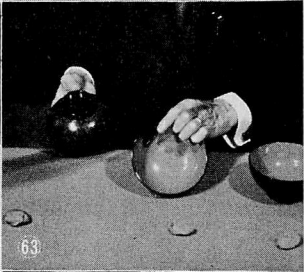
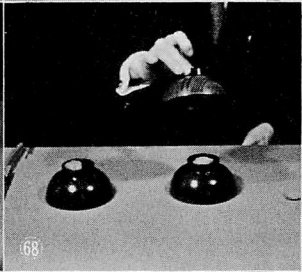
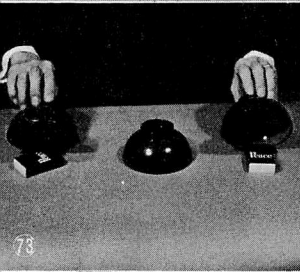
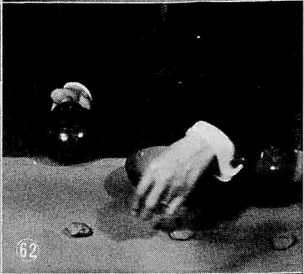
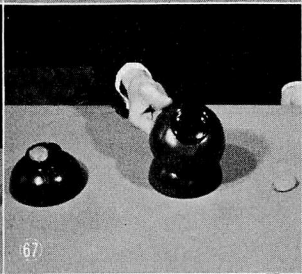
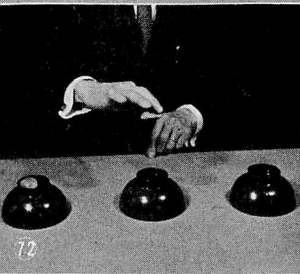
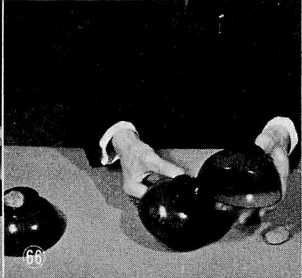
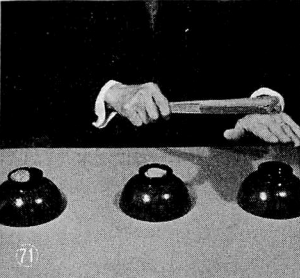
① タネの玉を一個右手にパームしておわん返しを行なう。そして、左のわんを玉の上に伏せるとき、右手にパームしていた玉を入れ、中の玉を左のおわんに打ち込むしぐさをしておわんを起こすと、左のおわんから玉が二つ出てくるから、右手でその左わんを伏せながら、左手で中わんのおわん返しを行ない、右の玉を左手にとって左のおわんの上にかざし、これを打ち込むしぐさをして、中のおわんを起こすと、ここの玉はなくなっていて、左のおわんを起こしみると、三つの玉はここに集まっているのである。（写真㊴〜㊻）

（手順を変えて、玉を中央に集めるのもよい）

② ここで、右手は玉をパームしたまま扇子をとり、扇子を右側に置いて、玉をおのおのおわんの前にならべる。——つまり、最初の状態にもどるわけだ。（写真㊼）

◇第四段◇

56
51
46
57
52
47
58
53
48
59
54
49
60
55
50

71
66
61
72
67
62
73
Peace
68
63
74
Peace
69
64
70
65

①　おわん返しを行ない、右手で左のおわんを玉の前に伏せ、左の玉を右手にとって左手にウソに移し、左のおわんの上で左手を開いて、扇子で甲をたたき、左のおわんに打ち込んだつもりにする。しかし、このとき玉は右手にパームしたままである。（写真㊽〜㊿）

②　ついで、中わんと右わんのおわん返しを行ない、中わんを一度起こして伏せ、中の玉を右手にとって左手にウソに移し、同様のしぐさで中わんに入れるゼスチュアをする。このとき、右手にパームした玉は二個となる。

③　こんどは右わんを右手でとり、ひっくり返して両手をかけ、左手に渡すと同時に右手で扇子をとって半開きにし、その上に右わんをのせて左手で糸底をもち、すべらせるように卓上に伏せたら扇子を全開してあおぎながら、左・中・右の順でおわんを起こすと、こはいかに！三つのおわんはカラッポである！（写真51〜57）

◇第五段◇

①　右手に玉三個をパームしたままで「おわん返し」を行ない、中わんを右手に持って、左手に持ち変え、中わんを中央の前方に伏せ、つぎに左、右のおわんを同時にとって伏せる。（おわんは三角形におかれる）このとき、右手にパームしていた三個の玉を右わんに入れる。

②　そして、左・中……と順におわんを客席に向けて起こし、最後に右のおわんを起こすと、中から玉が三個出現する。――ここに見物の視線を集めておいて、左手をテーブルの下のネタ場にのばし、タバコ（キャラメル、又は大きな玉とか、薬玉とか、おわんにかくせるものなら何でもよい）をパームする。（写真58〜61）

◇第六段◇

①　右手で右のおわんをとり、左手にかぶせてネタを忍ばせる。そしてあいた左手で玉を三カ所にならべ、左手で中わんをとって見物に中を見せ、右のおわんを玉の上に伏せてタバコとチェンジし、玉はサムパームする。（写真62〜63）

② 右手の上から中わんをかぶせ、玉を右わんの糸底にのせて、その上に中わんをおく。そして、右手で玉をせり上にあげるしぐさをしながら、中わんの糸底をもってとり、同時に左手にもう一個のタバコ（または他のネタ）をパームしてくる。そして左わんをとるのだがネタはこのとき右手に持ち変え、左わんの中を見物に見せて中わんを中玉の上に伏せ、玉はサムパームして、この右手の上から左わんをかぶせて、玉を中わんの糸底におき、その上に左わんを伏せる。（写真64～67）

③ 右手で玉をせりあげるゼスチュアをして、左わんの糸底を持つが、このとき左手はもう一個のタバコ（または他のネタ）をパームしてくる。そして、その上に左わんをかぶせて右手に持ち変えて伏せ、左手で左の玉をとつて、糸底にのせる。（写真68～69）――と、三個のおわんの糸底に三個の玉がのってならぶのである。

◇第七段◇

① 右手で左わんの糸底の玉をとり、左手にウソ移しをやってパームし、その手で扇子をとって左わんに打ち込むゼスチュアをし、扇子を一たんテーブルにおくが、このときさりげなく手を引いてパームした玉をテーブルの下に落とす。

② つぎに中わんの糸底の玉をとって同じことをくり返し、パームした玉を下に落とす。

③ 右わんの糸底の玉も同様にしてしまつする。（写真70～72）

④ そこで、おわんを左・右と起こし、最後に中わんに両手をかけて起こすときれいである。――三個の玉はいつの間にかタバコやキャラメルや、あるいは薬玉（くすだま）などと変化しているので、大かっさいを博する。――というしだいだ。（写真73～74）

〔SSMC・田島義秀氏所演〕

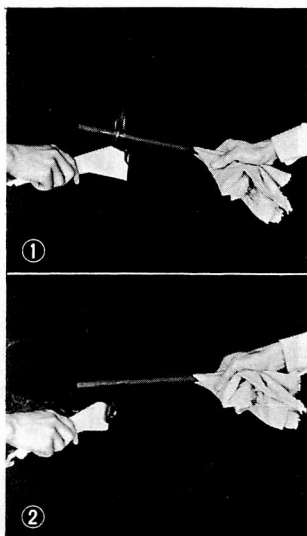
●……鉄火術

《演　技》

手ごろ（直径16ミリぐらい）の鉄棒を炭火でトロトロに熱し、これに白紙を近付ければ、たちまちにしてパッ！と燃えあがるようになったら九字を切り、大海印を結んで、

「みなもとの求むる水を手にとりて放てば九千八海となる」

「雨あられ、雪や氷をかき集め、火防に結ぶ水くきのあと」

という火伏せのご神歌を唱えながら清水で手をよく浄め、食塩をつかんで、この鉄棒の根本をにぎり、お立ち合いに手ぬぐいでこの拳（こぶし）をしっかりくくりつけてもらい、

「えいっ！――」

鋭い気合い一声、サッ！とその鉄火をしごくと、パチパチと塩がはぜ、紫の煙がパッ！と立って、いかにもものすごいが（写真①～⑤）、しごき終わって手を開いてみせると、鉄火のサビと塩の焦げあとはついているが、ヤケドはしていない！（写真⑥）……という、見た目にはまことにスリル百パーセントの大魔術――著者はかつてインドの〝マハラジャー・オブ・マジック〟（魔術の大王）P・C・ソーカー氏のレセプションでこれを演じ〝ほんとうにタネのない魔法〟として絶賛を博した。

《ひみつ》

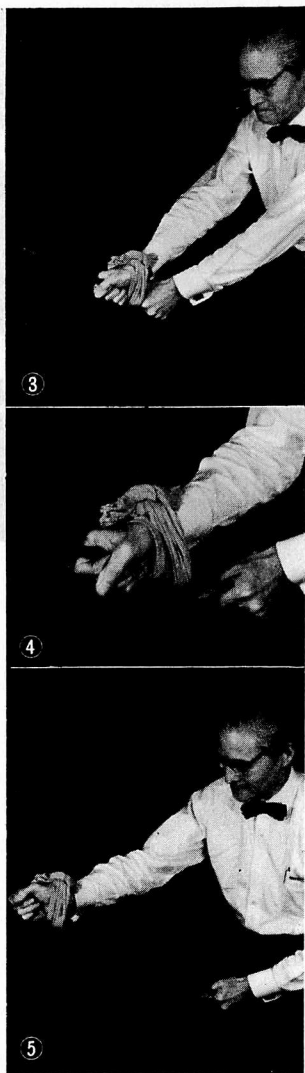
〝タネのない魔法〟というかんばんに偽りはないが、九字を切ったり、ご神歌を唱えたり……はまったくのゼスチュア、実は物理現象で他奇はないのであるが、テレビ・ショーに登場する自称仙人氏などは、精神統一の結

①

②

果だとか、深山幽谷にこもって十何年の修業を積んで会(え)得した仙術だ！などと大ボラを吹いている。

日本最古の神前裁判に用いられた〃火起請〃のひとつで、むかしは行者や山伏の専売物であったが、やってみると、案外やさしく、勇気さえあればだれにも容易に演じられる危険術である。

紙を近付ければメラメラと燃えあがるように灼熱(しゃくねつ)した鉄火をつかんで、ほんとうにヤケドをしないのか？——と、たいていの人は不審を抱くが、試みにストーブが見た目にも明らかにわかるほど真赤に焼けたとき、そこにやかんの水をこぼして見たまえ、水はそのままジーッと蒸発はせず、しばらくはいくつもの小さな水玉となってポンポンとダンスをしているであろう。

——これを〃スフィロイダル・ステート〃(Spheroidal state＝球状態)といって、灼熱した鉄火に接触した水滴は、ほんの一部分が蒸発してガス体となり、その上に水滴が浮かんでいる状態となる。そして、その水滴の一部が蒸発するに際しては多量の潜熱を吸収するので、表面の水滴の温度は、容易に高まらず、水玉は形を壊さずにポン、ポンと弾んで踊っていて、ガス体の上の水玉

と高熱の鉄火とは、最後まで直接に触れ合うことはないのである。

　そこで、

「お浄め」

と称して手を洗い、十分に水分を吸収させておくと、十二分に灼熱した鉄火をつかんでも、この原理でヤケドを負う心配がないのである。いわんや塩を多量につかむにおいてはいっそう安全だが、塩がはぜて、紫煙があがるので演出効果は満点だ。

　もちろん九字を切ることも呪文も必要はないが、ただくれぐれも憶病風に吹かれてためらっておれば鉄火の温度がグングン下るから〃スフィロイダル・ステート〃のご利益も冷めて、皮膚が鉄火に密着してしまうから、大火傷を負わねばならぬこととなる。ナマ焼けの鉄棒をしごくことは危険千万である。

　恋も灼熱しているときにつかまないと、失恋して永い苦悩にホゾを噛むことになるものだ。——こんなところから勇気と教訓を学ぶことのできるのも奇術の徳と知りたまえ!。

●……真剣白刃止め

《演　技》

「夏なお寒き氷の刃、——これは決して剣劇俳優が舞台で使う竹光ではございません。ご当地の名流なにがし家ご先祖伝来の銘刀を拝借いたしましたもの、まず切れ味を試してご覧に入れましょう」

　と、半紙一枚をとりあげ、

「一枚は二枚、二枚は四枚、四枚は八枚、八枚は十六枚……」

　とやれば、これはおなじみ「ガマの油」の口上になるが、とにかくこのように白紙で試し、つぎに古い旅行案

内とかクラブ雑誌のような部厚い本で試し、あるいは青竹をスパリ、サッ！と切ってみせた上で、これを頬に当

明治17年版“和洋手品の種”さし絵

ててグッ！と肉に深く食い込ませ、

「えいっ！」

鋭い気合いと共にズズズ……と引いてみせる。（頬に食い込ませた上をロープでギリギリしばってもらうともっと効果的である）

そうして、更に、

「これをお目にかけると、あいつのつらの皮は可なり厚いから……などとおっしゃる向きもございます。では手ににぎって、思いきりしっかりとしばっていただきましょう。どなたか力自慢のお方、お二人ほど、ちょっと手をお貸しくださいませんか」

と、お立ち合いにご登場を願う。

両手をよくあらためて、こんどは、その白刃をグッ！と握り、そのにぎりこぶしを包むように手ぬぐいをかけて、二人にグングン引き縮めさせながら、

「えいっ！」

――白刃をズ、ズ、ズ……と引きぬいてみせると、もうこの辺で観衆の大半は面をそむけてしまう。女

え村正の妖刀といえども肉体を傷つけることはできなくなると吹いているが、人をだまくらかすのもいいかげんにしろ！と言いたい。

もっとも、明治十七年に刊行された「和洋手品の種」というタネあかしの本にも

……これはごく秘密の法なり。

十二麻利支天、刀鍛冶その真を割るとも、だいごのあらん限りは甲乙丙丁戊巳庚辛壬癸。

天じくのどんどの川の三つまたのはないたとりて渡るしゃかはのてづまで打てば銘作の刃もおそるべしと、へんまんぼろん　そわか

右の歌を二十一ぺん唱うれば、切れ止る也。

と記されてある。まことに恐るべきタネあかしの本もあったもので、もしこの通りに信じて実演した読者があったとしたら、まず大ケガはまぬがれなかったことと、肌に粟を生ずるの思いがする。

現に東京・大田区のある魚屋氏は、肉体は心の影であ

性はざんにんな刺激を喜ぶという説もあるが、私の千数百回の実演歴では、まず大方の女性は正視しないのが常である。

さて、こうして切先近くまで抜いてみせたら、

「刀は切先に近づくにつれて刃が細くなるからもう楽だろうとおっしゃった方がございました。では再びツバモトまで戻してごらんに入れましょう。えいっ！――」

再び気合いをかけて、アベコベに差しもどすと、ここで拍手は期せずして起こるから、いい気持ちである。

これも「真剣白刃止め」と称して、テレビのショーでは神仙術だの、不死身の霊術だのと大ボラを吹く連中が多いが。……

《ひみつ》

東京・目白のある新興宗教の教祖は、この白刃止めの霊術伝授に、まず呼吸調整からはじめて般若心経の暗誦、霊動発動法などというおまけをつけて五日間も通わせ、数万円の伝授料を巻きあげており、赤坂の神さまは、教祖の「神よび歌」を七回唱えることによってたと

キオ歓迎会（TAMC主催）で真剣白刃止めを演ずる著者と鈴木順一郎氏

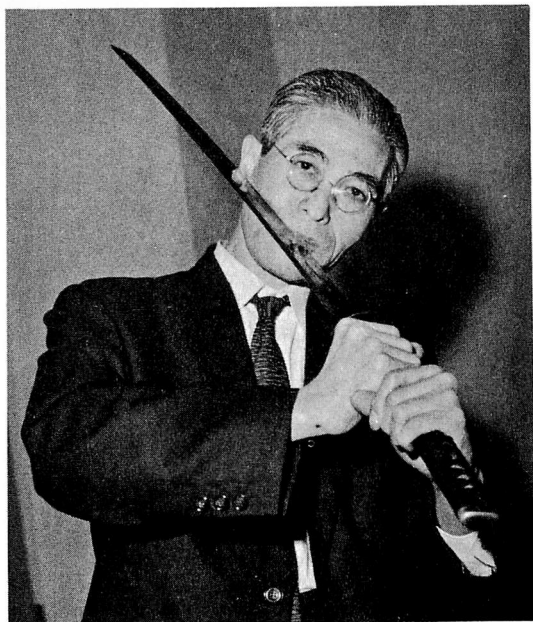
る！と説く赤坂の生神さまの熱心な信者で、いくら入信をすすめても肯こうとしないに連中、教祖直伝のこの刃止めの神業を見せてやったら、どんなガンコな奴でも、「神よび歌」のいやちこなご霊験に恐れ入らざるを得ないであろうと、お手近の刺身庖丁を代用してやってみせたからたまらない、しばらく左手は使いものにならぬほどの大ケガを負って青くなった！――という、笑えぬ実例がある。

――能書が思わず長くなったが、この例でも明らかなように、この刃止めの術は日本刀なればこそできるのであって、いくら神よび歌を二十一ぺんくり返しても刺身庖丁や出刃などの切れ味を止めることはできないのだ。

――というのは、日本刀は打ち方も磨ぎ方も料理庖丁とは根本的に違うからである。日本刀は刃に凹凸がなく、その上なめらかな「タテ磨ぎ」で仕上げられているので、ナナメに当てて引かなければ切れないのが常、弾力のある皮膚に直角に当てれば、摩擦がないから、まず危険はないものだ。いきなり皮膚に押しつけるのが恐いというならば、まずふっくりした座布団に深く食い込ませて（もちろん直角にだ）引いてみるがよい。布団は無事なはずである。

それならば、テストのときは紙も青竹もどうして見事にズバリ！と切れるのかというに、すなわちいずれもナナメに刃を当てるからで、試みに一枚の半紙を刃に直角に当てて力一ぱい引っ張って見たまえ、指先でおさえたところは破けても刃に当たっているところは切れないが、ちょいとナナメにすれば流しただけでもスーッと切れる。

だから、刃に乗るときも刀身が動かぬようにしっかりした台に立てなければならぬし、ハシゴに組むときも、刃をナナメにかけることはご法度（はっと）である。――もっとも、ハシゴにした刃を踏むときは、両方の梯身をつかんで登るから、力点が両腕に移るので刃にかかる体重は半減以下になる。

ただ、素手でにぎって手拭いをかけ、力じまんの男二人にぎゅうぎゅう縮めさせて、抜き差しをする場合にはいささかコツがある。

これがすなわち大奥義、秘伝で教祖さま方の伝授料は安くても十万円。――というのが相場である。が、本書の読者への特別奉仕として、ホントウのひみつをあかすことにする。

剣伏せの術（真剣白刃止めを実演する著者）

――実は手拭いのかけ方に秘伝があるので、結び目をこぶしの内側で縮められたらお手あげのほかはない。実は私も茶目っ気を出して、ある神さま氏が、
「お立ち合いのどなたでもけっこう、十分縮めてください」
と出した手に手ぬぐいをかけたとき、これをやったら顔色を変えて、
「反対に、反対に……」
とおっしゃる。知らぬ顔でなお締めつけると、
「恩に着ます、反対にしてください」
とのたもうた。満堂の信者の前で赤恥をかかせるも気の毒と、いう通りに甲の方にまわして締めてやると、神さま氏はやっとゆうぜんとしごいてみせることができて、どうやら体面を保つことができたのであったが、これが十万円の極意なのである。甲にまわすと、いくらぎゅうぎゅう締めても限度があるから、刃が手のひらに密着はせずにすむ。
――さア、今度は読者諸君が著者に恩を着る番というものである！

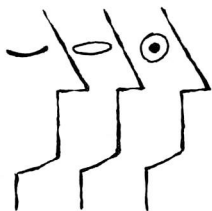
●……磁力発生

《演　技》

「月世界の磁気が注目のマトになっておりますが、マサツ電気でどんな物にでも磁気を帯びさせることが可能であるという実験をお目にかけましょう！」
てな口上で、二本の木片（きれいな割りばしでもよい）をお立ち合いにあらためてもらい、丁字形に持ってこすり合わせることしばし、七〜八センチも離して、
「上ってこい！――」
号令をかけると、下の木片はツ、ツーと、見事に上がってくる。――まことにすごい磁力！

《ひみつ》

手のうらを返せば、ナンと中指と木片の下端に輪ゴムがかけてあるではないか！――これはタネあかし用に使ってご愛きょう。

催眠術

催眠術もブームと言われており、テレビにもしきりにとりあげられているが、本格的なものはほんの二、三に過ぎず、その大部分は単に興味をそそるためのショーであり、さもなければ似非催眠術のセンセイ方や、自称仙人などのPRであって、世をあやまることが多く、かえって本当の催眠術を誤解させる結果を招来しているのは嘆かわしい極みである。

そもそも〝催眠術〟という名称が不適当だから、斯くは魔法じみた法術のごとく誤解されるのも無理からぬしだいなので、これは当然〝暗示術〟とでも改める必要があろう。

明治のころは〝メスメリズム〟と称ばれたものだ。——というのは、ドイツの医師メスメル氏の動物磁気説からきたので、すなわち、被術者が施術者の動物電磁気を感受して、その意のごとくする現象と信じられていたからである。

しかし、その後英国の外科医ブレード氏が、その誤謬を指摘し、暗示によって起こる精神感応の現象であることを証明して〝ヒプノチズム〟(Hypnotisme)と名付け、今日に及んでいるわけだが、〝ヒプノス〟(Hypnos)とは、ギリシア語で睡眠の意であるから、これまた当たらないのである。

すなわち、いわゆる〝催眠術〟に感応して、施術者の暗示の通りの行動をとり、またその問いに答えても、被術者は麻酔にかけられたように眠っているわけではないのである。

たとえていうならば、あたかも密室に閉じこめられた者が、たった一カ所の小窓から射し込む一条の光線を望みみるように、閉ざされた精神の小窓から入る施術者の暗示のみが被術者にはたらく状態になるのが〝催眠現象〟なのである。

したがって、この暗示に感応するのは、高等動物である人間だけであって、知能程度の低い動物にはかからないのが本当なのである。

よく〝動物催眠術〟と称して、鳥とか、蛇とか、蛙とか、ないしはワニにもかけるなどと大ボラを吹いて見世

物興行をやっている連中もいるが、これは動物の習性と条件反射を利用した〃強制術〃ともいうべきで、明治の奇術師宮岡天外が、堂々「動物強制術」のポスターで巡業していたのは偉とせねばなるまい。

ここに、一番わかり易い一例を挙げよう、――筆者がテレビで何回も公開している鳥の強制術のごときは、だれもが一番容易に試みて成功する方法だから、やってごらんになるがよい。（筆者はテレビで演技する場合も〃動物催眠術〃とは言わない。もちろん深山幽谷に何十年も難行苦業を重ねて習得した仙術などとも吹かない。そうして惜しみなくひみつのタネあかしをやっている）

鳥を眠らせる……●

「一喝、空飛ぶ鳥も羽交いをやすめ、ニョロつく蛇もたちまち棒のようになる、我が輩の仙術をごろうじろ！」

なんかと、白髯をしごきながらやられると、テレビショーの司会者までが、まんまとたぶらかされて、感嘆のためいきをつくのがこれである。

実験用には十姉妹などが一番手軽でよろしい。なるべく元気のいいやつをつかんで手のヒラににぎり、

「えいッ！」

と鋭い気合いをかけると、いともかんたんにひっくりかえって脚を縮め、何分間でもじっとしているが、もう一ぺん気合いをかけると、勢よく羽ばたいて会場中を飛びまわるから、まことに効果百パーセントである。

これが、大きなトサカをふりたてて、バタバタ騒いでいる鶏になると、またおもむきが変わって舞台栄えがする。――どんなにあばれている鶏でも、たちまちにハク製のように動かなくなるから、見物はアレヨ、アレヨとばかり目をみはる。筆者が岩手のある農家で、たわむれにこれをやってみせたときなどは、同行の鈴木伝明君（往年の松竹映画大スター）が

「君、おとしたんじゃないか？」

（殺してしまったのではないか）と、顔色を変えて心配

したものだった。
しかし、ご心配は無用、鶏くんの耳もと（？）で、ポン！と手をひとつたたいて、「ホイ！」と声をかけると、夢からさめたように眼を見開き、ブルル！とトサカをふりたてて、元気よく歩き出すのである。……

《ひみつ》

小鳥の場合は、あおむけにしてしばらく両眼をおさえておくだけでかんたんにおとなしくなるが、鶏は、図体が大きいだけにバタバタ騒いで、なかなか静かにならぬことがある。

しかし、両脚を一しょにつかんで、一メートルあまり持ちあげて急降下させること、二〜三度に及べば、たちまちおとなしくなってしまう。これをテーブルの上におさえつけて、一方の手で両眼をふさぎ、一方の手で首すじを静かになでてやると、まるで置き物のようになってしまい、放っておくと何分でも動かないから、おちて（死んで）しまったのではないか？——と、飼い主をハラハラさせるのも当然である。

けれども、前記のように手をポン！とたたけば、たちまち眼を開いて立ち上がるのである。

催眠術はだれもかかる……●

さて、人間にかける催眠術であるが、前にものべたように、たいへん間違った認識のもとにおかれているために、テレビショーなんかのわずかな時間に、コマギレな話と、カッコいい被術状態を見せられると、大方の視聴者は、これもいつの間にか催眠術にかかってしまう結果になるのであるが、テレビは時間がくれば否応なしに放映がたち切られてしまうので、術をかけっ放しにされたことになるわけだから、ここに重大な問題があるのである。

すなわち、暗示は、一度感応したら、解かれるまでそのままの状態がつづくので、タチのわるい暗示が残ると、精神的呪縛からいつまでも解放されないことになる。そこで、ノイローゼ患者などが未熟な催眠療法を受

他者催眠誘導の実際
（日本催眠科学院院長　御手洗満氏）

けたばかりに、かえって症状を悪化、亢進させ、果てはホンモノの狂人になってしまったような実例も少なくはないのである。

これは極端な例だが、往年の高島象山という、相当に名を売った占師が、堂本某なるノイローゼ青年に刺殺された事件のあったことは、未だ読者の記憶に新たなこととおもう。ところが、これはまったく人違いで象山は夢にも思い描かなかった危禍に会った犠牲者であった！

——というウソのような実話がある。

奇術の天勝と易者の高島は、ニセモノの多いことで天下の両横綱だと言われて久しいが、この悲劇も「高島」を名乗ったためであったのは、何という皮肉であろうか。——

現在も「二代目天勝」のニセモノが五指に余るほどドサまわりをしているが、たまたまホンモノの二代目天勝と同じ列車に乗り合わせたニセモノがおずおずと出した名刺には「フタシロ」（二代）と鉛筆でルビがつけてあったという。

「高島易断」はあまりにも有名だが、その創始者、呑象・高島嘉右ヱ門は、人も知る横浜開港の大恩人として、いまも景仰される商傑で、易は「売らない」のが建て前と、これを米塩の資としていた人ではない。したがって、この人に易を学んだ人たちのだれひとりとして「高島」を名乗る者はないし、後裔にも、一門にも易占を営業としている者はない。巷にはんらんしている「オバケ暦」が謳っている「高島易断本部」などはもちろん縁もゆかりもないものだから、電話帖にもこの「本部」「総本部」「本家」「宗家」などがズラリといくつもならんでいるというナンセンスぶりだが、かつて日本橋に「高島本家」という大看板を掲げていた馬場某を、嘉右ヱ門翁の甥の徳右ヱ門氏が訪ねてみたら、

「これは、これは、ご宗家にはようこその御来駕、まことに恐縮の至りでございます。手前タカシマ・モトイエでございます、以後面体お見知りおきくださいまして、よろしく御引きまわしのほどを。——」

と、いんぎん無礼な仁義をきられて、開いた口がふさがらなかった！——とは、筆者が当の徳右ヱ門氏から直接きいた話だが、フタシロ天勝、高島モトイエの類は、こうしていまも天下を横行しているしだいで、前記堂本某がノイローゼの心霊療法（テレパシー＝遠隔感応術）を受けた高島易断総本部もそのひとつで、象山ではなかったのであるが、象山の総本部は国電神田駅の構内からもその屋上の大看板がよく見えたところから、このノイローゼ青年、ここでもまたカッと逆上して飛び込んだ！——というわけであった。

ところで、この総本部氏、その直後に誇大宣伝のかどで遠隔感応術療法の看板をおろさせられたくらいのセンセイだから、このインチキ心霊術をかけっ放しにして解くことを怠ったので、堂本青年のノイローゼはかえって悪化亢進したのは当たり前の話であったわけだ。

——こういうしだいで、催眠術はかけたら必ず解くことを忘れてはならないのだが、テレビでは、時間がくれば容赦なくチョンになってしまうから、先年ＴＢＳで、大宅壮一氏や女優の筑波久子さんなどに試験台になって

もらっての施術実況を放送したときは、視聴者で感応した人がたくさんあって、それが解かれないまで映像が消えてしまったからさア大変、えらい騒ぎがもち上がって、局側もろうばいしたことがあった。

しかし、一めん、このようにして催眠術はだれにもかかるものであるということが立証もされたわけだ。

また、われわれは、かたちは違うけれども知らず識らずのうちに催眠術にかかって、暗示のままに躍らされていることも思ってみなければならぬ。

すなわち、テレビのCMであり、新聞、雑誌の広告である。薬のごときは、まるでこのCMの催眠術的効果が利くようなところが少なくない。医家の間では、これも「プラシーボ効果」のひとつとみているわけだが、つまり患者に、毒にもならぬが薬とはいえない、食塩水やでんぷんなどを「薬」と称して与えて効果をテストすると、かつての札幌医大では、肩こりや筋肉、神経痛などの患者に実施した五十二例中、このプラシーボ効果だけで全治したもの20％、本物の薬を投与して効いたもの35％のパーセンテージとなり、両方が効いたもの38例のうち、26％はプラシーボ効果の方が秀れていたという統計が出ている。

また、関東逓信病院でも、精神神経症状の強い秘尿器科の患者50名に、ジャガイモのでんぷんを主体にして作った、薬らしきものを与えたところ、実に58％の有効を記録し、女性患者の場合は、約3/4が自覚症状を改善したという実験例がある。

だから、真に「名医」と言われる人たちは、巧みにこのプラシーボ効果を使っている。現に著者の叔父の実例にみても、ものすごい不眠症に陥って、ついには普通人の致死量の睡眠薬を服んでも眠れぬ状態になったとき、主治医のK博士は、

「これは、最近ドイツのP社が初めて成功した処方で、未だ市販されていないものです。つい二、三日前大学に試用してみて欲しいと送って来たのを分けてもらいましたから、特に差し上げましょう、今夜はぐっすり眠れま

すよ！」

といって、例の赤い紙に包んだ頓服をくれたものだ。

——と、どうだろう、この新薬の効験はまさに神のごとくで、その晩、叔父は久しぶりで前後不覚に熟睡したではないか！

「どうでした、あの薬はよく効いたでしょう！」

翌くる日、K博士はニコニコして、私にだけこっそりとこの新薬のタネあかしをしてくれた。

「——実は、アレ、味の素なんですよ！」

〝味の素〟はきれいな結晶体だから、いかにもあっぱれな新薬としてまかり通る。カプセルに入れるとか、服みにくい薬だから……とオプラートでも添えれば、有難味はいっそう増すが、やはり信用ある医院か、有名薬局の薬袋に入っていなければ、このような効果は期待できない。

催眠術の効果……●

昭和の初年の話だが、三田の慶応大学からほど近い四国町に淋病を根治させるという新薬の注射療院ができて、その発明者と称する「何某先生謝恩会」の名で大宣伝をしたところ、これがものすごい大当たりをとり、門前市をなしたことがあったが、ある専門家が疑念を抱いて分析してみたら、その稀代の即効新薬の正体は食塩水であった！——という実例もある。Wという著者の友人も一本五円という、当時としては容易ならざる大金を払って注射をしてもらったら、一回で痛みが止まったといって、その宣伝の片棒を担いだものだったが、これなどもプラシーボ効果の生きた実例である。

また、満州事変の起こったころ、「ラジウム温灸器」というのを売り出したところ、これも笑いの止まらぬほどに売れたので、せめてもの罪ほろぼしに……と軍部になにがしかの献金をしたら、大新聞にも「献金伍長」の美名を謳われ、結局献金の何百倍かの宣伝になったまではよかったが、間もなくこの温灸器に添える「ラジウム液」なるシロモノがやはり食塩水にピンクの色を付けた

ものに過ぎなかったことがバレて、栄華の夢たちまちにして破れ去った！――という例もある。一々挙げたら限りもないが、とにかく、このようにしてプラシーボ効果は、実に驚くべきものがある。それもこれも、暗示の力というものが、われわれの心身にどれほど大きな影響を及ぼすかを立証するに足るであろう。

したがって、催眠術というものをほんとうに身につけて、これを善用するときは、精神、肉体をともに救う結果となって世の中を明るくすることができるが、前に記したニセ高島のように悪用すれば、その害毒の恐ろしさ、また思い半に過ぐるものがある。

催眠誘導の実際（御手洗満氏の指導ぶり）

現にほんとうの催眠術は、医療はもとより、教育方面からも注目されて、悪癖の矯正（きょうせい）や学科の好き嫌いをなくし、記憶力の増進に大きな役割を果たそうとしているし、またセールスマンなどが、暗示、誘導力を巧みに発揮するときは、いつの間にか相手を自分のペースに引き込むから、メキメキと成績を上げるし、経営者は勇気を与えられ、自信力、実行力が強化されるので、易々と常勝将軍となることができるというので、催眠術の学校はどこも大繁昌しているし、有名会社やロータリークラブ、ライオンズ・クラブのような、実業家のメンバーの多い諸団体でも、しきりに講演や講習会を開いて、催眠術の知識吸収に努めるようになったのは喜ばしいことである。

――というわけで、実はもっと詳しい催眠術入門のあらましをのべたいのであるが、本書では催眠術にそれだ

けのページが与えられていないから、ほんのいとぐちをほぐすに止めるほかはないが〝奇術を見せる〟技術のひとつとしても、この暗示をたくみに駆使すれば、効果が何倍になるかしれないし、事実また明治の「メスメリズム」以来、舞台で「催眠術」といって演ずる奇術が、どんなに神秘ムードを盛りあげ、ワンダフル！とうならせるかはご承知の通りである。

何よりも、まず〝大魔術〟のポスターをごらんになるがよい。美女が宙に浮き、あるいは円筒に入れられて火焔に包まれ、また電気ノコギリで断ち割られ腹からはあたり一めんに血しぶきが上がっている。——その一方にはガイコツが己れの首を抱えて踊り、ピストルから発射されたひもつきの弾丸がオリに閉じ込められた少年の胴体を貫いている！……というような、一見して好奇心をあおる図がらであろう。

そして、ソ連のキオはいみじくも謳った、

「魔術にはタネがあるが、キオの魔法にはタネがない！」

と。——まずこのキャッチフレーズからしてすでに不思議の国に誘い込むりっぱな催眠術ははじまっているのである。

舞台の、アラビア風の宮殿の奥は深く、キャンドルの灯はゆらぎ、うすむらさきの香煙が一ぱいに漂っている。……とあれば、そこにどんな不可思議な現象が起っても、それは当然のような気持ちになるであろう。

何事の在しますかは知らねども

かたじけなさに　涙こぼるる

という古歌は、まことによく環境暗示の偉大な効果を表現している。伊勢神宮とか、出雲大社とか、または熊野本宮のようなところには、ただその境内に一歩足を踏み入れただけで、自ら襟を正すようになるし、精巧な彫刻や仏画に彩られた大伽藍に、大ローソクの灯明がともり、白檀や伽羅の銘香が焚かれ、鐘や木魚にリズムを盛りあげられながら(?)おごそかな読経の声を聴くとき、思わず合掌をするに至るのも人情であろう。

——これすなわち、みな一種の催眠術にかかるわけで一枚の白紙も「護摩札」と呼ばれ「お守り」となれば、

よく数千金を奉賽して惜しまぬのも同じことである。
　そうして、神仏を拝み、祈りをこめることによって心を浄められ、また勇気を与えられて、よく窮地から脱出することが叶うのも、みんなこうした暗示に感応すればこそで、これは環境暗示、威厳暗示にかかるばかりではなく、自己暗示が偉力を発揮することもまた大きいのである。

自己催眠のかけ方……●

　自己暗示　覚えて　あそぶ　夢の国
　わが思い出は　豊かなりけり
　――睡眠剤よ、さようなら！だ。床に入ったら、君は自分自身でこう暗示を与えるがよい。
「手が重い、足がだるーい、心臓は正しく力強く鼓動を打っている。呼吸が楽だ。空気がうまい。腹が温かァい。おでこが涼しい、とってもいい気持ちだ。疲れがスウっと抜けていく。眠ウくなる、眠ウくなる、とってもいい気持ちだ、やがて楽しい夢の世界が展ける。……」
　これをくり返していると、君はいつしかスヤスヤと快い眠りに入っていく。そして、疲れは気持ちよく回復して、翌くる朝は元気よく目がさめる。そこで、その清々しい朝の空気を吸いながら、こんどはこういう自己暗示をかける。
「何という気持ちのよい朝だ！きょうもよい日だ、きっといい事がある。私は健康だ！元気がモリモリと湧きあがる！きょうも仕合せが一ぱい待っているのだ！……」
　自分が自分に言いきかせるだけでは、いささか心許ないという人は、かしわ手をうち、あるいは読経して神仏の力を藉りるがいい。――それが祈りである。
　また、明日は何時に起きねばならぬという用のあるときは、旅行に出かけるときなどは、この上に、
「あすの朝×時になると目がさめる！×時になるといい気持ちで起き上がることができる！」
　と、くり返し自己暗示をかけておくがよい。これに馴れるとめざまし時計に頼るよりも遙かに有効である。

テレビショーの催眠術……●

概論はこのくらいで止めて、つぎにテレビのショーで興味の焦点（しょうてん）となっているインスタント催眠術――いや、だれにもすぐにかけることのできる催眠術らしき生理現象や、かんたんなトリックをご紹介することにする。

これによって、正しいヒプノチズム。――すなわち本当の催眠術の開眼ができたら、ぜひ本格的に研究し、日日の生活にも有効に役立てていただきたいとおもう。

……………………

●……刺　針　術

《演　技》

「催眠術を施して、針を刺しても痛くないという暗示、血も出ないという暗示をかけると、この通り平気で針も突き通せます」

と、まず術者が頬や腕にハットピンやタタミ針を通してみせ、

「一度ためしてみようというお方、どうぞ舞台にお上がりください。ものはためし、いかにわれわれの肉体が、生命力が強いかをテストしてみませんか！」

などと、これもよく「催眠術師」と自称するセンセイ方がみせるショーでやっているが、そのもっと大がかりの、サーベルでハラから背中まで串刺しにするものすごい芸当を見せたのは、「世界魔術団」のベン・コウ・ベイ（アルジェリヤ）で、彼は、

「白人としてただひとり、仏陀の教理に基づくヨガの業を行ない、ネハンの境地に達した不死身人間！」

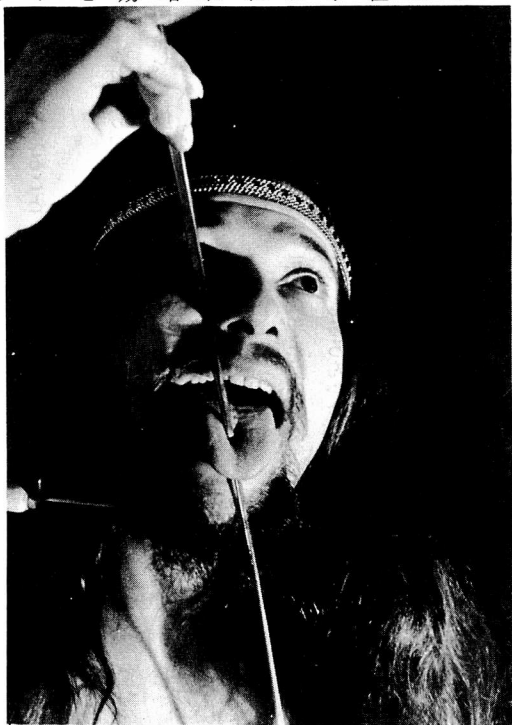
と豪語してたが。……

《ひみつ》

実は、「いくら痛くない」と暗示をかけられても、針や剣が皮膚を貫いて、ぜんぜん痛みを感じないはずはない。しかし、型通り術者の目をみつめさせたり、

「痛くない！血も出ない！まずそういう確信を持つのです！」

とくり返しながら針を刺されると、ちょっとチクリとするだけで、頬や腕などはかんたんに向こう側まで突き抜けてしまうし、舌も中央なら易々と貫くことができ、抜いたアトも、ものの五秒か十秒もおさえて放すと、出血はない。

けれども、これは「催眠術」と言うべきではなく、生理現象にほかならない。すなわち、痛覚神経の網が張られているのは表皮だけだから、刺すときと、向こう側に突き抜けるとき、注射針を刺されるくらいの痛みは感ずるが、それほどにも感じないのは、やはり暗示を与えられると、それなりの効果はあるわけだが、「血も出ません」と言っても、その貫いたアトをちょっとおさえることを忘れると、場所によっては血が止まらないことがあるから、これを忘れてはならない。いつか、生理をよくわきまえぬイカサマ術師が、見よう見まねでこれをやって、ポタポタ、ポタポタ、舞台の床を血で汚し、とんだ赤恥をかいた実例がある。

刺針術（実演＝世界魔法団＝ベン・ゴウ・ベイ）

毛細管は、針のようなもので傷つけられても、綿糸を千切ったときと同じく先端に粘着力があるし、血液は凝固力に富んでいるから、ほんのわずかの時間押えることによって完全に止血する。

また、皮膚も、筋肉も、ものすごく弾力があって、針などは、抜けば直ちに元の状態に戻るし、表皮を突き抜けて筋肉に入れば、痛みは感じないものなのである。

但し、動脈や静脈は、ぜったいに突き破らぬ用心が肝要だし、剣も鋭利なものを通せば大事になる。

また、ベイ・コウ・ベイのように、これを「見せ芸」として、一日に二回も三回も毎日くり返し、その通す個所にタコができるようになるのは、無害とは言いきれない。

この実験に一番適当しているのは、ハットピンであるが、念のためアルコールを侵ませた消毒綿でよく拭いてお使いになるのが安全第一。

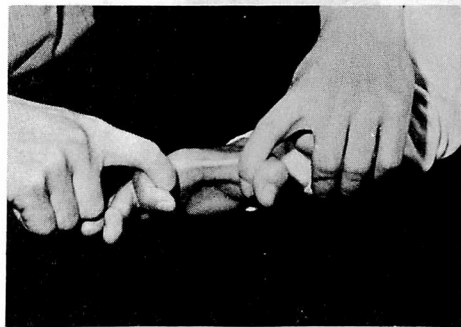
（タタミ針ぐらいは通しても平気だが、まず千枚通しぐらいに止めておいた方が無事。）

●……指環を鉄化する

あなたは、ひとさし指とおや指で軽く環をつくり、「まずこの指の環を開けていただきましょう。――こりゃァ開くのが当然ですよね」

《演　技》

と、テストする相手が両手をかけたら、もちろんやすやすと開きます。しかし、――

「私が催眠術をかけると、あなたはもうぜったいに開けることができなくなります。私のこの指のように堅固になってし

まうのです。さァ、私の目をよくみつめて、——この指は固くなる、鉄のように固くなる。私がワン、ツウ、スリーと号令をかけると、もう開けることはできない。あなたは両手をかけ、どんなにりきんでもダメです。ワン、ツウ、スリー!」

と、相手の胸元につきつけると、どんな力じまんの人が両手をかけて開こうとしてもビクともしなくなってしまう。

これもまたただ「えいッ」とするどい気合い一声でもよろしい。

《ひみつ》

テストのときには相手から相当の距離をおくこと、そうして、「術をかける」ともったいつけたら、その指の環を相手のアゴの下までグッ!と突き込むのがひみつ。——つまり、距離があれば開ける方の両腕が一ぱい開くことができるので、わけはないけれども、アゴの下まで胸元深く突っ込まれると、両のヒジの開く限度があるから、どんなに力を入れても開くことができないのである。一度試してごらんなさい。

●……人橋術

《演技》

まずお立ち合いの中から一人ご登場願いましょう。テレビのショーでもおなじみの人体硬直術です。「さァ、私の目をじいっとみつめてください。あなたの身体はだんだん固くなって来ます。両手をピタリと両脚につけて、

私の目をよくみつめるのです。――ソレ、あなたの身体はだんだん固くなる。ほおらもう大分硬直してきた。まだまだ固くなる。鉄のように固くなる。……」

とくり返し、

「さァ、全身が硬直しました。鉄の一枚板のように固くなりました。では軽く目をつむってください、これからあなたを二脚の椅子に渡して人体の橋にいたしますが、人に乗られてもビクともしません」

と、助手に手伝わせて、写真のように頭と脚首を二個の椅子にかけ渡し、その上に一人、または二人に乗ってもらうが、ほんとうに板鉄のようにピンと反ったままだから、見物は思わずかっさいを送る。そこで、「では術を解きましょう」

と、手をさしのべて乗せた人をおろし、橋にした本人の全身をさすりながら、

「さァ、硬直してあなたの身体はまた元に戻ります。私が数を五つ数えると、すっかり軟かくなりますよ。ひとォつ、ふたァつ、……ほォら大分軟かくなりました。三つ、四つ、……もうだいじょうぶ、いい気持ちになったでしょ、五つ、ハイ覚めました！」

と抱き起こすのである。

《ひみつ》

「あなたのからだは固くなる。だんだんと固くなってきた。……」

と暗示をかけていくと、知らずしらずのうちに当の本人がコチコチにしゃちこばることも事実だが、

「もっと固くなる、鉄のように固くなる。……」

反復暗示を与えながら、手を添えて相手の両腕をピタリと脚につけ、つぎに脊柱に両手を当てて、反らすように正すのである。脊柱は一本の骨ではなく、臼状の骨がいくつも重なり合い、強靱な脊髄でつながれているのだから、これをキチンと重ねるように正すと、しぜんにシャンと反るようになり、これを二脚の椅子にかけ渡すと、「太鼓橋」の原理で、抵抗と重心は両端、——頭と脚くびに移るから、まん中に人の一人や二人は乗せてもくずれないのである。

また、衆人環視の中でヘナヘナとくずおれてはみっともないという、潜在意識も働くから、からだは自然に緊張しているし、弓なりに反った中央部に人を乗せても、前記の理由で平気で堪えられるものなのだ。

——こういう生理現象のことだから、誰がやっても成功率の高い術なので、よくテレビにも登場するが、それでも、かけっ放しはいけない。やはり「疲れもすっかりとれて、いい気持ちで目がさめます」というような暗示を与えて、精神・肉体ともに十分にほぐしてやることを忘れないようにしてください。

●……指寄せ

《演　技》

被術者を椅子にかけさせたら、まず

「全身の力をすっかり抜いて、楽ウな気持ちになってください」

と、相手の緊張をほぐしてやり、

「では軽く両手を組み合わせて、――ひとさし指だけ立ててください。そして、あなたはその自分のひとさし指をじいっとみつめるのです」

と、その組み合わせた両手を眼の高さに持っていく。ひとさし指以外の指は、全部交互に組ませ、おや指は型に交叉させる。そうして、目との間に適当の距離をおいてヒジを浮かせるようにする。そうして、

「ほかに何も考えずに、その指をみつめていてごらんなさい、右と左の指はだんだん近付いていきます。お互いに相引くのです。早く会いたいのです。――そォら、ぐんぐん近付いていく。ぐんぐんと近付いていく。ホラ、ホラ、もうあんなに近寄った。離そうと思っても指はいうことをきかない。ソレ、ますます近寄ってきた。――ア、もうピタリとくっついてしまった。離そうとしても絶対に離れない。無理に離そうとすると痛い。二本のひとさし指はすっかり密着してしまった。仲よし同士の指はとても喜んでいるのです。もう離れない！」

と、暗示をかける。両のひとさし指は、ほんとうにピッタリと密着して離れない。そこで、

「さァ、こんどはその指がくっついたままで動き出す。手が上下に振動し始めた。ソーレ動き出した。だんだん動きが活発になる。おもしろいように上下運動を始めた。ピストンのように激しく動く。……とってもいい気持ちだ！、身体が軽ゥくなる。疲れがすっかり抜けてしまう。……とってもいい気持ち！何かうっとりとして来た。とってもいい気持ちだ！……」

と、たたみかけていく。――これはもうりっぱな本格的の催眠導入法だが、この「指寄せ」などは、誰がやっ

ても成功する入門過程のひとつだ。

さて、この辺で軽く目を閉じさせよう。

「両手の運動は続いている。こんどは頭も前後に揺れて来た。ますますいい気持ちになる。頭がぐーんと後ろに引かれる、いい気持ちで後ろに引かれる。肩が軽ぅくなった。肩が軽ぅくなったので手が宙に浮いて、両手はしぜんに解かれる。指が離れる。指がスーッと離れる。そうして、私が手を三つたたくと、あなたはとてもいい気持ちで催眠から覚めます。……ひとぉつ、ふたァつ、——さァ、大分覚めて来た。みっつ、ハイ、覚めました」

ここで、被術者は夢から覚めたように、ポカリと目を開く。——身も心も軽くなって、肩のコリも、疲れもすっかり忘れてしまうのである。そこで、

「どうです？いい気持ちでしょう！」

と念を押すと、被術者は必ず「ハイ！」とうなずくこと請け合いである。

《ひみつ》

「指がだんだん近寄っていく。左右の指はとても仲よしなので、相寄らずにはおれないのです」

というのは、言語暗示の力でもあるが、両腕を宙に浮かして不安定状態におけば、いつまでもそのまま静止していることはできないものである。もちろん、立てたひとさし指も、長く反らしていると苦痛を感ずるようになるので、自然に相寄って、やがてピタリと密着すればホッとして安らぎを覚えるのだ。これを「不覚筋動」という。また、はじめに指先をみつめさせ、まずここに注意を集中させるのは、「凝視法」の応用である。

両手に軽く棒を握らせて、無心に両側に垂れさせ、

「その二本の棒は、互いに相牽き会う力を持っています。それ、だんだんと寄っていく、グングン、グングン吸いつけられていく！……」

というふうにやるのもおもしろい。やはり「不覚筋動」のテストのひとつで、とにかく生体は、空間に長時間同一状態で止まることはできないので、一番暗示にかかり易いコンディションになるわけである。

また、こんな軽い催眠術でも、一度施術したら必ず解

いてやることを忘れてはならない。かけっ放しで、いつまでも催眠状態にしておくことは、一種の精神的呪縛を施すことになるので、逆効果を招来するおそれがある。必ず解放してやらなければいけないのである。

●……不動金縛り術

《演　技》

お立ち合いのひとりに出てもらったら椅子にかけさせる。この場合、施術者も向かい合って椅子にかけた方がよい。

「ハイ、私の目をよくみつめて、——私のいう通りにしてくださいよ。椅子に深くかけて、まず、足を前に出して、こういうふうに爪先を揃える。——それから両腕を水平に伸ばしてください。さア、一しょに深呼吸をしましょう。息を深ァく吸って、静かに吐く、ハイもう一度くり返して、——では軽く目を閉じましょう。……私が数を三つ数えると、さア、もうあなたは立つことができない！どんなにもがいても立てません！一——二——三、ソレ立てない！」

とやる。これは馴れると、こんなに時間をかけずに、瞬間にして立てなくすることができるが、これだけもったいつけると、初歩の人でも容易に成功させることが可能だ。

そして、相手はおかしいほど、立とうとしても立ち上がれないから、

「では術を解きます。私が数を三つ数えると、あなたはいい気持ちで術から覚めます。ひとォつ、ハイ、足を引いてよろしい、ふたァつ、三つ！ハイ覚めました！」

とやるのである。

《ひみつ》

インスタント催眠術の中でも一番かんたんで、一番有効な方法である。試みにこの通りにやってごらんなさい、あなた方が驚くほど、誰にもかかる術なのである。

実はこういう姿勢にさせると、誰だって立ち上ることができないので、「術」などと言えたものではないので

あるが、相手はおもしろいほど術中に陥るからゆかい。
かつて私は、CBCの深夜番組で、十二〜三人のストリッパー諸嬢にぶっつけ本番でこれを試み、見事に成功させたことがある。
しかし、ほんの初歩の人で、自信がもてなかったら、おでこに指を一本軽く当てるとよい。
そして、
「えいッ！」
と、するどい気合をひとつかけると、これは何の手数もいらぬ「気合い術」として、人々を驚かすことができるのである。

●……針の山登り

《演　技》
これは、「催眠術」というよりは「霊術」と称してやっているセンセイ方が多い。
かつて方々のテレビで「霊感少女」と騒がれた「熊沢天皇」のメイだという熊沢久子（当時北区滝野川第一小学校五年生）は、一面に五寸クギを林立させたビール箱を踏んで見せて得意満面、またけっこうこれで「アッとおどろく」諸君も多かったが、NHKで「神通力を備えた不死身の男」と紹介されたセンセイの演出は、さすがにうまかった。
——細かに砕いた陶器の破片やガラス屑を、ザァッ！と滝のごとくゴザの上に落下させ、やおらハカマのモモダチをとって、その上をムリリ、ムリリと素足で踏み渡ってみせ、それからこんどはハダカで仰向けに寝て、腹に板を載せ、二人のお立合いをさらにその上にのせたのである。
アナウンサー氏の方は「演出」でない驚嘆ぶりで、
「いやァ、実に驚きました。あのようなするどいガラス片や陶器片の上に寝て、大の男を二人ものせて、よくお怪我をなさらんものですナ。……アレ、未だ背中にガラス片のアトがたくさんついていますが、切れてはおらんのですなァ！——」

と、心からいたわるような目でその破片のアトをみつめながら、

「こういうことが、たんれんしだいではできるのですか？」

というと、不死身の男と名乗るセンセイは、

「私ァ生駒山の奥に十三年も籠もって、茶断ち、塩断ち、草の根を噛み、木の皮を食って水ゴリをとり、難行苦業を重ねたのです。その結果、どんな荒行にも堪えることのできる、不死身になることができたのです！」

と大ボラを吹いて得々としていたものだが。……

《ひみつ》

ひみつは「圧力の原理」の応用である。すなわち、たとえば五〇〇gの煉瓦をテーブルの上にのせると、煉瓦はテーブルの表面を五〇〇gの力で下方に圧し、テーブルの表面はこれと相等しい力で煉瓦を押しあげているのである。この二つの力がつりあっているから、煉瓦は落ちもせず、また舞い上りもしない、――というのが力学の原理だ。この場合、煉瓦がテーブルに触れている面積を、一〇〇平方cmと仮定するならば、圧力は一平方cmについて五gである。このように、単位面積に働く力を「圧力の強さ」という。このことは、同じ重量の物体でも、その接触面積が広ければ広いほど、圧力の強さは小さくなることを明らかにしているであろう。

だから、針の山（クギも同様）、またはガラス片や陶磁器片にしても、それがたくさん密集しているところを素足で踏んでも、その一片にかかる体重はしれたものであるから、痛くもなければ、ケガもしない。まして、ハダカで寝ころがれば、面積がひろがるからいっそう楽なので、さらに載せる重量を増しても平気で堪えることが可能なわけである。

筆者は、かつてCBCの深夜番組で、生け花に使う剣山を五十個もならべた上に、ぶっつけ本番でストリッパー嬢をのせて実験したことがあったが、もちろん無事であった。修業も練習もあったものではないのだ。

（アラビア魔法団の演出は、ビール瓶一～二本を舞台で砕いたが、これは仙人氏の演出に軍配をあげたい。）

●……頭上砕瓦術

《演　技》

屋根に用いるカワラを二〜三枚、頭に載せて、お立ち合いにハンマーを渡し、

「どうぞ御遠慮なく打ちおろしてください。カワラが割れるか、私のアタマが割れるか、二つに一つですが、カクゴはできています」

とやってもよし、

「自己催眠で、私のアタマは瓦よりも固い石になった！と暗示をかければ、だいじょうぶでございます。さァどうぞ！」

とやるのもおもしろい。

上部の瓦は木っ葉みじんに砕けて飛び散るが、頭と、頭に接している瓦は無事である。

《ひみつ》

原理は「針の山」とまったく同じこと。思いきってやってみれば「なるほど！」と合点がいく。

ただし、毛髪にカワラの破片が食い入るから、ビニールのふろしきなどをかぶって、これを防ぐがいい。

これと同工異曲なものに「掌上砕石術」というのがある。石を手のひらで手刀で割ってみせるのだが、このときも必ず石を二個使う。すなわち手刀を打ちおろすとき、下の石に上の石をぶっつけて砕くのである。割る石は脆質のものを選ぶこともちろんだ。

《著者の横顔》

石川雅章（いしかわがしょう）　会津喜多方の産。青年時代より童話活動に入り、本邦最初の童話雑誌「足跡」を創刊、また児童週刊誌の鼻祖「コドモ新聞」の編集長を経て、花月園少女歌劇の作者・演出家となり、松旭斎天勝一座の文芸部長に迎えられ、全国に不思議と奇蹟の渦を巻き起こす。伝記小説「松旭斎天勝」「奇術と手品の遊び方」「三分間マジック・コーチ」「マジック教室」「家庭ゲーム百科」「トランプ入門」「人の度胆を抜く法」「バケのかわ」他著書多数、愛宕山以来の放送歴も長く、東京都大田区、神奈川県川崎市の成人学校では、奇術と童話の講座を担当す。日本童話協会理事、日本催眠科学院教授。

現住所　東京都大田区久ガ原三丁目39―10

奇術と手品の習い方　0076-25425-1382

著者　石川雅章

発行者　松木　茂
印刷所　精文堂印刷㈱

発行所　株式会社　金園社　東京都台東区東上野2-9-6
(〒110)
電話　03・833-4021（代）
振替口座　東京　5-93783

愛読者サービス券

・金園社の出版物をご愛読頂きましてありがとうございます。
平素のご愛顧の印として
愛読者サービス券３枚
を封書で ご送付ごとに
ボールペン
１本を進呈いたします。

・本券の有効期間
昭和56年12月末日まで

・宛　先　〒110
東京都台東区東上野２の９
金園社愛読者サービス係

・この券は愛読者に限り有効です。
・出版目録ご入用の方も上記へご請求下さい。

昭和四十五年十二月一日　初版発行
昭和五十四年十二月一日　五版発行